

292
39172
8

大正七年度古蹟調査報告
第一册

濱田委員報告

大正七年九十兩月朝鮮總督府博物館囑托林漢韶ト共ニ慶尙北道慶尙南道忠清南道各地ノ古蹟調査ニ從ヒ候内、慶尙北道星州及高靈、慶尙南道昌寧ニ於ケル古墳調査ニ關スル報告書別冊ノ通り提出候也

大正十年三月三十一日

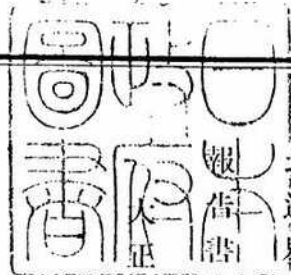
朝鮮總督府古蹟調査事務囑托

梅原末治

朝鮮總督府古蹟調査委員

濱田耕作

朝鮮總督府古蹟調査委員長 水野鍊太郎殿



第二節	古墳ノ外形及發掘	元
第二節	石室ノ構造ト遺物	元
第二章	池山洞第一號古墳	三
第一節	古墳ノ外形及發掘	三
第二節	石室ノ構造	三
第三節	遺物ノ配置	三
第四節	遺物	三
第三章	池山洞第三號古墳	六
第一節	古墳ノ位置及發見ノ次第	六
第二節	石室及遺物ノ配置	六
第三節	遺物	六
第三編	慶尙南道昌寧郡古墳	四〇
第一章	校洞第二十一號古墳	四〇
第一節	古墳ノ外形及發掘	四〇
第二節	石室ノ構造	四〇
第二章	校洞第三十一號古墳	四三
第一節	古墳ノ外形及發掘	四三
第二節	石室ノ構造	四三
第三節	遺物ノ配置	四三

第四節	遺物	四七
第四編	古墳及遺物ノ研究	五
第一章	遺物ノ研究	五
第一節	土器	五
第二節	金屬器	五
第二章	古墳ノ研究	六
第一節	古墳ノ構造ト内容遺物	六
第二節	古墳築造ノ年代	六
附	錄	七
星州古墳人骨調査(醫學博士長谷部言人君)		七



挿圖目次

第一	慶尚北道星州郡星州附近地圖(五萬分一地形圖分裁)	一
第二	星山洞古墳分布圖(林漢鼎)	二
第三	星山洞古墳群遠望(梅原)	三
第四	古墳群一部(上)(同)	三
第五	星山洞第一號古墳東面(上)(同)	四
第六	第二、第三號古墳(濱田)	四
第七	第一號古墳實測圖(林漢鼎)	五
第八	石室實測圖(梅原)	六
第九	石室西部遺物存在狀態(濱田)	七
第一〇	石室東部遺物存在狀態(上)(同)	七
第一	石室遺物配置圖(濱田梅原)	八
第二	發見土器(臺附壺)	九
第三	同(長頸壺及臺)	九
第四	同(高坏)	一〇
第五	同(高坏)	一〇
第六	銀製冠飾	一一

圖版番號

第一七	銅鑲	一一
第一八	金鑲及金製耳飾	一一
第一九	銀製帶飾金具一部(表面)	一二
第二〇	同(裏面)	一二
第二一	同 全部	一三
第二二	斧頭及槍身	一三
第二三	不明金具	一三
第二四	同 刀劍	一四
第二五	同 同柄頭部	一四
第二六	同 發見土器圖(梅原)	一五
第二七	星山洞第一號及第二號古墳發見金屬器具圖(濱田梅原)	一六
第二八	星山洞第一、第二、第六號古墳發見土器紋樣及第一號古墳銀製帶金具拓本	一七
第二九	星山洞第二號古墳實測圖(林漢鼎)	一八
第三〇	同 石室發掘(梅原)	一九
第三一	同 同(上)	一九
第三二	同 石室側壁(上)(同)	二〇
第三三	同 同(上)	二〇
第三四	同 第一小石室(上)(同)	二一

第三五	同	同 內部(上同)	三
第三六	同	第二小石室(上同)	三
第三七	同	古墳斷面圖(梅原)	三
第三八	同	主石室實測圖(上同)	三
第三九	同	第一小石室實測圖(上同)	三
第四〇	同	第二小石室實測圖(上同)	三
第四一	同	主石室遺物配置略圖(濱田梅原)	三
第四二	同	主石室發見土器(壺及臺)	三
第四三	同	同(壺及臺附壺)	三
第四四	同	同(高環及臺附壺)	三
第四五	同	同(高環)	三
第四六	同	主石室發見鉄器	三
第四七	同	小石室發見土器	三
第四八	同	主石室發見槍身及斧頭	三
第四九	同	同 刀身	三
第五〇	同	發見土器圖(梅原)	三
第五一	同	第六號古墳發掘光景(梅原)	三
第五二	同	同 發掘後狀態(上同)	三

第五三	同	古墳實測圖(梅原及林)	三
第五四	同	古墳石室內部西北隅(梅原)	三
第五五	同	同 東北隅(上同)	三
第五六	同	石室實測圖(梅原實)	三
第五七	同	石室遺物配置圖(濱田梅原)	三
第五八	同	發見土器	三
第五九	同	同(貝入高環)	三
第六〇	同	木片	三
第六一	同	鉄器	三
第六二	同	發見土器及鉄器圖(梅原)	三
第六三	同	慶尚北道高靈郡高麗附近地圖(五萬分一地)	三
第六四	同	高靈圭山古墳群遠望(濱田)	三
第六五	同	池山洞第一號古墳石室(梅原)	三
第六六	同	同 第一號及第二號古墳略測圖(梅原略)	三
第六七	同	同 第一號古墳石室實測圖(上同)	三
第六八	同	同 第二號古墳石室(梅原)	三
第六九	同	同 石室西南部土器埋存狀態(上同)	三
第七〇	同	同 石室及遺物配置圖(梅原實)	三

第二〇五	同 鉄器	六
第二〇六	同 發見土器圖 <small>(梅原 梨園)</small>	七
第二〇七	同 同 <small>(上同)</small>	七
第二〇八	同 同 <small>(上同)</small>	七
第二〇九	同 發見土器紋様拓本	七
第二一〇	星山洞第二號古墳第一小石室發見人骨頭蓋 <small>(長谷部博 土器真)</small>	七

小圖目次

第一	革帶金具裝置想像圖	八
第二	筑後月ノ岡及大和新山古墳發見帶金具圖	九
第三	昌寧校洞發見革帶金具圖 <small>(小場恒吉君 實測圖)</small>	一〇
第四	梁山北亭洞古墳發見箭狀冠飾着裝原狀圖 <small>(小川 敬吉君 朝鮮古墳圖譜第 二册より轉寫)</small>	二
第五	(イ)龍岡雙楹塚壁畫人物冠飾 <small>(梅原 寫生 朝鮮古墳圖譜第 二册より轉寫)</small>	三
	(ロ)唐代土偶鳥形冠飾 <small>(梅原 寫生)</small>	三
第六	高靈主山山城平面圖 <small>(林漢明 測圖)</small>	元
第七	エトルスキ及埃及土器臺 <small>(濱田 寫圖)</small>	五
第八	エトルスキ土器臺	五
第九	燉煌石室壁畫耳飾佩用圖 <small>(ヘリよ氏燉煌圖譜 第二册より轉寫)</small>	五
第一〇	內地古墳出土耳飾	六
第一一	伊豫國妻島出土環刀頭圖 <small>(梅原 模寫)</small>	六
附表	日本朝鮮支那年代比較表	七

慶尙北道慶尙南道古墳調査報告書

朝鮮總督府古蹟調査委員

濱田耕作

同 古蹟調査事務囑托

梅原末治

第一編 慶尙北道星州郡古墳 (第一圖—第四圖)

慶尙北道星州郡ハ從來星山伽倻、碧珍伽倻或ハ京山伽倻ト稱セラレ、古ヘ加羅ノ一國タリシト傳ヘラル。其ノ詳細ナル考説ハ夙ニ故文學博士那珂通世氏ノ試ミラレタルモノアリ。又タ古蹟調査委員今西龍君ノ大正六年度報告並ニ同君ノ「加羅境域考」等ニ見エ、其ノ古墳群ノ分布ニ就キテモ、今西君ノ記載ヲ經タルモノアルヲ以テ、吾人ハタダ其ノウチ星山西麓ノ古墳群ヲ調査シ、其ノ三基ヲ發掘スルニ止メタリ。

星山西麓ノ古墳群中星山洞(舊龍上洞)南方ノ一群ハ、高靈街道ニ近ク、左手ノ丘陵上ニ二三ノ大墳ヲ中心トシ、一方ハ其ノ北方島地ノ傾斜面ニ大小十數基ヲ數ヘ、他方星山支脈ノ脊梁上ニ珠連シ、其ノ數幾何タルヲ知ラズ。此ノ島地ニ散在スルモノノ内、或ハ石室ヲ現ハシ、或ハ其ノ封土ヲ缺損セルモノアリト雖モ、大部分ハ之ヲ外部ヨリ窺フニ、未ダ盜掘ノ厄ニ遭ハザルモノノ如シ。タダ星山支脈上ニ存在スルモノハ、風雨ニ暴露シ、封土石室ヲ破ラレ、散亂掠奪ノ禍ニ遭ヘルモノ尠カラズ。此等丘陵上ノ古墳ト、島地ノ古墳トハ、其ノ營造ノ時代ニ就イテ、恐ラク多少ノ差違アル可ク先ヅ中腹ノ臺地ニ墳墓ヲ營ミテ後テ、適當ナル墓域ノ發見困難ナルニ及ビテ、漸次丘陵上ニ之ヲ造ルニ至レルナル可ク

或ハ又タ一方ニ於イテハ。宏大ナル高貴ノ墳墓先ツ臺地ノ好位置ニ起サレ、狭小ニシテ微賤ナルモノ丘陵ノ脊梁ニ造ラレタルモノアル可シ。斯ノ如キハ固ヨリ一般ノ推測ニ過ギズシテ、其ノ果シテ然ルヤ否ヤハ、一々ノ古墳ヲ調査シタル後ニ非ザレバ之ヲ斷言スル能ハザルヤ言フ俟タズ。吾人ハ此ノ星山洞南方ノ古墳群中先ツ高靈街道ニ近キ低地ノ二基第一號古墳及ヲ發掘シ、次イテ丘陵脊梁上ノ一基第六號ヲ調査シタリ。此ノ少數ヲ以テ、星山郡古墳ノ一般的性質ヲ云爲スルハ充分ナラズト雖モ、亦タ以テ所謂加羅國ノ一タリト稱セラルル星山伽倻ニ於ケル古墳ノ性質ニ就キテ、若干ノ知識ヲ學界ニ寄與スルニ足ルモノアラム。

第一章 星山洞第一號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第五圖―第七圖)

〔外形〕 本古墳ハ上述星山洞(舊龍上洞)古墳群中ノ西北端ニ位シ、丘陵ノ尾端ニ營マレタル圓塚ニシテ、封土ノ高サ約十二尺、基部ノ直徑約四十五尺アリ。南方ハ少許ノ畑地ヲ距テテ第二號墳ニ接シ、北方ハ下降傾斜面ニ臨メリ。封土ノ東方中腹部ニ少シク崩壊セル處アリ、南麓ハ一部分封土ヲ削リテ畑地ヲナセルヲ以テ、稍々形狀ノ完好ヲ缺クト雖モ、何等發掘セラレタル形跡ヲ見ズ。表面全部ニハ芝生ノ被ヘルヲ見ルノミ、

〔發掘〕 本員等星州ニ著スルヤ、警察官員ノ案内ヲ得テ、星山洞ニ於ケル古墳群ヲ踏査シ、先ツ本古墳ヲ調査スルノ計畫ヲ立テ、大正七年九月二十七日午前十時ヨリ、人夫十三名ヲ役シテ發掘ヲ開始セリ。上述封土東腹部ノ崩壊ヲ利用シ、之ヲ中心トシ幅八尺ノ縱溝ヲ作り封土ノ中點ニ向ハシメ、石室ノ一角ニ逢着センコトヲ期セリ。午前十一時掘ルコ

ト六尺ニシテ直ニ割石積ノ一部ニ到達セリ。乃チ其ノ部分ヲ掘リ擴メテ之ヲ檢スルニ、長方形石室ノ上邊ノ一端ナルコトヲ確メ得タルヲ以テ、土砂崩壊ニ對スル設備ヲ施シテ後、天井石ト側壁トノ間ニ渡セル石材ヲ除キ、側壁積石ノ一部ヲ穿テテ、十二時半石室內部ニ進入スルヲ得タリ。此ノ作業中上部積石ノ一部室內ニ轉落シテ、土器一箇ヲ破壞ス。内部ハ土砂ノ侵入ヲ見ズ、土器其他ノ遺物依然トシテ埋葬當時ノ原狀ヲ止ムルモノアリ。午後ハ此等遺品配列ノ狀態ヲ精査記録シ、次デ之ヲ採取セリ。翌二十八日ハ人夫二名ヲ用キテ、更ニ石室底部ニ沈澱セル粘土層ヲ檢査シ、遂ニ金屬裝飾品等多數ヲ獲タルガ、二十九日ハ助手二名ト共ニ石室ノ實測ニ從ヒ、復舊工事ハ第二號古墳發掘ノ經過中ニ之ヲ施セリ。

第二節 石室ノ構造 (第八圖)

本古墳ノ石室ハ封土ノ中央部ニアリ、略ボ東西ニ長キ直方形ヲ呈ス。(第七圖)石室ノ底部ハ封土頂點下約十三尺ノ平面ニ位シ、長十二尺、幅中央ニ於イテ四尺五寸ヲ有ス。入口ト思ハル東壁ヲ除ク他ノ三側壁ハ、石材ノ平滑ナル部分ヲ内面トシテ、殆ド垂直ニ近キ側面ヲ成シ、築石ノ法決シテ粗雜ナリト言フ可カラズ。其ノ高五尺二寸内外ニ至ル。

東壁ノ構造ハ之ニ反シテ壁面垂直ヲ呈セズ、石材ノ出入凹凸アリテ、外部ヨリ挿入セル形跡ヲ認ム可ク、石材モ亦タ他ノ三面ニ比シテ稍々長大ナルモノノ如シ。此ノ部分ハ調査ノ際ニ之ヲ發掘セルヲ以テ、其ノ構造ノ詳細ヲ知ルヲ得タルガ、東側壁ト天井石トノ間ニ斜ニ扁平ナル石材五箇(第八圖)ヲ架シテ、其ノ空隙ヲ塞グリ。此ノ構造ハ亦タ以テ東壁ガ石室築造ノ當初ニ於イテ存在セズ、埋葬竣リテ後之ヲ閉塞スル際ニ造ラレタルモノニシテ、遂ニ斯ノ如キ特殊ノ構造ヲ生ゼルモノナルコトヲ推測セシム可ク、前記東壁ノ内部ガ垂直面ヲ呈セズ、却ツテ外部ニ於イテ整直ナル事實ト相俟テテ、此ノ東壁ノ部分ガ本石室ノ入口タリシヲ證スルニ充分ナリト謂フ可シ。

石室ノ天井石ハ大石四枚ヲ横ニ並列シ、今マ東壁ヨリ第三ノ最小ナル石材ノ挫折シテ少シク内側ニ落込メル外、略ボ

天井ノ原狀ヲ遺存ス。石室ノ底部ニハ小割石ノ層アリ、石塊ヲ二三重ニ敷成セリ。其ノ上部ニハ流水ニヨリテ沈澱セル薄キ粘土層アリテ之ヲ被ヘリ。側壁ノ内面ニハ漆喰ヲ塗りテ化粧セル痕迹ヲ認メズ。

第三節 遺物ノ配置 (第九圖—第二二圖)

前節發掘ノ條ニ於テ既ニ記セルガ如ク、本古墳ノ石室ハ少許ノ粘土ノ沈澱セル外、殆ド土砂ノ流入ヲ見ズ、遺物ハ略ボ副葬ノ原狀ヲ留メ、其ノ配置ヲ明ニスルコトヲ得タルハ、吾人ノ最モ喜ブ所ナリ。第九圖及第十圖ハ石室開口ノ際撮影セルモノニシテ、以テ遺物存在ノ原狀ヲ髣髴スルヲ得可シ。第十一圖ハ遺物配列ノ詳圖ナリ。以下之ニ就キテ説明スル所アラム。

副葬品中顯著ナル土器ノ配置ハ略ボ之ヲ三群トスルヲ得可シ。其ノ一ハ奥壁ニ近ク南側ニ群集セルモノニシテ、高大ナル臺上ニ大ナル壺ヲ安置シ、其ノ臺側ニ蓋附高環二箇アリ。器ハ横倒シ蓋ト相離レタリ。其ノ二ハ前壁ニ近キ一群ニシテ、南側ニ二箇ノ臺附大形壺横倒シ、其ノ北壁ニ小形ノ高環五箇ヲ置ク。其ノ内一箇ニハ環中盤ノ殼ノ遺存セルモノアリ。其ノ三ハ前二群ノ中間ニアリテ、南北兩側壁ニ各二箇ノ高環ヲ配置ス。

次ニ金周器等ノ遺物ニ於テ、最モ注意ス可キモノハ大小二口ノ環刀ナリ。孰レモ柄頭ヲ西ニシテ中央土器群ノ東ニアリ、刀身ヲ石室ノ長軸ニ並行セリ。其ノ北邊ニ接シテ亦タ刃ヲ南ニセル刀身一口アリ。環刀ノ柄頭ヨリ南方高環トノ間ニ當リテ、銀製帶飾金具三十四箇略ボ輪狀ヲナシテ存在セリ。此ノ附近ヨリ齒牙四箇ヲ發見シ、其ノ西方數寸ニ頭蓋骨ノ一部僅ニ殘存セルヲ認メタリ。頭蓋ノ南方ニハ筒狀銀製冠飾、北方ニハ金製耳飾一箇、亦タ頭蓋ノ東西ニ金環各一箇ヲ發見セルガ、帶金具ノ南方ニ接シテ四肢長骨ノ斷片ト思ハルモノアリ、東方土器群ニ近ク下肢骨指骨數片ヲ認メタリ。即チ頭蓋下肢指骨間ノ距離約五尺三寸ヲ測ル可ク、埋葬屍體ハ頭ヲ西ニシタル伸展葬タリシヲ確ムルヲ得。

以上ノ外奥壁大土器群ノ南方、側壁ニ近ク斧頭二箇アリ。又タ大土器側ノ高環ニ接シテ槍身二箇ヲ發見セリ。前壁臺附長頸壺ノ北方ニモ槍身二箇散在シ、其ノ南方高環群ノ西ニ接シテ、刀子三箇、斧頭一箇アリ。更ニ石室前壁ノ南隅ニ近ク小銅環十箇ノ散在スルヲ見タリ。

如上遺物ノ配置ニヨリ、本古墳ノ被葬者ハ一人ニシテ、石室ノ略ボ中央部ニ頭ヲ奥ニシテ、大小ノ環刀ヲ横へ、銀製帶飾金具ヲ垂下セル革帶ヲ纏ヒ、耳ニ金環ヲ附シ、一種筒形ノ飾アル冠ヲ戴ケル男子タリシヲ想像ス可ク、頭邊ニ近ク大形臺ニ載セタル壺ヲ置キ、ナホ身軀周圍ニ多數ノ土器ヲ副葬セルモノナルヲ知ル。而カモ銀釘等ノ遺存スルヲ見ザルハ恐ラク遺骸ヲ納ムルニ木棺ヲ以テセサリシヲ語ルモノニ非サル無キカ。

第四節 遺物 (第二二圖—第二八圖)

本古墳石室内ニ副葬セラレタル遺物ノ種類及ビ數量左ノ如シ。

一、土器	十五箇	一、銅環	十箇	一、銀製冠飾	一箇
一、刀劍	三口	一、槍身	四箇	一、不明金具	三箇
一、金環	二箇	一、金製耳飾	一箇	一、銀製帶金具	一組 _{三十}
一、刀子	三口 _{以上}	一、斧頭	三箇	一、鐵器殘缺	三箇

今マ以下一々ニ就キテ其ノ説明スル所アラム。

〔土器〕 十五箇皆ナ黝黑色ノ所謂祝部風ノ堅緻ナル燒方ノモノニシテ、朝鮮ニ於テ新羅燒ト通稱スルモノノ系統ニ屬シ、其ノ製法精巧ナリ。内臺一、長頸壺一、臺附長頸壺二、蓋附高環十一アリ。

(1) 臺(第一三圖及第二六圖) 高一尺四寸、上部ハ環形ヲナシ、其ノ下ニ喇叭狀ニ開ケル筒部アリ。底徑一尺ニ達ス。環部以下ヲ八

段ニ分チ、上ヨリ五段ニ至ル間ニハ縦ニ四列ノ透孔ヲ穿チ、其ノ下方三段ノ圓錐形部ニハ梯形孔ヲ市松狀ニ開ク。又タ全面ニ亘リテ横ニ波狀刷毛目紋ヲ附加シテ裝飾トナス。此ノ種ノ器臺ハ後述星山洞第二號古墳ヨリモ出デタルド、多少其ノ形狀ヲ殊ニス。ナホ類品ノ慶尙南道各地ノ古墳ヨリ發見セラレタルモノ尠ナカラズ。即チ晋州郡道洞面、慶州郡慶州附近(朝鮮古蹟 國語第三)等ヨリ出デタルモノ是レナリ。今マ之ヲ第二號古墳所出ノモノニ比スルニ、直線形狀ヲ有シ、稍々優雅ノ感ヲ缺クモノアリ。ナホ此ノ器臺ニ關シテハ、後章別ニ説ク所アル可シ。

(2) 長頸蓋(第一三圖及第二六圖) 前項臺ノ環上ニ載セラレタルママ遺存セルモノニシテ、底部ハ從ツテ不安定ノ形狀ヲナス。口徑五寸、高四寸五分ノ大ナル頸ヲ有シ、此ノ部ニ二段ノ帶狀突起アリ、肩部ト共ニ其間ニ波狀刷毛目紋ヲ附ス。全軀ノ形式普通見ル所ナルモ、其ノ口部ノ窄メルハ或ハ本來被セ蓋ヲ有セシモノナルカヲ思ハシム。全高一尺一寸。

(3) 臺附長頸蓋(第一二圖及第一六圖) 二箇略ボ同形ニシテ、一ハ高一尺〇七分、他ハ高一尺一寸餘アリ。口徑約五寸六分、高三寸五分許ノ大ナル頸部ヲ有シ、下部ニハ六箇ノ透孔ヲ有スル低キ臺ヲ附ス。頸部ニハ三條ノ突帶アリ、其ノ間ニ波狀刷毛目紋ヲ附スルコト前記ノ臺ト相同ジ。腹部ニモ亦タ一條ノ突帶ヲ繞ラス。此ノ兩臺中其ノ一ハ形狀稍々歪ミヲ生ジタルヲ見ル。

(4) 高環(第一四圖、第一五圖、第二六圖、第一〇五圖) 十一箇皆ナ蓋ヲ具フ。之ヲ大小ノ二類ニ分ツ可ク、小形ノモノハ五箇アリ、何レモ同形ニシテ高サ四寸五六分ノ間ヲ出入ス。表面ニ光澤アリ、厚手ノ感ヲ有ス。蓋ハ印籠形ニシテ、稍々大ナル環狀ノ鈕ヲ附ス。環ハ脚部ニ比シテ稍々大キク、聊カ不安定ノ感アルモ、脚ニハ細長キ三箇ノ透孔アリ、其彎曲輕快ナリ。大形ノモノハ六箇ニシテ、蓋ハ器ト相離レテ出土セシモ、其ノ存在狀態等ヨリ推シテ、假ニ寫眞圖ノ如ク組合セタリ。各器ノ大サ相同ジカラザルモ、器脚ニハ皆ナ二段各四箇ノ透孔アリテ、上下交互ニ之ヲ配セリ。蓋ノ形狀ハ二種アリ。一ハ上空ニシテ且ツ周圍ニ透孔ヲ有スルモノ、他ハ圓盤狀ヲナセルモノ是レナリ。而カモ前者ニハ蓋部ニ波紋

ノ外、一種小字形ノ刷毛目紋ヲ現ハセルモノ二例アリ。後者ニハ環部ニ波紋ヲ施シタルモノアルヲ見ル。之ヲ要スルニ、大形高環ハ其ノ器脚大ニシテ安定ノ感ヲ與フルモノアリ、重厚ノ趣ヲ發揮セルヲ注意ス可シ。高環内部ハ多ク空虚ナルモ、タダ小高環(第一五圖)ニハ蟹ノ鉗節ノ存在スルヲ認メタリ。(京都帝國大學助教野村)

〔金屬裝飾具〕 金環、金製耳飾、銀製帶飾具、銅環、銀製冠飾ノ五種アリ。本古墳ハ貴金屬製ノ遺物ニ於テ、比較的豊富ナリト稱スルモ妨ナシ。就中顯著ナルモノヲ金製耳飾、銀製帶飾具及銀製冠飾トナス。

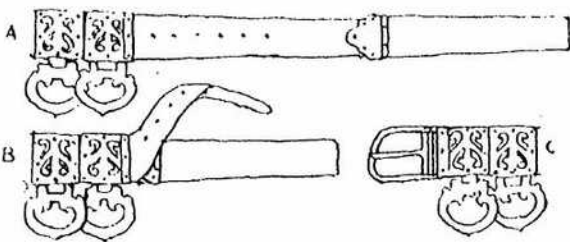
(5) 金環(第一八圖) 二箇共ニ中銅金被セニシテ、心葉形ノ心持ヲ有スル楕圓形ナルハ、聊カ普通ノ金環ト其ノ趣ヲ殊ニセリ。處々青錆ヲ生ジ、切缺キノ部分ヲモ閉塞セルガ、其他ノ部分ハ美シキ黃金色ヲ呈シ、慶尙北道善山等出土ノ金環ノ白味ヲ帯ビタル金色ヲ示セルニ反シ、内地ノ古墳出土ノ金環類ト其ノ軌ヲ一ニセリ。長徑七分六厘、短徑六分五厘、斷面ハ圓形ニシテ徑一分餘アリ。此ノ一對ノ金環ハ其ノ出土狀態ヨリシテ、頭蓋部ニ近ク存セルヲ以テモ、本墳被葬者ノ耳環ナリシコト疑フ可カラズ。

(6) 銅環(第七圖) 十箇其ノ形狀前記金環ト異ナルナク、唯ダ稍々小形ニシテ金被セナキノ差アルノミ。長徑五分、短徑四分弱。其ノ如何ナル用途ニ供セラレシカ、之ヲ明ニスルコト難シ。

(7) 金製耳飾(第一八圖) 一箇、總長一寸七分弱、橢圓ノ長徑七分ニ近キ中實ノ金環ニ垂下スルニ、黃金薄板ヲ打抜キテ作レル心葉形ノ飾リヲ以テセルモノニシテ、其ノ兩者ノ中間ニハ、黃金細線ノ環ヲ接合シテ製作セル、一種ノ方柱形ノ飾リヲ繼ギテ之ヲ聯結セルノミナラズ、心葉形ノ傍ニハ、更ニ同形ノ小葉ヲ添垂セルヲ注意ス可シ。其ノ黃金色ハ寧ろ赤味ヲ帯ビ、後章述ブル所ノ昌寧古墳出土ノモノノ白色ヲ帯ビテ輕薄ナルト其ノ撰ヲ異ニス。本例ト殆ド同一ノ耳飾ハ、朝鮮ニ於テハ慶尙南道昌寧校洞第七號古墳ヨリ出デタルモノアリ。(大正八年谷井委員等發掘) 近似ノモノトシテハ同上校洞第六號古墳(阿梁山郡北亭洞古墳 大正九年馬場委員等發掘) 等ニ其ノ例ヲ見ル可ク、内地ニ在リテハ、肥後國玉名郡江田村

船山古墳ハシメ各地ノ古墳ヨリモ之ヲ出セリ。此等ニ就キテハ別ニ後章説ク所アル可シ。又々從來此種ノ耳飾ハ多ク一對宛ヲ出シ、殊ニ昌寧古墳ニ於ケル谷井委員等ノ調査ニ徴スルニ、其ノ耳環トシテ垂下セラレタルコト明白ナルヲ以テ、本員等ハ發掘ノ際特ニ注意シテ、他ノ一箇ヲ搜索セシモ遂ニ之ヲ得ルコト能ハザリキ。而カモ本墳ノ被葬者ノ一個躰ニシテ、己ニ前述ノ一對ノ金環アリ、或ハ此ノ耳飾ノ如キハ、生前己ニ其ノ一箇ヲ喪失シテ、之ヲ胸飾等ノ用途ニ供シシニ非ザルナキカヲ想像セシムルモノナキニ非ズ。試ニ記シテ參考ニ供ス。

第一圖 革帶金具設置想像圖



(8) 銀製帶飾(第一九圖乃至第二二圖)一具。其ノ大部分ハ長方形ノ薄板ニ一種ノ流麗ナル忍冬唐草的ノ三葉紋ヲ打出シ、其ノ下方ニ心葉形ノ瓔珞様ノ打出シ銀板ヲ樞鉸ニヨリテ下垂セルモノニシテ、其ノ全數三十一箇、各片ノ長一寸九分方板幅八分、一分アリ。方板上ニハ九ヶ處ニ小銀ヲ打テテ、他ノ物質ニ附綴セノルモノナルコトヲ示ス。心葉形ノ全ク脱落セルモノ一箇、コノ外別ニ同形ノ金具ノ一端ニ、銀製ノ精巧ナル 鉸具ヲ附セルモノ一箇、及ビ其ノ右端ニ板金ヲ表裏ニ附加シテ特殊ノ裝置ヲ施セルモノ一箇ト、更ニ長方形ノ短冊形銀板長三寸二分、幅七分ノ一端ニ、銀留アル圭狀金具ヲ樞鉸ニヨリ連綴セルモノ一箇トヲ作出セリ。今此等金具ヲ見ルニ、合シテ一條ノ革帶ノ裝飾具ヲ完備セ合ルモノニ外ナラズ。鉸具ヲ有スル一片ハ、固ヨリ帶ノ一端ヲナシ、右端ニ板金ヲ加ヘタル一片ハ、留孔ヲ穿テ爾他端ニ近ク置カレシモノナル可ク、長方板ニ至リテハ、其ノ裝法確カナラズ。或ハ此ノ革帶ニ附スルコト附圖第一(A)ノ如ク、帶ノ物餘リヲ挾ムニ便ニセリト解

ス可キカ。或ハ又々板金ヲ附加セル一片ハ、銀高一分アリテ、他ノ諸片ニ於ケル銀高五厘ナルニ比シテ二倍ノ厚アルヲ以テ見レバ、此ノ處ニ於イテ革ハ二片トナリ、其ノ一ニハ留孔ヲ穿テ、他ノ一ニハ長方板ヲ附シテ、鉸裝ノ下敷トセルコト附圖第一(B)ノ如カリシカ。ナホ後考ヲ俟ツ。ソハ兎モアレ、三十三個ノ飾金具ハ帶ノ全長ニ亘リテ附加セラレタルナル可ク、方板ノ幅八分ナレバ、帶ノ全長ハ少クトモ二尺四寸以上ニ及ベルコト明ナリ。而カモ方板ハ相接シテ革帶上ニ釘裝セラレ、瓔珞片ハ比隣相重リテ、行步鏘然タル響ヲナセルコト想像スルニ難カラズ。

第二圖 筑後月岡大和郡新山古墳發見帶金具圖



人心折上蓋



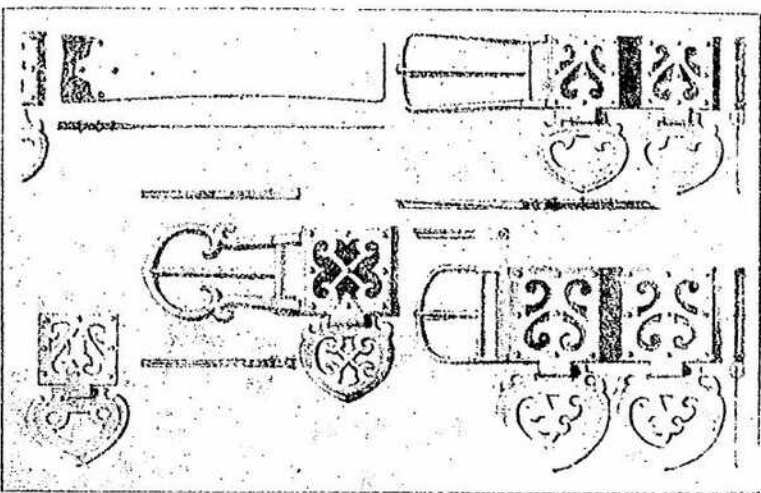
原狀ヲ髣髴セシム可キモノアリシト云フ。

(9) 銀製冠飾(第二六圖及第二七圖)一箇。銀ノ薄板ヲ以テ作り、長徑約七寸アリ。其ノ形狀矢羽根ノ如ク、或ハ鳥翼ヲ張レルガ如シ。中央ヨリ折レテ一端ハ嘴狀ヲ呈ス。周縁ニハ二列ノ連點紋ヲ以テ飾レリ。此ノ異形ノ遺品ハ何等用途ニ就キテ考フル所ナク、タゞ頭蓋附近ヨリ出デタルヲ注意スルニ止マリシガ、其後谷井委員ハ類品ヲ昌寧校洞ノ一古墳ヨリ

此種ノ金具ハ從來内地ニ於イテ大和國北葛城郡馬見村大塚新山、筑後國三井郡吉井町若宮八幡岡古墳等ヨリ金銅製ノ類品ヲ出セルヲ聞ケルノミナリシガ

(附圖)、本員等此ノ遺品ヲ星州古墳ニ於イテ發見セル後、谷井委員ハ昌寧校洞ノ古墳ヨリ數例ノ遺品ヲ發見シ、就中其ノ或者ハ本古墳出土器ト全然同一ノ型式ヲ示シ、恐ラク同一工匠ノ手ニ成リシカラ推測セシムルモノアリ。此ノ兩地方ノ文化的關係ヲ考察スルニ絶好ノ資料ナリトス。附圖第三ニ是等昌寧發見金具ニ就イテ小場恒吉君ノ實測製圖セルモノヲ掲ゲテ、其ノ類同ヲ明ニセリ。又

タ梁山郡北亭洞ノ一古墳ヨリ馬場委員等ノ發見セル類品ハ、古墳石室ニ粘土層ノ沈澱セルモノ無ク、垂下瓔珞様ノ金具累累相重リテ、革帶ニ裝置セラレタル



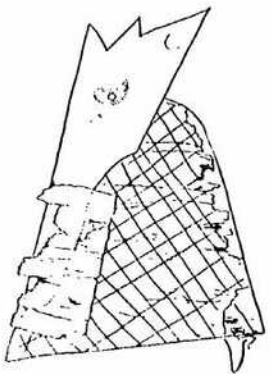
發見シ、更ニ近ク馬場委員ノ梁山北亭洞ノ一古墳ヲ發掘シテ、同行ノ小川囑托ノ注意ニヨリ、其ノ權ノ皮ヲ以テ作ラレタル冠ニ、嘴狀部下ニシテ飾リタル前立ノ金具ナルコトヲ確メ得タルハ、吾人ノ感謝スル所ナリ。本例ガ遺骸頭部ノ邊ヨリ出デタルコト、亦以テ其ノ冠飾タリシヲ證スルモノニシテ、或ハ鳥羽ヲ象レルモノニ非ザルカ。稍々其ノ性質ヲ殊ニスルモ、鳥羽其者ヲ冠飾トセルモノ、平安南道龍岡郡雙塚ノ壁畫中ノ人物ニ其ノ例ヲ見ル。又々支那唐代土偶中冠飾ニ鳥形ヲ以テセルモノアリ。參考ノ爲メ圖示ス。(附圖)

〔武器工具等〕 環頭太刀大小二、直刀一、刀子三、槍身四、斧頭三、其他ニ不明ノ鉄具三アリ。其ノ内最モ注意ス可キモノヲ環頭刀トナス。

(10) 環頭刀(第三圖、第四圖、第五圖、第六圖、第七圖) 大小二口。略ボ拵ノ儘遺存シタルヲ以テ、其ノ著裝ノ狀態ヲ徵ス可ク、既ニ述ベタルガ如ク、大ナルモノノ側ニ小ナルモノヲ添ヘ密着シテ出土セリ。斯ノ如キハ南鮮ニ於イテ屢々見ル所ニシテ、關野委員ノ調査セル慶州普門里ノ夫婦塚ヲ初メ、谷井委員ノ獲タル全羅南道羅州潘南面大安里第八號墳壘棺内、昌寧校洞第七號墳等所出ノモノ皆ナ然リ。

大小二口共其ノ樣式全ク同一ニシテ、大刀ハ拵附ノ儘ニテ長約二尺八寸、小刀ハ同ジク一尺五寸アリ。大刀ノ環頭ハ鐵地銀張ニシテ短キ圭頭狀ヲ呈シ、環ノ中央ニ三葉形アリ。根本ハ銀張リニシテ兩端ニ蛇腹ノ二帶ヲ附ス。柄ノ部分ハ打出シノ連續環紋アル銀ノ薄板ヲ卷キ、下端ハ銀線ヲ以テ固着ス。此ノ刀ニハ鏝無ク、直ニ鞘口ノ銀覆セニ接セリ。身ノ長一尺九寸、刃渡り一寸。峰鋒先ニ近キ部分ニ於イテ却ツテ厚ク、三分五厘アリ。鞘ハ木質ノ儘ニ遺存スルノミニシテ、鞘金具トシテハ、タダ鞘尻ニ近ク細キ銀製ノ責一箇ヲ附セルヲ見ルノミ。小刀ハ同一樣式ナルモ、柄ノ部分特ニ長ク、鞘金具ヲ缺ク。身ノ長七寸五分、刃渡り六分五厘アリ。ナホ此種環刀ニ關シテハ、後章別ニ説ク所アラム。

第四圖 梁山北亭洞古墳發見華帶原狀圖



前者ハ共ニ細長キ圓錐形ヲ呈シ、鋒部ノ切斷面一ハ丸味アル三角形ヲナス。後者ハ共ニ鋒ト穗袋トノ中間ノ關ニ、括レヲ表ハシ、鋒部菱形ノ斷面ヲ有ス。其ノ一口ハ大形ニシテ原狀ニ於イテ長一尺ニ達ス可ク、穗袋端ニハ切込ミアリテ、此ノ部分ノ目釘孔今ナホ存ス。

(11) 直刀(第三圖) 一口。拵ノ部分ヲ遺存セザルモ、身ハ比較的完好ナリ。長一尺二寸三分、刃渡り關部ニテ一寸二分、莖部ハ四寸、今マ目釘孔ヲ認メズ。

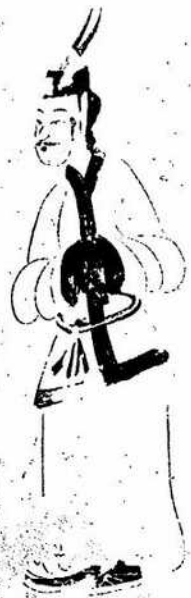
(12) 刀子(第七圖) 三口以上。内二口ハ略ボ形狀ヲ完存スルモ、他ハ斷片ナルヲ以テ大サ不明ナリ。二口ノ中一ハ長三寸二分、他ハ身部長二寸七分。普通ノ形式ニシテ、木片附着セルモ拵ノ狀態ハ之ヲ徵スルコト能ハズ。

(13) 槍身(第三圖及第七圖) 四個。形ノ全キモノ二、鋒先ノ部分ヲ缺損セルモノ二アリ

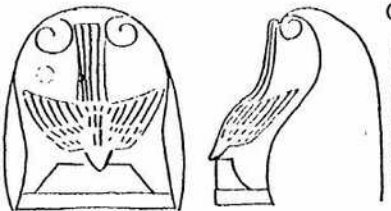
前者ハ共ニ細長キ圓錐形ヲ呈シ、鋒部ノ切斷面一ハ丸味アル三角形ヲナス。後者ハ共ニ鋒ト穗袋トノ中間ノ關ニ、括レヲ表ハシ、鋒部菱形ノ斷面ヲ有ス。其ノ一口ハ大形ニシテ原狀ニ於イテ長一尺ニ達ス可ク、穗袋端ニハ切込ミアリテ、此ノ部分ノ目釘孔今ナホ存ス。

(14) 斧頭(第三圖及第七圖) 三個。腐蝕太シキモ略ボ其ノ全形ヲ存ス。内二箇ハ幅廣キ刃部ヲ有シ、柄ヲ挿入ス可キ穗袋アル通有ノ形式ニ屬シ、一ハ長五寸四分、他ハ三寸六分アリ。又他ノ一口ハ長サ四寸一分、其ノ柄ハ刃ニ直角ニ

第五圖(イ) 龍岡陵塚藏人物冠飾



第五圖(ロ) 唐代土偶鳥形冠飾



挿入ス可ク、根本ニ近ク其ノ孔ヲ通ゼリ。此種

ノ鐵斧ハ前式ニ比シテ類例希ニシテ、南鮮ニ於
イテハ忠清南道扶餘郡扶餘面陵山里第三號古墳
全羅南道潘南面大安里古墳等ヨリ之ヲ出シ、内
地ニ於イテハ山城國葛野郡松尾村下山田穀塚出
土品等ヲ其ノ著シキモノトナス。

(15) 不明金具(第三圖) 其ノ二箇ハ長方形ノ鉄器ニシテ
中央ニ孔アリ。兩端ノ角ニ面取リヲ加ヘ、薄キ

銀板ヲ張り、三ヶ處ヲ銜留トセリ。他ノ一箇ハ長サ一寸許ノ勾玉形ニ近キ銀被
セノ金物ナリ。一種ノ裝飾品カトモ思ハルルモ、遺骸ト離レテ出土シ、其ノ用
途ヲ知ルコト困難ナリ。

(16) 鐵器殘缺(第七圖) 三個ノ内、一ハ棒狀ノ一端尖リテ鐵ノ如キ外形ヲ呈シ、二ハ兩
端ノ折斷セル細キ棒狀ノモノ、而シテ他ノ一ハ一端分レテ毛抜キ形ヲ呈セリ。
但シ何レモ完形ヲ存セザルヲ以テ用途ヲ確ムル能ハズ。

〔人骨齒牙〕 本石室發見ノ頭蓋及股骨ノ斷片ハ紛碎シテ、全ク測定ニ堪エズ。タ
ダ齒牙四個ハ之ヲ京都市帝國大學教授醫學博士足立文太郎氏ノ鑑定ヲ請ヒテ、
其ノ中年ニシテ頑強ナラザル個人(性別不明)ノ上齶右側大白齒、同右側犬齒、下齶

右側(イ)切齒(イ)ナルコトヲ知ルヲ得タリ。一箇ハ破不詳明性別其他ニ就キテ知ル能ハザルモ、記シテ參考ニ供ス。

要之、本古墳ハ其ノ封土ノ大サニ於イテ、後述第二號古墳ニ比シテ遙ニ小ナルモ、其ノ石室ハ土砂ノ流入無ク、遺物
亦タ完存シテ、星州ニ於ケル古墳ノ研究ニ向テ、最モ貴重ナル一資料ヲ提供セリ。其ノ石室ノ構造ニ特ニ注意ス可キ點
無キモ、遺物ノ數量ハ比較的豊富ニシテ、其ノ銀製帶飾、金製耳飾、環刀等ハ、此地文化ノ狀態ヲ知ル可キ絶好ノ資材
タリ。之ヲ此ノ地方王侯ノ墳墓トスルコト能ハズトスルモ、ナホ有力ナル一貴紳ノソレタルハ、蓋シ疑フ可カラズ。ナ
ホ星州ノ古代文化ニ關シテハ、更ニ後章之ヲ論スル所アル可シ。

第二章 星山洞第二號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第二九圖—第三六圖)

〔外形〕 第二號古墳モ圓塚ニシテ、第一號墳ノ東南ニ接シ、上部少シク平坦トナリ、截頭圓錐形ヲ呈ス。其ノ形狀略ボ完好ニシテ、丘陵ノ端ニ營マレタルヲ以テ頗ル雄偉ナル外貌ヲ有ス。蓋シ星山洞古墳群中最モ大形ナルモノノ一ナラム。封土ノ高約二十尺、底徑約九十尺。其ノ表面ハタダ芝草ヲ以テ被ハレタルノミニシテ、何等特異ノ點ヲ見ズ。

〔發掘〕 第一號古墳ニ引續キ發掘調査ニ決シ、九月二十七日午後ヨリ作業ニ著手セリ。前者ノ例ニ倣ヒテ東北東ノ中腹ニ一區ヲ劃シテ封土ヲ削リ、石室ノ一端ニ達セントセルモ、作業ノ進行容易ナラズ。表面下三四尺ノ位置ニ割石ノ散在セルト、少許ノ大形祝部風土器破片ノ混セルモノアルヲ見タルノミ。漸次發掘區劃ヲ擴大シテ、第四日即チ九月三十日午前十時ニ至リテ、發掘區域ノ西南隅地下約八尺ニ於テ石積ノ一端ニ達セルガ、更ニ周圍ヲ掘リ擴ゲテ其ノ構造ヲ檢セルニ、一小石室(附屬第一石室)ナルヲ確メタリ。内部ニ伸展葬ノ人骨アリ。祝部風高坏四箇甕形ノ甕室ニ於テ發見セラレ。

此ノ小石室ハ其ノ大サ及位置ヨリシテ、固ヨリ本古墳ノ主室ニ非ザルヲ認ム可キニヨリ、其ノ調査ヲ完了セル後、發掘ノ必要上已ムヲ得ズ、之ヲ破壞シテ其ノ作業ヲ繼行セシニ、前記小石室ノ東方約六尺、封土ノ表面ヨリ約四尺ノ位置ニ於テ、更ニ一小石室ヲ發見セリ。内ニ高坏四箇アリ。之ヲ附屬第二石室トナス。

十月一日此ノ小石室ノ調査ヲ竣ヘ、更ニ發掘區域ヲ擴大シ、墳ノ中央部ニ及ボシ、上部ヨリ封土ヲ削去シテ、既掘ノ部分ニ連續センコトヲ期セリ。蓋シ第一小石室ノ下部ニ石積ノ層アルヲ發見シ、其ノ主室上部ヲ被ヘルモノナル可キヲ推察セシムルモノアルヲ以テナリ。翌二日夕ニハ表面下十尺餘ニ達シ、前記石積ノ部分ニ到リシガ、ナホ主石室

ノ位置ヲ確ムルコト能ハズ。此間封土ノ表面附近ヨリ、鐵器片一、土器片若干ヲ發見シ、更ニ殘存セル封土西北ノ半部ヲ削去シ、封土ヲ頂上ヨリ中斷セル大溝ヲ作リテ、徹底ノ發掘ヲ行フノ必要アルヲ認メ、三日ヨリ人夫ヲ増シテ二十人トナシ、大ニ業ヲ進メシム。四日五日兩日ハ降雨ノ爲メ作業ヲ中止セシガ、七日ニ至リテ積石ノ層位ニ達シ、遂ニ主室ノ天井石ニ到著セリ。其ノ北方ノ一枚ハ中斷シテ室內ニ落込タルモ、石室ハ南北ニ長キ形狀ヲ有セルモノナルヲ明ニセリ。八日ヨリ人夫ヲ減ジテ八名トナシ、石室ヲ南中北ノ三區ニ分チテ精査スルノ方針ヲ立テ、先ヅ南區ヨリ始ム。

南區ハ底部ノ敷石上幾分黒味アル灰層ノ如キモノアリ。槍身刀斧頭鏃等ノ鐵器類及土器ヲ發見ス。北區ニ至リテ天井石ノ墜落セルモノニ會シ、之ヲ除キテ臺及臺ヨリ成レル大土器群ノ破碎セルモノ、又タ數個ノ高坏等ヲ獲タリ。九日中腹ノ調査ニ於テ環頭刀柄鐵器片等ヲ採集シ、午後三時全ク調査ヲ完了ス。直ニ復舊工事ニ着手シ、翌日ニ至リテ之ヲ竣レリ。本古墳發掘ニ費セシ日數前後十一日、使用人夫ノ延人員百三十六人ニ達セリ。

第二節 石室ノ構造 (第二九圖、第三七圖—第四〇圖)

本古墳ハ已ニ述ベタルガ如ク、中央ニ主石室ヲ有スルノ外、封土ノ一隅ニ附屬ノ小石室二箇ヲ發見セルガ、全封土ニ亘リテ發掘地域外更ニ幾何ノ小石室ヲ藏セルカ明ナラズ。コハ封土ノ全部ヲ削平シテ檢出スルニ非ザレバ、到底知ルコトヲ得ズ、限ラレタル時日ヲ以テ遂行スルコト殆ド不可能ナルノミナラズ、古墳ヲ全然破壞シ去ルノ勞弊ト相償フ可キ結果ヲ豫期スルコト難キヲ以テ、敢テ之ヲ試ミザリキ。今次ニ發見セラレタル石室ニ就キテ其ノ構造ヲ録ス可シ。

〔主室〕 主室ハ其ノ位置封土ノ略ボ中央ニアリ、南北ニ長キ直方形ノ石室ナリ。形狀第三八圖ニ示スガ如ク、長十一尺四寸、幅中央部ニ於テ約五尺七寸アリ。壁面ハ第一號古墳ニ於ケルト同様ノ割石ヲ以テ構成シ、高五尺五寸内外ニ及ブ。而カモ其ノ構造ハ前者ニ比シテ巧緻ノ度ヲ加ヘ、石材ノ割面ヲ整ヘテ殆ド垂直ニ近キ側面ヲナス。又タ側壁ノ外

部ハ、壁面ヲ構成セル石材ノ外、大ナル石塊ヲ幾重ニモ積成シテ、堅平ヲ加フルニ努メ、石室ヲ中核トセル一箇ノ石塚ヲ形成セルガ如キ觀アリ。(第三七圖參照)

天井部ハ花崗岩ノ大材ヲ横架シ、今マ其ノ南半ノ二石ヲ完存ス。一ハ幅一尺五寸許ノ方柱狀ノ割石ニシテ、其ノ南ニ接スルモノハ、長サ五尺ニ及ベル大形ノ平石ナリ。北半部ノ天井石ハ墜落シテ原形詳ナラザルモ、殘存ノ石材ヨリ推スニ、稍々扁平ナル大石ヲ累ネタルモノナルガ如シ。石室ノ底部ハ小形ノ割石ヲ敷キ、石並ビ三四重ニシテ、其ノ厚四五寸アリ。發掘ノ際コノ礫層ノ上部ニ帶黒色灰様ノ層ノ存在ヲ見タルコト、既ニ記シタルガ如シ。(第三八圖參照)

此ノ石室ハ構造上何レガ戸口ナルベキヲ確メ難キモ、南壁ノ上部實測断面圖ニ見ルガ如ク、少シク傾斜セルコトト、後述遺物配列ノ状態ヨリ、臆氣ナガラ遺骸ハ北方ヲ枕トシテ葬ラレタルヲ察セシムルモノアリ。強キテ入口ヲ求ムルニ於イテハ、南方ト見ルヲ穩當トス可キカ。

〔附屬第一石室〕 主室ノ東壁ヲ距ル約七尺、其ノ外部積石ノ上ニ築成セラレ、石室底部前者ノ其レヨリ約二尺ノ上位ス。主要部ハ長六尺七寸、幅一尺五寸内外ノ直方形ヲナシ、別ニ東南隅ニ竪一尺三寸、横一尺九寸ノ翼室ヲ附セルヲ以テ一見鍵形ヲ呈セリ。(第三九圖參照) 主要部ノ方向ハ略ボ主石室ノソレト一致シ、大形ノ割石ヲ以テ壁面ヲ積ミ、上部亦タ特ニ大ナル石材ヲ用キズ。其ノ構造主室ニ比シテ稍々精巧ヲ缺ク。基底ハ直ニ主室外圍ノ積石ニ接觸シ、其ノ傾斜ニ從ヒテ此ノ小室亦タ少シク全體ニ於イテ東西ニ傾ケリ。此等ノ點ヨリ考フルニ、本室ハ主室ノ構成ト時ヲ隔ツルコト無ク、恐ラクハ主室築造ノ過程中、或ル事情ニヨリ本室ヲ作ルニ至リシモノノ如シ。

〔附屬第二石室〕 ハ第一小石室ヨリ約二尺五寸高キ平面ニアリ、其ノ東南東約六尺ニ位ス。封土ノ傾斜面下約二尺五寸ニ天井石ノ中心ヲ存ス。其平面稍々撥形ヲ呈セル直方形ニシテ、西北隅ニ近ク小形ノ龜狀入り込ミヲ有セリ。室ノ長サ約五尺九寸、幅最モ濶キ部分ニ於イテ二尺五寸アリ。(第四〇圖參照) 長軸ノ方向ハ第一小室ト一致シ、側壁ハ高約二尺、割石

ヲ以テ築成シ、上部ニ至ツテ稍々縮約セリ。其ノ天井石ハ扁平ナル石材三箇ヲ以テ覆ヒ、北端ノ一石ハ長四尺幅二尺三寸ノ大石ニシテ、優ニ室ノ上部ヲ被ヒテ餘アルモ、他ノ二者ハ小形ニシテ、各石ノ間空隙多ク、埋葬後直ニ土石ノ流入ヲ豫想セシム。底部ハ單ニ粘土ヲ以テ固メ、礫層ノ設備ナキモ、壁面ノ構造ハ大體ニ於イテ、第一小室ニ比シテ稍々精巧ヲ加フアルモノ、如シ。

第三節 遺物ノ配置 (第三九圖—第四一圖)

〔主室〕 既ニ述ベタルガ如ク、主室ハ天井石ノ一部破壊シテ土砂ノ流入アリ、副葬品ハ此ノ土砂採取中點々發見セラレタルモノ多キヲ以テ、第一號古墳ノ如ク明確ニ其ノ配置ノ原狀ヲ認ムル能ハザルモノアリシガ、區劃的精査ノ結果、知リ得タル所略ボ次ノ如シ。(第四一圖參照)

即チ遺物ノ配置ハ之ヲ略ボ二群トス可ク、一ハ室ノ北方ナル大形壺及ヒ壺、高杯ノ類ニシテ、他ハ東南隅ニ於ケル土器及鐵器ノ群ナリ。此ノ内前者ハ一端ニ高大ナル陶製基臺アリ、其ノ上ニ大ナル壺ヲ載セ、臺ノ南ニ接シテ臺附長頸壺アリ。又々數箇ノ小形蓋附高杯ヲ其ノ附近ニ並列セリ。此等ハ墜落セル天井石ノ下部ニ位シ、破碎セルモノアリシモ、略ボ配列ノ原狀ヲ辨認セシム。後者ハ南壁ノ中央ニ接シテ、小形臺附壺一箇アリ。其ノ東南ニ高杯五箇殆ド一列ニ散在ス。棺身及釘等ノ鐵器亦タ之ト相交ハリ、土器ハ蓋器何レモ接合セズ、重累混亂ノ狀ヲ呈セリ。此ノ二群ノ外調査ノ際隨處ニ刀劍槍身其他ノ鉄片ヲ獲タルモ、何レモ混亂ノ状態ニアリ、一々地點ヲ明示ス可カラズ。タダ其内石室中央部ノ西壁ニ近ク、鉄製環狀柄頭一箇ヲ發見セルヲ注意ス可キノミ。

如上遺物配列ノ状態ト發掘ノ際注意シタル諸種ノ現象ニヨリ、此ノ主石室ハ埋葬後一度攪亂セラレシモノナルヲ推定セシム。遺物ノ散亂ハ單ニ土砂流入ノ爲メトハ解ス可カラズ。其ノ土器鐵器類ノ殘存シテ、何等貴金屬ノ裝飾品ノ存

在セザルハ、主トシテ此等ヲ目的トシテ盜掠セルモノナル可ク、土器亦タ一部分ヲ存シテ破片ヲ完存セザルモノアルハ、土砂ト共ニ持チ去ラレタル爲メカ。ナホ北半部ニ大ナル土器ノ破片ヲ完存セルハ、盜掘ノ際偶々此ノ部分ノ天井石墜落セルニ由リ遺棄セラレタルモノナラム。斯ノ如ク本古墳ハ遺物ノ一部分ヲ存スルノミナルヲ以テ、遺骸埋葬ノ状態ヲ推スコト困難ナルモ、北壁ニ近ク大形壺及基臺ノ土器群アルコトハ、之ヲ第一號古墳ノ實例ニ徴シテ遺骸ノ頭部ニ近ク置カレタルヲ想像セシム可キモノアリ。然ラバ則チ屍骸ハ北ヲ枕シテ、伸展位ニ葬ラレタルヲ推測スル必シモ不可ナルナカラム。

〔附屬小石室〕 第一小石室ニ於テハ、發掘ノ際遺骸ナホ殘存シテ、其ノ埋葬ノ状態ヲ窺フ可キモノアリ。即チ直方形ノ室中西南方ニ略ボ完存セル頭蓋アリ。破片ノ際、顔面ヲ上ニシテ伸展ノ狀ニ葬ラレ、副葬品ハ東南隅ノ翼室ニ、高坪四箇ヲ規則正シク並置セリ(第三九圖參照)。第二小室ハ土砂流入シテ前者ノ如ク明ナラザルモ、南方東壁ニ接シテ二箇、北方ノ東西兩壁ニ接シテ各一箇ノ高坪ヲ存セリ。思フニ遺骸ハ室ノ中央ニ葬リ、其ノ周邊ニ土器ヲ副葬セルモノナラム。(第四〇圖參照)

第四節 遺物 (第四二圖—第五〇圖)

本古墳主室内ノ遺物ハ前節既ニ略述セルガ如ク、土器及鉄器類ノ二ニ分ツ可ク、前者ニハ壺、臺、高坪等各種アリ。後者ニハ刀劍、槍身、斧頭等アリ。以下一々ニ就キテ記ス所アラム。

〔土器〕 副葬品中最モ多數ヲ占ムルモノニシテ、多クハ破碎セルモ、之ヲ修復シテ總數十五箇ヲ得タリ。何レモ祝部風ノ堅緻ナル窯器ナリ。

(1) 壺(第四三圖及第五〇圖) 一箇。高九寸五分口徑五寸五分。稍々長キ頸ヲ有シ、二箇ノ紐帶ト刷毛目ノ波狀紋ヲ繞ラセリ。肩部ハ平滑ナルモ、其ノ以下ニハ製作ノ線條紋ヲ置ク。頸部其他ハ半バ地釉ヲ出シ滑澤アリ。其ノ形狀整美ナリ。主

室北壁ニ近ク、墜落セル天井石下ニアリテ破碎セルモ、今マ之ヲ接合スルニ、頸部及腹部ニ小缺損アルモ、略ボ完形ヲ得タリ。次項基臺ノ上ニ置カレタルコト、第一號古墳ニ於ケル例ノ如カリシナラム。

(2) 臺(第四二圖及第五〇圖) 一箇、前臺ト同一地點ニ於テ發見セラレ、破片ヲ接合スルニ殆ド完形ニ復セリ。高一尺八寸八分、上徑八寸四分、底徑一尺一寸四分。其ノ製作ノ必要上、特ニ上下兩部ニ於テ厚手ニシテ、堅緻ナル陶質ヲ呈セリ。形狀ハ第一號墳出土ノモノニ似タルモ、下部ハ大キク鼓胴ノ形ヲナシ、上部ハ小ニシテ牽牛花狀ヲ爲ス。表面ハ横帶ヲ以テ十四段ニ分チ、上ヨリ第四段以下第十段ニ至ル迄、縦ニ四列ノ透孔ヲ穿チ、其ノ以下ニハ市松狀ノ孔ヲ不規則ニ開ク。又タ上縁ヨリ第十一段ニ至ル間ハ、四周ヨリ縦帶四箇ヲ降シ、各横帶上ヲ銜留トセル形ヲ現ハセリ。蓋シ此ノ種ノ臺ノ全形ハ金屬器若シハ木皮器ノ原狀ヨリ出デタル遺形ナリ。(參照) 前項ノ大壺ヲ此ノ臺上ニ裝置スルニ、其ノ權衡相應ヘルモノナルコトハ、寫真圖ニ於テ見ルガ如シ。

(3) 臺附壺(第四三圖及第五〇圖) 二箇、其ノ一ハ大形ニシテ薄手ノ堅質ナルモ、稍々淡青色ヲ帶フ。高一尺五分、口徑四寸九分。前二者ノ近傍ニ於テ之ヲ發見シ、破片ヲ復合スルニ不足ノ部分多キモ、略ボ全形ヲ認ムルニ足ル。(破片ニ魚骨ノ如キモノアリ) 頸部ニハ二條ノ紐帶アリ。其ノ下ニ刷毛目波狀紋ヲ施ス。臺部ハ高サ頸ト相若キ、六箇ノ透孔ヲ有ス。(第五〇圖參照) 其ノ二ハ南壁中央附近ヨリ發見セラレ、小形ニシテ高七寸三分、口徑四寸、頸部ノ比例前者ニ比シテ高ク、タダ一條ノ帶ヲ繞ラシ、臺ニハ五箇ノ透孔アリ。粗製ニシテ歪形ナリ。(同上)

(4) 高坪(第四四圖及第五〇圖) 十一箇。何レモ蓋ヲ備フ。之ヲ型式ニヨリテ略ボ三種ニ分ツコトヲ得。一ハ蓋ニ透孔ヲ有スル大形ノ鉢アリ、器脚ニハ二段四箇宛ノ透孔ヲ入ル。(同上) 二ハ器脚比較的深ク、側面ニ波狀刷毛目紋アリ。脚部ハ太クシテ安定ノ觀ヲ呈ス。器ト蓋トハ接合シテ出土セルモ、蓋ハ器ヨリモ大ニ過ギ、燒方モ亦タ相同ジカラズ。(同上) 三ハ前者ニ比シテ其ノ形小サク、蓋ニハ圓環狀ノ鈕アリ。之ヲ繞リテ表面ニ波狀刷毛目紋ヲ印シ、器脚ニハ

一段ノ細長キ透孔ヲ開ク。蓋ト器トノ權衡ハ宜シキヲ得、形狀整美ニシテ、臺脚亦タ美ハシキ曲線ヲ呈ス。又タ質ハ特ニ堅緻ニシテ表面黒キ光澤ヲ帶ブ。(同上157)内蓋ノ之トハ別式ニ屬シ、或ハ過大ナル等變態ノモノアリ。此等ハ皆ナ器蓋ノ本來ヨリ必シモ相一致セザリシヲ語ルモノナリ。高塚中一箇(同上)ニハいばにしの貝(Chais tinnu losa problematica, Baker (purpura)) 數箇ヲ容レタルモノアリ。(京都帝國大學理學部助手 黒田徳米君ノ鑑定ニ據ル)

〔鐵器〕 何レモ缺損腐蝕シ、其ノ發見位置ハ混亂シテ、原狀ヲ確ムルコト難シ。此ノ内ニ刀身、環頭、槍身、斧頭等アリ。

(5) 刀身(第四九圖) 皆ナ斷片ナルモ、其ノ副葬ノ刀類ハ多數ナリシヲ推スニ足ル。形ノ大小種々アリ。刀子ノ鋒部、其ノ身部等モアリ。後者ニハ今ナホ鞘ノ木片附着セルヲ認ム。

(6) 環頭(第四六圖) 一箇。鉄製ニシテ楕圓形ノ内ニ三葉ヨリ成レル簡單ナル裝飾ヲ入ル。モト銀被セナリシナラムモ、今ハ全ク其ノ痕無シ。現存部ノ長サ一寸九分。環頭ノ幅二寸一分。第一號古墳所出ノ大形ノモノト殆ド同大ナリ。何レノ刀身ニ屬セシモノナルカ不明ナリ。發見位置ハ或ハ北壁ニ近カリシト云ヒ、或ハ中央部ナリシト云ヒ確ナラズ。

(7) 槍身(第四八圖及第四七圖) 缺損アルモノヲ合シテ其數凡ソ七箇。内五箇ハ普通ノ形式ニシテ、袋ヨリ穂先ニ向ツテ漸次幅ヲ減ジ、兩者ノ間ニ殆ド關ヲ認メ難シ。又タ一箇ハ僅ニ關ヲ認メラレ、鋒ノ横斷面菱形ヲ呈ス。又タ鋒ノ横斷面長方形ニ近ク、袋ヲ特ニ太ク作レルモノニ箇アリ。其ノ一ニハナホ穂袋ニ柄ノ木片ヲ遺存セリ。穂袋部ノ破損セルモノヲ除キ、他ノ三者ハ皆ナ其ノ端ニ近ク目釘ヲ存ス。

又タ前諸例ト異リテ一種團扇形ヲ呈シ、細長キ穂袋ノ尖端ニ幅廣キ鋒部ヲ附セルモノアリ。(第四八圖) 是ノミニテハ破損シテ全形ヲ知ルニ山ナキモ、谷井委員ノ昌寧校洞第七號墳ヨリ同一器ノ完品ヲ發見セラレタルヲ参照シテ、其ノ原形ヲ知ルヲ得ベシ。(第二七圖中點線ヲ以テ其ノ復原圖ヲ示ス) 又タ前例ト略ボ相似テ、横斷面劍ト同様ノ鋒部、穂袋ノ一方ニ偏シテ、

附セラレタルモノアリ。(同上) 其ノ鋒端缺損セルモ他ニ類例ヲ知ラズ。

(8) 斧頭(第四八圖) 一箇。長サ三寸三分。穂袋ト幅廣キ及部トヨリ成リ、最モ普通ノ形式ナリ。

(9) 方形座金(第四六圖) 一箇。略ボ方形ニシテ中央ニ方孔ヲ開キ、四隅ニ圓孔ヲ穿ツ。用途明ナラズ。

(10) 雜具(第六四圖) 丁形ノ鐵器ニ環ヲ穿テルモノ、鉄棒狀ノモノ、環狀ノ鐵具、勾玉形ノ鉄製品等アリ。後者ハ長一寸、第一號墳所出ノモノト略ボ同形ナリ。(運送中破)

〔附屬小石室土器〕 既ニ記セルガ如ク、第一小室ヨリ蓋附高環四個、第二小室ヨリ高環四箇ヲ發見セリ。即チ

(11) 高環(第四七圖及第五〇圖) 第一小石室發見ノモノハ二型式アリ。一ハ主室出土ノ第一型式ト同形ニシテ、質堅緻黒色ヲ帶ビ、器ハ比較的深ク、脚太クシテ透孔二段六箇宛ヲ開キ、側面ニ刷毛目紋アルモノ一箇。(同上) 二ハ主室ノ第二型式ニ似テ、灰白色ヲ帶ビ、一部分ニ吹出シ袖ヲ現ハシ、器ハ淺クシテ脚細ク、透孔ハ二段四箇宛ヲ入ル。(同上16) 蓋ニ至リテハ兩型形式トモ同型ニシテ、圓形環狀ノ鈕ヲ有シ、側面ニ切込ミ四箇ヲ有ス。タダ第二式中蓋ノ著シク大形ニシテ、表面ニ點線紋ヲ附セルモノアリ。本來器ト相對セザルモノヲ使用セシコトヲ示セリ。

第二小石室出土ノ四箇(第四七圖及第五〇圖) ハ何レモ上記第二類ニ近キ形式ヲ有シ、製作粗雜ニシテ皆ナ多少ノ歪ミアリ。悉ク蓋ヲ缺ク。

〔附屬第二石室人骨〕 附屬第一石室ハ開口ノ際、頭蓋骨ノ殆ド完存セル人骨ヲ認メタリシガ、採取ノ時破碎シ、今マ僅ニ頭蓋及四肢骨ノ一部ヲ保存シ得タルノミ。友人東北帝國大學教授醫學博士長谷部言人君ハ吾人ノ請ヲ容レテ、此等入骨ニ就キテ其ノ研究ノ一班ヲ記述セラレタルモノ、別ニ本報告ノ最後ニ附載スル所アリ。其ノ詳細ハ同君ノ記載ニ譲リ、タダ此ノ人骨ガ壯年男子ノモノニシテ、頭蓋ノ指示數七八、〇ニシテ中頭ニ屬シ、現代ノ南方鮮人ヨリモ、寧ロ北方鮮人ノ特徴ト一致セルヲ摘記シ置カム。(第一二圖)

本古墳ハ上記スガ如ク、之ヲ第一號古墳ニ比スルニ、其ノ封土ノ大サニ於テ彼ヲ凌駕スルコト數倍ナルモ、其ノ
主石室ノ大サハ比較的大ナラズ。タダ之ニ附隸セル二小石室ノ存在ヲ異トス可キノミ。又タ遺物ハタトヘ一度盜掘ニ會
ヒ、貴重品ヲ奪ヒ去ラレシヲ推測ス可キモ、其ノ殘存土器ニヨリ之ヲ察スルニ、彼ニ比シテ甚シキ差違アリシヲ想像ス
ルコト能ハズ。又タ時代ニ於テモ、其ノ遺物ヨリシテ彼ト大ナル間隔アルヲ認ム可カラズ。タダ第一號古墳ヲ築造シテ
後チ、其ノ附近ニ斯ノ如キ宏大ナル封土ヲ有スル墳墓ヲ營メリトスルヨリモ、此ノ第二號墳先ヅ形勝ノ地點ニ造ラレタ
ル後、少シク遅レテ第一號墳ヲ其ノ下方ニ起セシト推測スルヲ穩當トス可キガ如シ。サレバ文化時代ハ兩者相同ジキモ
強テ營造ノ先後ヲ考フレバ、斯ノ如キ所見ニ到達ス可キナリ。又タ附屬ノ二小室中少クトモ第一小室ハ、其ノ構造上
主室築成中ニ造ラレシヲ認ム可ク、其ノ遺物ノ貧弱ナル、石室ノ狭小ナル等ヨリシテ、主室被葬者ノ從者ノ類ナリト想
像ス可ク、其ノ壯年男子ノモノタル可キコトハ、長谷部博士ノ人骨調査ノ結果明カナル所ナリ。第二小室亦タ略ボ之ト
同性質ノモノナル可ク、其ノ果シテ殉葬ニ出デタルヤ、將タ他ノ事情ニヨリテ附葬セシモノナルヤ、遽ニ斷ズルコト能
ハズ。

第三章 星山洞第六號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第五一圖—第五三圖)

〔外形〕 本古墳ハ前記二古墳ヨリ連續シテ北上セル丘陵脊梁上ニ連續セル古墳群中ノ一ニシテ、第一號古墳ヨリ數ヘ
テ第六ニ當レルモノナリ。(第五二圖) 外貌低キ圓塚ナルモ、東、西及南ノ三面ハ丘陵ノ下降傾斜面ニ連リ、封土ノ限界ヲ定
ムルコト能ハズ。發掘ノ結果知り得タル石室ノ底面ヨリ測ルニ、封土ノ頂上ニ至ル高約十尺、基底徑約三十尺ニ近シ。
附近ニハ松樹ヲ生ゼルモ、塚上タダ土砂ヲ暴露セルノミ。

〔發掘〕 本古墳ハ第二號古墳調査繼續中、人夫ノ一部ヲ割キテ發掘セルモノニシテ、其ノ作業ニ着手セシハ、十月三
日午前十時ナリ。人夫八名ヲ以テ、封土ノ中央部東半ヲ穿鑿セシメシニ、午後二時過ギ發掘區域ノ中央部地下約三尺餘
ニ割石積ミノ存セルヲ認メ、更ニ北西ニ掘リ擴ゲ、遂ニ表面下三尺八寸ニシテ石室ノ天井石ノ一部ニ到達セリ。側壁ト
天井石トノ間隙ヨリ内部ヲ洞見スルニ、土砂ノ充塞セルモノ無カリシヲ以テ、側壁ノ一部ヲ穿テテ人跡ノ出入シ得ル程
度ノ孔ヲ造リ、梯子ヲ下シテ方漸ク内部ニ入ルヲ得タリ。翌四日先ヅ内部ノ南隅ナル天井石ノ間隙ヨリ流入セル少許
ノ土砂ヲ搬出セシメシニ、内ニ人骨片ノ混在セルモノアリ。次デ出入ノ便ヲ謀ランガ爲メ、天井石附近ノ土ヲ削レルニ、
南壁積石ノ間ニ後ヨリ埋葬セラレシト思ハルル人骨ノ遺存スルヲ發見セリ。其ノ頭蓋ハ略ボ完存シ、前頭部ヲ北ニシ屈
葬ノ状態ニアリシモノノ如シ。(長谷部博士論文中文中ノ600頁) (第五二圖及) 此ノ日内部ノ調査ヲ行ヒ、復舊工事ハ十月七日
午後人夫六人ヲ以テ完了セリ。

第二節 石室ノ構造ト遺物ノ配置 (第五四圖—第五七圖)

〔石室〕 本古墳ノ石室ハ南北ニ長キ直方形ニシテ、封土ノ中央部ヨリ稍々南ニ偏在シ、長サ約十尺、幅三尺弱。兩側

長壁ハ上方ニ於テ稍々縮約シ、高サ中央部ニ於テ約六尺アリ。其ノ石積ミノ手法ハ寫真並ニ圖面ニヨリテ之ヲ窺フ可ク、大小ノ山石ノ破塊ヲ積ミテ、其ノ平滑ニ近キ小面ヲ内部ニ現ハシ、石間ノ空隙ハ填ルニ小石片ヲ以テセリ。昌寧其他ノ地方ニ於テ見ルガ如キ漆喰ヲ石壁面ニ塗レル痕ヲ見ズ。又タ石室ノ外部モ填ルニ割石ヲ以テシ、構造ノ堅牢ヲ期セルモノアリ。其ノ構架比較的精巧ト稱ス可シ。石室東北隅角ハ銳利ナル直角ヲ呈セザルモ、ナホ概シテ北短壁ハ垂直ニ近キ面ヲナシ整齊ナルニ反シテ、之ニ對スル南短壁ハ、上部ニ至リテ外方ニ張り出セルコト縦斷圖ニ示セルガ如シ。思フニ此ノ南壁ハ石室ノ出口ニシテ、埋葬後外部ヨリ補填セルガ爲メ不整形ヲ呈セルモノナラム。

天井石ハ巨大ナル板石三枚ヨリ成リ、上部更ニ副フルニ小石材ヲ以テシ、底部ハ拳大ヲ超ユル石塊ヲ以テ地山ノ削平面ヲ被ヒ、其ノ上ニ割栗石ヲ以テ化粧セリ。此ノ敷石層ノ厚サ五六寸ニ及ビ、表面暗褐色ヲ呈シ、遺物ハ石室ノ封鎖セラレタル當年ノ光景ヲ保存シ、タダ棺柩ノ大部分腐朽シテ遺骸亦タ見ル可カラザルヲ異ニセルノミ。

〔遺物ノ配置〕 遺物ハ石室ノ北壁ニ近ク、數箇ノ土器ヲ見タルノ外、鉄釘、木棺殘片等ノ石敷ノ隨處ニ之ヲ發見セルノミ。(第五七圖參照) 先ヅ北壁ノ下隅中央ニ一箇ノ壺アリ。口ヲ石室内部ニ横ニシテ倒レタリ。思フニ當初ハ直立セルモ、敷石ノ震動等ニヨリテ此ノ状態ヲ致セルモノナラム。北壁ノ西隅ニ二箇ノ高坏アリテ傾斜セリ。其ノ一ハ蓋ヲ具ヘ、其ノ内ニ貝殼ノ存セルヲ見ル。北壁ノ東隅ニ亦タ三箇ノ高坏アリ、其ノ一ハ直立セルモ他ハ横倒シテ、蓋四箇其ノ附近ニ散在ス。内一箇ノ高坏ニ貝ヲ盛レルコト亦タ同ジ。斯ノ如ク器物ノ傾倒セルハ抑モ何ノ故カ。恐ラク底部敷石ノ移動側壁挿入ノ石片等ノ落下ニヨリテ、此ノ狀ヲ呈セルニ至レルナル可シ。腐朽セル木片三四亦タ此ノ石室ノ北部ニ散亂セリ。是レ石敷ノ隨處ニ發片セラレタル鉄釘ト共ニ、木棺ノ遺片ナル可ク、以テ木棺ノ原位置ヲ推察スルニ足ラム。

以上ノ外遺物ハ南壁附近ニ之ヲ認ムルコト能ハズ。思フニ屍體ハ木棺ニ納メテ石室ノ中央ヨリ南部ニ亘リテ安置セラレ、前記土器ハ棺ノ頭部ニ之ヲ配列セラレタルナル可シ。

第三節 遺物 (第五八圖—第六二圖)

〔土器〕 總テ十二箇アリ。内壺形一、高坏五、同蓋六。皆ナ藍青色ノ堅緻ナル祝部風陶器ナルコト、他ノ諸墳ノソレト殊ナラズ。

(1) 壺(第五八圖及第六二圖) 一箇、口縁アル薄手ノモノニシテ、一部分ニ褐色ノ釉ノ如キモノ見ユ。肩部以外製作の條線紋ヲ現ハセリ。高七寸六分、口徑五寸三分。内部ニ何者ヲモ存セズ、一箇ノ孤立セル蓋(同上)ハ其ノ形狀高坏ノモノニ似ザルヲ以テ見レバ、東壁ニ接セル高坏群中ニ發見セラレシモ、此ノ壺ニ副ヘルモノカ。

(2) 高坏(第五八圖及第六二圖) 五箇。多少大小ヲ異ニセルモ、大凡高五寸前後ナリ。薄手ニシテ褐色釉狀ノ光澤ヲ有スルコト前者ト相同ジ。其ノ内西北隅ト東北隅トニ各一箇蓋ヲ被ヘルモノアリシモ、他ハ蓋器各其處ヲ異ニセルヲ以テ、寫真圖ハ其ノ位置ト形制ヨリシテ適宜ニ相副ハシメタルモノナリ。又タ前記蓋ヲ頂ケル高坏モ、其ノ蓋ハ形制大ニ過ギ、器ト正シク相適合セザルニ似タリ。而カモ此等ヲ無造作ニ配合シタルハ、元來本土器製作者ガ、蓋ト器ト別々ニ製作シタル粗品ヲ供給セルナル可ク、始ヨリ精密ニ適合スルヲ期セザリシナル可シ。高坏ノ臺脚ハ皆ナ短冊形ノ透孔ヲ開ク。其ノ數各四箇、上下二段ニ交互ニ配セラル。蓋ニハ平タキ鈕アリ。紋様ハ之ヲ附セズ。

高坏中二箇ハ其ノ坏中ニ貝ヲ容ル。西北隅ニ在リシモノハ蓋ヲ開ケハ中ニ貝アリ、凡テ四十二個。長サ一寸弱ノいばにし (Thais tumulosa problematica, Baker (purpura) ナリ。(同上) 其ノ東北隅ニ在リシモノハ、傾倒シテ貝ノ全數確カナラザルモ、現存セルモノ十數箇。内一箇はまぐり (Meretrix meretrix Linné) ヲ交ル他ハ、皆ナ前者ト同ジクいばにしナリ。(貝ノ種名ニ就キテハ、京都帝國大學理學部助手黒田徳來君ノ教示ヲ乞ヘリ)

〔鐵器等〕 刀子六、鉄釘十九アリシモ、刀劍貴金屬裝飾品等ヲ見ズ。

(3) 刀子(第六一圖下) 六口。但シ其ノ形ノ全キハ僅ニ一口ニシテ、其他ハ莖若クハ鋒先ノ部分ニ缺損アリ。此ノ完好ノ一

例ハ石室ノ北西隅ニ存セルモノニシテ、長四寸一分、及渡リ六分、峯幅二分ヲ有ス。他ノ諸品モ其ノ原形ニ於イテ之ト大差ナキモノナリシガ如シ。拵ノ制ハ身部等ニ柄鞘ノ木片殘存セルノミニシテ、他ハ殆ド見ル可キモノ無キモ、タダ一口(同上)ハ鞘口ニ近ク、幅三分ノ銀ノ薄板ヲ纏キテ纏ヲ作レルヲ見ル。

(4) 鉄釘及鉄鏡(第六一圖) 圓形ノ笠頭ヲ有スル鉄釘九本。最モ長キハ四寸ニ達シ、方柱形ノ身ヲ有ス。(同上) 鏡ハ同ク九本、長二寸五分乃至二寸七分アリ。内側ニ木材ノ殘片ノ附着セルモノアリ。此等ハ皆ナ主トシテ石室ノ四隅ニ散在シ、木棺ニ使用セラレシモノナルコトヲ察スルニ足ル。

(5) 木片(第六〇圖) 數個。炭化シテ其ノ木質ヲ確ムルコト困難ナルモ、恐ラクハ檜材ナムラカ。原形ヲ止メタリト思ハルル部分ニ於イテ厚サ一寸八分アリ。何レモ石室ノ北邊土器群ノ間ヨリ出デシモ、木棺ノ遺物トシテ見ル可キモノナラム。

以上要之、本古墳ハ曾テ盜掘ノ厄ニ遭ハザリシモ、其ノ内容ノ遺物貧弱ニシテ、之ヲ第一號第二號古墳ニ比スルニ、其ノ被葬者ノ位置遙ニ劣等ノモノナルコト言フ俟タズ。男女兩性ノ孰レニ屬スルカハ不明ナルモ、刀劍類ノ存セザルヨリ考フレバ、寧ロ女性ナリシヲ假想ス可キカ。石室内部ヨリ發見ノ人骨破片ハ、南壁積石間ヨリ出デタル人骨ノ一部ノ落達ミタルモノナラムト想定セシガ、長谷部博士ノ研究ニ據レバ、必シモ然ラザルニ似タリ。然レドモ其ノ發見狀態ヨリシテ、壯年ノ男性ニ屬スト推定セラルル南壁發見ノ人骨ハ、此ノ石室ノ被葬者ト見ルコト能ハザルハ疑ヲ容レズ。若シ夫レ其ノ年代ニ至リテハ、遺物ノ乏シキヲ以テ確ナル推定ヲ下シ難キモ、略ボ前二古墳ト同時代ノモノトシテ差支ナカラム。又タ注意ス可キハ、本古墳ノ石室水平高位ト封土トノ高サノ關係ナリ。封土ノ全部ヲ發掘スル機會ナカリシモ、吾人調査ノ範圍ヨリ考フルニ、此ノ石室ハ恐ラク丘陵ノ尾部地山ヲ鑿掘シテ、其ノ底部ヲ作り、室ノ壁面ヲ積成シ、

自餘ノ部分ハ割石ヲ以テ固メ、之ニ土砂ヲ被ヒタルモノノ如シ。故ニ其ノ石室底面ハ封土ノ基底ヨリ稍々下位ニ來ルノ結果ヲ生ジタリ。(第五三圖) 斯ノ如キハ這種地形上ニ於ケル石室築造ノ一法式トシテ見ルヲ得可ケム。支那漢代等ノ墳封土ノ基底ヨリ下ニ來ルヲ常トス。

第二編 慶尙北道高靈郡古墳

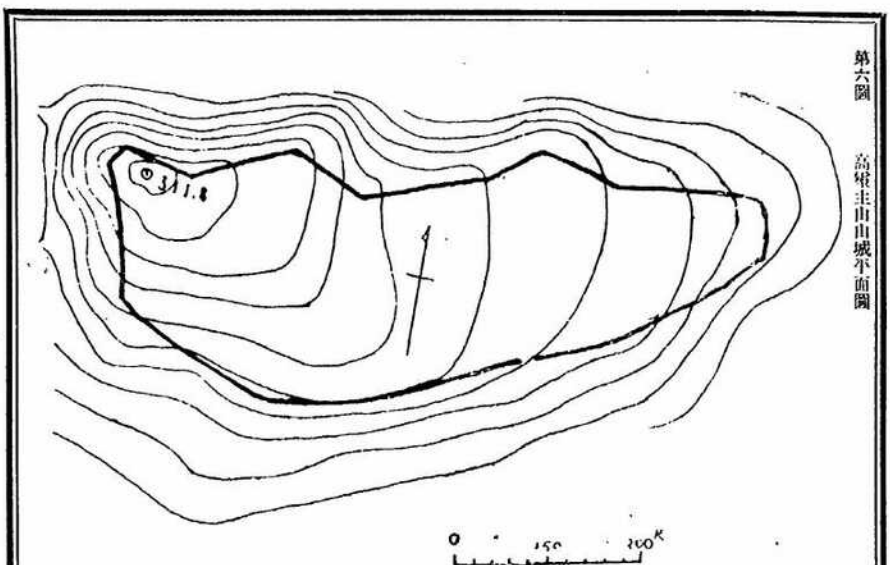
慶尙北道高靈郡ノ地ハ「三國史記」地理志ニ所謂本ノ大伽倻國ニシテ、始祖伊珍阿鼓王ヨリ道設智王ニ至ル十六世百五二十年間居ル處、新羅眞興王ノ滅ボス所トナレリト云フ。其ノ歴史地理上ノ考說ニ至テハ、是レ亦タ那珂博士今西委員等ノ論ゼル所ナルヲ以テ、今マ之ヲ贅セズ。又タ其ノ古墳分布ノ大要ハ、今西君ノ既ニ報告セルガ如ク、主山(耳山)南麓一帶ヨリ西方池山洞ニ至ルモノヲ主トシ、其ノ内ニハ宏大ナル外形ヲ有スルモノ數基アリ。「輿地勝覽」其他ニ所謂錦林王陵ト稱スルモノ其ノ一ヲ占ムルガ如シ。此ノ外邑内面、雲水面等ニモ古墳群ノ存スルモノアリト雖モ、此ノ地方ハ已ニ關野博士一行、黑板委員等ノ發掘調査ヲ經タルモノアリ。「朝鮮古蹟圖譜」^三ニ其ノ遺物ヲ載セタルノミナラズ、本員等ハ日程上長時日ヲ此ノ地ニ費スコト能ハサリシヲ以テ、僅ニ主山南麓一帶ノ古墳群ヲ踏査シ、其ノ外貌ノ一般ヲ察シ、既ニ發掘セラレタル古墳以外ニ、盜掘ノ形迹ヲ認メザルニ二三ノ小古墳ヲ發掘セルニ過ギズ。若シ夫レ高靈古墳ノ性質ニ就キテ、充分ナル智識ヲ得ント欲セバ、更ニ主山西南山梁ニ兀立セル錦林王陵ト傳稱セラルル大古墳ノ類ヲ調査スルニ非ズンバ、之ヲ期スルコト能ハザル可ク、之ガ爲ニハ長時日ト大ナル努力ヲ要スルコト言フヲ俟タズ(第六三圖 第六四圖)

第一章 池山洞第一號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘(第六五圖—第六七圖)

〔外形〕 本古墳ハ高靈主山ヨリ遠ク西南西ニ延ビタル丘陵ノ尾ノ一端ニ築カレシ圓形古墳ニシテ、封土ノ東西徑約三十四尺、高サ西側中腹部ニ於テ約六尺アリ。其ノ外貌ニ於テ何等特殊ノ構造部分ヲ認メズ。封土ノ南側ハ直ニ高丘ニ連リ、其ノ形狀確然タラザルモ、他ノ三側殊ニ北方ヨリ見ル時ハ、完好ナル圓墳ナルコトヲ識認スルヲ得可シ、而

第六圖 高靈主山山城平面圖



カモ本古墳ハ其ノ上ニ稚松ヲ生ジ、一見内部ノ擾亂セラレタル痕迹無カリシヲ以テ、次ノ第二號古墳ト共ニ、池山洞古墳群中ヨリ之ヲ選定發掘シタリ。

〔發掘〕 十月十四日人夫十名ヲ役シ發掘ヲ開始シ、梅原囀托主トシテ工事ヲ督シ、先ヅ封土ノ西半部ヲ削シテ、上部ヨリ發掘シテ石室ノ位置ヲ求ム。封土ハ砂礫ヲ混ゼル赤土ニシテ、作業容易ナリシカバ、直ニ石室ノ西端ト覺シキ部分ニ掘リ當テタリ。次デ天井石ヲ見ズ、直ニ側壁ノ一部ニ達シ、南北兩方向ニ其ノ發掘ヲ進メ、終ニ石室全部ノ浚掃ヲ行ハシム然ルニ石室ノ北側ハ略ボ原形ヲ存セシモ、南方ハ曾テ發掘ノ厄ニ遇ヒシ形迹ヲ存シ、タダ室ノ西北隅ヨリ土器蓋ノ殘缺一箇、略ボ中央部ノ南壁ニ接シテ鉄釘一箇ヲ發見シタル外、大腿骨ノ一片、東西ニ長ク僅ニ遺存セルヲ見タルノミ。石室ノ實測調査ヲ行ヒ、復舊工事亦タ同日午後五時ニ至リテ完了セリ。

第二節 石室ノ構造ト遺物

(第六五圖—第六七、圖第八二圖)

〔石室ノ構造〕 本古墳ノ石室ハ、東西ニ長キ一種ノ短冊形

ニシテ、封土ノ南邊ニ偏在ス。其ノ天井石ハ現存表土下約一尺ニアリ、構造ノ詳細ハ實測圖(第六)ニヨリテ之ヲ窺フ可シ。石室ノ大サハ長十一尺五寸、幅二尺四寸乃至二尺七寸アリ。四壁ハ小形ノ割石ヲ用キテ巧ニ之ヲ築成シ、其ノ高二尺乃至三尺ニ至ル。天井ハ平板石ヲ横架シテ之ヲ覆ヒ、更ニ其間ニ小石ヲ補填シテ、土砂ノ流入ヲ防ギシモノノ如シ。南北兩側壁ハ現狀ニ於テ、稍々中部ニ迫出シ、鼓狀ヲ呈セルハ上部ヨリノ壓力ニヨリテ此ノ不整形ヲ生ジタルナル可シ。天井石ハ今マ七枚ヲ存スルモ、石室ノ長サヨリ之ヲ察スルニ、本來九箇ヲ具ヘタルナル可ク、曾テ盜掘ノ際之ヲ失ヘルモノナラム。石室ノ底部ハ全面敷クニ川原石ヲ以テシ、其ノ厚サ一寸乃至二寸アリ。更ニ其ノ下部ハ粘土ヲ以テ固メタルヲ見ル。而カモ此ノ底面ハ長徑ニ於テ水平位ヲ保タズ、東邊稍々高ク、中央部最モ低キ狀態ヲ示セルハ、當初ヨリ其ノ構造ニ不整ナルモノアリシヲ語ルモノノ如シ。

〔遺物〕 副葬品ハ盜掘ニ罹レル結果トシテ、僅ニ一二ノ殘物ヲ見ルノミ。即チ其ノ一ハ黝青色祝部風土器ノ蓋ニシテ、撮ミヲ存シ直徑五寸余アリ。今マ其ノ一半ヲ闕ク。恐ラク高坏ノ蓋ナル可シ。表面圓圈ノ間ニ刻點紋ヲ印シ池山洞第二號古墳發見ノ諸例ト全ク其ノ性質ヲ等シクス。(第八) 鐵釘一箇ハ石室ノ中央部ヨリ出デ、長サ二寸三分、木棺ニ用キシモノナラム。其ノ附近ニ見タル大腿骨片ハ紛碎シテ測定調査ニ堪エザリキ。

要之、本古墳ハ以上ノ如ク、既ニ盜掘ニ遇ヒ、遺物ノ存スルモノ殆ト是レ無カリシモ、石室ハ南端天井石ノ一部ヲ缺失セル外、殆ト完存シテ其ノ構造ヲ明ニスルコトヲ得タリ。其ノ殘存セル零碎ノ遺物ハ、次ノ第二號古墳並ニ曾テ關野博士ノ發掘ニ係ル高靈古墳ノ副葬品ト、同性質ナルヲ推測セシムルモノアルヲ注意ス可キノミ。

第二章 池山洞第二號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第六六圖、第六八圖)

〔外形〕 本古墳亦タ上述第一號古墳ト等シク圓塚ニシテ、底徑約三十尺アリ。第一號墳ノ中心點ヲ距ル西南約四十尺クニ其ノ封土ノ中點ヲ置ク。所在地ハ丘陵ノ分岐點ニ近ク、封土ノ西端ハ雨水ノ爲ニ流深ヲ生ジテ一部ヲ失ヒ、稍々完形ヲ具ヘザルモ、表面何等發掘ノ形迹ノ存スルモノ無シ。(第六六圖) 封土ハ砂利ヲ交ヘタル赤土ナルコト、第一號古墳ト同ジ特殊ノ構造部分ヲ認ムルコト能ハズ。

〔發掘〕 十月十四日第一號古墳發掘ノ進程ニ從ヒ、其ノ人夫八名ヲ分チテ之ガ發掘ニ從事セシム。午前十時半ヨリ封土ノ中央部ヲ開掘シ、二時間ノ後表土下約三尺ニ於テ、石室ノ天井石及側壁ノ一部ニ到達セリ。次デ東西ニ向ツテ掘リ廣ゲタルガ、天井石ノ大部分ハ中央ヨリ折斷シテ室内ニ陥落シ、土砂流入セルノミナラズ、東南長壁ノ一部分亦タ崩壞シテ、曾テ盜掘ニ遭ヘルヲ疑ハシメタルモ、午後四時ニ至リテ、天井石ノ部位ヨリ深サ三尺一寸、室ノ中央部ニ近ク、土器ノ埋存セルヲ發見セリ。梅原囑托工ヲ督シテ、之ヨリ漸次東北方ニ於ケル底部ノ調査ヲ行ヒ、土器鐵釘等ヲ採集シ、午後五時半ニ及ブ。翌十五日ハ人夫五名ヲ以テ、午前九時ヨリ發掘ヲ繼續シ、一方梅原囑托ハ石室東北隅ヲ究メ、更ニ鐵釘、槍身、刀子、土器蓋等ヲ得タルガ、他方金高靈郡書記ハ人夫ノ一半ヲ率キテ、石室ノ西方ヲ發掘シタルニ、前日壁端ト思惟セシ部分ハ、天井石ノ落下セシモノノ殘片ニシテ、室ハ更ニ西南ニ細長ク延ビタルモノナルヲ知り、且ツ其ノ下部ヨリ遺物ヲ發見セルヲ以テ、此ノ方向ニ發掘ヲ擴グルノ必要ヲ生ジタリ。斯クテ底部ニ落下セル一枚ノ大天井石ヲ除ケルニ、土器六箇及鐵釘十數本ヲ發見ス。ナホ其ノ奥ニ落込ミタル一箇ノ天井石ヲ除去シテ、始メテ西南側壁ニ到達セリ。午後三時ニ至リテ全部ノ調査ヲ完了シ、次デ復舊工事を着手ス。先ヅ扁平ナル石材ヲ以テ天井石ニ渡シ、

石室ノ形状ヲ保存シ、其ノ上ニ土砂ヲ加ヘ、午後五時ニ至リテ之ヲ終レリ。

以上ノ結果ニ徴スルニ、石室天井石ノ崩落ト土砂流入トハ、本來構造ノ堅固ナラザリシニ本クモ、封土西南部ノ雨水ノ爲ニ流失シテ缺損ヲ生ジタルコトハ、先ヅ此ノ部分ヨリ天井石ノ落下ヲ來セシモノノ如ク、而カモ之ガ爲メ却ツテ盜掘ヲ困難ナラシメ、遺物ヲ保存スルニ至レルハ、意外ノ幸ト言フ可シ。

第二節 石室ノ構造 (第六八圖、第七〇圖)

本古墳ニ於ケル石室ハ、現状ニ於テ封土ノ中心ヨリ稍々西北方ニ偏スルモ、既ニ述べタルガ如ク、封土ノ西北部ガ流水ノ爲メ缺損セルナルヲ以テ、本來ハ略ボ封丘ノ中央ニ位置セルモノト解スルモ誤リナカラム。(第六八圖)

本石室ハ天井石ノ崩落ト側壁一部^長破壞シテ、第一號墳ノソレノ如ク、完形ヲ認ムルコト難キモ、其ノ平面ハ直方形ニシテ、東北ヨリ西南ニ長軸ヲ有シ、長サ十六尺五寸餘、幅二尺八寸内外アリ。此ノ平面上ニ其ノ四壁ヲ構成ス。側壁ノ高東北端ニ於テ約四尺二寸、西南部ハ稍々低クシテ、後述天井部ノ特殊ナル構架ノ存スル部位ニ於テ、約三尺七寸ヲ有ス。側壁ハ割石ヲ以テ築成セルコト第一號墳ト同ジク、略ボ完存セル西北長壁ニヨリテ之ヲ見ルニ、漸次上部ノ石材ヲ提出シテ、高三尺七寸ニ對シテ、約八九寸ノ縮約ヲ平面上ニ示シ、断面梯形ヲ呈セリ。第六八圖ハ發掘セラレタル石室ノ西南ヨリ東北部ヲ寫真セルモノニシテ、其ノ構造ノ一斑ヲ窺フ可キナリ。

本室ノ天井部ハ崩落シテ明ナラザル點多シト雖モ、東北隅ニハ厚六寸餘ノ平石ヲ橫架シタルヲ見ル可ク、室ノ西南部モ亦タ其ノ構架斯ノ如カリシハ、其ノ落下セル石材ニヨリテ之ヲ察スルニ足ル。タダ室ノ中央ヨリ稍々西南部ニ於テ側壁ノ一方ヨリ薄キ板石ヲ一尺許提出シ、又タ其ノ對壁ヨリモ同様ノ裝置ヲナシ、兩者合シテ天井部ヲ閉塞シ、更ニ其ノ上部ノ中程ニ小石材ヲ置キテ、其ノ間隙ヲ塞ギタルモノアルヲ發見セリ。是レ固ヨリ大石材使用ノ節約ニ出デタルモ

ノナラムモ、亦タ以テ本石室構造上ニ於ケル一特異點タリ。(第七〇圖石室)
(横斷面参照)

第三節 遺物ノ配置 (第六九圖、第七〇圖)

石室内ニ於ケル遺物ハ、天井石ノ落下ト、土砂流入トニヨリ、逐次之ヲ採集スル外無カリシヲ以テ、其ノ絕對的正確ヲ期シ難キモノアリシモ、其ノ配置ハ略ボ圖示セルガ如シ(第七〇圖)。即チ其ノ分布ハ自ラ東西ノ二區ヲ形成スルヲ見ル。東北區ハ遺物分布ノ主要區ニシテ、土器ハ亦タ自ラ二小群ヲ成ス。其ノ一ハ東北ノ奥壁ニ近キ一群ニシテ、奥ニ接シテ土器臺ノ橫置セルモノ、蓋類ノ散亂セルモノナドアリ。其ノ西南ニ蓋附火消壺形土器一箇橫倒シ、其ノ東ニ接シテ大形長頸壺一箇ノ安置セラレタルアリ。又タ鋒端ヲ西ニ向ケタル槍身一箇前記火消壺ノ西北ニ發見セラル。第二群ハ前群ヨリ距ツルコト一尺餘ニシテ、高坏二個、合子形土器一箇、及ビ其ノ西ニ當リテ高坏、合子形土器各一箇ヲ二行ニ並列シ、鉢ノ蓋ハ開キテ之ヲ器側ニ上面シテ置カレタルヲ見ル。此ノ第二群附近ニ鏝形鐵釘及ビ、鐵釘多數散亂セルコト圖ニ示セルガ如シ。

西南區ニ於ケル遺物ハ、石室奥壁ニ近ク、大ナル蓋附壺四箇ヲ並べタル一群ト、其ノ東北ニ當リテ、蓋附高坏ト其上ニ更ニ一箇ノ高坏ヲ累ネ置キタル一群トヨリ成ル。前者ノ下部ヨリハ鏝形鐵器及ビ一種ノ小形鐵斧形ノ金具ヲ出シ、後者ノ附近ヨリハ鏝及釘ノ多數ヲ出セリ。此ノ區ノ土器中特ニ注意ス可キハ、其ノ高坏ノ一(第七四圖)ニ鏝ノ貝ヲ充セルモノアリシコトナリトス。而シテ此ノ西南區ト東北區トノ中間約六七尺ノ間ハ、殆ド何等遺物ヲ見ルコト無ク、僅ニ其ノ中央南部ニ偏シテ、柄ヲ北方ニ向ケタル刀子ヲ存セルト、其ノ附近ニ鐵釘一箇アリシヲ認メタルノミ。

如上ノ遺物配置ノ狀態ヨリ考フルニ、石室ノ中央部ハ遺骸ヲ納メタル木棺ヲ藏セルコト、鐵釘其他ノ遺物ノ位置ヨリシテ、之ヲ推定スルニ難カラズ。其ノ棺ノ大サ正ニ寢棺ニ相當セルコトハ云フ迄モ無ク、タダ孰レヲ頭部トセルヤハ明

カナラザルモ、棺内ニ收メラレシト思ハルル刀子ノ位置ヨリシテ、恐ラク東北ヲ枕トセシモノナルヲ想像セシムルモノアリ。次ニ又タ一考ス可キハ、如何ニシテ石室内ニ遺骸ヲ搬入セシカノ問題ナリ。本石室ハ既ニ述ベタルガ如ク、側壁殊ニ兩短壁ノ構造ハ齊シク整正ニシテ、其ノ一方ヲ後ヨリ閉塞セシコトヲ暗示セザルノミナラズ、石室ノ幅僅ニ三尺其ノ高サ又々四尺ヲ越エズ。短壁ノ一方ヨリ棺ヲ移入スルコト、頗ル困難ナルヲ思ハシム。之ヲ如上遺物ノ配置ト併セ考フルニ、上部ヨリ棺ヲ垂下シ、埋葬終リテ後チ天井石ヲ覆ヘル、一種ノ堅穴式石室ノ性質ヲ有セルモノナリト解スルヲ以テ穩當トス可シ。

第四節 遺物 (第七一圖—第七七圖、第八三圖)

本古墳發見ノ遺物ハ土器類多數ヲ占メ、刀子槍身等ノ鐵製利器及鐵釘類ノ金屬器若干ヲ出セシモ、裝飾品ニ至リテハ終ニ之ヲ發見スルコト能ハザリキ。

〔土器〕 總計二十五箇、内長頸壺一、同蓋一、蓋附高環八、同蓋六、合子形二アリ。此等ハ皆ナ嚮キノ星州發見ノ土器ト同系統ニ屬スル祝部風ノモノニシテ、所謂新羅燒ト稱スルモノノ類ナレド、其ノ形式手法等ニ至リテハ彼是多少ノ差違ナキニ非ズ。大體ニ於テ厚手ノ堅緻ナル燒方ニシテ、其色青鼠色ヲ呈シ、星州ノモノニ比シテ頗ル形式的ニ陥レルモノアルヲ見ル。此等ノ比較ニ至リテハ、後章別ニ説ク所アラム。

(1)長頸壺(第七一圖及第七二圖) 一箇。高九寸二分、口徑五寸アリ。頸部ハ長四寸、側面ニ四段ノ細キ凸帶ヲ繞ラシ、其間ニ波狀刷毛目紋ヲ描ク。口部ハ一旦開キテ、更ニ外被セ蓋ヲ受ク可ク内側ニ窄メルモ、蓋ハ之ヲ遺存セズ。腹部ハ稍々平タク底ハ圓味ヲ帶ブルコト、這種ノ壺ニ多ク見ル所ト同ジ。燒方特ニ堅緻ニシテ黒味ヲ帶ビ、一種ノ磁器トモ見ル可ク、頸及肩部ニハ吹出シ釉ヲ認ム可シ。

(2)蓋(第七一圖及第七二圖) 一箇。徑四寸高一寸四分ノ小形ニシテ、短キ鼓形ヲ呈ス。側面ニ圓棒ヲ以テ貫ケルガ如キ孔四箇ヲ存スルノミニシテ、何等ノ裝飾無シ。前記ノ長頸壺ノ蓋トシテ小サキニ過グル感アルモ、他ニ之ヲ必要トスル器ナク其ノ發見位置ヨリシテモ、亦々長頸壺ニ副ヘルモノトシテ見ル可キニ似タリ。

(3)蓋附壺(第七三圖及第七四圖) 蓋ト器ト相合セルモル五個、游離セル蓋二箇アリ。前者中其ノ四箇ハ、石室ノ西南隅ニ存シ、一箇ハ東北ノ土器群中ニアリシコト既ニ述ベタルガ如シ。何レモ燒方弱ク、殆ド素燒ニ近ク、外面ハ淡キ青鼠色ヲ呈セルモ、内部ノ如キハ赭色ナリ。加之頗ル薄手ナルヲ以テ、既ニ土砂中ニ在リテ破碎セシモノ多ク、注意ヲ加ヘテ探掘セシモ、其ノ全形ヲ復原シ得タルモノ二個ニ過ギザリキ。然レドモ其ノ破片ヨリ之ヲ推スニ、總テ同型式ニ出ヅルコト疑フ可カラズ。其ノ形ハ短キ甕形ニシテ火消壺ノ如ク、口部ハ括レテ薄キ縁ヲ作り、外被セノ蓋ヲ冠ス。肩部以下ノ表面ニハ製作ノ必要ニ起源セル格子狀ノ印紋ヲ附ス。蓋ハ小キ撮ミアリ、器ニ比シテ幾分厚手ニシテ砂ヲ含ムコト多シ。壺ノ大サ高七寸八分内外、口徑約五寸、蓋徑六寸三四分、高二寸アリ。又々游離セル蓋二箇ハ其ノ手法上述ノモノト全ク相同ジ。

(4)蓋附高環(第七三圖及第七四圖) 八箇。凡テ同一ノ型式ニ出デ、高約五寸。環部ハ平タクシテ淺ク、脚ハ之ニ反シテ太クシテ大キク、安定ノ感ヲ與フルモ、亦々權衡ヲ失ヘル傾ナキニ非ズ。此ノ脚ニハ上下二段五箇宛ノ透孔アリ。兩帶アリテ孔間ト其ノ下方ヲ圍リ、底端ニハ縁ヲ有ス。蓋モ亦々平タクシテ其ノ表面圓圈ノ間ニ刻點紋ヲ印シ、寶珠形ノ鈕ヲ具フ。斯ノ如キ型式ハ從來高靈ヨリ發見セルモノニノミ見ル所ニシテ、他ノ地方ニ於テ未ダ之ヲ認ムルコト能ハズ。一ノ地方的特色トス可ク、又々其ノ後出隨著ノ型式タルコトヲ語ルモノノ如シ。此ノ高環ノ一(第七三圖及第七四圖)ニ環中いばにシノ貝三十箇許(黒田德米君ノ鑑定ニ依レバ二種アリ、大ナルモノハ *Thais tumulosa clavigera*; Krister *(purpurina)*、小ナルハ *Thais lutescens Dillwyn (purpur)* ナリト云フ)ヲ容レタルハ、星州古墳ニ於テ見タル事

實ト共ニ注意ニ値ス。

此ノ高環ノ蓋ト全ク同形式ニ屬スル蓋ナホ六箇分アリ。(第七一圖)内三箇ハ全形ヲ存シ、(同上)二箇ハ半以上ヲ殘セルモ、他ノ一箇ハ僅ニ縁部ヲ存スルノミ。此等ノ内ニハ形ノ著シク歪メルモノ、又タ燒方ノ脆弱ニシテ殆ド瓦器タトモ名ク可キモノ等アリ。何レモ之ニ適合ス可キ器ナク、破殘セルモノニ於テハ、接合ス可キ破片ヲ發見セズ。又接合セラレタル破片モ、處ヲ異ニシテ散在セルコトハ注意ス可キ現象トナス。

(5) 合子形土器(第七二圖及第七三圖)二箇。共ニ高約四寸三分アリ。身ノ兩側ニ環狀ノ耳アリ。印籠蓋ノ形式ニ屬ス。但シ兩者多少形ヲ殊ニシ、一(同上)ハ器形稍々高ク、筒形ヲ呈シ、側面ニ四條ノ小凸帯ヲ繞ラシ、其ノ間ニ波紋ト櫛目紋トヲ印ス。其ノ蓋ハ厚手ニシテ小キ鈕ノ周圍ニハ二段ノ刻點紋ヲ附セリ。他(同上)ハ器形少シク低ク、底部圓味ヲ帯ビ、環耳稍々長キヲ異ニセルノミナラズ、蓋ノ鈕ハ寶珠形ニ近ク、前記高環ノソレニ類ス。器側ニハ三條ノ小凸帯ト波紋トヲ附スルコトハ前例ト相似タリ。

〔鐵器類〕 槍身、刀子及ビ針狀、鎌狀、斧狀ノ鐵器、環狀金具ノ外釘類數十本ヲ發見セシモ、刀劍類ノ武器ハ之ヲ缺キ身體裝飾品ハ全ク之ヲ見ズ。

(6) 槍身(第七四圖及第七五圖)一箇。袋部ニ少シク缺損アルモ、他ハ略ボ原形ヲ存ス。鋒部ノ断面ハ扁平ナル菱形ニシテ、穂袋トノ間ニ僅ニ關ヲ有シ、袋部ノ端ニ切リ込ミヲ設ク。コレ通常多ク見ル所ノ型式ナリ。總長六寸三分。

(7) 刀子(第七六圖)二箇。後述ノ針狀鐵器ト共ニ石室中央部ニ於テ發見セラレ。二口共ニ鞘其他拵ノ儘殘存シ、其ノ一ハ長三寸六分、鞘口ニ金ノ薄板ヲ卷キ、柄ノ一部分ニハ一種鱗狀ノ刻紋アリ。元ト其上ニ金箔ヲ置キシカト思ハルルモ今マ其ノ痕迹ヲ止メズ。自餘ノ部分ハ漆塗リノ迹ヲ存セリ。他ノ一ハ身ノ長三寸五分、其ノ本端ニ幅二分ノ銀板ヲ卷キ、莖ノ兩側ニ金ノ薄板ヲ合セテ、楕圓形ノ柄頭ヲナセルコト注意ニ値ス。

(8) 針狀鐵器(第七五圖)之ニ圓頭ノ長釘ト鏡形ノ二類アルコト、星州第六號墳ニ於ケルト同ジ。前者ハ頭大ニ身ハ方鏡形ヲ呈シ、長サ孰レモ三寸五六分アリ。身ニ木片ヲ附著セルモノ多ク、中ニハ頭部ノ折レ曲レルモノ、身ノ歪メルモノ等アリ。其ノ一ニ殘レル木片ノ厚サ一寸餘アルモノアルヲ以テ、木材ノ厚サヲ推考シ得可シ。鏡形ノモノハ前者ニ比シテ其數少ナキモ、ナホ二十箇内外ヲ得タリ。大サ峯部ノ長約二寸五分ノモノ大部分ヲ占ムルモ、時ニ三寸ヲ超ユルモノ無キニ非ズ。又タ二寸二分ノ小形ノモノヲモ混ゼリ。其ノ内側並ニ尖端ニ木片ノ遺存スルハ、前者ト共ニ棺材ノ接合ニ使用セラレシコトヲ示シテ餘アリ。以上ノ外二箇ノ異形鏡類發見セラレシガ、其ノ一ハ長方形ノ環ニ類シ、方柱狀ノ材ノ緋メ金具タリシガ如ク(第七七圖)他ノ一ハL字形ノ兩端ヲ曲ゲテ尖端ヲナセルモノ、遽カニ其ノ用途ヲ考フルコト能ハズ。

(9) 環形金具(第七六圖及第七七圖)三箇。何レモ稍々楕圓形ヲ呈シ、環ノ短徑一寸二分、乃至一寸五分アリ。其ノ短徑ノ一端ニ他ノ金具ヲ附セシ痕迹アリ、内一箇ニハ棒狀ノ金屬ナホ遺存セリ。此等ノ點ヨリ考フレバ、或ハ鉸具ノ類カト思ハルルモ、ナホ明瞭ヲ缺ク。

(10) 斧形金具(第七八圖及第七九圖)九箇。何レモ略ボ相似タル形ヲ呈シ、薄キ方形ノ鐵板ノ一端ヲ切り曲ゲテ、柄ヲ挿入ス可ク、筒形ノ袋ヲナセリ。大サ一寸四五分。外形ハ鐵斧ト同一ナルモ、及部ヲ缺ケルヲ以テ、利器トシテ使用セラレシモノト認ムルコト能ハズ。

(11) 鎌形鐵器(第七六圖及第七七圖)數箇。小形ニシテ何レモ長サ二寸六分内外ニ過ギズ。扁平ニシテ細長キ鐵板ノ一端ヲ少シク曲ゲ、他端刀ノ鋒形ニ近シ。其ノ形狀一部考古學者ノ所謂鎌ト相類スルモ、コレ亦タ及ヲ有セズ。利器トシテ實用ノモノト見ルヲ得ズ。

* * * * *

本古墳ハ既ニ吾人ノ述べタルガ如ク、其ノ石室ノ平面細長ク幅狭キヲ特徴トス可ク、内包ノ遺物ハ土器ニ於イテ比較的豊富ナルニ係ラズ、貴金屬ノ裝飾品ヲ全ク缺キタルハ、聊カ不審ノ感ナキニ非ズ。カノ高坏蓋ノ破片散在シ其ノ一部ヲ闕失セル等ノ事實ハ、或ハ曾テ盜掘スルモノアリテ、貴重品ノミヲ奪ヒ去レルニ非ザルヤヲ疑ハシムルモノアレド、又タ一方ニ於イテハ土器類ノ多數完存スルヲ以テ見レバ、始メヨリ此等ノ品目ヲ缺如セルモノトモ考ヘラル。何レニセヨ現存ノ遺物ヨリ之ヲ推スニ、男子ヲ葬レリトスルヨリモ、女子ノ墳墓ナリトスルヲ以テ穩當ノ見解ナリト謂フ可シ。而カモ土器類ノ性質ハ之ヲ星州古墳ノモノト比較シテ、稍々其ノ趣ヲ殊ニセルハ、果シテ單ニ地方的差異トシテ認ム可キヤ、又タ更ニ時代の相違ヲ以テ説明ス可キモノナリヤ。是レ最モ重要ナル問題ニシテ、吾人ガ後章別ニ論及セント欲スル所ナリ。

第三章 池山洞第三號古墳

第一節 古墳ノ位置及發見ノ次第

〔位置〕 本古墳ハ前記二古墳ヲ存スル丘陵ノ北方、畑地ヲ距テ相對ナル別箇ノ丘陵ノ一端ニアリ。其ノ主山南麓ノ一支脈タル點ニ於イテハ、兩丘相殊ナル無シト雖モ、自ラ別種ノ一古墳群中ニ入ル可キモノナリ。サレド今マ便宜上之ヲ池山洞第三號古墳ト稱ス。其ノ外形ハ獨立セル墳形ヲ存セズ。高靈居昌間ノ道路開整工事ニ際シテ、偶然發見セルモノニ係ル。

〔發見ノ次第〕 十月十四日午後二時頃、前記道路工事中丘陵ノ一端ヲ切り崩シタルニ、豫定道路面上約六尺ノ位置ヨリ、一石室ヲ發見シタリ。前述二古墳發掘ニ從事セル梅原囑托之ヲ耳ニシ、直ニ其ノ現場ニ臨ミ、工事ヲ中止セシメ、吾人ノ調査ヲ經ルニ至レルモノナリ。サレバ古墳ノ外形ハ其ノ原狀ヲ知ルニ由ナク、又タ石室ハ道路工事ノ必要上之ヲ保存スルコト能ハザルヲ以テ、遺物ヲ採集シタル後チ、之ヲ破壞スルノ已ム無キニ至レリ。(第七八圖)

第一節 石室及遺物ノ配置 (第七八圖—第八〇圖)

〔石室〕 已ニ述べタルガ如ク、本古墳ハ何等封土ノ存スルヲ見ズ、丘陵ノ傾斜面ヲ穿テテ墓室ヲ營メルモノニシテ、石室ハ長方形ヲナシ、其ノ長軸ハ略ホ東西線ニ一致セルヲ見ル。而カモ構造ニ於イテハ前記二古墳ト相同ジカラズ、底部ハ地山ヲ削平シタルノミニシテ、何等ノ設備無ク、四壁ハ大ナル石盤石ヲ並列シテ構成シ、其ノ上部石材ノ不整ヨリ生ゼル間隙ハ、割石ヲ積重ネテ之ヲ補足セリ。(第八〇圖) 吾人調査ノ際已ニ半バ破壞セラレタル後ナリシカバ、其ノ原狀ノ明確ナラザル點無アリシト云ヘドモ、北壁現存ノ三石ガ原形ノ儘ニシテ、此ノ部分ニ缺損無シトセバ、石室ノ長約七尺

七寸ヲ算ス可ク、其ノ幅ノ二尺ナルコトハ、東壁ノ部分ニ於テ之ヲ確メ得可シ。又其ノ前後短壁ハ各一枚石ヨリ成リ長壁ヲ構成セル石材ノ外側ニ置カレシコト、東半部ノ状態ヨリモ之ヲ推測スルコトヲ得。天井石ハ僅ニ東端ノ一枚ヲ殘存セルモ、之ニヨリテ察スルニ、側壁ト同種ノ稍々厚キ盤石ヲ以テ覆ヘルモノナル可ク、底面ヨリノ高さ僅ニ二尺ニ過ギズ。之ニヨレバ本石室ハ前後二古墳ト様式ヲ殊ニセル所謂箱式石棺 (Rectangular Stone Chamber) ノ系統ニ屬スルモノナルヲ知ル。而カモ内地ニ於ケル阿波式石棺トモ稱セラルル小箱式石棺ニ比較シテ、遙ニ長大ナルノミナラズ、割石ヲ以テ壁面ヲ補足セルハ、積石石室トノ中間型ヲ示スモノトモ見ル可シ。

〔遺物ノ配置〕 本石室内ニ於ケル遺物ノ配置ハ寫真(第七八圖及第七九圖)及ビ實測圖(第八〇圖)ニ之ヲ示セルガ如ク、其ノ東端僅ニ方二尺ノ區域ニ局限シ、大小十餘箇ノ土器ノ密集シテ置カレタルモノナルヲ見ル。中ニハ二器相重ナレルモノ無キニ非ズ土器以外ニハ西端ノ壺ニ接シテ鎌ノ如キ鐵器一箇ト、其傍ニ鋒先ヲ略ボ東ニ向ケタル槍身一箇ヲ發見セルノミ。如上ノ状態ヨリ推セバ、遺骸ハ恐ラク東枕ニ葬ラレ、土器ハ其ノ頭邊ニ安置セラレシモノナルガ如シ。

第三節 遺物 (第八一圖—第八三圖)

本石室發見ノ土器ハ、其ノ大部分ハ同ジク祝部風、若シクハ新羅燒ト稱セラルル系統ニ屬スルモノニシテ、青味アル褐色ヲ呈シ、其質堅緻ナルモ、其ノ手法ニ至リテハ、前記第二號古墳發見品トモ多少ノ差違アリ。又タ其ノ内二箇ハ薄手ニシテ脆弱ナル素燒ニ近キ窯器ナルヲ注意ス可シ。今マ次ニ項ヲ分チテ、各例ニ就キテ記述スル所アラム。

(1) 長頸壺(第八一圖及第八二圖) 五箇。何レモ底部圓味ヲ帶ビ、安定ヲ缺ケルモノナルガ、内二箇ハ腹部稍々低ク喇叭狀ニ開ケル型式ニ屬ス。一(同上)ハ高七寸四分、口徑五寸五分アリ。頸部ニハ二段ノ突帶ヲ繞ラシ、其ノ間ニ波狀刷毛目紋ヲ表ハス。他(同上)ハ高五寸八分、口徑四寸八分アリ。頸部ニハ其ノ上下兩線ニ突帶アリ、波紋ヲ其ノ間ニ印セルコト

前者ト相同ジ。他ノ三箇ノ壺ハ腹部少シク高ク、殆ド球狀ヲナシ、頸部ハ圓筒形ニ近ク、其ノ上端ニハ外被セ蓋ヲ水ク可キ構造ヲ有セリ。其ノ一(同上)ハ腹部小サクシテ頸部大キク、其ノ中央ニ圈帶アリ、波狀刷毛目紋ヲ現ハス高七寸許。二(同上)ハ前者ニ比シテ腹部大キク、圓球ニ近ク、頸部ニハ中央ト下線トニ凸帶ヲ繞ラシ、波紋ヲ其ノ間ニ印ス。腹部ニハ條線型ヲ捺押シタリ。高八寸八分。三(同上)ハ前者ト相似タルモ頸部更ニ長ク、其ノ上ニ施サレタル圈帶亦タ一條ヲ加フ。腹部ニハ格子形ノ型紋ヲ捺シ、吹キ出シ線種ノ現ハルヲ見ル。高九寸。總シテ此等ノ長頸壺ハ製作精巧ナラズ、歪形ノモノ多キヲ認ムルノミナラズ、其ノ三例ニ冠シタル大形撮ミヲ有スル蓋ノ如キハ、特ニ器ニ適合セシメテ作ラレタルモノニ非ズ。有リ合セノ品ヲ取り合セタルニ過ギザルヲ覺エシム。(同上)

(2) 壺(第八一圖及第八二圖) 一箇。高六寸二分、徑六寸ノ大ナル底ヲ有シ、上部ハ括レテ薄手ノ緣アル大ナル口ヲ附ス。其ノ製作比較的薄手ニシテ、器ノ表面ニハ疊目ノ如キ型紋ヲ押シ、裏ニハ太キ渦紋ヲ印ス。

(3) 脚附壺(第八一圖及第八三圖) 表面滑カニシテ青鼠色ヲ帶ビ製作著シク精巧ナリ。高五寸三分、口徑三寸二分。器ハ稍々扁平ニシテ短キ口部ヲ附シ、器腹ノ中央ニハ波紋ヲ表ハシタル帶ヲ繞ラシ、其ノ一端ニ渦狀ノ平耳ヲ附ス。脚部ハ高杯ノソレニ似テ、大キクシテ低ク、三角形ノ透孔四箇ヲ開ク。全躰ノ形狀整齊ニシテ頗ル優美、他ノ諸品ト其ノ選ヲ殊ニセリ。出土ノ際其ノ傍ヨリ蓋一箇ヲ伴出セリ。口徑四寸高撮ミハ環狀ヲナシ、其ノ中央少シク突起シ、其ノ周圍ニ圈線ヲ繞ラス。蓋ノ表面ニハ亦タ二段ノ刻線紋ヲ施セリ。

(4) 臺(第八一圖及第八三圖) 一箇。高三寸八分、底徑六寸一分アリ、前述長頸壺ノ臺トシテハ頗ル大形ニ過グ。短キ鼓形ヲ呈シ、上部ニ圈帶アリ其ノ上ニ三角形ノ透孔六箇ヲ穿ツ。底部ニハ釉土ノ固著セルモノアリ、整形ヲ呈セズ。

(5) 蓋(第八一圖及第八三圖) 二箇。内地古墳ヨリモ發見スルコト多キ普通ノ形式ニシテ、一(同上)ハ蓋器通高二寸三分。蓋ハ外被セニテ環狀ノ撮ミアルモ紋様無ク、他ハ略ボ同大ナルモ、蓋ニハ刻點紋ヲ印ス。今マ鈕ヲ缺損セルガ、其ノ迹回

入シテ右巻キノ渦線状ヲ呈シ、製作ノ際別ニ鈕ヲ作リテ附著セルモノナルヲ示ス。

(6) 蓋(第八一圖) 一箇。上述壺ノ内部ヨリ發見セラレシモ、徑四寸六分ニシテ、其ノ口ヲ冠スルニ足ラズ。其色薄キ青鼠色ニシテ稍々形式ヲ殊ニス。或ハ後述ノ壺ノ一ニ附着セルモノカ。

(7) 壺(第八三圖) 二箇。其ニ薄手ニシテ質脆ク、素燒トモ稱ス可ク、其ノ色灰青色ヲ呈ス。内一(同上)ハ石室内ニ於イテ既ニ破碎シ破片散佚セル部分アリ。之ヲ復原スル能ハザリシモ、形狀略ホ既述ノ壺ニ類シ、高六寸、底徑五寸八分ヲ測ル可ク、器ノ底部ニ近ク格子目紋ヲ印ス。二(同上)ハ高四寸八分、底徑略ホ相如キ、腹部少シク膨ミ、口部ニハ蓋ヲ承クル爲ニ淺キ段ヲ設ク。此ノ器完形ノ儘發見セラレシモ、運搬ノ際破壊シテ、復タ接合スル能ハザルニ至レリ。

(8) 鐵器(第八一圖及第八三圖) 内槍身一箇ハ長六寸三分、身ト穂袋トノ間ニ關テ缺ケル型式ニ屬ス。鋒部ハ長クシテ其ノ断面ハ正シキ菱形ヲ呈シ、穂袋ハ縁ニ切込ミアリ、兩側ニ目釘ヲ存ス。(同上) 次ニ鎌形一箇ハ破損シテ出土セルモ、接合スレバ原形ヲ復ス可シ。長五寸一分、一端ヲ曲ゲ下方ニ及リテ附ス。第二號發見ノモノニ似テ、其ノ利器タルコト本例ニ於イテ疑ヲ見ズ。(同上)

要之、本古墳ハ其ノ石室ノ構造所謂組合セノ箱式石棺ノ大ナルモノニ類シ、他ノ諸墳ノソレト同ジカラズ。其ノ被葬者ニ就キテハ何等ノ推定ヲ下スコト能ハザルモ、副葬ノ土器ハ、其ノ性質稍々高靈ノ他ノ古墳出土ノモノト相異ルレノ感ヲ起サシムルモノアリ。之ニ就キテハ更ニ別論スル所アラム。

第三編 慶尚南道昌寧郡古墳

慶尚南道昌寧郡ハ「三國史記地理志」ニ、「火王郡、本比自火郡一云比真興王十六年、置州名下州、二十六年廢、景德王改名今昌寧郡」トアリ。「比自火」ハ今マ昌寧ニ遺存スル真興王碑ニハ「比子伐」ト記シ、又タ「比只」トモ書シ、神功皇后ノ平定セラレタル七國ノ一トシテ「書紀」ニ舉ゲラレシ「比自林」モ亦タ同名異字ニ過ギザルコトハ、既ニ吉田東伍、那珂通世氏等以來論セラレシ所ニシテ、之ヲ疑フヲ要セザル可ク、古ヘ伽羅ノ一國タリシハ文獻ノ證スル所タリ。此地ノ古墳ニ關シテハ、早ク關野、谷井兩委員等ノ踏査ヲ經ハ、朝鮮古蹟圖誌 第三冊參照、今西委員亦タ近ク大正六年度ノ調査報告中ニ、其ノ分布ノ概要ヲ記ス所アリ。本員等ハ星州高靈ヲ調査シタル後ハ、朝鮮古蹟圖誌 第九一圖、短時日ヲ此ノ地ニ費スノ他ナキ事情ナリシヲ以テ、僅ニ校洞附近ノ古墳群中、二三ノ小規模ノ古墳ヲ發掘シタルニ過ギザリキ。(第八五圖)

昌寧ニ於ケル古墳ノ分布ハ、昌寧邑ノ東方ヨリ北方ニ亘リテ、牧馬山麓ノ低丘及高地上ニ最モ濃厚ナリ。即チ松峴洞及校洞ノ地トナス。就中邑北校洞ノ高地ニハ、或ハ王陵ト稱セラルル大古墳ヲ中心トシテ、其ノ周圍ニ小塚ノ陪スルモノアリ。其ノ東方牧馬山麓ニ向ツテ、大小ノ古墳累々トシテ散點ス。此ノ大古墳ハ曾テ發掘ヲ試ミ中止セラレタル形迹アリシガ、本員等ニ次イデ昌寧古墳調査ニ從事セラレタル谷井委員一行ニヨリテ、其ノ發掘ヲ完成シ、釐ク可キ多數ノ且ツ貴重ナル遺品ヲ採集セラレタルハ、其ノ報告ヲ俟テテ明カナルヲ得可シ。本員等ハ此ノ大古墳ノ東方、昌寧邑ノ東北方ニ於ケル二三ノ古墳ヲ實査シ、僅ニ其ノ一ニ於イテ處女石室ニ遭遇シタルノミ。而カモ其ノ内容ハ谷井君發掘ノモノニ比シテ、殆ド言フニ足ラズト雖モ、亦タ以テ校洞古墳群ノ年代ヲ證スル一資料タルヲ得ムカ。本員等ハ昌寧古墳ノ調査中、普通學校長橋本良藏君ノ援助ヲ得タルモノ多キヲ特記シテ感謝ノ意ヲ表ス。(第八八圖及第九〇圖)

第一章 校洞第二十一號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第八五圖、第九一圖)

〔外形〕 本古墳ハ校洞古墳群中、其ノ中央ヲ橫斷シテ北方面ニ通ズル道路ノ西方約一町、臺地ノ高處ニ位スル低キ圓形ノ小墳ニシテ、徑約三十五尺、高八尺許。封土ハ赤色土ヨリ成リ、表面ニ小キ岩石ノ破片ヲ混ズ。全面芝草ヲ以テ被ハレ、何等發掘ノ迹ヲ認メザリキ。本墳ハ校洞古墳群中任意ノ一ヲ選ミタルモノナルヲ以テ、第一號ヲ以テ稱スル時ハ、後ノ發掘者ノ命名ヲ妨グル恐アリ。故ニ特ニ第二十一號ノ數ヲ以テ之ニ名ケタリ。

〔發掘〕 十月十八日午前九時發掘ニ着手シ、先ヅ封土ノ中腹北方ニ一區ヲ劃シテ發掘ス。土壤頗ル粗鬆ニシテ作業容易ニ進行シ、一時間ヲ出デスシテ石室ノ一端ニ掘リ當テタリ。其ノ北端ハ壁面既ニ破壞シテ内部ニ土砂流入シ、盜掘ニ罹レルヲ疑ハシメタルヲ以テ、更ニ天井部ヲ穿テ入口ヲ擴大シテ内部ニ達セシニ、果シテ土砂ハ室内ノ大半ヲ埋メ、中央部ノ西壁ニ近ク人骨破片ノ土砂中ニ散亂セルモノト、祝部風ノ土器片一二ヲ發見セルノミニシテ、既掘ノ證迹充分ナリ。故ニ流入ノ土砂ヲ浚探セズ、單ニ石室ノ構造ヲ調査スルニ止メ、直ニ復舊工事ヲ行ヒ、同日午前中ニ之ヲ終了ス。

第二節 石室ノ構造 (第九三圖)

石室ハ封土ノ中央ニ在リ。入口ハ北面シ長方形ノ平面ヲ有ス。現存總長二十一尺五寸、幅ハ奥ニ於テ四尺九寸アリ。入口ニ至ルニ從ヒ少シク縮減ス。北端入口ハ盜掘ニ遭ヒテ破壞セラレ、其ノ構造明カナラザレドモ、他ノ三側壁ハ略ボ完存セリ。積成スルニ小形ノ割石ヲ以テシ、其ノ構造頗ル意ヲ用キ、奥壁ノ如キハ割石ノ小面ヲ巧ニ重ネテ、高五尺四寸ニ對シテ、上部約三寸内方ニ傾斜シ、巧妙ナル築成法ヲ示セリ。天井石ハ今マ七枚ヲ存スルモ、石室ノ長サヨリ考フレバ、ナホ戸口ニ於テ一二枚ヲ備ヘタルナル可シ。中央天井石ノ二枚ハ、割石ノ不整形面ヲ其儘使用セルモ、他ノ五枚ハ其面平滑ニシテ整齊ナリ。而カモ入口ニ至ルニ從ヒテ天井高ク、最北ノモノノ如キハ、相隣レル石ニ比シテ約四

寸ノ上位ニ置カルルヲ見ル。石室ノ底面ハ敷クニ礎石ヲ以テシタルモ、其ノ全部ニ就キテハ流入砂土ノ爲メ之ヲ檢スルコト能ハザリキ。

已ニ述ベタルガ如ク、本古墳ハ既ニ盜掘ヲ經タルモノナルヲ以テ、遺物ヲ發見スルコト無ク、タダ牧馬山麓暴露セル幾多ノ石室ト同一形式ニ屬スル一標本トシテ、其ノ構造ヲ明ニシタルニ過ギズ。

第二章 校洞第三十一號古墳

第一節 古墳ノ外形及發掘 (第九四圖)

〔外形〕 本古墳ハ上述第二十一號古墳ノ東南東約一町半ニ位シ、道路ノ東方ニ近ク畑中ニ介在ス。第三十一號ト命名セル理由ハ前古墳ノ條ニ記セルト 圓形ノ小古墳ナルモ、封土ハ周圍ノ畑地ヨリ漸次削リ取ラレ、北端ハ小徑ヲ通ジ形ヲ損セルモ、南半ハ略ボ殘存シテ、塚ノ原徑約五十五尺、高サ石室底面ヨリ約十三尺ヲ測ル可シ。此ノ墳亦タ全面芝草ヲ生シ何等特異ノ點ヲ見ズ。

〔發掘〕 松尾洞古墳調査ヲ了シテ後、十月十九日午後四時ヨリ發掘ニ着手ス。人夫二十名ヲ使役シテ、封土ノ北腹ヨリ中央部ニ向ツテ幅四尺ノ縱溝ヲ穿テ、石室ニ達スルノ方針ヲ以テ進ム。翌二十日午前十時ニ至リテ、封土ノ中央部ニ近ク、表面下約六尺ニシテ石室ノ一部ニ到達セリ。此ノ部分ヲ掘リ擴ゲテ石材ヲ除去セル結果、其ノ石室戸口ニ近キ壁ノ上部ナルヲ確メ、石材ノ空隙ヨリ之ヲ窺ヒテ、東南ニ長キ石室ナルヲ明ニセシモ、内部暗黒ニシテ且ツ通風良好ナラザルヲ以テ、調査ヲ容易ナラシムル爲メ、奥壁ノ上部ニ小孔ヲ穿ツコトノ適當ナルヲ認メ、人夫ヲ別テ其ノ作業ニ從ハシム。午後三時其ノ目的ヲ達シ、内部ノ調査ヲ開始セリ。此ノ石室ハ幸ヒ既掘ノ形迹無ク、底部ニ石積ノ間隙ヨリ流入セル粘土ノ沈澱シテ細密ナル層ヲナシ、稍々滲水ノ溜レルヲ見ルノミ。奥壁ニ接シテ大形壺ノ露出セルモノノ外、遺

物ハ石室底部ノ粘土ヲ除去シテ、中央部ノ石床アルヲ發見シ、其ノ上ヨリ金製耳飾一對管玉一箇等ヲ採集シ、又タ其ノ區ヨリ土器ノ累々相重ナレルヲ漸次掘リ起コシタリ。此ノ調査ハ二十一日ヨリ二十二日午前九時半ニ及ビ、同時ニ石室ノ實測ヲモ終了セリ。復舊工事ハ日程ノ都合上、石床ヨリ採掘セシ粘土ノ検査ト共ニ、之ヲ橋本良藏君ニ委託シ、本員等昌寧出發後之ヲ行ヒシガ、其ノ際粘土中ヨリ小玉及銅鑽ヲ發見セリ。

第二節 石室ノ構造 (第九四圖、第九五圖)

本古墳ノ石室ハ長方形ニシテ、入口ヲ西北ニス。其ノ封土ニ於ケル位置現在ニ於イテ、中央ヨリ稍々北東ニ偏在セルモ、是レ此ノ部分ノ封土削去セラレシ結果ニシテ、本來中央ニ存セシコト想像ニ難カラズ。(第九四圖參照)
奥室ノ長十八尺三寸、幅奥ニ於イテ四尺八寸ナルモ、入口ハ稍々狹マリテ四尺ニ過ギズ。側壁ノ高サハ奥壁部ニ於イテ六尺三寸アリ。壁面ノ構造ハ入口ヲ除ク他ノ三面ハ、上述校洞第二十一號墳ノソレト略ボ同ジク、花崗岩ノ割石ヲ積ミ重ネ、其ノ構造巧妙ナリ。而カモ其ノ壁面ハ垂直ヲナサズ、上部ニ至ルニ從ヒテ、稍々内方ニ傾斜シ、切斷面梯形ヲ呈ス。但シ今マ奥ニ向ツテ右側壁ノ中央、土砂ノ壓力ノ爲カ少シク膨ミヲ生ジ不整形トナレリ。入口部ノ構造ハ他ノ三壁トハ殊ナリ、二箇ノ大石ヲ上下ニ置キ、小石ヲ以テ其ノ空隙ヲ填メタルモノニシテ、埋葬了リテ後之ヲ閉塞セルモノナルコトヲ推測スルヲ得。

石室天井部ハ八枚ノ石材ヲ以テ之ヲ覆ヘルガ、比較的小形ノ石材ニシテ、其ノ面平滑ナラザルハ、聊カ側壁ニ比シテ粗雜ノ感アリ。但シ各材ノ空隙ハ小石ヲ加ヘテ構架堅牢ナリ。封土ハ中央部ニ於イテ天井石ノ上面ヨリ約六尺ヲ測ル。以上ノ如ク本古墳石室ノ構造ハ第二十一號墳ト大差ナキモ、底部ノ設備ニ於イテ特異ノ點ヲ示セリ。即チ室ノ略ボ中央、長サ八尺六寸ノ區域ヲ割シテ、一ノ石床ノ如キモノヲ造レルコト是ナリ。此ノ床ノ高ハ奥ニ於イテ一尺ヲ超ユルモ

入口ニ對スル部分ニ於イテ、僅ニ六寸ニ過ギザル傾斜ヲ示セリ。床ノ兩端ニ稍々大形ノ平板石ヲ重ネ、内部ニ小キ礫石ヲ敷ク。奥壁ノ石床トノ間ニハ何等特殊ノ設備アルヲ見ズ。

石床ヲ石室内ニ設クルコトハ、南鮮ノ古墳ニ其ノ例往々ニシテ是レアリ。谷井委員等ハ其後同ジク此ノ校洞ノ古墳群中ニ於イテ之ヲ發見セラレシノミナラズ、關野博士調査ノ慶州普門里ノ夫婦塚、咸鏡南道安邊郡上細浦洞古墳等ニ類似ノ構造ヲ見ル。朝鮮古墳而カモ其ノ特ニ著シキハ、大正九年十一月馬場委員小川囑托ノ調査ニ係ル梁山北亭洞ノ古墳石室ナリ。詳細ノ報告ハ他日同君等ニヨリテ發表セラル可キモ、石室中央ニ於ケル床部ノ構造奥區ニ於ケル遺物ノ配置等全然本古墳ノソレト相一致セリ。是等ハ以テ兩古墳年代性質ノ攻究ニ資ス可キナリ。

第三節 遺物ノ配置 (第九六圖)

扱テ本古墳石室内ニ於ケル遺物發見ノ状態ヲ見ルニ、石床上ニ遺骸ヲ安置シ、裝身具ヲ伴存セルモ、奥區ニ於イテハ主トシテ土器ヲ副葬シタリ。

石床上ニ於イテハ、奥區ノ境ヲナセル石積ノ中央部ヨリ約一尺八寸ニシテ、三寸ノ距離ヲ以テ、一對ノ金製耳飾ヲ發見シ、兩箇ノ中間稍々北西ニ偏シテ、碧玉製管玉一箇ヲ見ル。ナホ此ノ部位ヲ中心トシテ、石床ノ周圍ニ亘リテ一種扁平ナル鐵片數箇以上ノ散在セルモノアリ。其ノ散布ノ最大距離、前後ニ於イテ六尺五寸許ヲ測ル可シ。遺骸ノ骨片齒牙等何等ノ痕迹無カリシモ、此ノ鐵片ハ木片ノ附著セルモノアル等ヨリ考フルモ、木棺ニ裝置セラレシ金具ノ殘物ト見ル可ク、之ヲ耳飾ノ位置ト相併セテ、奥壁方向ヲ枕トシテ石床上ニ伸葬ノ状態ニアリシヲ推測ス可シ。

奥區ニ於ケル遺物ハ、堅三尺七寸横四尺八寸ノ區劃内ニ、大形蓋二箇、蓋附高坏無慮五十餘箇、素燒碗形土器十數箇ヲ難然トシテ混入セルモノニシテ、土器以外殆ンド他ノ遺物ヲ認メズ。其ノ器々相重リ、或ハ仆レ、或ハ上下ヲ顛倒シ

蓋ト身ト相離レタルハ、本來整然ト相並ベタルモノニ非ザルヲ認メシム。從テ一々ノ器ノ位置ヲ細説スルガ如キハ、徒ニ煩雜ヲ加フルノミナレバ、遺物配置圖ニ主要ナル土器ノ號數ヲ指示シタルニ止ム。タダ其ノ内大形壺ノ一(第九七)ハ奥壁ヨリ約一尺ノ處ニ、口ヲ奥ニ向ケテ横倒シ、他ノ一(第九七)ハ奥壁ノ北隅ニ近ク傾斜シ、其ノ附近ニ前者ニ附屬ス可シト思ハルル蓋アリ。其ノ傍ニ槍形鐵器二箇遺存セシヲ注意シ置カム。

以上本古墳遺物ノ埋設状態ヲ通觀シテ、吾人ハ其ノ被葬者ノ一人タリシコトヲ知り、又タ武器類ノ殆ド之ニ缺ケルニ反シテ、華麗ナル金製耳飾等ノ裝飾品ノ存スル等、之ヲ寧ロ女性ノ墳墓トスルノ穩當ナルヲ覺ユ。

第三節 遺物 (第九七圖—第一〇九圖)

本古墳發見遺物ノ種類及ビ數量左ノ如ク、比較的豐富ナル部類ニ屬ス。

- 一、土器 六十六箇
- 一、金製耳飾 一對
- 一、環狀金具 四箇
- 一、管玉 一箇
- 一、小玉 七箇
- 一、槍身狀鐵器 二箇
- 一、刀子 七口
- 一、鐵製金具 七箇
- 一、鐵釘 一箇
- 及破片 十數片

左ニ各品ニ就キテ一々説明スル所アラム。

〔土器〕 其數頗ル多量ニシテ、之ヲ品目ニヨリテ分テバ、長頸壺二、蓋附高坏五十、同游離蓋一、脚附碗形二、蓋附高碗形十一アリ。即チ其ノ大多數ハ蓋附高坏ニシテ、土器ノ種類ハ比較的單調ナルヲ見ル。蓋附高碗形ノ一類ヲ除ケバ他ハ皆ナ青風色堅緻ナル新羅燒ト稱スルモノノ系統ニ屬シ、星州高靈等ノ遺品ト大同小異ナルモ、形式上ニハ多少ノ差異アリ。又タ特ニ連圈紋、直線紋等ノ適用盛ニシテ、慶州附近出土ノモノト類似セリ。蓋附高碗形ノモノハ之ニ反シテ褐色脆弱ノ燒素ニシテ、頗ル外觀ヲ殊ニス。

(1)長頸壺(第九七圖及第一〇六圖) 二箇。其ノ形狀整齊ニシテ製作精巧ナリ。内ハ腹部稍々平タク、頸部ノ中央ニハ凸帯ヲ繞ラシ、其ノ上下ニ半圓ヲ連ネタル紋様ヲ印ス。口部ハ別ニ挺出シ、外被セ蓋ヲ承クル形狀ヲナシ、之ニ半球ニ近キ高キ蓋ヲ冠ス。蓋ノ撮ミハ大ナル坏狀ヲ呈シ、周圍ニ三個ノ透孔ヲ開キ、連圈紋及ビ一種ノ三角斜紋ヲ以テ蓋ノ表面ヲ飾ル。壺ノ高一尺〇三分、口徑五寸六分、蓋ノ高三寸八分アリ。(同上) 其ノ二ハ前者ヨリモ更ニ大ニシテ、高一尺一寸四分、口徑六寸九分、寧ロ球狀ニ近キ器腹ヲ有シ、頸部ハ太ク且ツ長シ。之ニ三帶ヲ繞ラシ、最上ノ帶區ハ素紋ナルモ、下ノ二者及ビ肩部ニハ波狀刷毛目紋ヲ入ル。

(2)蓋附高坏(第九九圖乃至第一〇七圖)ハ其ノ數莫大ニシテ、蓋器相備ハリテ發見セラレタルモノ、及ビ之ニ配合シ得ルモノヲ併セテ五十箇、蓋ノ游離シテ器ヲ缺クモノ一箇ヲ數フ。其ノ高サ最大ナルモノ七寸、最小ナルモノ四寸六分。其ノ口徑ハ五寸六分ヨリ三寸七分ノ間ニ至ル。製作ハ概ネ整美ナルモ、亦タ苦澁ノ器ナキニ非ズ。其ノ形式ハ之ヲ大別シテ二種類トス可シ。即チ

- (イ)脚短クシテ器坏大ニ、蓋器共ニ圓味ヲ帶ブルモノ。(例之、第一〇一圖(26))
- (ロ)脚高クシテ器比較的小サク、器蓋共ニ瘦形ナルモノ。(例之、第一〇一圖(7))

此ノ内(イ)ハ其ノ數最モ多ク後者ノ約八倍ヲ數フ可シ。而カモ其蓋合シテ殆ト球形ニ近キモノヨリ、頗ル低平ナルモノニ至リ、其ノ様一ナラズト雖モ、表面ニハ連圈紋鋸齒狀三角紋等ノ結合ヨリ成ル幾何學的紋様ヲ以テ飾ルヲ常トス。其ノ紋様要素ノ結合ニハ各種ノ方式アリ。第一〇九圖ニ其ノ拓本ヲ以テ略ボ之ヲ分類配列セリ。又タ此種形式ノ蓋ニ於テハ、其ノ撮ミハ後者ノ形式ノモノニ比シテ、小ナルヲ注意ス可シ。脚ハ低矮ニシテ、透孔ヲ二段交五ニ開ケルヲ見ル。(ロ)ノ型式ニアリテハ器蓋稍々高キモノニ於イテモ瘦形ニシテ、其上ニ連圈紋ヲ交ヘザル簡單ナル幾何學的紋様ヲ置キ、脚ハ高クシテ之ニ二段交五ノ透孔ヲ穿テルモ、其ノ孔ノ大サハ稍々小ナリ。全體ノ製作

前型式ニ比シテ重厚古拙ノ感ヲ具フ。思フニ當時兩型式ノ高坏行ハルルト雖モ、時代ノ好尚ハ前者ニ存シテ後者ニ非ズ。而カモ後者ハ星州出土ノモノニ近ク、前者ハ慶州發見ノ新羅燒土器ト其ノ精神手法ヲ等シクス。

(3)脚附椀形(第一〇六圖第一圖) 二箇。内一ハ脚稍々高クシテ二段ニ透孔ヲ開キ、器モ亦タ高クシテ下部少シク細マリタリ三箇ノ耳形捉手ヲ有ス。他ノ一ハ脚低クシテ一段ノ透孔ヲ穿チ、器亦タ低平ニシテ三耳ヲ備フ。器鉢ニ數條ノ線帶ヲ繞ラセルハ兩者共ニ同ジ。

(4)蓋附高椀形(第九八圖及第一〇六圖) 十一箇。内二箇ハ破碎シテ復原スルコトヲ得ズ。又タ他ノ一箇ハ蓋ヲ缺ク。一箇ハ稍々大形ナルモ他ハ皆ナ同型ナリ。此ノ一類ノ土器ハ褐色素燒ノ脆弱ナル窯法ニ出デ、他ノ祝部風ナルト其ノ趣キヲ殊ニセラルモノアルコトハ既ニ述ベタルガ如シ、蓋ニハ小サキ撮ミアリ、高坏ノ蓋ノソレト類シ、器ノ上縁ニハ蓋被セニ應ズル傾斜アリ、器ノ下部ハ稍々細マリタリ。器ノ上端ニ近ク一側ニ耳アリ。其ノ大形ノ一ニアリテハ環狀ヲナスモ他ハ皆ナ退歩シテ單ニ嘴狀ヲ呈スルノミ。器ノ表面ニハ幽ニ段狀ノ線帶アルヲ見ル。

〔金屬製裝飾具〕 純金製耳飾一對ノ外、鐵地銀張環四箇アリ。

(5)金製耳飾(第一〇三圖) 一對。銀ノ直徑八分五厘、全長二寸四分。稍々白味ヲ帶ベル黃金ヲ以テ作り、其下ニ瓔珞形ノ裝飾ヲ下垂ス。是ハ球狀寶飾ヲ以テ始マリ、其下ニ方形ニ近キ部分アリ。三箇ノ花瓣樣片ヲ懸吊シ、又タ別ニ方形部ノ中心ヨリ連鎖ヲ出シ、其下ニ二箇ノ大ナル山柵形三面體ノ飾物ヲ垂ル。其ノ各面中央ニハ心葉形ニ類スル裝飾アリ、下端ニ四箇ノ小珠ヲ附セリ。一方ノ分ニハ其ノ尖端ノ一珠ヲ缺ク又タ最上部ニ位スル球形ニハ細キ連珠狀ノ橫帶アリ。其他各部ノ縁邊等ノ裝飾ハ粒線ヨリ成リ、所謂細金細工ノ系統ニ屬ス可キモノタルヤ言フヲ俟タズ。此ノ種ノ耳飾ノ單簡ナルモノハ星州古墳ヨリ出タルコト既述ノ如ク、本例ヨリモ精巧華麗ナルモノ慶州其他ノ古墳ヨリ出タルコト少ナカラズ。此等ノ精品ニ比較スレバ、本例ノ如キハ一箇ノ粗製仕入品ノ感ナキ能ハズ。又タ内地古墳ヨリ發見セルモノ數例アリ。

リ。此等ニ關シテハ次章別ニ述ブル所アル可シ。

(6)鐵製環(第一〇三圖) 四箇。直徑六分五厘アリ。鐵地ニ銀張ヲ施セルモノナリ。一端ニ長サ五分ノ環止メ銀製金具アリ。其ノ先端ニ孔ヲ穿ツ。此種ノモノハ慶州普門里古墳ヨリ出土セルコトアルモ、其ノ所用ノ目的ハ之ヲ明ニスルコト能ハズ。

〔玉類〕

(7)管玉(第一〇一圖) 一箇。碧玉製ニシテ濃綠色ヲ呈ス。長五分、徑一分八厘、穿孔ハ稍々斜ニ貫通シ、一端ハ大ニ他端小ナク、一方ヨリ穿通セル形式ニ屬ス。

(8)小玉(第一〇三圖) 七箇。玻璃製ノ吹玉ニシテ、其ノ色青綠ニシテ不透明ナリ。何レモ徑一分内外ノモノニ過ギズ。

〔鐵製品〕 刀子七、槍身狀鐵器二、長方形金具七箇及同破片十數箇、外ニ小形ノ釘形品一、其他用途不明ノ斷片數個ヲ見タリ。

(9)刀子(第一〇一圖) 殘缺セルモノヲ併セテ七口分アリ。サレド形ノ完キモノハ二口ニ過ギズ。形式普通見ル所ニシテ、長三寸許。其ノ一ニハ身ノ部分ニ編糸ヲ以テ覆ヘル痕ノ存スルモノアリ。(第一〇一圖)

(10)長方形金具(第一〇四圖) 七箇分ト破片十數箇アリ。何レモ扁平細長ノ板狀ヲ呈シ、兩端稍々張出シタリ。長サ九寸内外ニシテ、時ニ一尺ヲ超ユルモノアリ。表面ニ木目ヲ印シ、又タ或者ニハ釘孔ト思ハルル小孔ヲ存ス。木棺等ノ金具ナリシガ如ク、其ノ石室内ノ發見位置亦タ之ヲ證スルニ似タリ。

(11)槍身狀鐵器(第一〇五圖) 二箇。缺損鋪化シ原形不明ナルモ、其ノ断面ハ方形ニシテ外觀槍身ニ似タリ。サレド穂袋ナキヲ以テ俄ニ槍ト斷ジ難シ。現存長サ一ハ八寸ニシテ、他ハ六寸。

* * * * *

昌寧校洞ノ古墳ハ本員等調査ノ後チ谷井氏等ノ一行ノ精査ヲ經ヘ、其ノ最モ宏大ナル古墳ヲ發掘シ、頗ル豊富ナル遺物ノ發見ヲ見タリ。此等ニ比較スルニ、本古墳ノ如キハ其ノ内容甚ダ貧弱ナルヲ免レズト雖モ、石室内部ニ石床の構造ヲ有シ、土器ヲ多數ニ包藏シ、金製耳飾ノ如キ裝飾品ヲ有スル等、彼是比較研究ノ材料トス可ク、其ノ被葬者ノ一人ニシテ、恐ラク女子ノモノナルヲ想像セシム可キハ、既ニ之ヲ述ベタリ。

第四編 古墳及遺物ノ研究

以上吾人ハ星州、高靈及ビ昌寧ニ於テ發掘調査シタル古墳ニ就テ之ヲ叙述シ、其ノ遺物ノ記載ヲ試ミタルガ、其ノ調査ノ區域ハ狭小ニシテ、發掘ノ古墳亦タ多カラズ。加之、朝鮮各地ノ古墳ト其ノ遺物ニ關スル知見廣カラザル吾人ガ、僅少ナル事實ヲ本トシテ、廣汎ナル結論ニ到達セントスルハ、敢テ企及ス可キ所ニアラザルモ、ナホ吾人ノ獲得セル遺物ニ就キテ比較研究ヲ要スルモノアリ。吾人ノ智識ノ範圍内ニ於テ多少ノ概觀ヲ試ミ得ベキモノナキニ非ズ。乃チ本編ニ於テ、先ヅ遺物ニ關シテ特ニ注意ヲ要ス可キ事項ヲ論述シ、次ニ古墳ノ構造ニ就キテ内地ノラレト比較シ、年代推考ノ試ミニ及バムトス。其ノ將來ノ調査研究ニヨリテ變改ヲ要ス可キハ、固ヨリ期スル所ニシテ、自ラ亦タ此ノ假說ヲ漸次提供セラル可キ新事實ヲ以テ試験セント欲ス。

第一章 遺物ノ研究

第一節 土器

土器ハ考古學上最モ重要ナル遺物ニシテ、民族、時代等ノ決定ニ關シテ、其ノ基礎的資料タルヤ言フヲ俟タズ。而カモ其ノ研究ノ煩瑣ニシテ地味ナルコトハ、學者ヲシテ之ニ携ハルモノヲ少カラシメ、其ノ成果ヲ見ザルコト獨リ朝鮮ニ於テノミ止マラズ、内地考古學界ニ於テモ亦タ然リトナス。サレバ吾人ハ現時朝鮮ノ他地方ニ於ケル土器ノ性質ニ就テ、一々比較研究スルノ時期ニ到達セズ。タダ星州、高靈、昌寧三地方ニ於テ吾人發掘ノ遺物ヲ主トシテ研究ノ對象トナサムト欲ス。

以上三地方ニ於テ古墳ヨリ發見セラレタル土器ハ、何レモ所謂祝部風ノ黝青色ノ陶質ヲ有スル堅緻ナル土器ニシテ

カノ新羅焼ト稱スルモノノ系統ニ屬スルハ即チ一ナリ。然レドモ更ニ詳ニ之ヲ比較スルニ、各地發見ノモノニ就イテ其ノ製作紋樣等ニ多少ノ相違アルヲ發見ス可シ。即チ次ノ如シ。

(一) 星州發見ノモノハ、其ノ製作比較的薄手ニシテ、形狀簡素整齊ナリ。其ノ紋樣ノ適用亦タ簡單ニシテ其ノ繁縟ナルヲ見ズ。

(二) 高靈古墳發見ノモノニ類アリ。

(イ) 池山洞第三號墳發見ノモノハ、其製作比較的厚手ニシテ、形狀ハ稍々形式的ニ陥レルモ、紋樣ハ星州發見ノモノト相似タリ。又タ粗惡脆弱ナル土器ヲ伴出ス。

(ロ) 池山洞第二號墳發見ノモノハ、其ノ製作稍々厚手ニシテ、形狀ハ優雅ナルモ形式的ニ陥リ、紋樣ハ複雜ニシテ、其ノ精神寧ロ昌寧發見ノモノニ近シ。

(三) 昌寧發見ノモノハ其ノ製作厚手ノモノ多ク、形狀ハ洗練ヲ經タルモ形式的ニ陥リ、其ノ紋樣ハ連圈紋、鋸齒三角紋等ヲ盛ニ應用シ、慶州地方發見ノ新羅古墳遺物ニ類似ス。又タ脆弱素燒ノ土器ヲ伴出ス。

以上ノ異同ニヨリ之ヲ考察スルニ、星州土器ハ形式上最モ古致ヲ有シ、咸安出土ノ土器ト一致シ、又タ内地古墳出土ノモノト相類スルモノアリ。高靈ノ(イ)ハ之ニ近ク、高靈ノ(ロ)ハ昌寧ノニ類シ、昌寧ハ形式上最モ新シク新羅土器ニ接近スルモノアルヲ認ム可シ。又タ星州土器ト伴出セル金製耳飾ハ、其ノ金色ニ於イテ其ノ製作形狀ニ於イテ、之ヲ昌寧發見土器ト伴出セル耳飾ニ比シテ古拙ノ感アリ。斯ノ如キ並行的事實ニヨリテ、益々星州土器ノ製作時代ガ、昌寧ノソレニ比シテ早キヲ思ハシム。但シ一方ニ於イテ星州土器ト共存セル帶飾金具ヲ、昌寧ニ於イテ谷井君ガ吾人ノ昌寧土器ト同型式ノモノト共ニ發見セラレタル事例アリ。故ニ此ノ土器ノ差違ヲ以テ直ニ時代ノ新古ニ歸スルヨリモ、他ノ事情、例ヘバ昌寧ハ新羅ノ中心ニ近ク、早ク其ノ文化ノ影響ヲ受ケタルニ反シ、星州ハ地僻ニシテ古式ヲ土器ニ遺存セリトモ

説明セラレザルニ非ズ。而カモ前記帶飾金具ノ兩地ニ於ケル發見ハ、必シモ星州土器ノ昌寧土器ニ比シテ古キヲ假定スルノ否定的材料トナルモノニ非ズ。故ニ今マ姑ク樣式上星州土器ヲ古シトシ、昌寧土器ヲ新シクスルノ順序ヲ立スルニ毫モ不可ナキヲ信ズ。又タ内地古墳出土ノ祝部土器ガ星州ノモノト最モ相似タルノ事實ハ、朝鮮土器ノ窯法ノ輸入ガ慶州古墳ノ盛時以前(三國鼎立時代ノ新羅)ニアル可キヲ想定セシム。

次ニ注意ス可キハ脆弱粗製ノ素燒的土器ガ、昌寧古墳中ヨリ發見セラレ、高靈ニ於イテモ亦タ粗製ノ祝部風土器ノ存在ヲ見ルコトナリ。之ヲ内地古墳横穴等ノ例ニヨリテ考フルニ、其ノ時代新シト思ハルモノニ於イテ類似ノ現象ヲ認ムルヲ以テ(例之、山城國發見部)一方ニ於イテ形狀形式的トナリ、紋樣繁縟トナレル土器ト共存スルノ事實ト相俟テ、此ノ粗製土器ハ稍々降レル時代ノ產物ナルヲ推測セシム。蓋シ斯ノ如キ土器ハ常ニ墮落的產物ニシテ、副葬ノ假器トシテ特ニ造ラルルニ至リシモノニ過ギザレハナリ。

又タ吾人ハ昌寧古墳ニ於イテ、副葬土器ガ異常ナル數ニ上レルモ、其ノ大多數ハ高坏ニシテ、其ノ種類ノ變化ニ至リテハ寧ロ乏シク、タダ數量的ニ誇示セントスルモノアルガ如キヲ認メタリ。斯ノ如キハ星州古墳ニ於イテ吾人ノ遭遇セザリシ事例ナリ。谷井君ハ其後昌寧古墳ヲ發掘シ、更ニ多數ノ土器ガ一古墳ノ石室ニ副葬セラレタルヲ發見シ。又タ内地古墳ノ例ニ於イテモ、寧ロ遲キ時代ノ古墳ニ單純ナル種類ノ土器ヲ多量ニ副葬スルモノアルガ如シ。(例之、淡路國三原郡此等ノ點ヨリ想像スルニ、粗製單純ナル土器ヲ多量ニ容ルルモノハ、精良多種ノ土器ヲ少數ニ藏スルモノヨリモ、時代ノ降ルモノナルヲ推定シテ差支ナキガ如シ。蓋シ是レ葬儀ノ漸次形式化シ、奢侈ヲ競ヒ外觀ヲ張ルニ專トナリ、死者生前ノ生活ヲ墓中ニ再現スルノ原意失ハルルニ至リシ結果ナラム。然レドモ斯ノ如キ大體ノ傾向ニハ固ヨリ除外例アル可ク、殊ニ少數ノ土器ヲ副葬スルモノヲ目シテ、直ニ時代古シト云フコト能ハザルヤ論無シ。

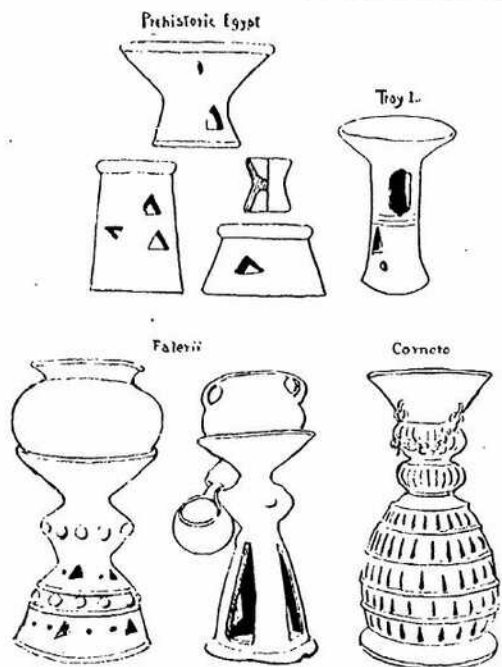
以上土器ニ就キ一般的考察ヲ試ミタル吾人ハ、最後ニ二三特殊ノ器形ニ關シテ述ブル所アラムトス。即チ其一ハ土器



（藏館物博王法ヤリユジ馬羅） 蓋器土さするの 圖八第

透孔ヲ設クルナリ。又タ斯ノ如キ臺ト其上ニ置カル可
キ器トヲ結合セル器形モ發生セルコトハ、朝鮮及内地
古墳ヨリ發見セル多クノ遺品ニヨリテ知ルヲ得可ク、
遂ニハ土器ノ底部安定トナリ絲底等ノ發達スルニ及ビ
テ、全ク臺ノ必要ヲ見ザルニ至レリ。
次ニ考察ス可キハ昌寧古墳發見ノ素燒ノ高椀類（第九
圖及第一〇圖）ナリ。此種ノ土器ハ脆弱ニシテ褐色ノ素燒ナル
點ニ於テ、他ノ祝部風ノ黝青色土器ト全ク種類ヲ異
ニスルガ如キ觀アルモ、其ノ蓋ハ祝部風高坏ト全ク
形式ヲ一ニシ、其ノ嘴狀ノ耳モ環耳ヨリ墮落變化セ
ルモノニ外ナラズ。故ニ一見特殊ノ土器ノ如ク思ハル
ルモ、單ニ窯中加熱ノ低度ナルニ由ルモノニシテ、之
ヲ別系統ノ土器ト見ルハ誤レリ。タダ斯ノ如キ形狀ノ
土器ハ、朝鮮ニ於テハ他ニ之ヲ見ルモ、内地古墳
ヨリハ未ダ曾テ發見セラレタルコト無ク、又タ斯カル
粗製ノ土器ハ實用ノ目的ニ應ハザル副葬ノ假器ニ過
ギズ。其ノ墮落の時代ノ產物タルコト前節既ニ述ベ
タルガ如シ。

ス。（附圖第七）是レ全ク土器製作ノ際ノ必要ヨリ生ジタル技術上ノ要求ヨリ、東西期セズシテ一軌ニ出デタルモノニ外ナラズ。即チ若シ側面ニ透孔ヲ開カラザル時ハ、窯中ニ於テ龜裂破碎スルノ恐多キヲ以テ、之ヲ避クルノ目的ヲ以テ豫メ



モ往々之ヲ出セルコトアリ。其ノ越前國三方郡南
西郷村大字郷市出土ノモノ（福井縣史蹟勝地
報告第一冊所載）及ビ同國
坂井郡東十郷村大字長屋發見品（京都帝國
大學所藏）ノ如キハ
星州古墳發見ノモノニ相似タリ。斯ノ如キ臺ハ底部
不安定ナル土器（若クハ金屬器）多カリシ古代ニ在リ
テハ、其必要多カリシヤ言フ須キズ。而シテ此等ノ
形式ヲ覽ルニ、其ノ縱帶ヲ施シ之ヲ釘著セルノ形ヲ
示セル等、土器トシテノ自然形式ニハ非ズ。金屬器
若シクハ木製器ノ其レヨリ出デ、之ヲ模造セルモノ
ナルヲ推測セシム。伊太利（トリス）ノ遺物中ニハ
金屬製ノ臺アリ。而カモ此ノ金屬製臺ニ在リテハ側
面透孔ヲ開カザルニ、土製臺ニ於テハ、（トリス）
埃及等ノ遺物モ、皆ナ朝鮮日本ノソレト同ジク、
三角形ノ透孔ヲ穿テテ見ルハ、頗ル興味アリトナ

ノ臺ナリ。臺類ノ發見ハ星州古墳ヨリ高大ナルモノニ箇（第一三圖）及高靈古墳ヨリ低小ナルモノニ箇（第七一圖）ヲ出セル
コト既述ノ如ク、此種ノ土器ハ慶尙南北道各地ノ古墳ヨリ發見セラレタルコト尠ナカラズ。（朝鮮古墳
圖譜第三）又タ内地古墳ヨリ

第七圖 ねるすき及埃及土器臺（下五箇埃及等、下三箇ねるすき）

第二節 金屬器

土器ニ次デ重要ナル遺物ハ金屬器ナルガ、其ノ美術工藝品トシテノ價值ハ却テ之ニ優ルモノアリ。而カモ金屬器ハ土器ノ如ク、其ノ發見ノ地方ニ於テ必シモ製作セラレタルモノニ非ズシテ、寧ロ一箇ノ工藝中心地ニ於テ製作セラレ、各地方ニ輸出セラレタル場合ヲ多シトナス。故ニ之ニヨリテ各地方ノ技術的差異、文化的相違ヲ知ルヨリモ、寧ロ各地方ニ分布セル共通文化技術ノ性質ヲ考察スルノ資料タル可シ。今マ次ニ其ノ注目ス可キ遺物ノ二三ニ就キテ述ブル所アラム。先ヅ最初ニ考察セントスルハ、星州及昌寧ニ於テ發見セル純金製環珞附耳飾(第一八圖及第一〇二圖)ナリ。從來内地古墳ヨリハ耳環トシテ單純ナル金張銅環ヲ發見スルヲ常トシ、間々此ノ種ノ華麗ナル耳飾ヲ見ルト雖モ、朝鮮ニ於テハ、其ノ高貴ナル大墳墓ヲ調査スルノ機會多キ爲ニヤ、比較的屢々此ノ類ノ裝飾附耳飾ヲ發見ス。今マ其ノ發見地ノ明確ナルモノノ内主要ナルモノヲ擧グレバ、

- 一、慶北、慶州郡普門里夫婦塚夫墓 一對 (朝鮮古墳 圖譜第三)
- 二、同 同 婦墓 一對 (同上)
- 三、同 同 普門里古墳 一對 (原田委員 發見)
- 四、慶南 晉州郡晉州面 一對 (朝鮮古墳 圖譜第三)
- 五、同 昌寧郡昌寧面校洞古墳 六對 (谷井委員 發見)
- 六、同 梁山郡梁山面北亭洞古墳 二對 (馬場委員 發見)

ノ如シ。(古墳以外ニテハ慶州芬基寺内發見ノ著シキ一例アリ、注意スヘシ)星州發見ノモノハ、其ノ耳環ノ素環ニシテ心葉片ヲ下垂セル點ニ於テ、谷井委員ノ昌寧發見品中ニ全ク同一ノモノヲ見、又々内地江田古墳出土品ニモ同形ノモ

ノヲ認ム。吾人ノ昌寧ニ於テ發見セルモノハ、耳環ニ太キ副環ヲ備ヘザルモ、其ノ山柩形三面鉢ヲ懸吊セル點ニ於テ、慶州普門里夫婦塚發見品ト同系統ニ屬スルモノナルヲ知ル。タダ其ノ製作ノ精巧、裝飾ノ華麗ニ至リテハ、遠ク慶

第九圖 煖石室壁畫耳飾佩用圖



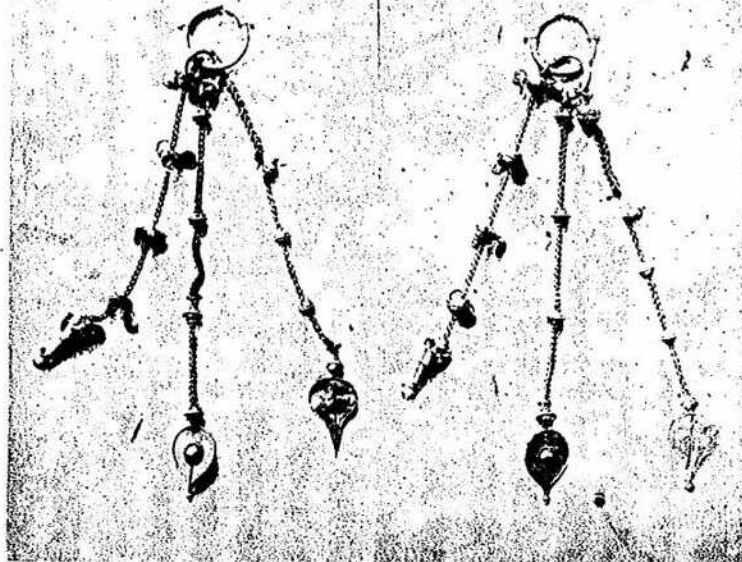
(ヘリト氏煖石室壁畫第二冊ヨリ轉寫)

州發見ノモノニ及バズ。粗略ニシテ仕入品ノ如キ觀アリ。當時ノ價格ニ於テモ數倍ノ差等ヲ有シ、其ノ佩用者ノ富貴ノ程度亦タ大ニ殊ナルモノアリシヲ推測ス可シ。宜ナリ、此等優良品ハ多ク宏大ナル王陵ト傳稱セラルル古墳ヨリ出デ、余等發見ノ遺品ハ、當該地方ニ於テモ規模大ナラザル古墳ヨリ發見セラレシヤ。

無ニ穿耳者、然莊子曰、天子之侍御不_レ又_レ揃、不_レ穿_レ耳、自古有_レ之矣」ト云ヘルモノ、反面ニ耳環ヲ佩スルノ風、支那古代ニ太ク盛ナラザリシヲ語ルモノニ非ザルナカラムヤ。而カモ「釋名」ノ環ヲ釋スルノ條ニ「穿_レ耳施_レ珠曰_レ環、此本出

日本及ビ附近諸國ノ耳飾ニ關シテハ、夙ニ高橋健自君ノ「日本人の耳飾」(民俗研究第一八、一九號)及ビ文學博士喜田貞吉君ノ「本邦古代耳飾考」(民族學史卷六號)等ニ考證セラルル所アリ。而シテ吾人ハ支那内地ヨリ此ノ種耳飾ノ遺物發見ヲ聞カザルハ、ヨシ其ノ風習無シトスル能ハザルニセヨ、「輟耕錄」(卷十二)或者謂、晉唐間人所_レ畫士女、多不帶_レ耳環、以爲古

第一〇圖(一) 内地古墳發見耳飾



(肥後江田古墳發見)

於蠻夷所爲也。蠻夷婦女、輕淫好走、故以此瑠瑠之飾之也、今中國人倣之耳」トアリ。其ノ後段ノ説明ハ姑ク之ヲ措キ、蠻夷ノ風俗ナリトセルハ故アルガ如シ。朝鮮日本ニ耳環ノ遺物多ク、支那西陲燧燧ノ壁畫中ニハ明ニ此ノ耳環ヲ佩セル士女ヲ畫ケルモノアリ。(一)殊ニ朝鮮ニ於テ華麗ナル瓔珞附耳飾ノ多ク發見セラルルハ、斯ノ如ク身軀ノ一部ヲ傷ケ、華奢ナル身軀裝飾ヲ愛好スル風ガ稍々低級ナル趣味ニ屬スルヲ知ルニ足ル可ク、西歐ニ於テモ希臘本土ヨリモ却ツテ伊太利ニ至るすき或ハ南魯クリみや半島ノすきたい族間ニ華奢壯麗ノ遺物ヲ認ムルハ其ノ以アルナリ。日本内地ニ在リテハ、此ノ種華麗ノ耳飾ハ寧ロ例外ニシテ、必シモ尊貴ノ古墳ト伴ハズ。特ニ朝鮮方面ト關係アル古墳ヨリ出土シ、其ノ伴出ノ古鏡ノ形式ヨリシテ、略ボ六朝中期ニ比定ス可キ年代ノモノナルヲ思ハシムルモノアリ。今左ニ參考ノ爲メ、内地古墳中此ノ種瓔珞附耳飾ヲ發見セル地名ヲ列舉ス可シ。

- 一、肥後國玉名郡江田村船山古墳 二對

(東京帝室博物館藏)

第一〇圖(二) 内地古墳發見耳飾

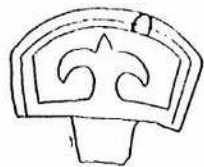


土怡前苑 島玉前肥 田江後肥 川郡内河 鮮水江近

- 二、傳豐後國速見郡石垣村大字北石垣鬼ノ窟古墳 一箇
 - 三、近江國高島郡水雄村大字鴨稻荷山古墳 一對
 - 四、若狹國遠敷郡瓜生村大字脇袋西塚古墳 一對
 - 五、上總國望陀郡清川村字祇園 (銀製) 一箇
 - 六、大和國磯城郡川西村大字唐院島根山古墳 一箇
 - 七、讚岐國綾歌郡羽床村字川向蛇塚古墳 一箇
 - 八、河内國中河内郡中高安村大字郡川 (銀製) 一箇
 - 九、伊勢國鈴鹿郡國府村大字保子里 一
 - 一〇、筑前國系島郡怡土村大字大門 一
 - 一一、肥前國東松浦郡玉島村大字谷口 一
- (以上ノ内耳飾以外胸飾等ニ屬スルモノアラム。今マクダ其ノ製作様式ノ上ヨリ一括シテ此處ニ列シタリ)
- 扱テ此ノ種耳飾ニ關シテ吾人ノ次ニ考察セント欲スルハ、其ノ製作ノ手法ナリ。星州古墳ノ遺品ハ、其ノ手法稍々粗大ナルモ、ナホ其ノ中緋メノ部分ニ於テ、金線ヲ纏繞シテ一種ノ形式ヲ爲セルガ、昌寧ノ遺品ニ至リテハ、前記慶州發見ノモノト共ニ、纖細ナル金線トヲ連綴纏繞シテ、各部ノ裝飾ヲ形成セルハ、正ニ是レ細金細工 (filigree work) ニ屬ス可キモノナリ。「フイリグラー」トハ伊太利語ノ「フイリグラーナ」(filigrana) ヨリ出テ、拉丁語ノ「線」(filum) ト粒 (granum) ノ兩語ヨリ成ル。金銀ヲ雕鏤スル代リニ、金銀ノ細線ヲ扭練シタルモノニ、其ノ微粒ヲ結

合シ、白蠟及ビ礫砂トヲ用キ、吹管ヲ以テ之ヲ固著セシメタル細工ヲ云フ。此ノ特殊ノ技術ハ已ニ早ク古代埃及ノ裝飾品ニモ之ヲ認ム可ク、希臘ニ於テ盛ニ行ハレ、殊ニ其ノ豐富ナル遺品ハ希臘文化ノ影響ヲ受ケタル伊太利^{イタリヤ}に在リヤビ及南魯^{南魯}すきたい族ノ墳墓ヨリ之ヲ發見ス。此ノ「フイリグレイ」ノ手法久シク志ラレタリシガ、十九世紀ニ至リテ希臘に在リシヤ^{ギリヤ}セリ。而シテ此ノ技術ハ東方ニ於テハ支那印度ニモ廣ガリ、今亦タ朝鮮ノ三國時代若シクハ其ノ以後ノ遺物ニ之ヲ見ルハ、頗ル興味アル事實ナリトス。其ノ正シク漢民族ノ手ニ成レルモノトシテハ、平安南道大同江面

第一圖 伊豫國 妻島出土環頭刀圖



第九號墳ヨリ關野博士等ノ發見セラレタル精巧無比ノ帶金具(考古學雜 誌八ノ一)之ヲ代表シテ餘アリ。支那内地發見ノ此種細金細工ノ遺品ニ就キテハ未ダ知ルコト稀ナルモ、朝鮮ニ於ケル此ノ技術ガ或ハ技術品ガ、支那ヨリ半島ニ傳ヘラレタルモノナルコト固ヨリ推察ニ難カラズ。而カモ印度ニ於ケル這般ノ技術ガ其ノ裝飾ノ種類等ヨリシテ、既ニ希臘人ノ手ニヨリ傳播セラレタルモノナリトセラル。文化交通ノ大勢ヨリ考察シテ、支那ニ於ケル此ノ「フイリグレイ」ノ技術モ、亦タ恐ラク第一世紀前後ニ於テ、西域地方ヨリ傳承セラレタルモノニシテ、印度ノ其レト同ジク、希臘人ニ負フ所アルモノトス可キガ如シ。今マ昌寧發見耳飾ノ山柜形下垂物及ビ扭線ノ細線ト微粒ヲ以テ、周縁ヲ飾ルガ如キハ、之ヲ南魯^{南魯}けるち(Koson)等發見ノ寶飾品ト比較シ、更ニ伊太利^{イタリヤ}に在リシ等ノモノト對比スルニ、其間相互一途ノ系統連絡スルモノアルヲ看取スルニ難カラズ、之ヲ各地方ノ自發的獨立ノ技術ト認ムルコト不穩當ナルヲ覺ユ。而カモ此ノ技術ガ東露西亞ヨリ支那ヲ經テ、朝鮮日本ニ其ノ作品ヲ殘セルヲ見ルハ、吾人ノ最モ興味ヲ感ズル所ナリトス。

金屬製品中次ニ述ブ可キハ刀劍ノ柄頭裝飾ナリ。吾人ハ星州古墳ヨリ發見セル大小二口ノ刀劍ニ環頭ヲ有スル銀製裝飾ヲ見タリ。(第二四圖)此種ノモノ慶南、全羅等ノ古墳ヨリ出土セルモノアルコトハ既ニ述ベタル所ナルガ、我ガ内地古墳

ヨリモ、同系統ノ環頭刀劍發見セラレルコト少ナカラズ。就中星州ノ例品ト殆ド全ク相同ジキ大小二口伴出ノ例品ハ、伊豫國宇摩郡妻島村東宮山古墳ヨリ出デタルコトアリ。(附圖第一)此ノ環頭刀ハ内地ニ在リテハ古ク^{コソル}狛劍ト稱セラレタルハ、其ノ明ニ朝鮮ヨリ輸入セラレタルモノナルヲ告グルモノナルガ、更ニ其ノ本源ハ支那ニアル可シトハ、客易ニ想像セラレル所ナリ。サレド支那ニ於テハ周漢以來環頭ト共ニ珠頭(大同江面第九號)ノモノ行ハレシガ如ク、此ノ環内三葉形若シクハ龍鳳等ノ裝飾アルモノハ、或ハ六朝時代ニ發達セルモノカ。支那ニ於ケル此種ノ遺品未ダ知ル能ハザルヲ以テ俄ニ決シ難キモ、其ノ忍冬唐艸の三葉ハ六朝時代ニ行ハレタル西域系統ノ裝飾「モチーヴ」ナルガ如シ。タダ星州發見品ノ如ク柄側ニ穀紋ニ似タル卷鬚紋アルハ、支那漢代ノ玉製品上ニ見ル所ト相類スルモノナルヲ覺ユ。

最後ニ記ス可キハ環形帶金具(第二九圖乃至 第三二圖等)ナリ。此ノ星州出土品ト殆ド全ク同一裝飾ノモノ昌寧ヨリ出デ、又タ梁山ヨリモ發見セラレタルコト、并ニ内地古墳ヨリモ出土セシコトハ既記ノ如シト雖モ、内地發見品ハ或ハ發見後失ハレタルヤモ知レザレドモ、帶ノ全長ヲ連ヌ可キ多數ノ飾片ヲ發見セシコトヲ聞カズ。而カモ此ノ星州發見品ノ上ニ施サレタル忍冬唐艸の紋様ハ、其ノ手法頗ル優秀ニシテ、正ニ六朝時代ノ佛像其他佛教藝術ニ關係アル工藝品等(又タ我ガ推古時代ノ遺品)ニ見ル所ト相一致シ、支那六朝時代ノ美術ノ影響ニ出デタルコト言フ俟タズ。更ニ此ノ紋様ノ起源ハ遠ク東羅馬、希臘ニアル可キコト亦タ學者ノ既ニ説ク所ナリ。タダ斯ノ如ク革帶ノ全長ニ飾金具ヲ附シ、環形ノ葉片ヲ垂ルルガ如キハ、現存セル六朝唐代ノ繪畫彫刻等ニモ其ノ例ヲ見ザル所ニシテ、斯ル煩褥ナル趣味ハ獨リ朝鮮ニ於イテ行ハレシモノナリトス可キカ。ナホ將來ノ研究ヲ要ス。

第二章 古墳ノ研究

第一節 古墳ノ構造ト内容遺物

朝鮮ニ於ケル古墳ハ其ノ構造上ヨリ之ヲ見ルニ、北鮮地方ニ於テハ、甌瓦ヲ以テ築造シ、全然支那式遺物ヲ包藏スル漢式古墳ノ外ニ、主トシテ切石ヲ以テ築成セル所謂高句麗式古墳アリ。扶餘地方ニ於ケル百濟古墳ト稱セラルルモノ亦タ、此ノ高句麗式ニ近キヲ見ル。而シテ南鮮地方ニ於テハ、全羅南道潘南面ノ甕棺式古墳ノ特殊ナルモノヲ除キテハ、慶尙南道古へノ加羅任那、新羅ノ地ト概稱セラルル方面ニ在リテハ、石塊ヲ以テ築造シタル石室古墳主ヲ行ハルルヲ見ル。

吾人ノ發掘調査シタル星州、高靈、昌寧諸地ノ古墳ハ、即チ此ノ最後ノ古墳系統ニ屬スルモノニシテ、其ノ地理的位置並ニ構造上ノ特徴ハ、之ヲ現示シテ餘アリ。其ノ大小ノ石塊ヲ築成シテ石室ノ壁面ヲ造リ、長方形ノ平面ヲ有シ、羨道室ノ區別無キ點ニ於テハ、吾人調査ノ諸古墳ハ皆ナ相一致シ、又タ此ノ地方ニ於ケル既往ノ調査ニ係ル古墳ノ多數トモ相異ナル點ヲ見ズ。即チ斯ノ如キ長方形ノ平面ヲ有スル石室ハ、南鮮古墳ニ最モ普通ナル形式ト見ルヲ得可ク、内地横穴式石室古墳ノ羨道室ノ區別アルモノト比較シテ、聊カ特異ノ點トナス。然レドモ朝鮮ニ於テモ羨道室ノ區別アル石室全ク存在セザルニ非ズ。例ヘバ慶南晉州ノ一古墳ノ如キハ其ノ一ナリ。(朝鮮古墳 圖譜第三)故ニ直チニ之ヲ以テ内鮮古墳ノ差異ト見ルヲ得ザル可シ。加之内地ニ在リテモ、古墳石室ノ構造形式ハ各地方の差異アリ、九州西部ト東部ト稍々其ノ趣ヲ異ニセル、山陰地方ノ山陽方面ト相同ジカラザル等、斯ル些少ナル相違點ヲ以テ、直ニ古墳築成人種民族時代等ノ相違ニ歸スルハ穩當ニ非ズ。タダ内地古墳中ニ粘土又ハ礫層ヲ以テ主軸トセルモノ、或ハ直接土中ニ葬リテ棺槨石室ノ設備ヲ有セザルガ如キモノ、或ハ石棺ヲ瘞メ、其ノ周圍ニ柳壁ヲ造ルモノ、或ハ石室内ニ石棺ヲ藏スルモノ等ノ墳

墓形式アリ。此等ハ朝鮮ニ於テ近時明ニセラレタル直接土中ニ葬リシ二三例ノ外未ダ發見セラレシコトヲ聞カズ。或ハ以テ日本内地特殊ノ形式トナスヲ得可キカ。(今南瀋南面ノ甕棺式古墳ハ日本内地ニモ九州其他ニ於テ之ヲ發見ス)

内容遺物ノ點ヨリ考察スルニ、星州、高靈、昌寧三地方ハ全ク同一系統ノ文化ヲ現示ス。タダ土器等ニ於テハ星州ハ稍々古拙ノ形式ヲ保有スト雖モ、コハ時代ノ小ナル差異、若シクハ地方の小特色トシテ説明シ得可キ程度ノモノタルニ過ギズ。更ニ之ヲ慶州、晉州、梁山、咸安等ニ於ケル既調査ノ古墳ノ内容遺物ト比較シテ、亦タ同様ノコトヲ言ヒ得可キナリ。

又タ之ヲ内地古墳ト比較スルニ、星州古墳ノ土器ハ最モ内地ノモノニ接近シ、高靈、昌寧乃至慶州地方ノモノハ、稍々相同ジカラザル點アルモ、其ノ祝部風ノ陶質黝青色ノ土器タル點ニ於テ、固ヨリ彼是同一系統ニ屬ス。土器以外ノ金屬裝飾品ノ如キハ、古墳所在ノ各地方ニ於テ製作セラレズ、他地方ヨリ輸入移送セラルル可能性、土器ニ比シテ頗ル大ナルヲ以テ、種族時代等ノ研究資料トシテハ、特殊ノ注意ヲ要ス可キモ、彼ノ環頭釧、環珞附耳飾、同帶飾等ハ内鮮古墳ニ於テテ共通ニ發見セラルルコト既記ノ如ク、又タ此等ハ内地ニ在リテハ年代推定ノ準據タル可キ鏡鑑ト伴出スルコト多シ。更ニ又タ重要視ス可キハ、日本民族特有ノ紋様ノ考ヘラルル直弧紋ヲ刻セル鹿角製釧頭ガ、咸安及ビ潘南面古墳ヨリ、今西、谷井兩委員ノ各々發見セラレタルコトナリ。(大正六年度古墳調査報告書 中谷井全四委員報告参照)

タダ茲ニ遺物上ヨリ見テ特記ス可キハ、内地古墳ヨリハ鏡鑑類ノ發見頗ル多キニ反シ、南鮮古墳ヨリハ從來慶南晉州ヨリ一面出土セルノ外(朝鮮古墳 圖譜第三)他ニ確ナル例ヲ聞カザルコトナリ。假令吾人ノ知見ニ達セザルモノアリトスルモ、其ノ事例ノ稀少ナルコトハ之ヲ否ム可カラザルニ似タリ。然レドモ此ノ鏡鑑發見ニ關シテ、内地古墳ノ一々ノ事實ヲ考查スルニ、内地古墳ニ在リテモ、朝鮮ト共通ナル横穴式石室古墳ニ在リテハ、其ノ發見太ダ乏シキヲ見ルハ頗ル注目ニ値ス可シ。今マ左ニ試ニ之ヲ表示センニ、梅原末治調査ニ據ル

大正十年三月調査 一三三 一箇所
古墳出土古墳總數

同發見 五六二面
鏡總數

發見古墳數
古墳總數ノ
百分比

發見古鏡數
古鏡總數ノ
百分比

六六

(一) 横穴式石室古墳	一八	八	三四	六
(二) 其他諸式古墳	一三三	五八	三六三	六五
内				
(イ) 粘土層又ハ礫層ヲ非體トセルモノ	一八	八	四九	八
(ロ) 直接埋葬又ハ木棺ト認ムベキモノ	三七	一六	九〇	一七
(ハ) 横穴式石室及ビ石棺古墳ノ類	七八	三四	二三四	四〇
(三) 構造ノ調査未了及不詳ノモノ	八〇		一六五	
合 計	二三二		五六二	

即チ之ニヨレバ横穴式石室古墳ヨリ鏡類ノ發見セラレシ數ハ、他ノ諸式古墳ニ比シテ甚ダ稀少ナルヲ見ル可ク、此ノ朝鮮古墳ト日本内地古墳トノ相違點モ、一ノ條件付ノモノタルヲ知ル可キナリ。而カモ横穴式以外諸式古墳中(イ)ノ粘土層及ビ礫層ヲ主體トスルモノハ、鏡類其他ノ遺物ヨリ考ヘテ時期尤モ古ク、不整形ナル小石室之ニ次ギ、石棺古墳ハ其ノ前方後圓ノ外形ヲ具ヘ通輪ヲ有スルモノ多キ等ノ點ヨリ、横穴式石室古墳ヨリモ古キ時期ノモノナリトスルハ、我が考古學者ノ一般ニ認ムル所ナリ。而シテ石棺古墳ノ出土品ハ鏡類其他ヨリシテ、六朝中期ノモノタルヲ示スモノアリ、他方ニ於テ此ノ六朝中期ノ鏡類ト共ニ、彼ノ南鮮地方古墳ヨリ出土スルモノト同様ナル耳飾、刀劍柄頭、帶飾或ハ又タ脊、冠等ヲ發見スルヲ以テ見レバ、日本ニ於ケル此石棺古墳ト朝鮮ニ於ケル横穴式石室古墳トノ間ニ、年時ノ並行接觸ヲ推定シ得可ク、我が内地ニ於ケル横穴式石室古墳ノ初期ハ朝鮮ノソレニ比シテ、少シク遅ルルモノアルヲ推定スルヲ得ム。而カモ我が横穴式石室古墳ニ鏡類ノ發見少ナク、之ニ反シテ土器ノ副葬多量ナルノ事實ハ、同ジク南鮮ノ横穴式古

墳ニ認メラルルノ通性ナリトスレバ、彼我兩者ノ關係自カラ明ナル可ク、我が横穴式石室古墳ハ、朝鮮ノソレヲ構成セル文化ニヨリテ影響セラレタルモノナル可シトノ推定ニ到達ス可キナリ。

次ニ吾人ハ以上述べタル古墳ノ構造及ビ内容ノ研究ト、日鮮古墳トノ比較ヲ本トシ、之ヲ朝鮮ニ於ケル歴史上ノ實時代ト照合シテ、吾人發掘調査ノ古墳ノ年代考定ニ到達セント欲ス。

第二節 古墳築造ノ年代

古墳ノ年代考定ハ、其ノ關係遺物ニ記銘アル場合等ヲ除クノ外ハ、精確ナル實時代ヲ推考スルコト殆ド不可能ナルヲ常トス。故ニ地質學者ガ地史ノ時代ヲ言フニ方リテ、數字ヲ以テ之ヲ舉グルヲ避クルト一般、考古學者ハ古墳ノ年代ヲ語ルニ、確然タル數字ヲ以テセズ、漠然タル時代ヲ以テ之ヲ順序スルヲ穩當トナス。吾人調査ノ慶尙南北道各地ノ古墳ニ於テモ、亦タ何等記銘アル遺物ノ發見無キヲ以テ、概括的時代ノ順序ヲ以テ、之ヲ示スノ外ナキナリ。

吾人ハ既ニ星州、高靈、昌寧ノ古墳ヲ含メル南鮮古墳ト、日本内地古墳トノ比較ヲ試ミ、其ノ遺物ノ上ヨリ概括的ニ六朝中期ヲ以テ兩者ノ接觸點タルヲ述べタリ。而カモナホ二三確實ナル考古學的遺品ノ共通ナルモノニ就キテ例證セムカ、星州古墳ニテ吾人ノ發見シ、谷井委員ノ又タ昌寧ノ古墳ニテ獲タル殆ド同一性質ノ金製耳飾ハ、肥後江田古墳ニ於テイテ發見セラレ、是ハ魏晉及六朝中期ノ鏡類其他ノ遺物ト共存シ、又タ星州發見ノ環頭刀ハ、傳仁德天皇陵出土品ト其ノ製作ヲ一ニシ、又タ昌寧ニ於テイテ吾人調査ノ古墳ト略ボ同年代ノ古墳ト認ム可キ他ノ古墳ヨリ、谷井委員ハ我が應神天皇陵陪塚丸山出土ノモノト一致セル鞍金具ヲ發見セル外、寶冠、香等ノ類ニ於テ、又タ鹿角製刀劍柄頭ニ於テモ彼是同様ノ一致點ヲ認メ得可シ。然ラバ則チ朝鮮ニ於ケル此種ノ古墳ハ、内地ニ於ケル歴史ノ年代ノ略ボ明瞭ナル應神、仁德帝陵等ヨリ推シテ、其ノ年代ノ一點ハ略ボ六朝中期ニアリト見ルヲ得可ク、一方之ヲ芬草寺ヨリ同種耳飾ノ出土セル

六七

ニ併セ考へ、其ノ前後ノ繼續ヲ考慮シテ、西曆第四世紀末葉ヨリ第六世紀ノ初頭、即チ朝鮮史ニ於ケル三國鼎立時代ノ最盛期ニ在リト言フヲ得可シ。(附表)

三國鼎立時代ニ於イテ昌寧地方ハ、所謂加羅或ハ伽倻ノ一國タル比自火ノ地タリシコトハ、史家ノ所見略ホ一致スル所ナリ。比自火ハ新羅眞興王ノ時、即チ西曆第六世紀ノ中葉ニ至ル迄、加羅ノ一國トシテ存續シ、其ノ後新羅ノ一郡トナリス。高麗亦タ大伽倻ト稱シ、眞興王ノ時ニ侵滅セラレル迄加羅ノ一國タリキ。然ラバ則チ前述ノ推定年代ヲ移シテ此ノ昌寧高靈兩地ノ古墳ニ適用スレバ、正ニ新羅ニ併合セラレル以前加羅國ノ存在セシ時代ノモノニシテ、日本ニ於イテ所謂任那ノ名ヲ以テ稱セシ時代ノモノトスルヲ得可シ。即チ此ノ見解ハ從來學者ガ因襲的ニ任那時代古墳ト稱セシモノト相一致ス。(朝鮮古墳圖 諸第三冊等)

次ニ星州ニ至リテハ歴史上其ノ變遷ヲ詳ニスルコト能ハズ、多クノ學者ハ傳説ニ本キテ同ジク伽倻ノ一國星山伽倻ノ地タリトスルモ、或ハ之ヲ伽倻地方以外ノ地トスルモノ無キニ非ズ。タダ吾人古墳調査ノ結果ニ徴スレバ、高靈昌寧地方ニ比シテ、少シク古キ時代ニ置ク可キカノ如キモ、其ノ古墳ノ構造内容遺物等ヨリシテ、之ヲ前記諸地ト同一文化ヲ挾有セシ民族ガ、略ホ同一時代ニ築造セシモノナリトスルニ何等ノ不可アルヲ見ズ。前者ヲ伽倻任那ノ遺跡トスレバ、星州モ亦タ伽倻ノ疆域ニ包括セラレ可キモノタルハ、考古學上ノ資料ノ語ル所ナリ。

要之、古墳ノ年代ハナホ將來多數ノ類例ヲ得テ、之ヲ比較研究シ、遺物ノ共存状態ヲ精査シテ並行的事實ヲ配列究シ、其ノ成果ヲ文献歴史上ノ研究ト擬考スルニ非ズンバ之ヲ決定シ易カラズ。吾人ガ以上推定セル所ハ固ヨリ假定的ノモノタルハ言フヲ俟タズ。タダ現在ニ於イテ吾人ハ星州、高靈、昌寧三地ノ古墳ハ之ヲ伽倻任那ノ古墳ト見ルニ支障無ク、其ノ年代ハ西曆四百年乃至五百年頃ヲ中心トスル時代ノモノタリトスルヲ以テ最モ穩當ナリトスルヲ得可シ。而カモ昌寧高靈ノモノハ、其ノ土器等ニ於イテ新羅ノモノニ頗ル接近シ、又タ全躰トシテ新羅ト伽倻ノモノトハ、亦タ同一文化ノ變

種トシテノ差アルニ過ギザルガ如ク、更ニ日本内地ノモノ亦タ此ノ大文化圏中ニ包括セラレルモノト言フヲ得可シ。之ニ關シテ其ノ人種的解説ハ如何、其ノ歴史の考察ハ如何等ノ問題ハ、最モ興味アルモノナリト雖モ、本報告ノ目的以外ニ且ルモノ多キヲ以テ、今マ茲ニ論及スルコトヲ止ム。(終)

〔附記〕

本報告作成ニ際シテ、星山洞古墳人骨ニ關シテハ醫學博士長谷部言人君ノ調査ヲ煩ハシ、其ノ結果ヲ附録トシテ別ニ掲載スルコトヲ得タルハ本員等ノ特ニ同君ニ對シテ感謝スル所ナリ。又タ星山洞古墳發見人骨齒牙ニ關シテ醫學博士足立文太郎君、同古墳並ニ高靈古墳發見ノ貝殼等ニ關シテハ黒田徳米君、駒井卓君等ノ鑑定示教ヲ煩ハセルモノアリ、深ク感謝ノ意ヲ表ス。

寫眞圖畫ニ於イテハ、本員及林漢韶君作成以外ノモノハ、多ク京城村上寫眞師ノ撮影ニ係リ、其他澤俊一君ノ手ヲ煩ハセルモノアリ。又タ谷井濟一君、小場恒吉君、小川敬吉君等ヨリ其ノ實測圖寫眞等ヲ借用シテ、之ヲ使用スルノ快諾ヲ得タルモノアリ。其ノ厚意ヲ感謝ス。

ヨリ摧折セリ。

腦頭蓋中等大。厚サ中等。眉間隆起、眉上弓、乳様上櫛、乳様突起等大。結合内外板ニ於テ癒着ナク、齒牙磨耗ハ齒骨點々露出スルニ止レリ。壯年男性ニ屬スト認メラル。

眼窩下縁及耳孔上縁ヲ水平面ニ在ラシメ、腦頭蓋ヲ垂直ニ俯觀スルニ、前述ノ缺損ヲ示スモ形類卵形ヲ呈シ、眉間隆起、眉上弓及觀骨突起ハ前頭匡廓ヲ超エテ顯ハレ、觀弓ハ左右缺失セルモ、殘存部ニ就テ按ズルニ顛額匡廓ヲ超ユルコトナシ。前頭結節微弱、顛額結節中等度。朝鮮人頭蓋ニ屢著明ナル偏歪ハ本頭蓋ニモ見ルベク、右前頭——左後頭ノ方向ニ稍著シク壓扁シ歪形ヲ呈セリ。又朝鮮人頭蓋ニハ時トシテ眉間隆起及眉上弓ノ上方ニ凹陥ノ横ルヲ認ルコトアリ。本頭蓋ニテハ著シカラズ。腦頭蓋ノ最大幅徑ハ顛頂骨顛額縁ノ少シク上方ニ存シ、一三三耗ナリ。後頭部ハ外後頭結節ヨリ上方缺失シ、最大長ヲ測ル能ハザルモ、「グラベラーイニオン」長一六七耗、「ナジオン—イニオン」長一六一耗ニシテ前者ニ三耗ヲ加ヘタル一七〇耗ヲ頭蓋最大長ト假定スレバ頭蓋示數約八〇前後ナルベシト推セラル。往年余ガ調査シタル男性朝鮮人頭蓋(主トシテ朝鮮中部ヨリ採集)二十七箇ニテハ平均最大長一七七耗七(一五八—一八九)、最大幅徑一四三耗六(一三四—一六六)ニテ頭蓋示數平均八〇、九(七二、九—九三、〇)ナリキ。本頭蓋ハ之ニ比シテ少シク小ニ且狹キ方ニ屬ス。久保博士著 *Beiträge zur physischen Anthropologie der Koreaner. I. metrischer Teil. 1913* (東京帝國大學醫科紀要第十七卷、第二〇三頁掲載)ノ表ニ據レバ、慶尙、全羅道出身者ニハ甚短頭ナルモノ多ク、平安道出身者ニ於テハ中頭以下三分ノ一ヲ占メ、京畿、忠清、黃海、江原道出身者ハ其中間ニ位セリ。故ニ一般ニ短頭ナル朝鮮人ニ於テ南部ヨリ北部ニ至ルニ從ヒ漸ク頭蓋狹小トナル傾向アル如シ。本石室頭蓋ハ現代慶尙道入ノ甚短頭ナルト異リ、寧ロ北方型ヲ呈スルモノト認ラル。

最小前頭幅ハ八五耗ニシテ、之ヲ二十八箇ノ朝鮮人男頭蓋ニ於ケル平均値九二耗六(八六一—一〇〇)ニ比スレバ甚狹シ。

又横前頭顛頂示數ハ六四、〇ニシテ朝鮮人男頭蓋二十八箇ノ平均値六四、六(五五、四—六九、八)ト略一致セリ。本頭蓋ハあいの、日本人、北部支那人頭蓋等ニ比シ其前頭ニ於テ比較的ヨリ狹窄セル朝鮮人頭蓋ノ特徴ヲ保テリ。顛額縁ハ腐蝕ノ爲メ、後頭部ノ形狀ハ缺損ノ爲メ之ヲ知ルヲ得ズ。

本頭蓋ヲ後方ヨリ觀ルニ、後頭部ノ缺損ハ之アルモ、尙顛頂彎曲ハ右側ニ弱ク、左側ニ稍強キヲ見ル。基底匡廓ニ於テハ左側ノ膨隆弱キト共ニ上述ノ歪形ヲ呈セルコト後面觀ニ於テモ之ヲ認メ得ベシ。兩側壁ハ微ニ下方ニ於テ狹マリ、其膨隆ハ中等度ナリ。頭蓋高(「ブレグマ」高)一八八耗、幅高示數九六、ニシテ朝鮮人男頭蓋二十七箇ニ於ル平均頭蓋高一四〇耗四(一三二、一—一四六)ニ比シテ低キモ後者ノ幅高示數平均九七、五(八三、七—一〇五、二)ト略一致セリ。「アステリオン」幅徑一〇七耗。兩耳孔幅徑一一五耗。頂ノ粗糲著シカラズ。後頭結節弱シ。

側面觀ニ於テ眉間隆起及眉上弓強ク、前頭ノ傾斜稍緩、彎曲弱シ。前頭骨ノ弦長一〇三耗、弧長ヲ測リ能ハズ。矢狀匡廓ハ眉間隆起ノ強ク突出セルヲ除ケバ鼻前頭縫合ヨリ略同一彎曲ヲ以テ「ブレグマ」ノ後方三種余ノ顛頂ニ達シ、之ヨリ稍急ニ後方ニ傾斜降下ス。頂面ノ傾斜緩、大後頭孔ハ微ニ後方ニ向フ。頭蓋最大長ヲ一七〇耗前後トスルニ長高示數ハ七五、三前後ニシテ、朝鮮人男頭蓋二十六箇ノ平均七八、九(七二、一—八七、三)ニ比シ稍小ナルモ大略之ニ一致セリ。顛額縁ノ高サ中等、膨隆弱シ。乳様上櫛稍著明。額弓ハ殘存部ニヨリテ弱ク外方ニ凸彎セルヲ知ル。乳様突起ハ尖端缺損アルモ大、其蜂窠大ナリ、乳様截痕淺シ。耳孔長楕圓ニシテ傾斜中等、耳上棘小。關節窩後突起痕跡、關節窩淺ク、關節結節弱シ。頭蓋基底長ハ一〇〇耗ニシテ、朝鮮人男頭蓋二十七箇ニ於ル平均値一〇一耗三(九三—一一〇)ニ略一致ス。側面長約九二耗(甚正確ナリト云フ能ハズ)ニシテ、朝鮮人男頭蓋十五箇ニ於ケル平均値九六耗二(八九—一〇三)ニ比シ稍小ナルモ大略之ニ一致セリ。額骨強ク突出セズ、緣突起弱。額前反著シカラズ、齒槽突起稍前反ス。

頭蓋基底面中部凸隆シ、後頭髁ノ高サ及彎曲中等。第三髁ナク、左髁窩及後髁アリ。側乳様突起ノ存否不明。後頭孔

ハ其緣大部分缺損シ、殊ニ其左及後緣ニハ木片ノ類ヲ以テ磨損シタル形跡アリ、固リ採集ノ際生ジタルモノトス。舌下神經管單一。咽頭結節弱シ。左右錐體ノ尖端部等缺失ス。

上齶齒槽ハ其唇及頰側壁ノ大部分ヲ失ヒ、且右ハ第二、左ハ第三大白齒槽ノ前壁ヲ殘シテ齒槽突起後端部缺失セリ。現存部ノ齒槽ハ孰レモ開口シ、其二三ハ齒根ノ箱入セル儘ニ存スルモノアレドモ齒冠缺失ス。口蓋ハ穹窿低クシテ、中廣ク、第二大白齒槽内緣ノ距離四二耗、該齒槽ノ内側ニテ測リタル距離三九耗ニシテ、朝鮮人男頭蓋十九個ニ於ケル後者ノ距離三五耗八(三四一四〇)ニ比シ大ナリ。口蓋隆起ナク、切齒縫合ノ痕跡アリ。

正面觀ニ於テ上顔高約六五耗。朝鮮人男頭蓋十九個ニ於ケル平均上顔高七二、三(六七一七八)ニ比シテ稍低シ。上顔幅徑ハ九八耗眼窠外緣距離九五耗ニシテ、朝鮮人男頭蓋二十八個ニ於ル該距離平均値一〇二、九耗(九七一一一)ニ比シ甚小。中顔幅徑ハ約九〇耗ニシテ鮮人男頭蓋二十個ニ於ル中顔幅徑平均値九九、五(九四一〇八)ニ比シ小ナリ。故ニ顔面ハ朝鮮人男頭蓋ニ比シ小ナリト云フベシ。然レドモ中顔幅徑ニ據ル上顔示數ハ約七一、一ニシテ鮮人男頭蓋十九個ノ平均七二、七(六五、七一八、一三)ニ略一致セリ。眼窠ハ其緣腐蝕或ハ缺損シテ、計測ニ堪エサルモ、高サ中等、橫軸少シク外下方ニ向ヒ傾斜セリ。左眼窠ハ右側ノニ比シ稍高シ。前者ノ圓形ヲ呈スルハ上眼窠緣ノ缺損アルニヨレリ。

鼻骨ハ僅ニ右側ノ上部ヲ存スルノミナルモ、其幅上部ニ於テ甚狹ク(兩鼻骨最小幅徑三耗)、「マカクス」型ヲ呈セルモノノ如シ。鼻骨四七耗、幅徑二五耗、示數五三、二ニシテ、之ヲ朝鮮人男頭蓋二十個ニ於ル平均高徑五二耗五(四七—五七)、幅徑二六耗〇(二三—二八)、示數四九、二(四一—五三)、此平均値ハ十八個ニ就テ計算スニ比スルニ高徑小ニシテ比較的廣シ。梨子孔下緣ハ稍銳、前鼻棘缺失ス。犬齒窩中等。

下齶骨破片及齒牙ニ就テハ特記スベキ點ナシ。以上ヲ按スルニ本頭蓋ハ腦頭蓋ノ形狀ニ於テ略現代朝鮮人ノ特徴ヲ具備シ、顔面ハ稍小ナルモ亦後者ニ相應セズトハ云フベカラズ。但シ其中等ナルハ現代慶尙、全羅兩道等南鮮地方人ニ見

ルコト稀ニシテ、北鮮地方人ノ特徴トスルガ如キニ該當セルヲ注意スベシ。

第六號墳發見人骨

第六號墳發見人骨ハ 6003 及 6004 ノ二部ニ分タレ。此内 6003 ニハ左右下齶枝、第二頸椎體並ニ齒狀突起、右上膊骨下端、下部缺失セル右脛骨破片等ノ外、頭骨破片少許及ヒ腰椎一個アリ。又 6004 ニハ頭骨破片、左上膊骨體及頭部第一頸椎、其他頸椎棘狀突起破片等アリ。之ヲ相比較スルニ 6003 中ニ存スル少許ノ頭骨破片及腰椎ヲ除ク他ハ、總テ同一個體ニ屬スルガ如シ。故ニ本號古墳ノ人骨ハ少クトモ二個體ノ人骨ヲ存セルヲ見ル。

6003 ノ頭蓋破片ハ左冠狀縫合ニ接スルニ前頭骨及左顳額骨ヨリ成ルモノ一片、右三角縫合ノ一部ヲ存スル後頭上鱗ノ右部一片其他併セテ三片ニシテ、厚ク、上記縫合ハ内面ニ於テ既ニ癒着ヲ示シ、又内殊ニ外面ニハ赭色ノ物質薄層ヲナシテ附着シ、其他内面諸處ニ藍色ノ物質斑點狀ニ附着セリ。後述ノ頭骨トハ明ニ別ノ個體ニ屬ス。

性不詳、熟年ト推定サル。又腰椎ハ體ノ前方ニ低ク上方ノモノニ該當シ、全面淡赭色物質ノ薄層ヲ以テ蔽ハル。體ノ前上緣、左右側突起、棘狀突起等缺失セリ。其大サヨリ察スルニ男性ニ屬スベシ。此兩者ヲ除キタル他ノ人骨破片ハ赭土附着セルモノモ、洗滌スレバ右ノ如キ赭色物質ノ膠着ヲ留メズ、只ダ表面處々ニ若黒ナル斑點ヲ印セリ。

此個體ハ頭蓋骨及上膊骨端ノ大ナルニヨリテ男性ナルヲ知ルベク、冠狀及矢狀縫合ハ内板ニテ癒着進ミタルモ、齒牙咀嚼面ノ磨耗ハ、齒骨斑點ヲナシテ露出セルノ程度ニ過ギザルヲ以テ、後ノ所見ニ準ジテ尙壯年ニ在リトスルヲ至當ナリ。

此頭骨ハ厚サ中等ニシテ脆ク、其前頭骨及顳額骨ノ左顳額面、及左後頭部ニ大缺損アリ。基底部分保存ハ稍良好ナルモ之ト接合スル能ハズ。上齶骨保存稍可ナルモ、亦缺損少カラザルガ爲メニ、遂ニ復原ノ目的ヲ達スルニ至ラザリキ。故ニ腦頭蓋及顔面ノ形狀ヲ正確ニ記述スル能ハザルヲ以テ、次ニ各部分ニ就キ觀察スルトコロヲ記スニ止ムベシ。

前頭骨ハ弦長一三耗、大ニシテ彎曲中等、右眉上弓及之ニ接スル眼窠上縁ノ一部、左眼窠上縁、左額骨突起並ニ額面、左右眼窠部等缺失セリ。眉上弓強ク、前頭結節弱シ。最小前頭幅徑ハ九〇耗ニシテ、左右耳孔距離一二五、左右「アステリオン」距離一一一ニシテ、第二號墳附屬石室人骨頭蓋ヨリモ幅徑大ナルニ最小前頭幅徑ハ彼ト同ジ。

本頭蓋亦朝鮮人頭蓋ノ前頭狹窄著シキ特徴ヲ保有セリ、後頭骨上縁失シ、外後頭結節亦缺損セルモ上項線強キヲ見ル頂面ノ粗糙ハ甚シク強カラズ。後頭孔ノ長三九耗。左右髁等損傷ス。第三髁ナシ。乳様突起中等大、乳様截痕深シ。咽頭結節強カラズ。下齶窩卵圓形。關節結節稍強。耳孔廣楕圓、耳上棘痕跡。頭蓋基底面ハ廣潤ニシテ凸隆ス。

上齶ハ左右齒槽並ニ口蓋突起及之ニ接スル體ノ一部、左額骨突起ヲ存シ、又口蓋骨水平部ヲ存ス。梨子孔ノ幅二七耗下縁銳、犬齒窩淺ク、犬齒槽強ク隆起ス。齒槽突起ノ前反稍著シク、齒槽ハ兩側各八個アリ、閉塞セルモノナシ。右第二門乃至第二大齒、左第一及第二大齒ヲ存ス。他ハ空虚ナリ。齒牙ノ大サ中等。磨耗第二度、但シ右第二門齒及犬齒ハ稍強ク用耗セリ。第三大齒ノ齒槽ハ小ナリ。口蓋ハ長徑四六耗、幅徑四三耗、示數九三、五、(後鼻棘尖端マデ測リタル幅徑三八耗。此示數七三、二)ニシテ第二號墳附屬石室人骨ニ於ル如ク廣キモ、朝鮮人男頭蓋十八個ニ就テ計測セル(後掲ノ方法ニテ)平均値長徑五二、〇(四七一五七)、幅徑三五、八(三四一四六)、示數六八、八(六一、八一八三、三)ト大略一致セリ。口蓋淺ク、輕度ノ口蓋隆起アリ、切齒縫合遺殘微小。後鼻棘細シ。

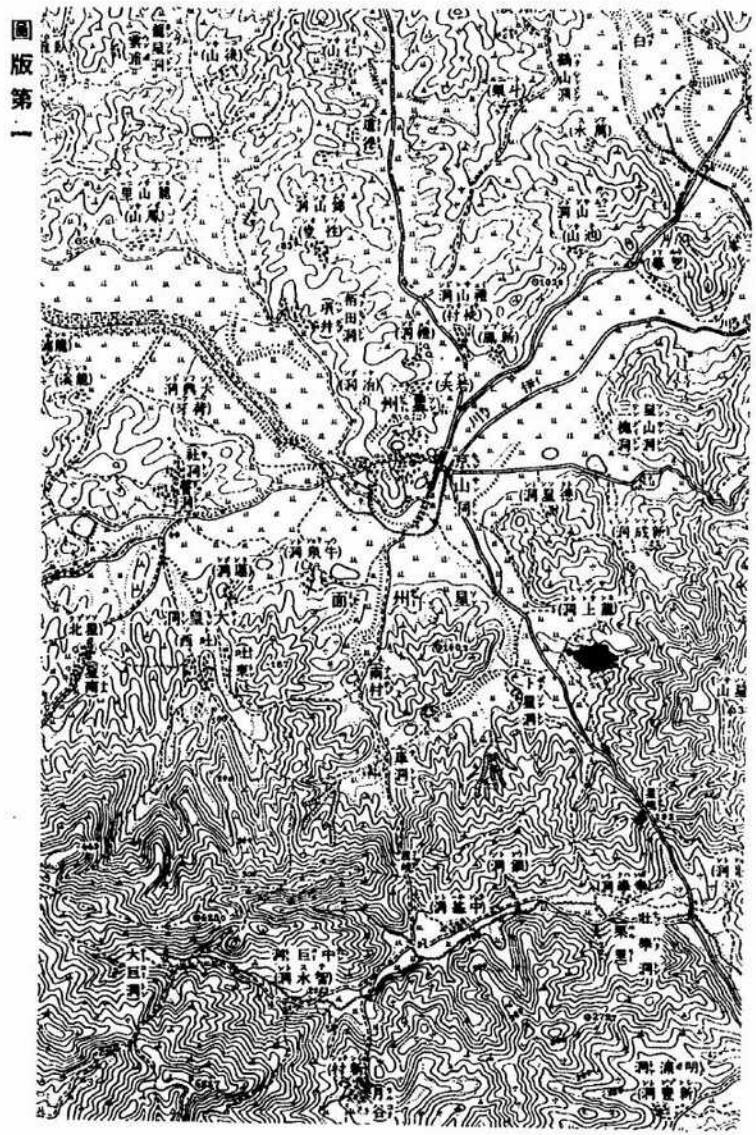
下齶枝ノ高サ左七二耗、最小幅徑同三九耗、示數五四、二、下齶截痕深ク、鳥喙突起細長、筋附着粗糙甚シク強カラズ右枝ニハ第二小齒及第一、第二大齒槽ヲ有スル體ノ一部ヲ伴フ。第三大齒ハ發生セズ、第二小齒ハ亡失、第一第二大齒ヲ存ス。

即チ本頭蓋ハ前頭狹窄ノ強キ、口蓋廣キ等第二號古墳附屬石室人骨ニ於ケルト一致シ、後者ノ如ク朝鮮人頭蓋ノ特徴ヲ具備セリ。

此頭骨ニ附屬スベキ左上膊骨ハ面腐蝕セルモ、中央最大徑二四耗、最小徑一六、耗示數六六、七、中央周圍六七耗、最小周圍六五耗ニシテ、太サ中等、三角粗隆強カラズ。稜骨神經骨稍著明ナリ。右上膊骨體下端部扁平。左脛骨ハ中央矢狀徑二八耗、橫徑一八耗、示數六四、三、中央周圍七三耗ニシテ扁平、前縁鈍、後面ハ縱走ス。鈍稜ニヨリテ、内外二面ニ分ル。斯ル狀態ハ日本石器時代人脛骨ニ屢々見ラルルトコロトシテ、余ニ興味ヲ感ゼシメタリ。頸椎等ニ就テハ特記スベキ點ナシ。(大正十年四月十七日)

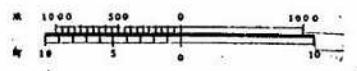
圖

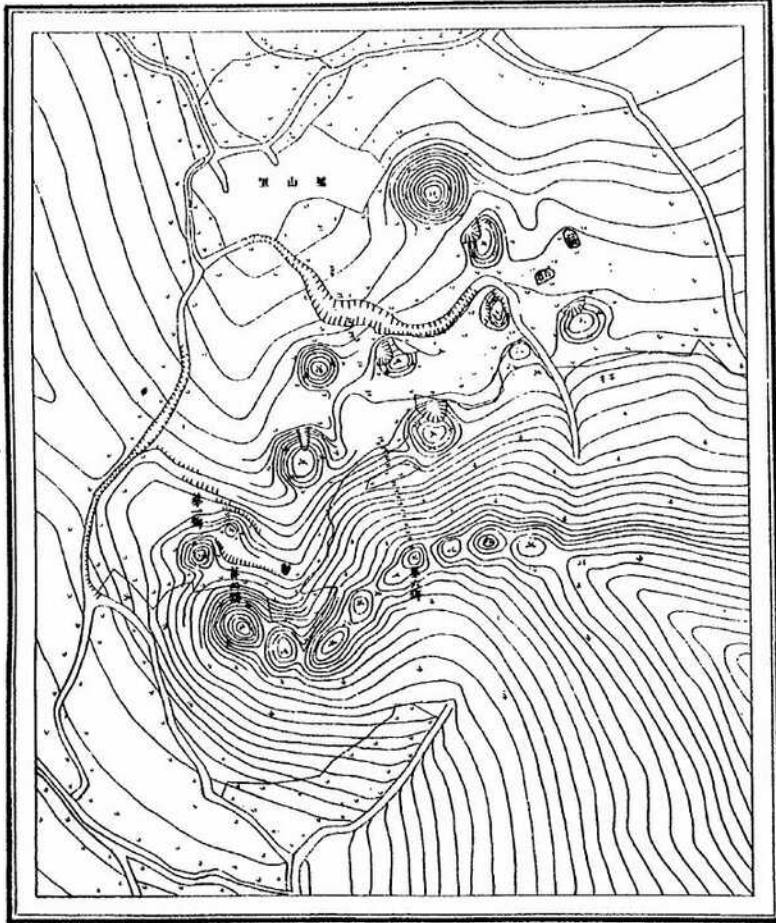
版



圖版第一

第一圖 慶尙北道星州郡星州附近地圖(陸地測量部五萬分之一地形圖分紙)





第二圖 慶尙北道星州郡星州面星山洞古墳分布圖



第三圖 星山洞古墳群遠望(北方より)



第四圖 星山洞古墳群一部

圖版第四

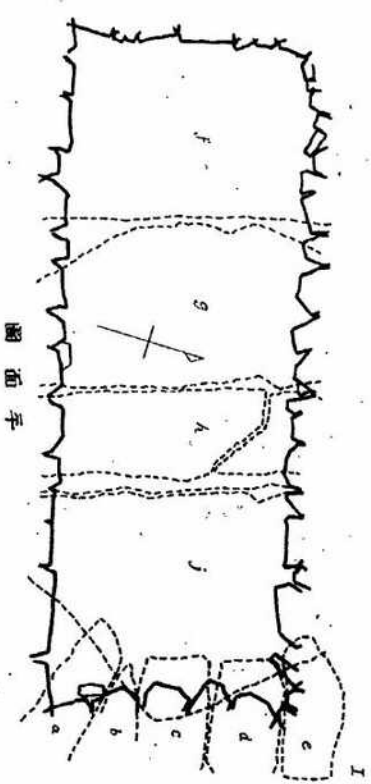


第五圖 星山洞第一號古墳東面(發掘後)

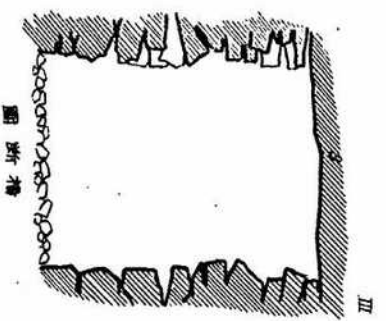


第六圖 同第一・第二・第三號古墳

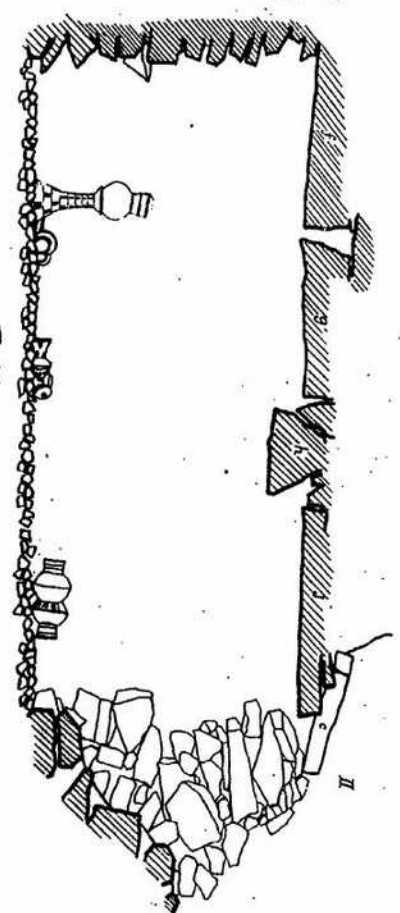
慶尚北道星州郡
 星山洞第一號古墳石室
 大正七年九月發掘調査
 梅原末治實測製圖



圖面手



圖新構



圖新裝

第八圖 星山洞第一號古墳石室實測圖

圖版第六



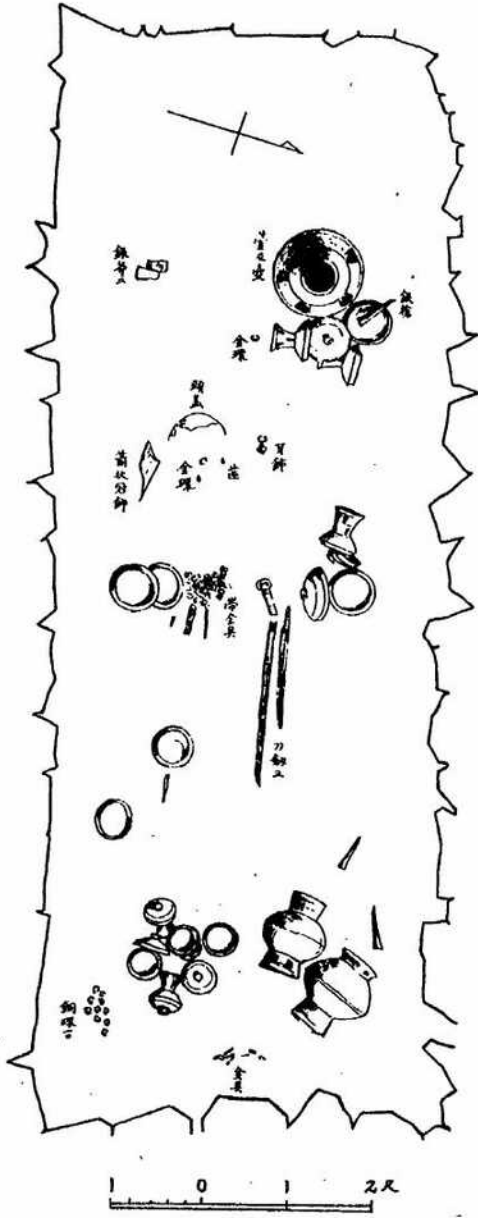
第一〇圖 同上 石室東部遺物存在狀態



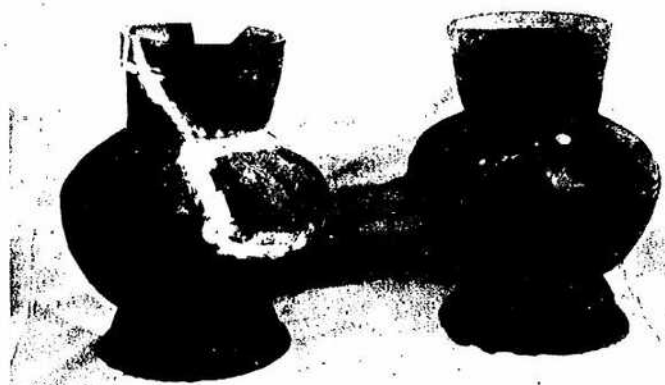
第九圖 旱山洞第一號古墳石室西部遺物存在狀態

星山洞第一號古墳石室遺物配置圖

大正七年十月發掘調査
濱田松原實測製圖



第一一圖 星山洞第一號古墳石室遺物配置圖

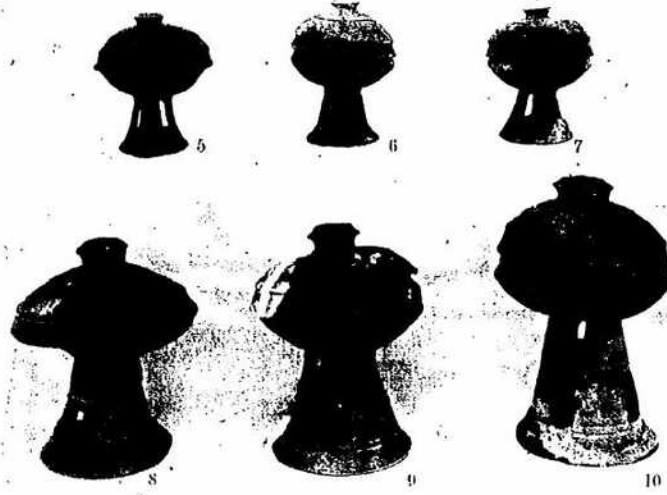


第一二圖 星山洞第一號古墳發見土器(釜田壺)

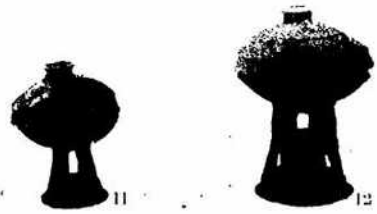


熊狀古存壺及壺頸長

第一三圖 同上(長頸壺及壺)



第一四圖 星山洞第一號墳發見土器(高杯)

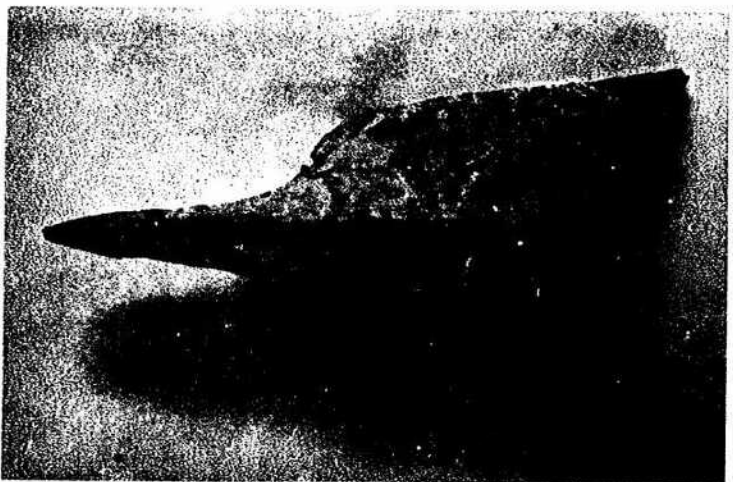


第一五圖 同

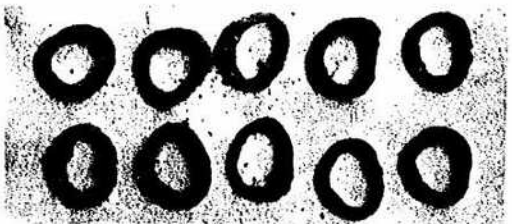


上(高杯)

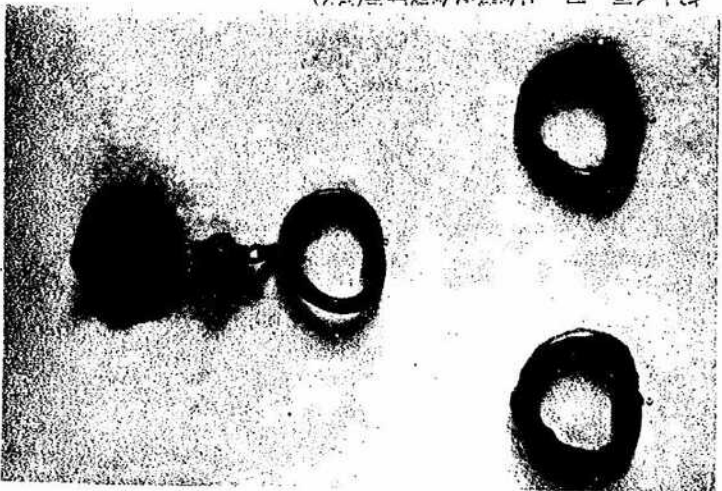
第一六圖 阜山銅第一號古墳發見銀製冠飾



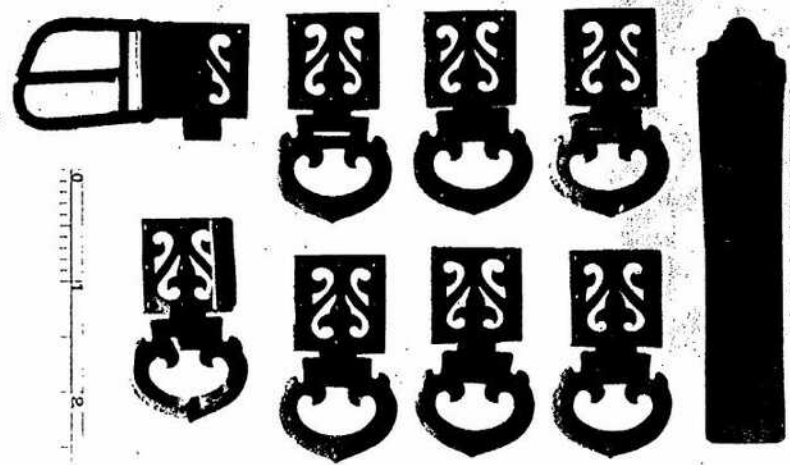
第一七圖
同上銅環



第一八圖 同上金環及金製耳飾(共)



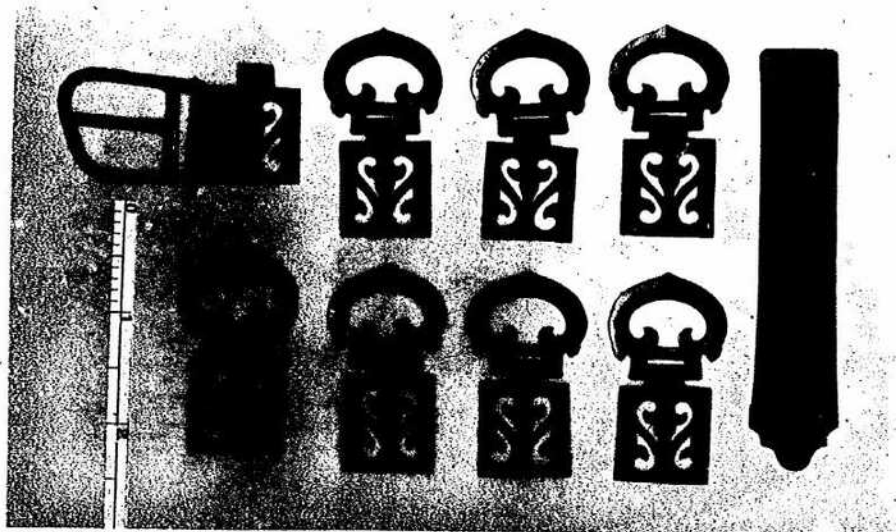
圖版第一一



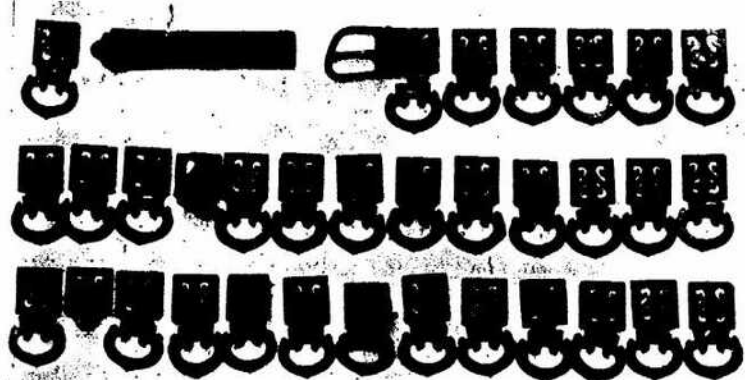
第一九圖 星山洞第一號墳發見銀製帶飾一部(表面)

同上(裏面)

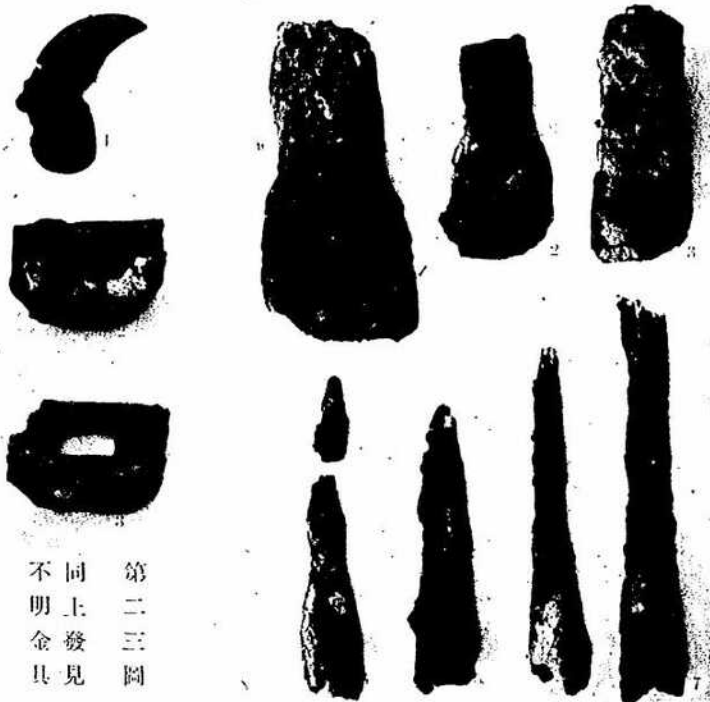
第二〇圖同



圖版第一三

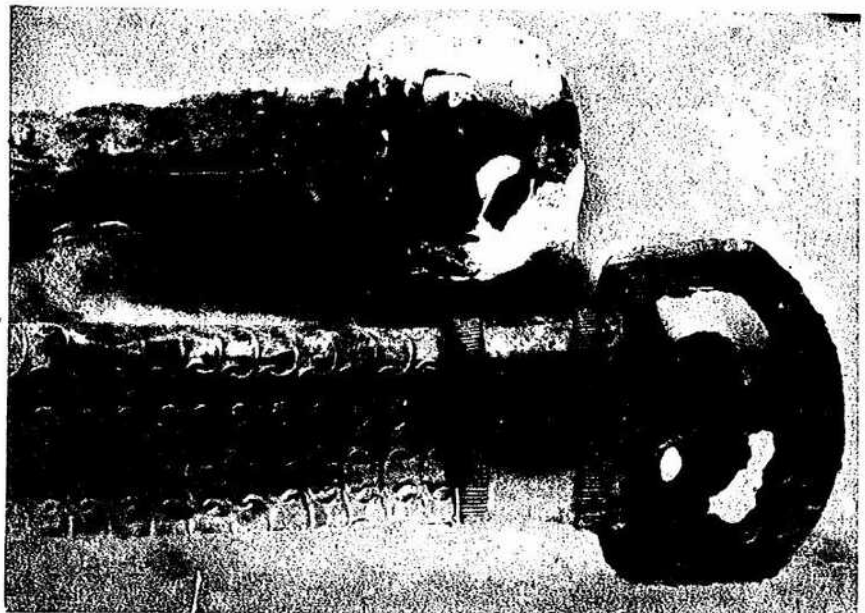


(部全)飾帶製銀見發墳古號一第洞山星 圖一二第



第二二圖 同上鐵斧及鐵槍

第二三圖
同上發見
不明金具

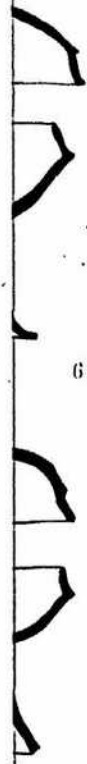


第二五圖 同上柄頭部(實大)



第二四圖 崑山洞第一號古墳發見刀劍

第二六圖 星山洞第一號古墳發見土器圖

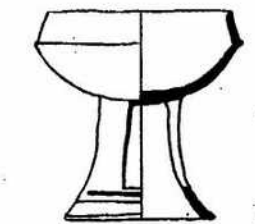
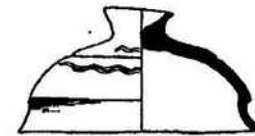
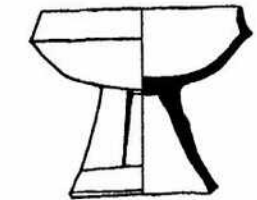
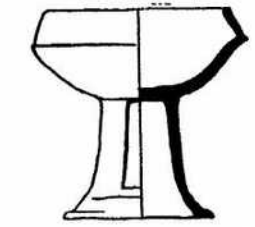
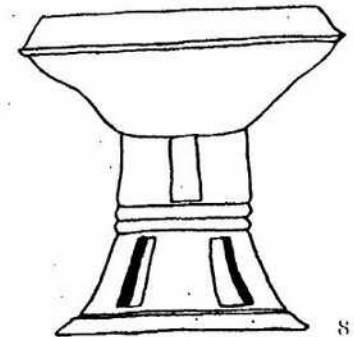
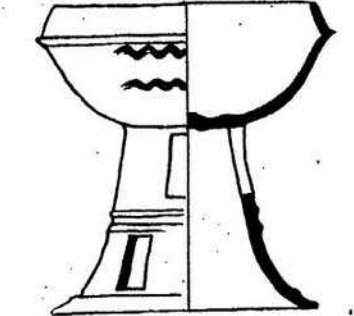
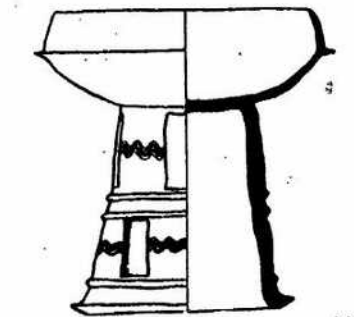
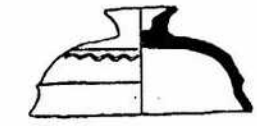
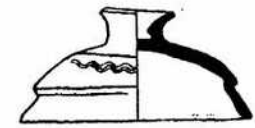
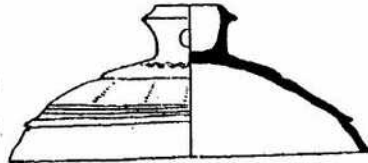
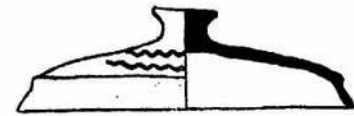
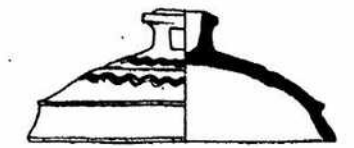
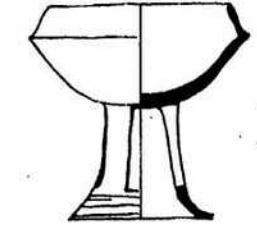
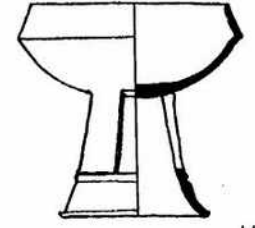
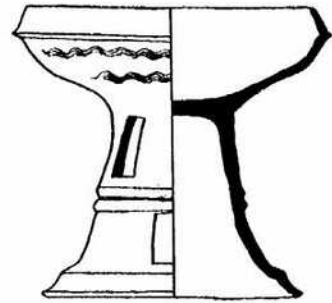
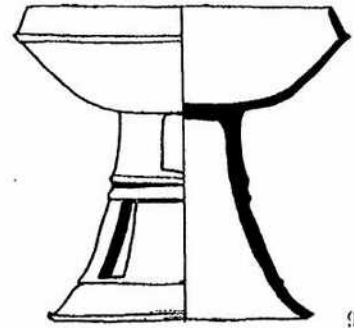
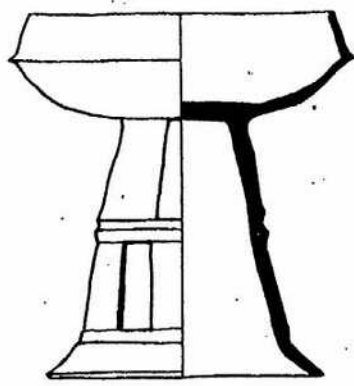
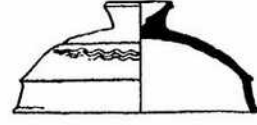
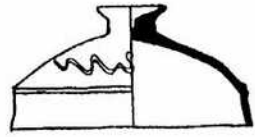
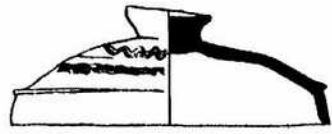
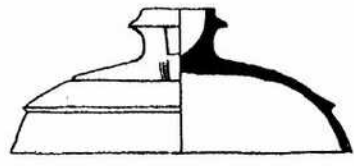
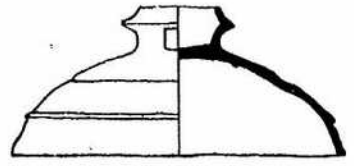


6

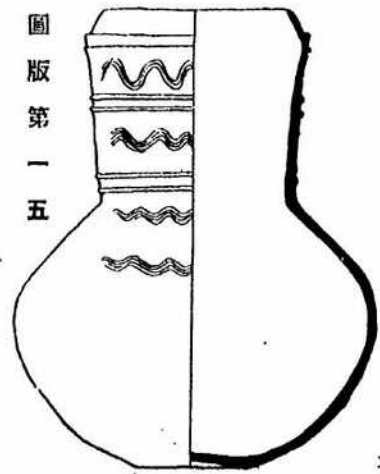
7

(1-1) 約五分之一
(5-15) 約三分之一

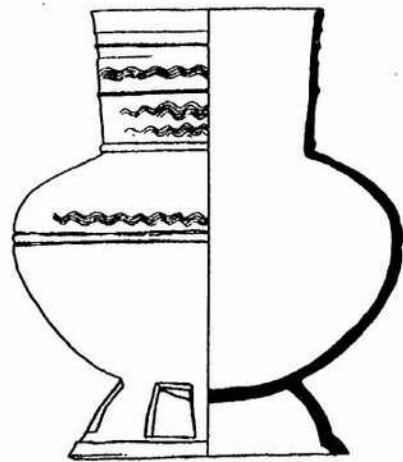
(1-4) 約五分之一
(5-15) 約三分之一



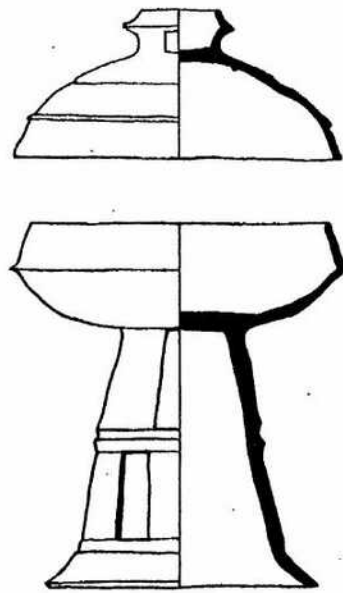
圖版第一五



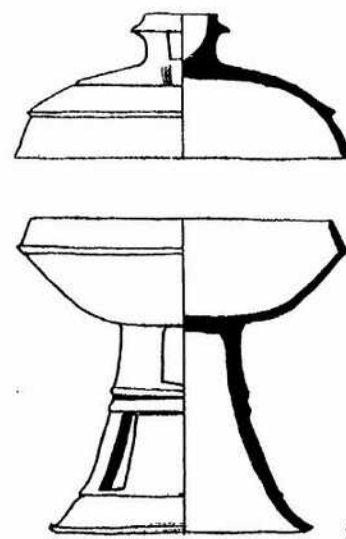
3



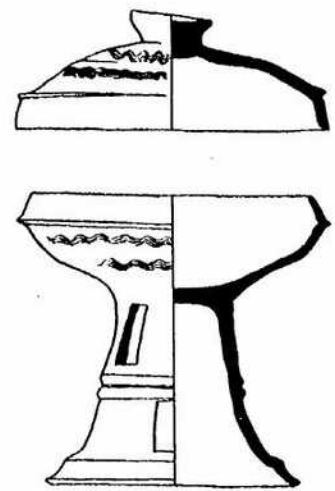
2



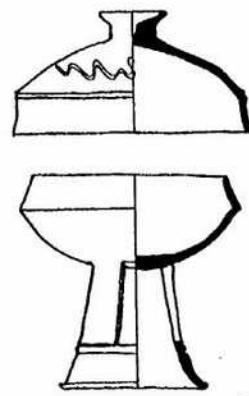
10



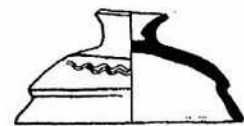
9



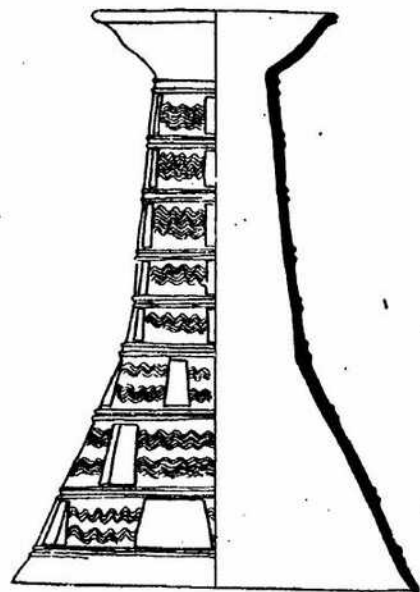
15



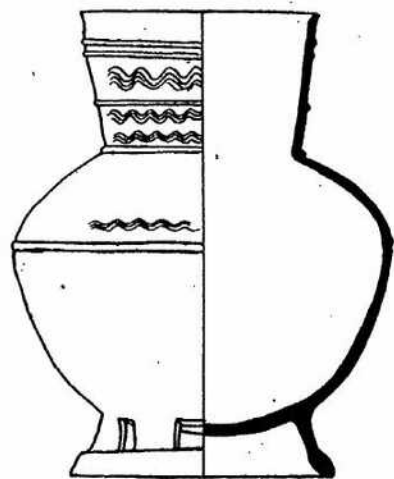
11



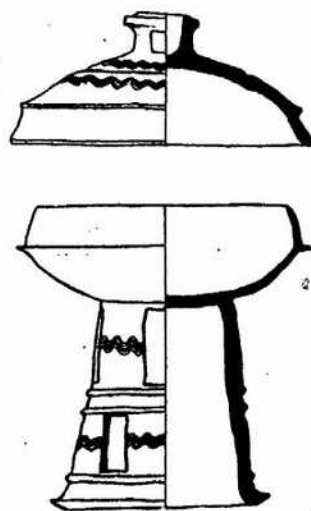
5



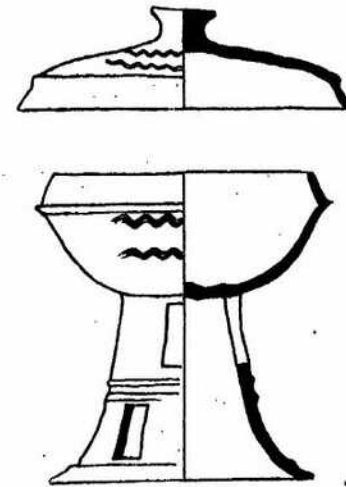
4



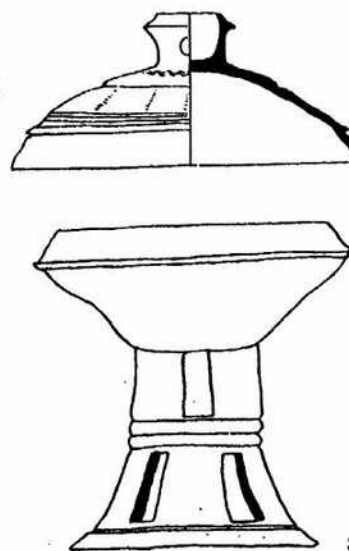
1



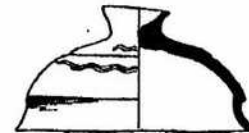
12



14



8



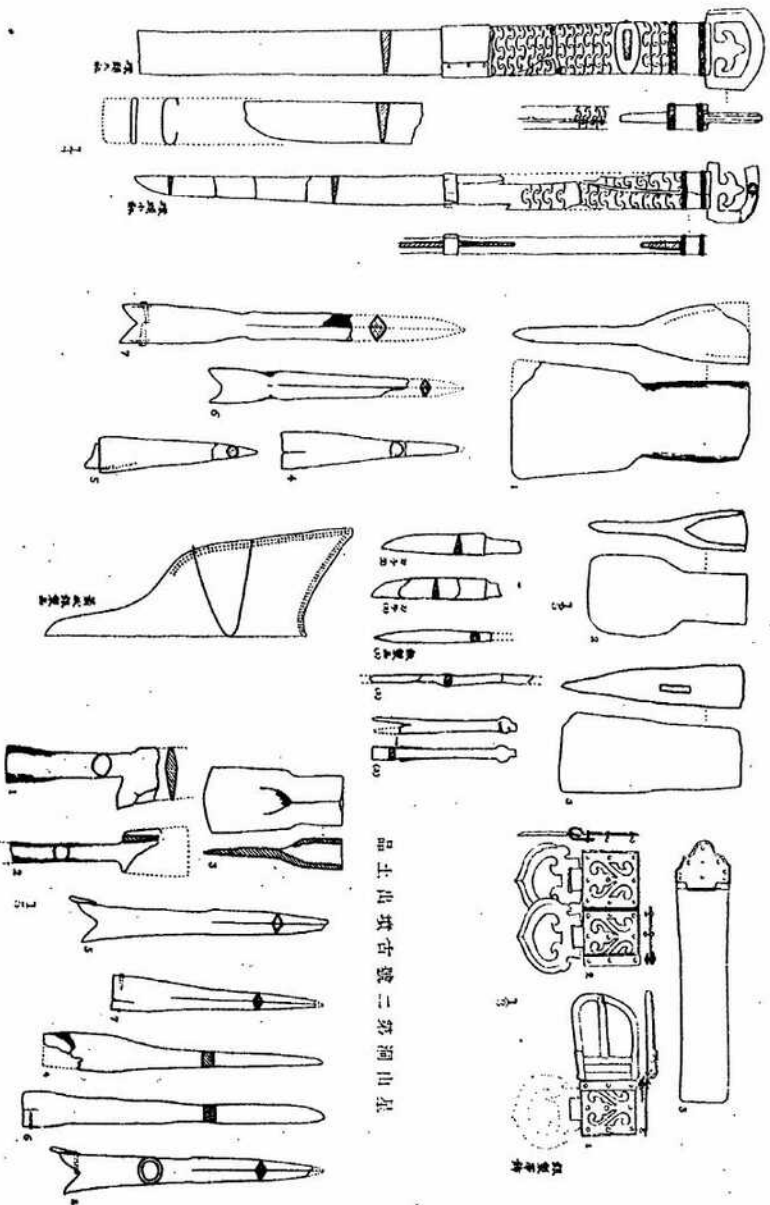
6



13

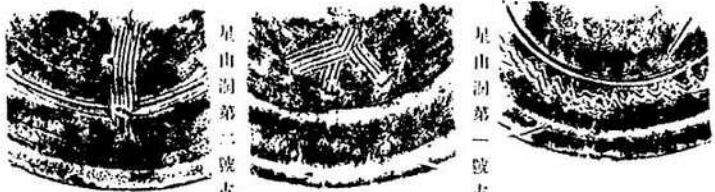
裏面白紙

星山洞第一號古墳發見金器

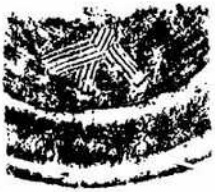


星山洞第二號古墳發見金器

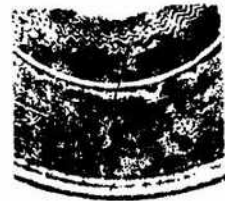
第二七圖 星山洞第一號及第二號古墳發見金器品



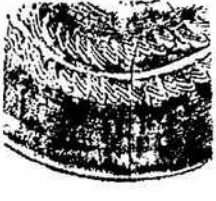
星山洞第二號古墳



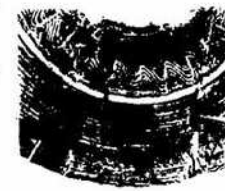
星山洞第一號古墳



星山洞第二號古墳



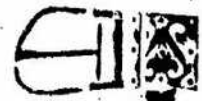
星山洞第一號古墳



星山洞第六號古墳



星山洞第六號古墳



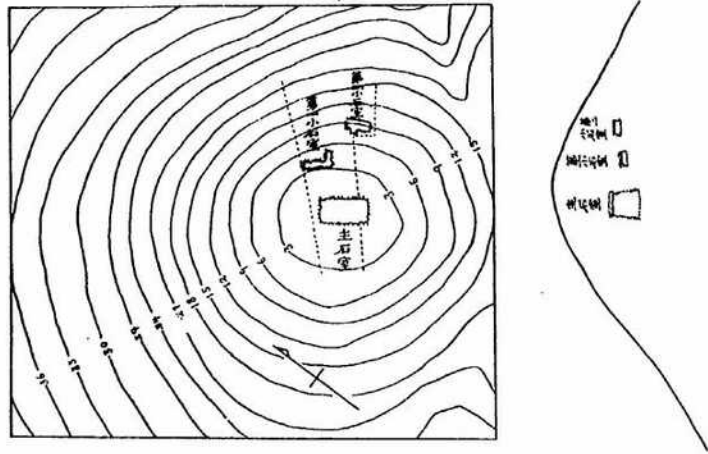
星山洞第一號古墳銀製帶飾



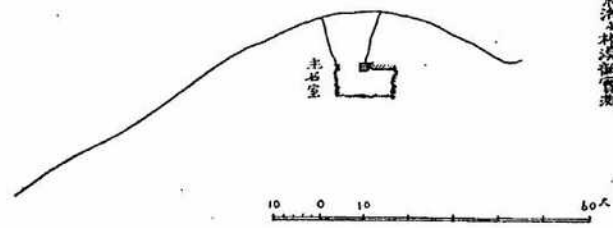
星山洞第一號古墳大環頭柄部銀飾

第二八圖

星山洞古墳發見土器紋樣及第一號古墳發見金具拓本

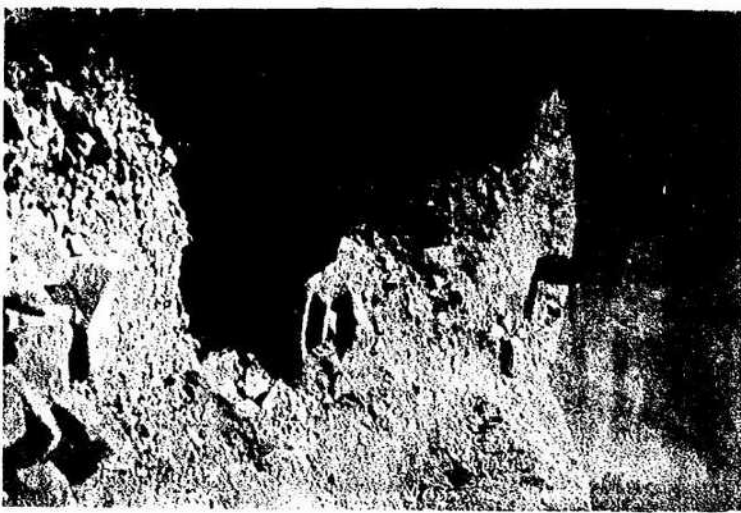


第二九圖 星山洞第二號古墳外形實測圖

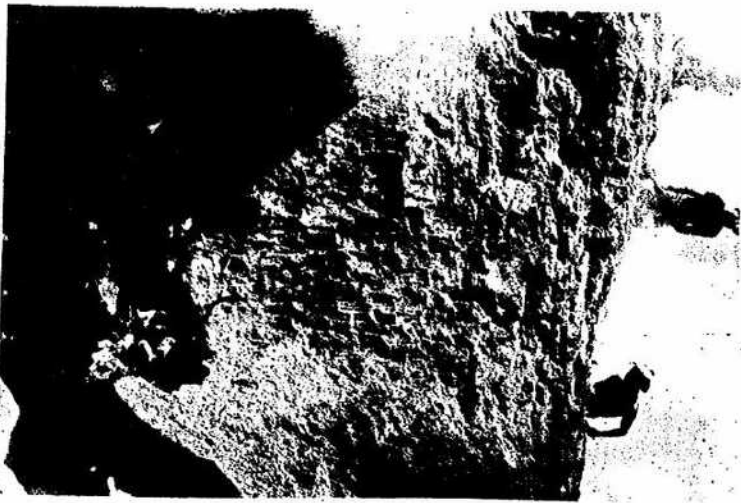


星州郡星山洞
第二號古墳

大正七年九月廿日發掘調査
梅原末清・林漢彌實測



第三一圖 同 上發掘終了



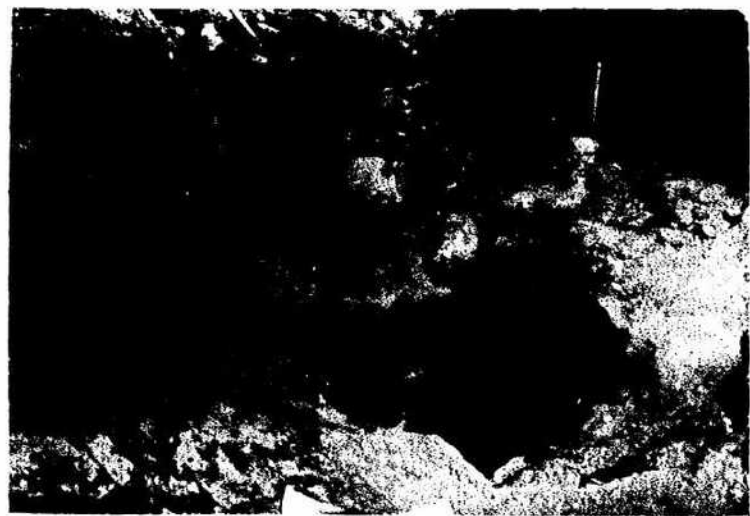
第三〇圖 星山洞第二號古墳主石室發掘



壁側室石主墳古號二第洞山星 圖二三第

上

同 圖三三第





第三四圖 旱山洞第二號墳附屬第一小石室

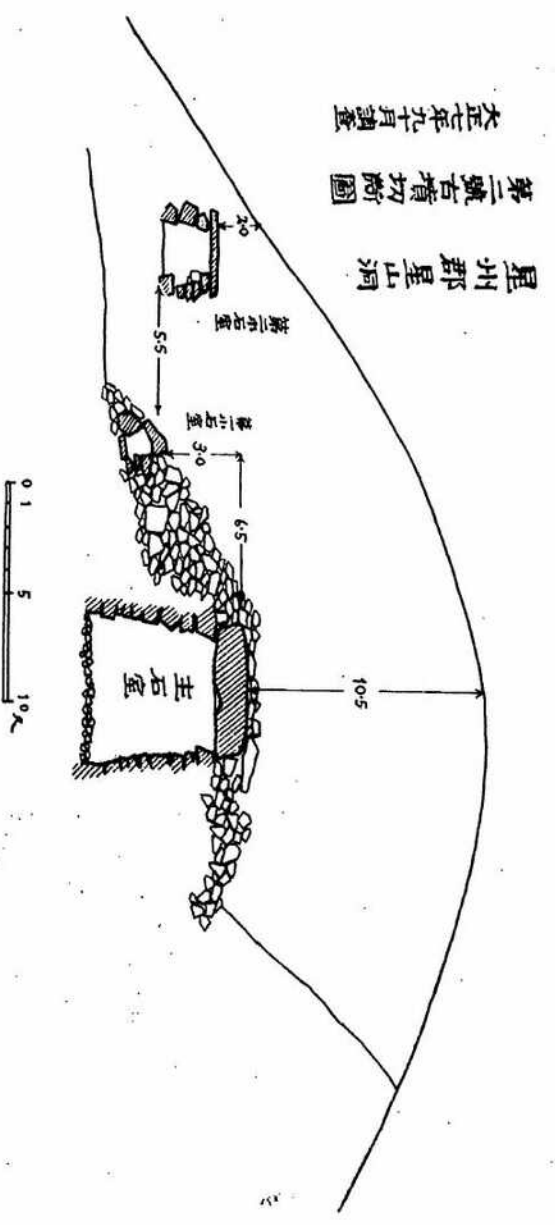


第三五圖 同上內部



第三六圖 同上第二小石室

星洞山第二號古墳斷面圖 第三七圖



圖版第二二

第三八圖 星山洞第二號古墳主石室實測圖

慶尚北道星州郡

星山洞第二號古墳

主石室

大正九年發掘調査

梅原本實測圖

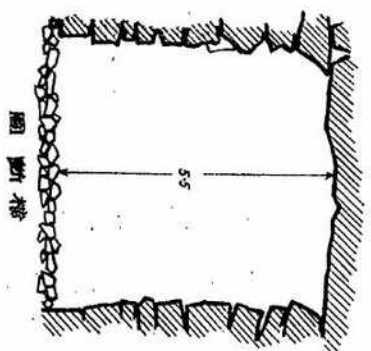
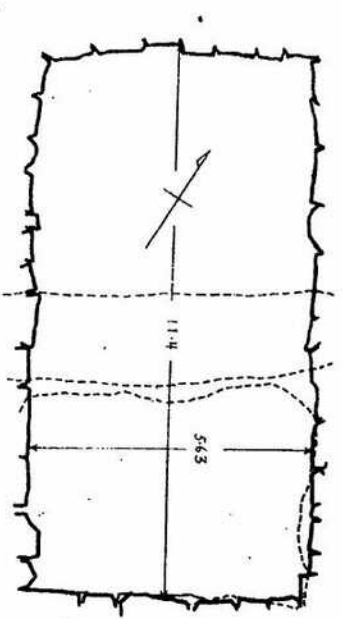


圖 斷 橫



平面圖

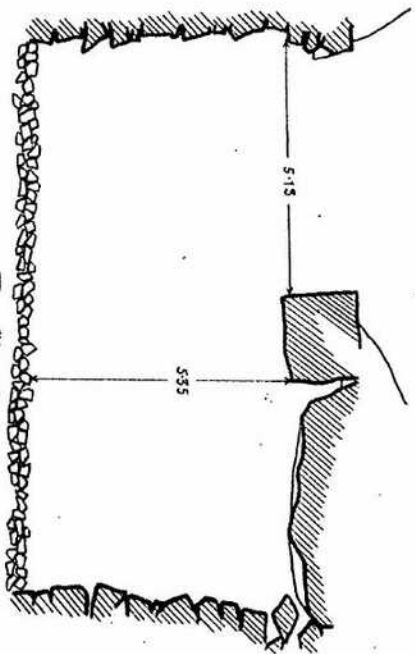
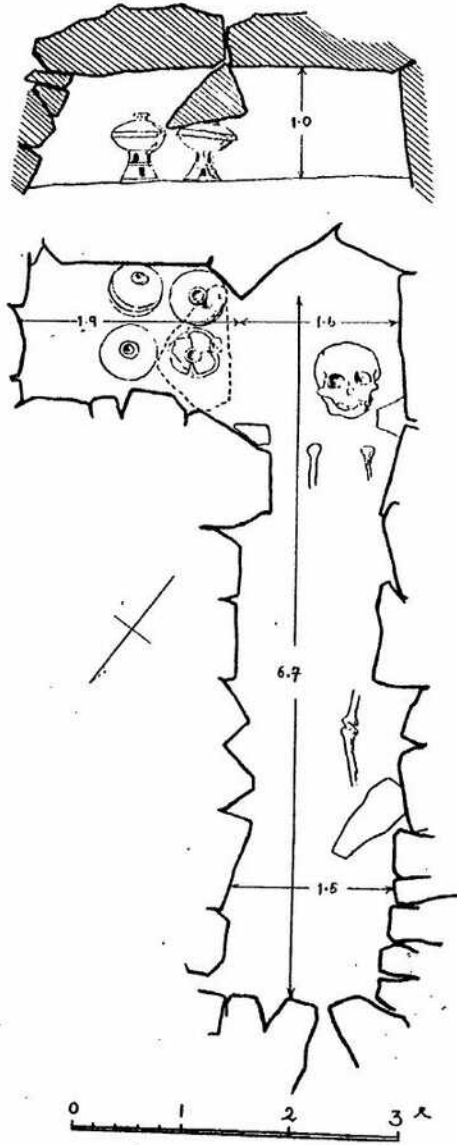


圖 斷 縱

圖 星 山 洞

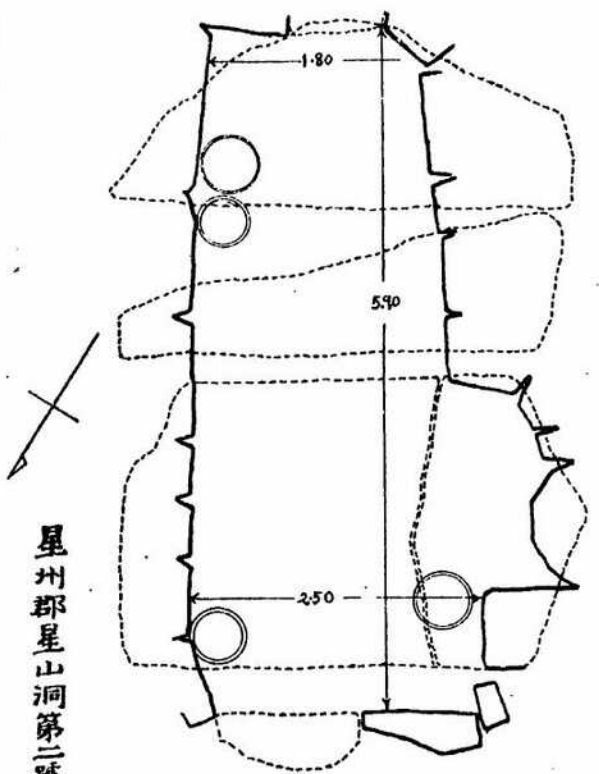
星山洞第二號古墳附屬第一石室

大正七年九月發掘調査
梅原末治實測圖

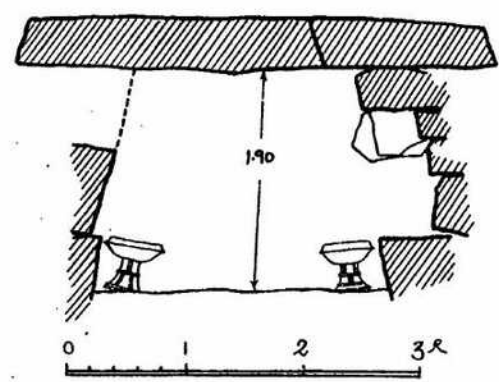


星山洞第二號古墳附屬第一小石室實測圖

圖版第二五



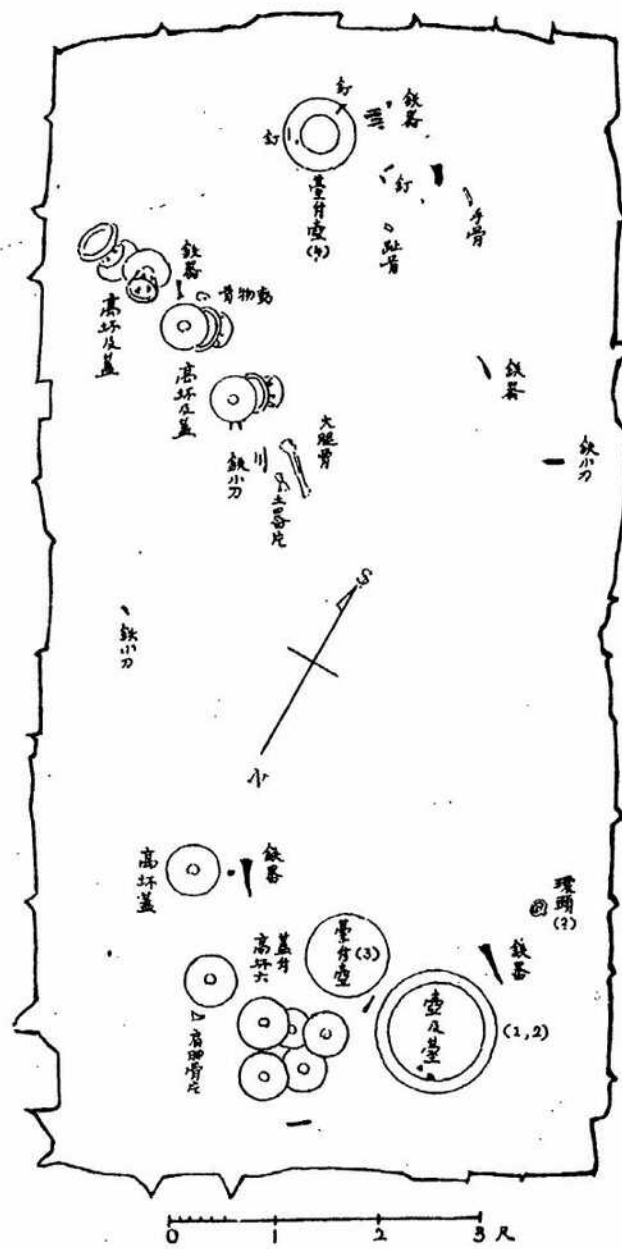
星州郡星山洞第二號古墳附屬第二小石室
大正七年九月
發掘調査



第四〇圖 星山洞第二號古墳附屬第二小石室實測圖

星山洞第二號古墳主石室遺物配置略圖

大正七年十月發掘調査
濱田拓原實測略圖



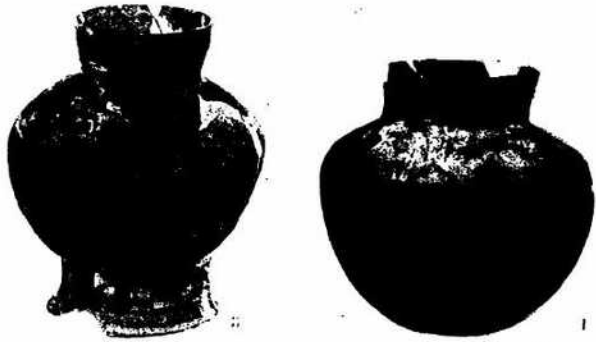
第四一圖 星山洞第二號古墳主石室遺物配置略圖

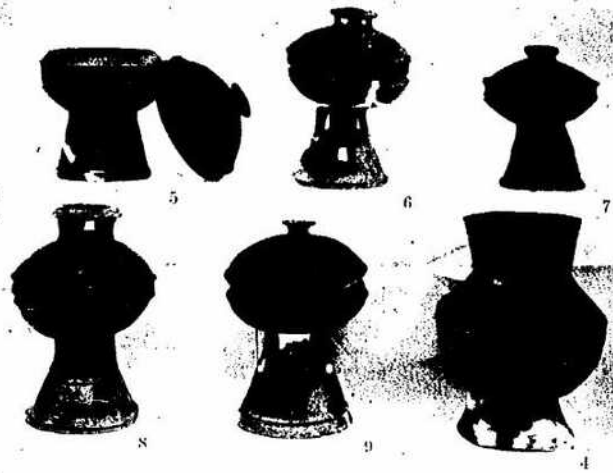




第四二圖 星山洞第二號古墳發見土器(壺及盃)

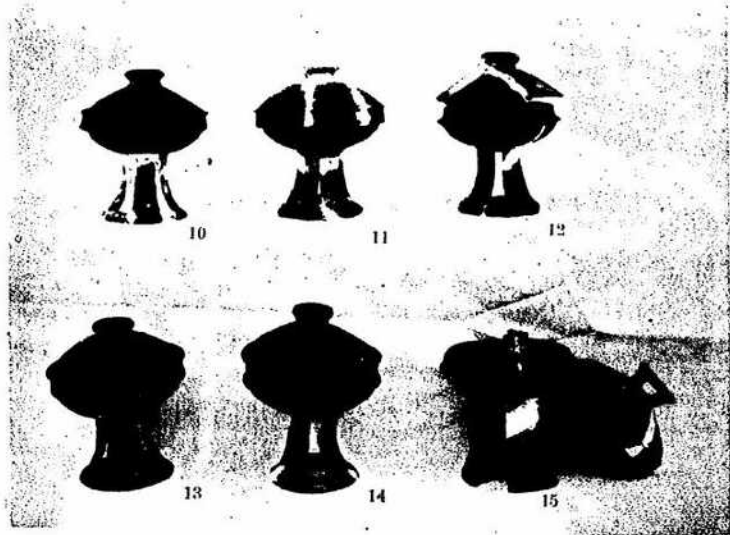
第四三圖 同上土器(壺及盃附蓋)



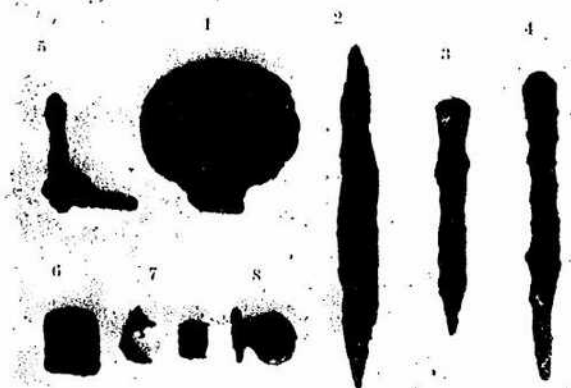


第四四圖 星山洞第二號古墳主室發見土器

(蓋附蓋及塚高)

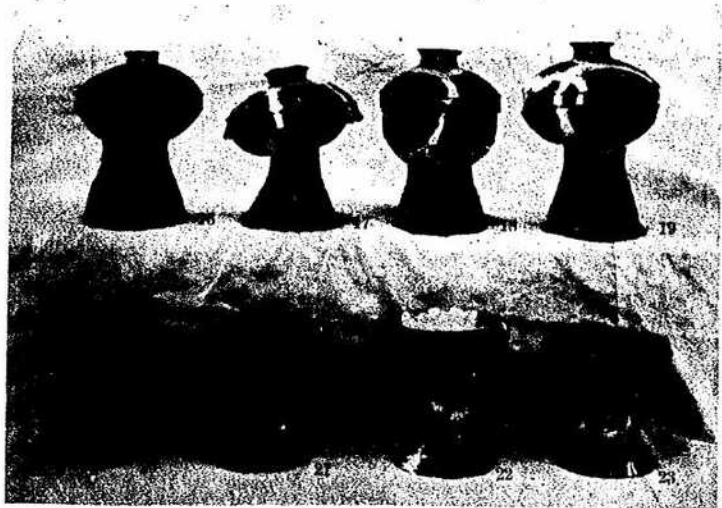


第四五圖 同上(高塚)



圖六四第
器鐵見發室主墳古號二第洞山星

器土見發室石小上同 圖七四第





第四九圖 星山洞第二號古墳土石室發見鐵刀類



第四八圖 同上發見鐵斧及鐵鎗

第五〇圖 星山洞第二號古墳發見土器圖

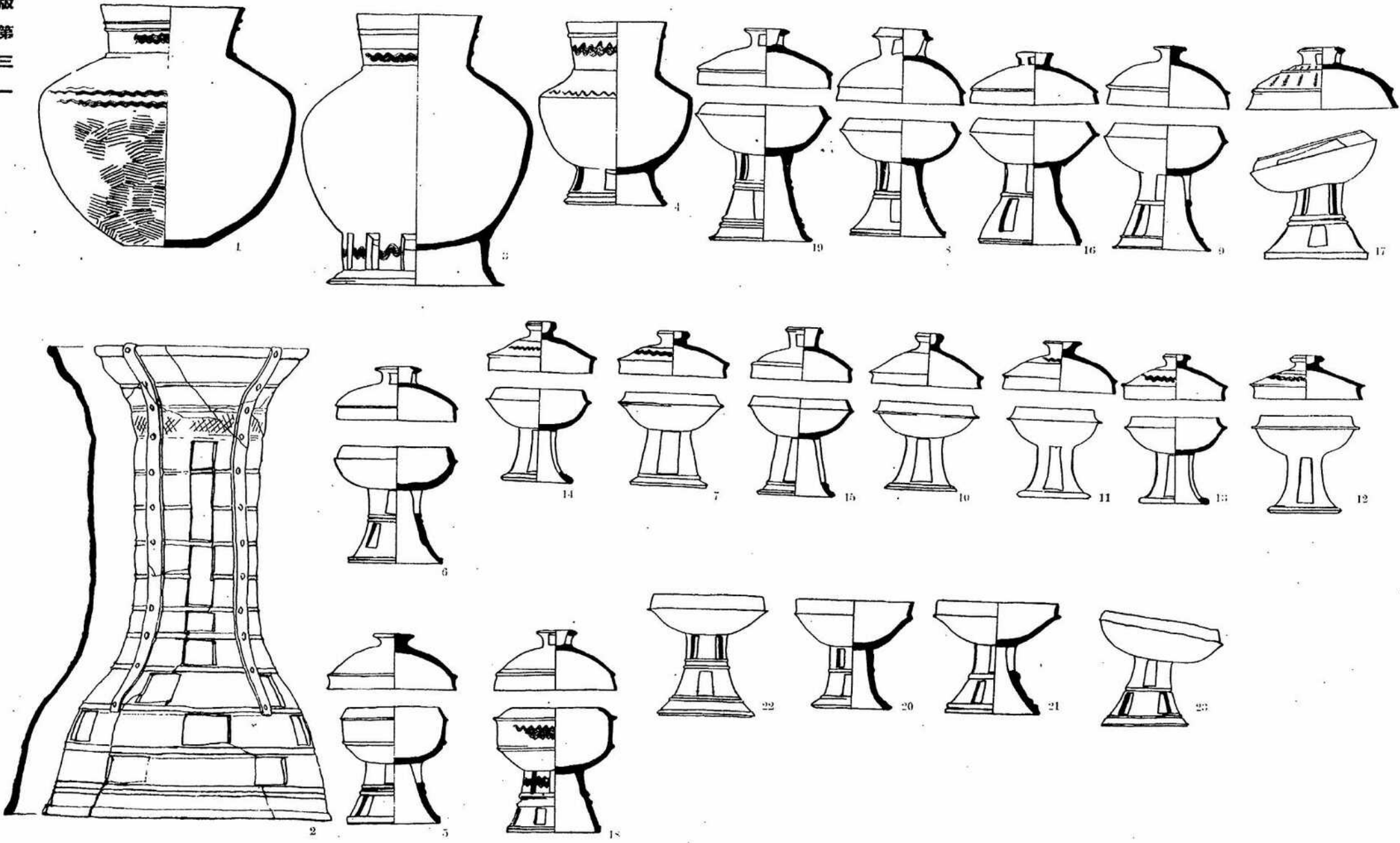


17

12

(約五分之一)

圖版第三



裏面白紙

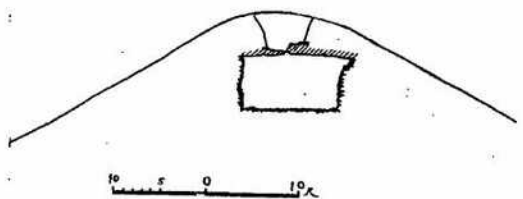
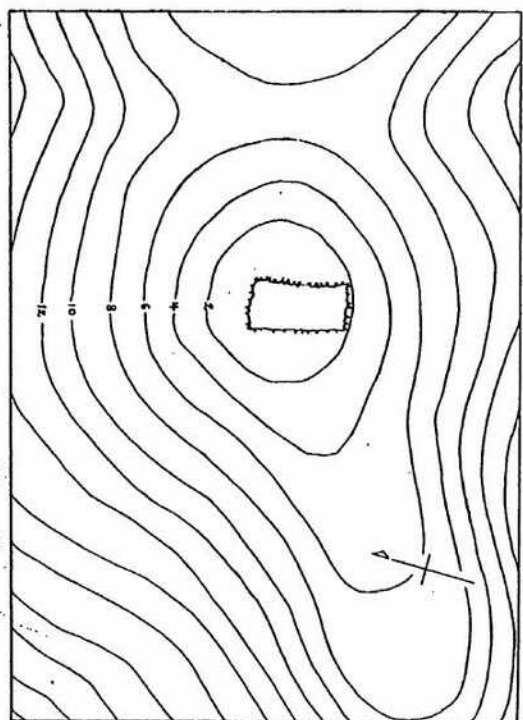


第五一圖 星山洞第六號古墳發掘光景



第五二圖 同上發掘終了後ノ光景

第五三圖 星山洞第六號古墳實測圖



星州郡星山洞第六號古墳

大正七年十月發掘 梅原及林實測

圖版第三三



圖版第三四

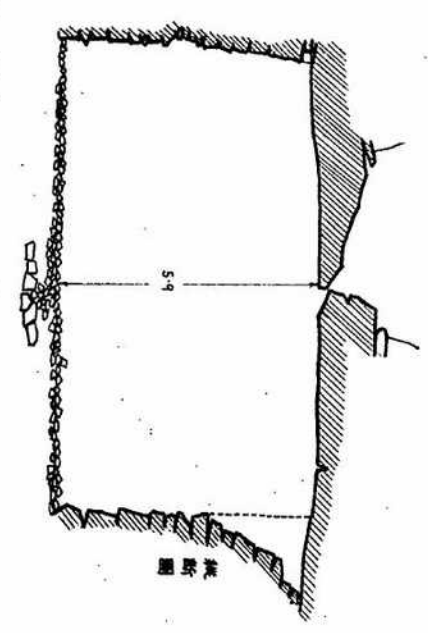
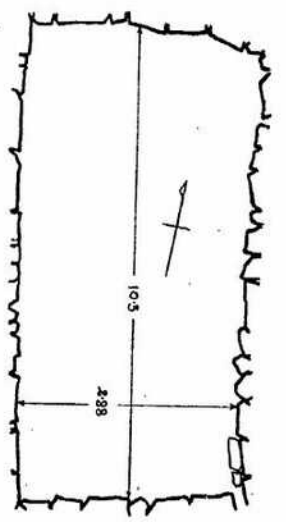
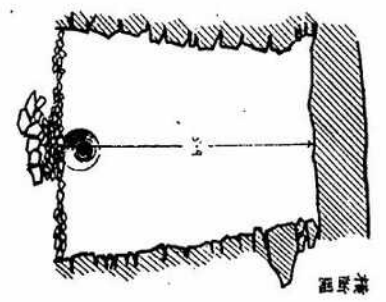


第五四圖 星州星山洞第六號古墳石室内部(西北隅)



第五五圖 同上(東北隅)

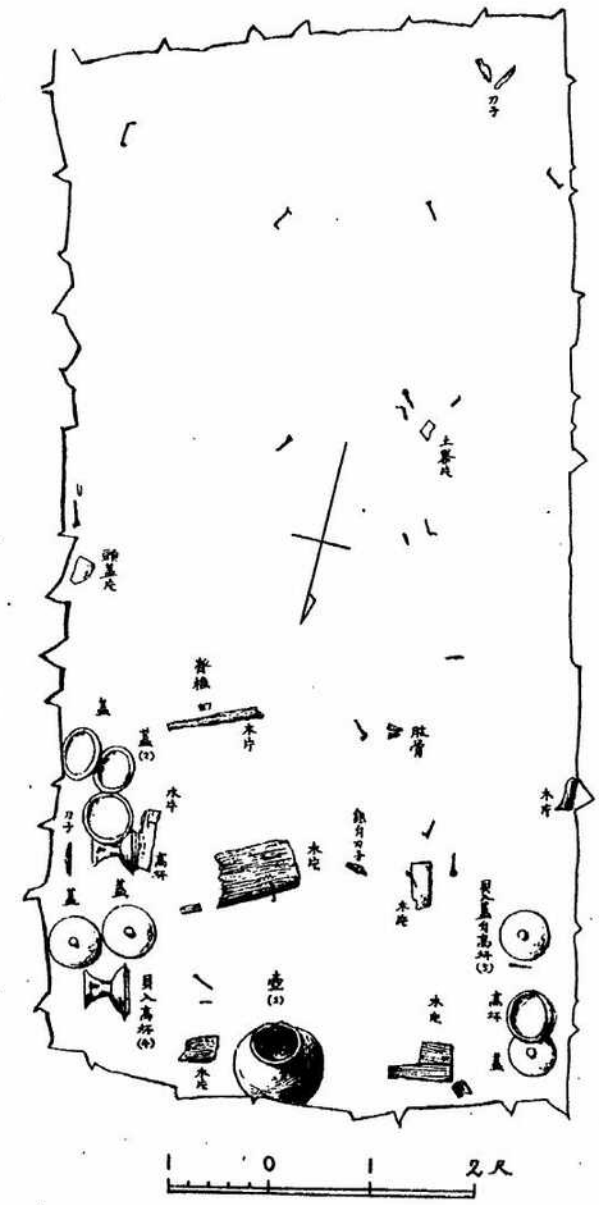
慶尚北道星州郡
 星山洞第六號古墳石室
 大正五年九月發掘調査
 地學部資料部



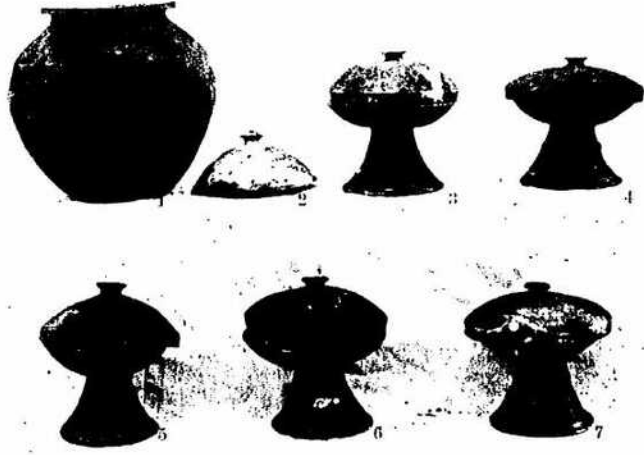
第五六圖 星山洞第六號古墳石室實測圖

星山洞第六號古墳石室遺物配置圖

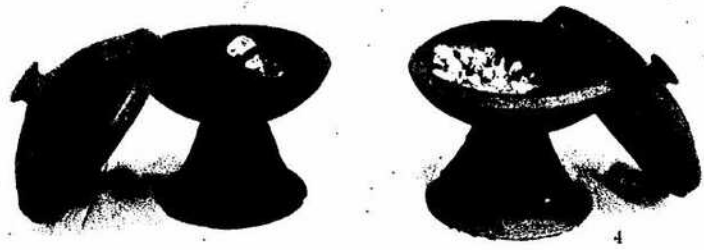
大正七年十月發掘調査
法田洋原實測製圖



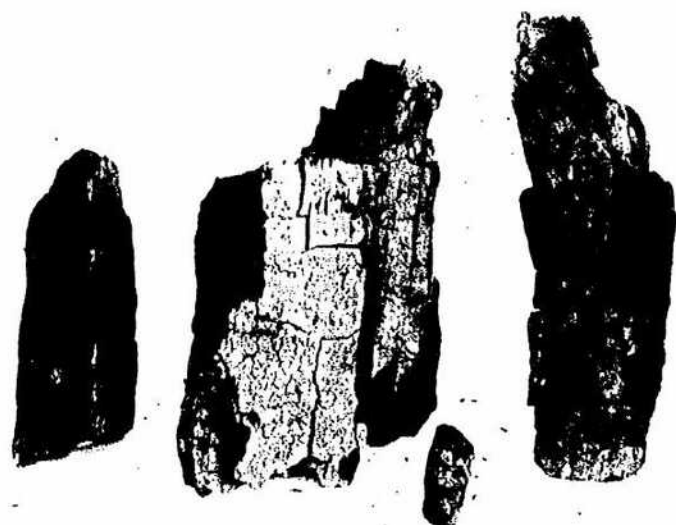
第五七圖 星山洞第六號古墳石室遺物配置圖



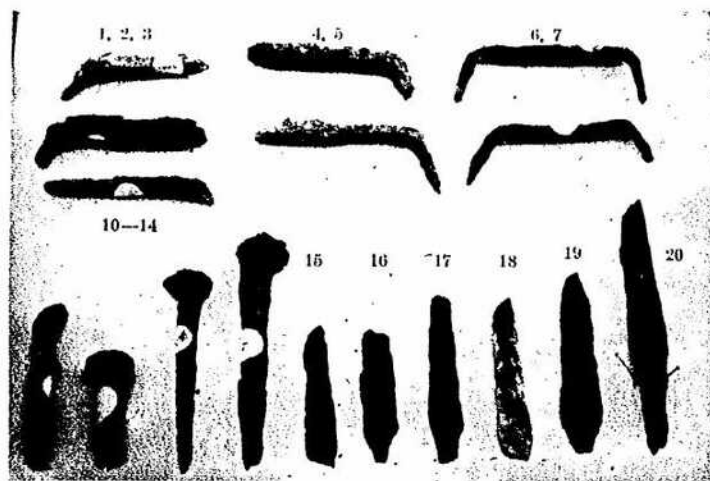
第五八圖 星山洞第六號古墳發見土器



第五九圖 同上具入高坏(重出)

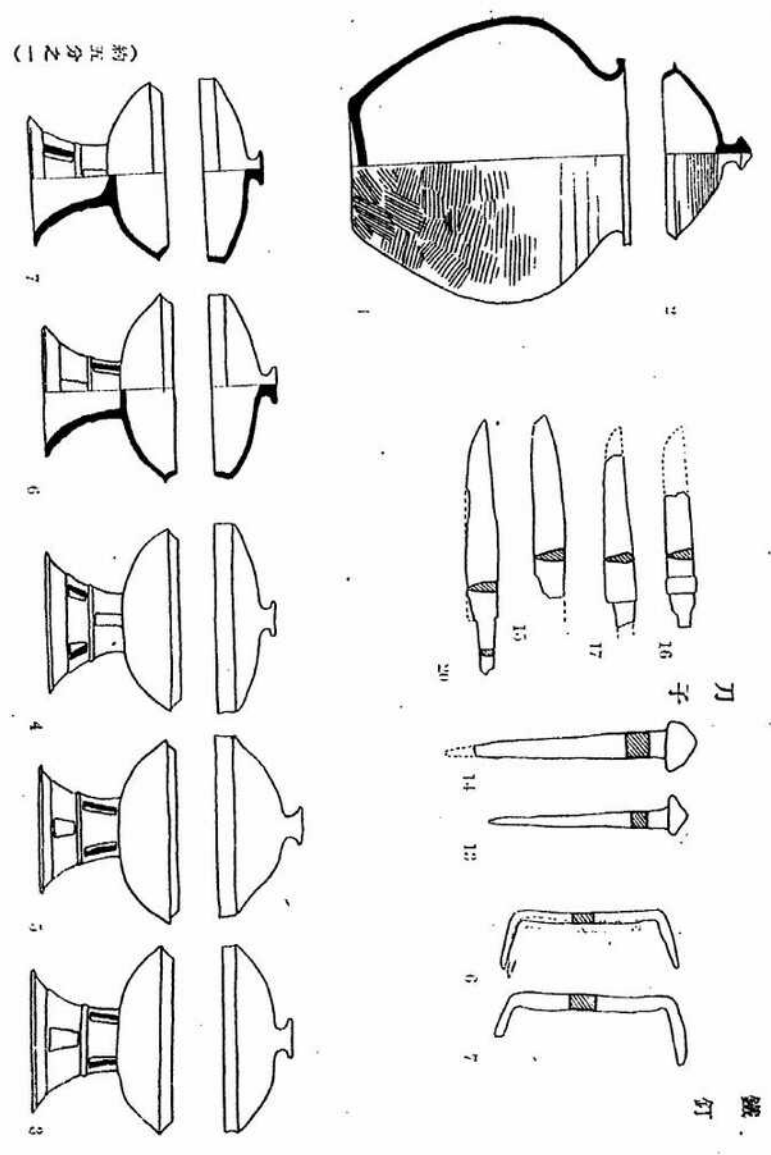


第六〇圖 星山洞第六號古墳發見木片



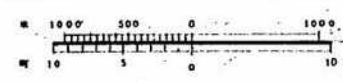
第六一圖 同上發見鐵器

第六二圖 星山洞第六號古墳發見土器及鐵器





第六三圖 慶尚北道高靈郡高靈附近地圖(陸地測量部五萬分之一地形圖分載)



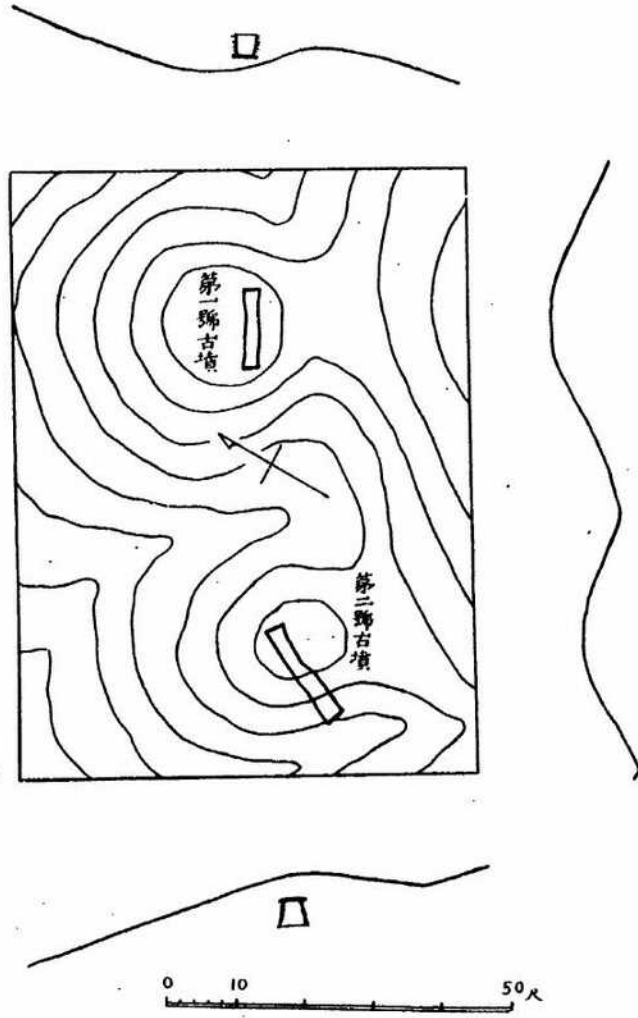


第六四圖 高靈主山古墳群遠望



第六五圖 高靈池山洞第一號古墳石室

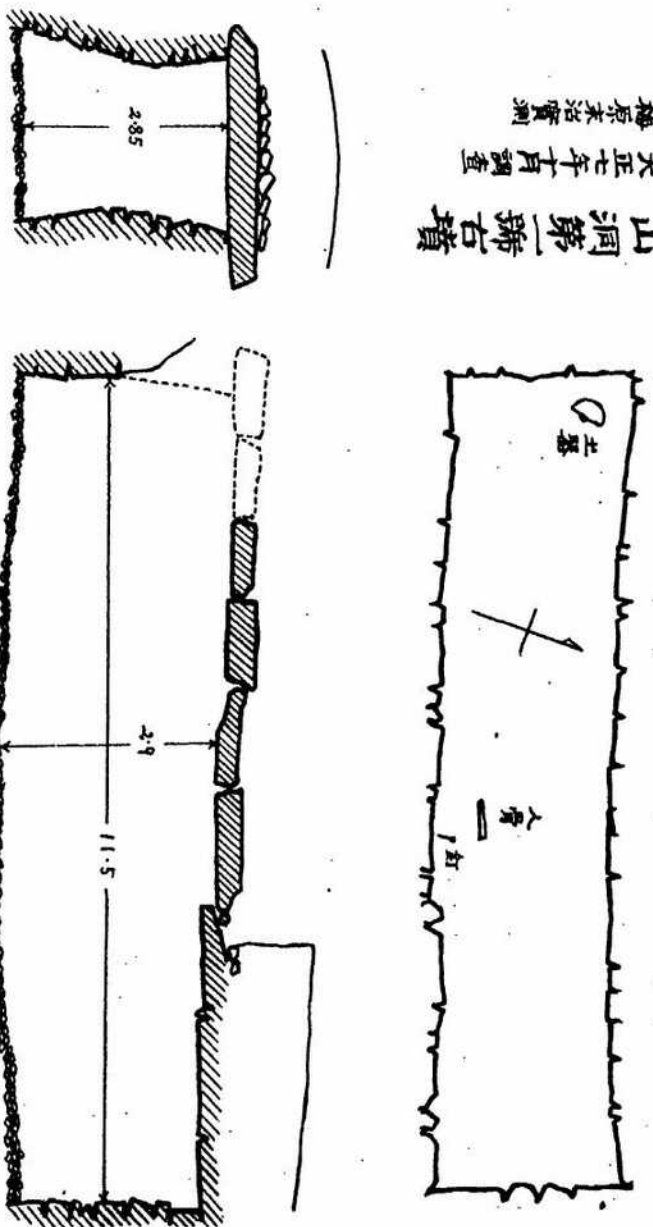
第六六圖 池山洞第一號及第二號古墳略測圖



慶尚北道高靈郡池山洞第一號及第二號古墳 大正七年十月調査

圖版第四二

池山洞第一號古墳
大正七年十月調査
榎原末治實測



第六七圖 高靈池山洞第一號古墳石室實測圖



第六八圖 高靈池山洞第二號古墳石室

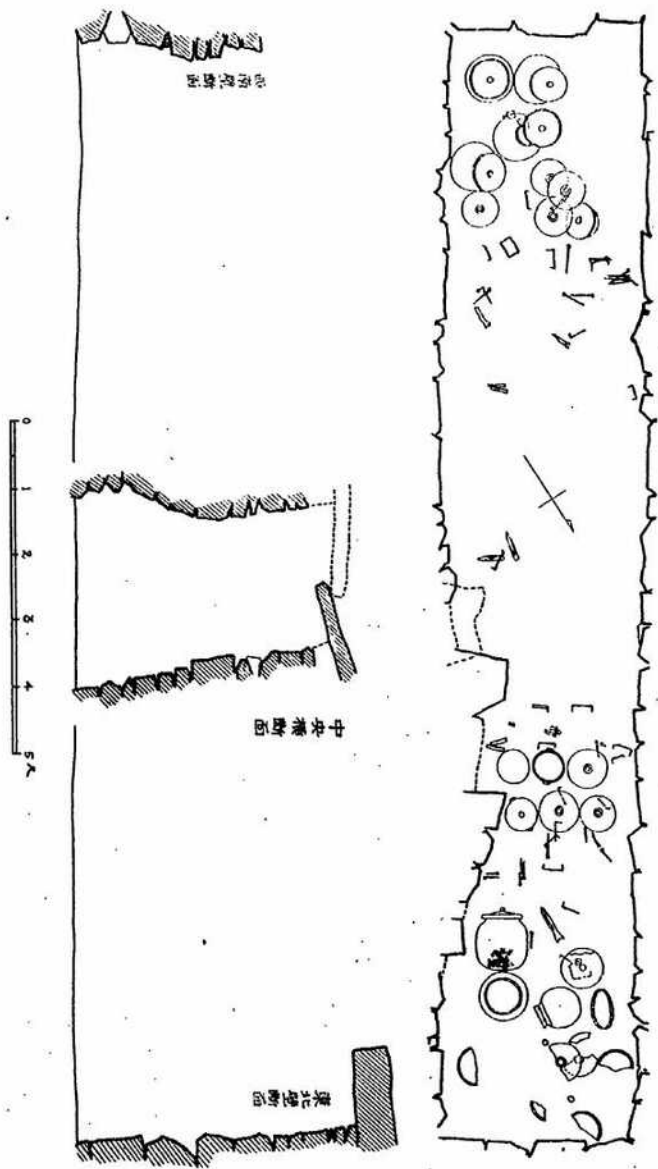
(東北壁ヲ寫ス)



第六九圖 同上石室西南部土器埋没狀態

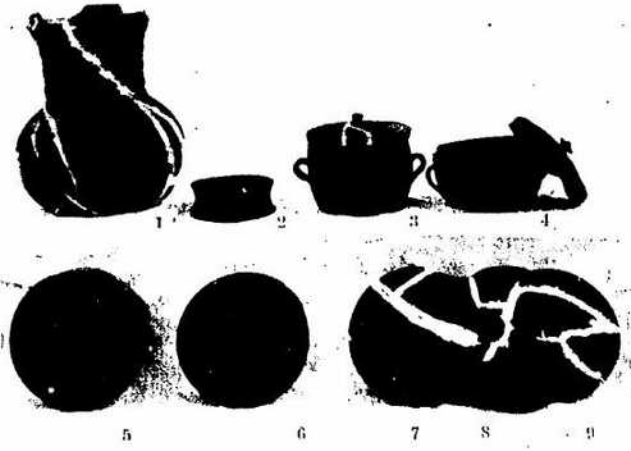
高靈山池洞第二號寶石墳古測圖 第七〇圖

平面圖

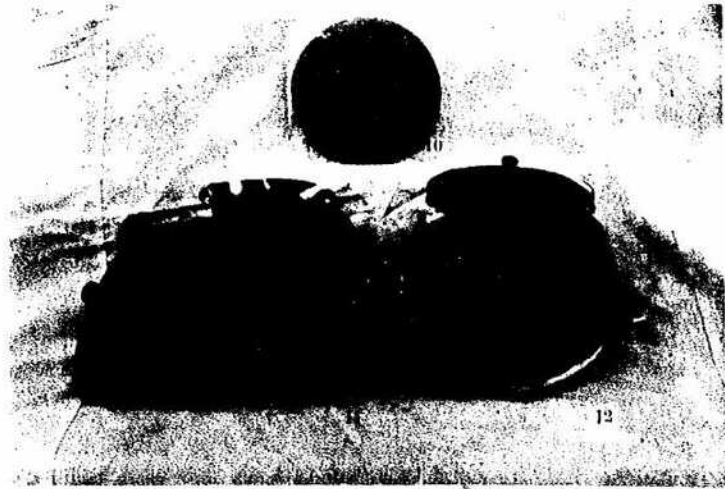


高靈山池洞第二號寶石墳古測圖
 七正午十月發掘調查繪原狀圖

圖版第四五

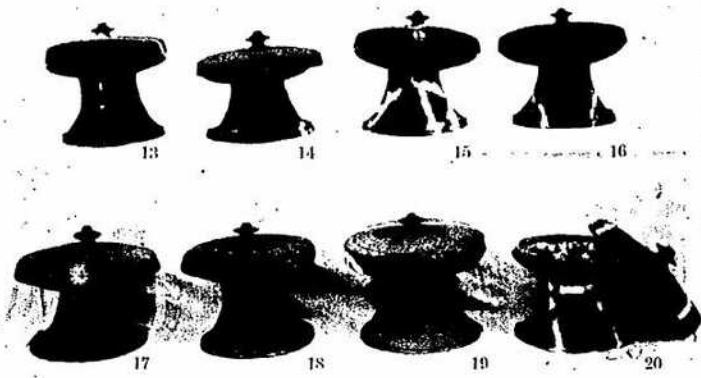


第七一圖 高靈池山洞第二號古墳發見土器



第七二圖 同上

圖版第四七



器土見發墳古號二第洞山池靈高 圖三七第

(由左)部一上同圖四七第

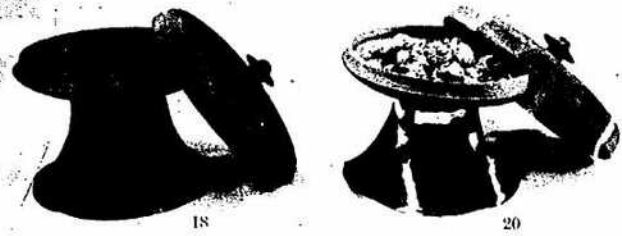
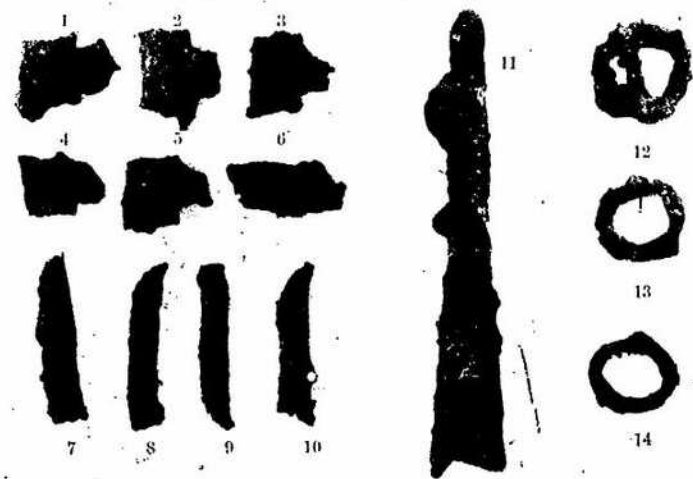


圖
版
第
四
八

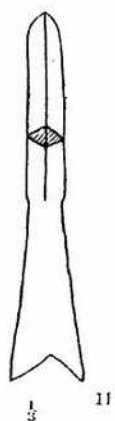
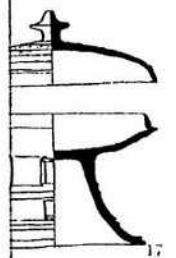
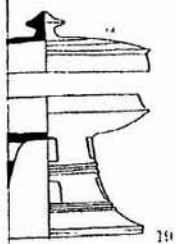


釘鐵見發墳號二第洞山池靈高 圖五七第

器鐵他其身槍上 同 圖六七第

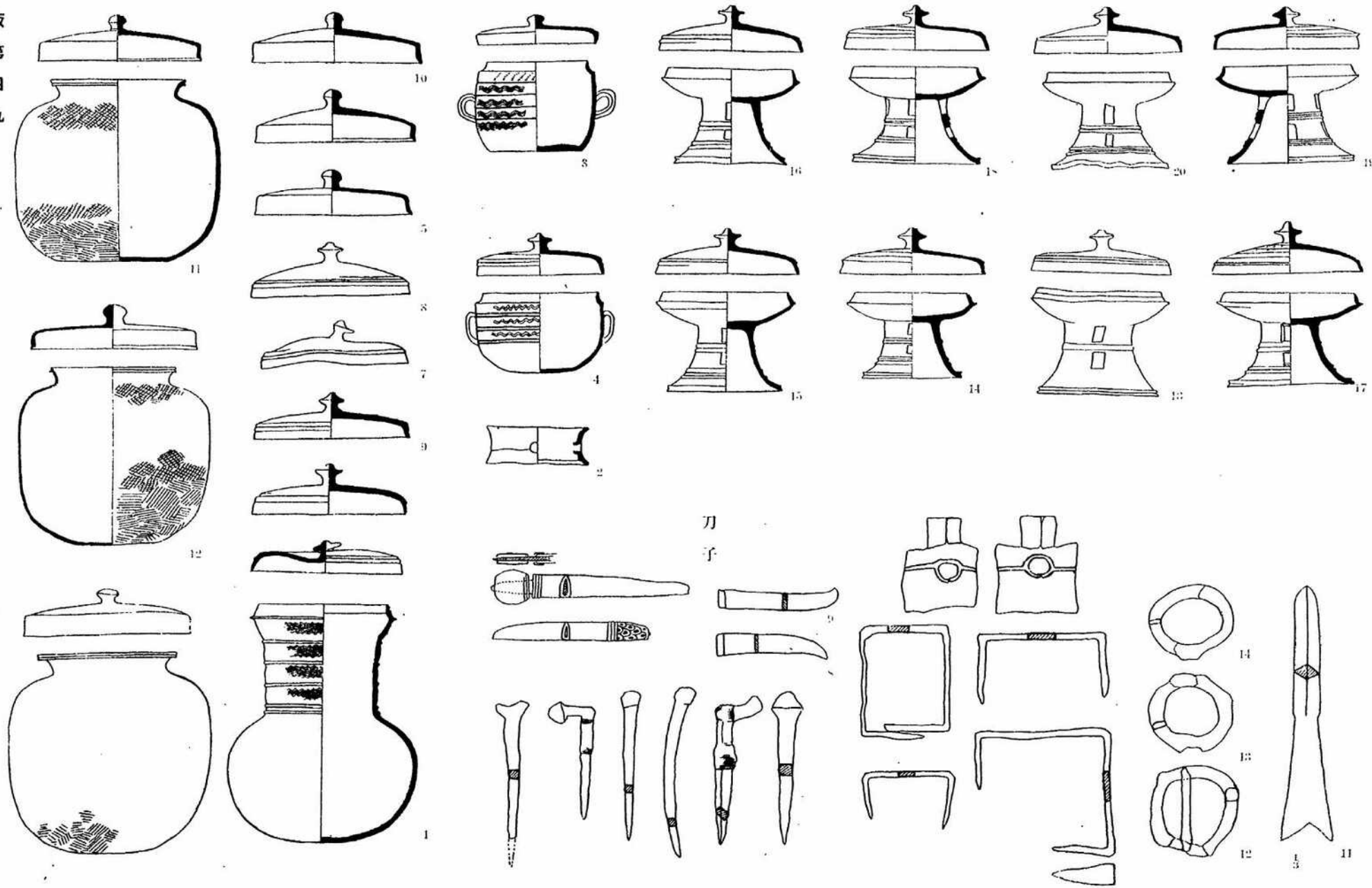


第七七圖 高靈池山洞第二號古墳發見土器及鐵器圖



(土器類 第六分之二)

圖版第四九



(以上各器均按原大繪)

裏面白紙



第七八圖

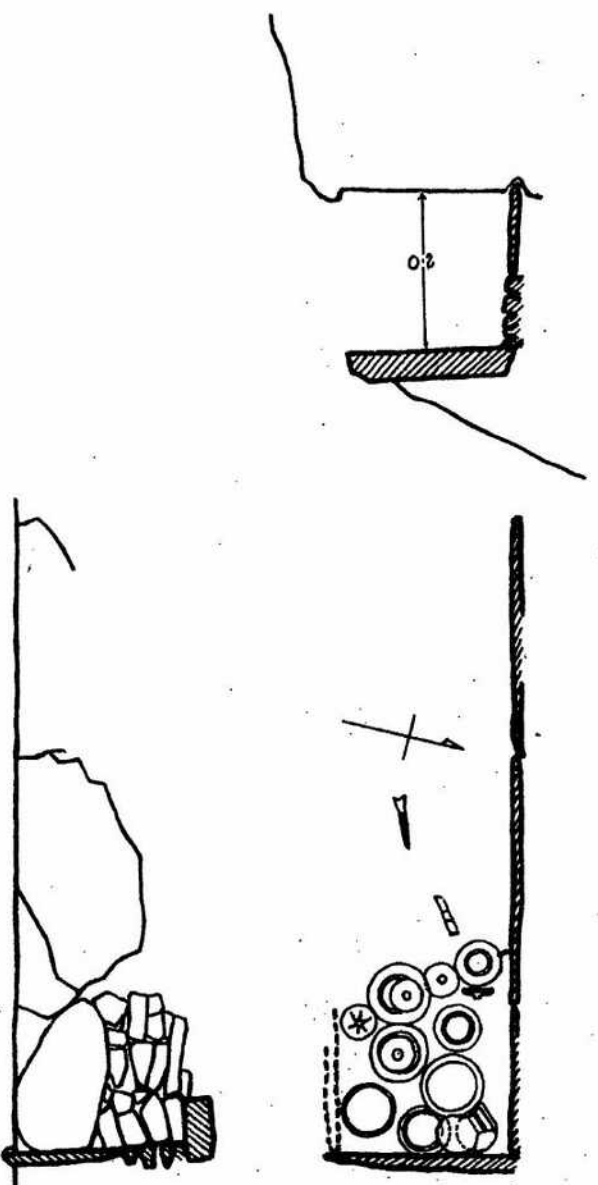
高靈池山洞第三號古墳石室



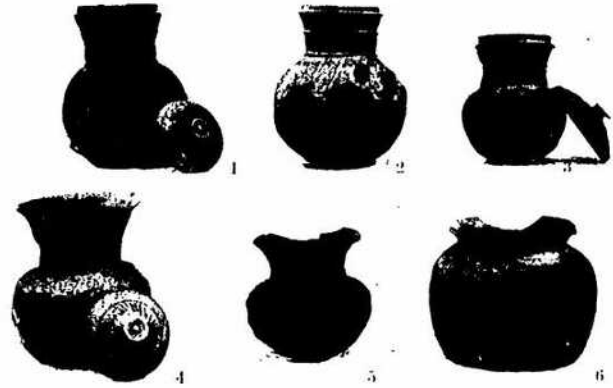
第七九圖

同

上石室內遺物



第八〇圖 池山洞第三號古墳石室實測圖



第八一圖 高靈池山洞第三號古墳發見土器及鐵器

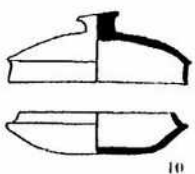


第八二圖 (同上第一號及第二號古墳發見土器)

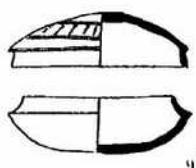


第八三圖

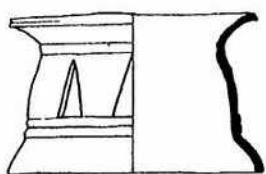
高靈池山洞第三號古墳發見土器圖 (約五分之一)



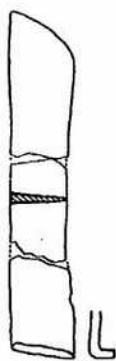
10



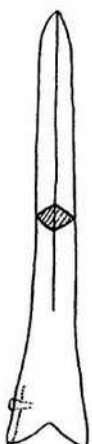
9



8

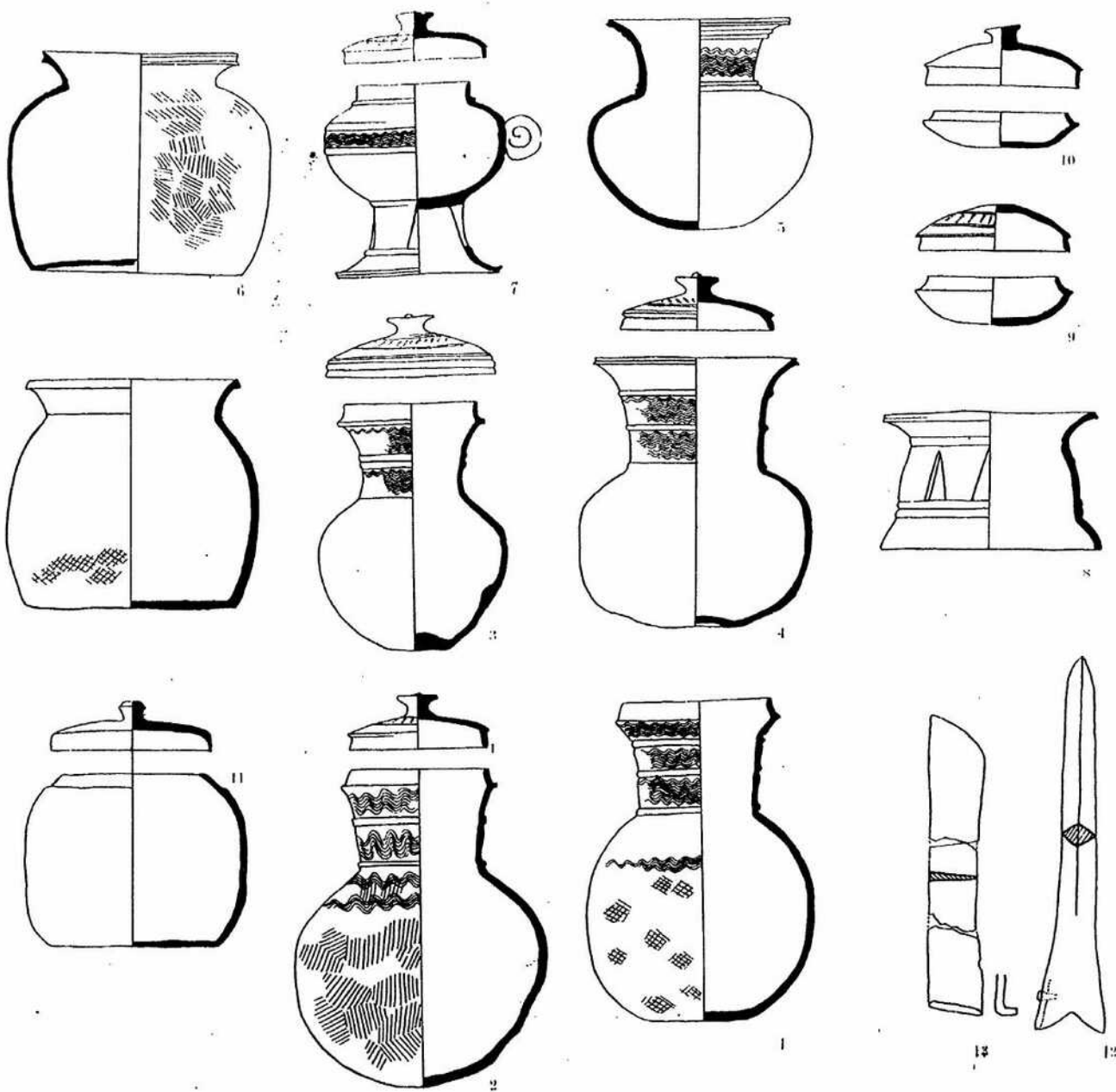


13



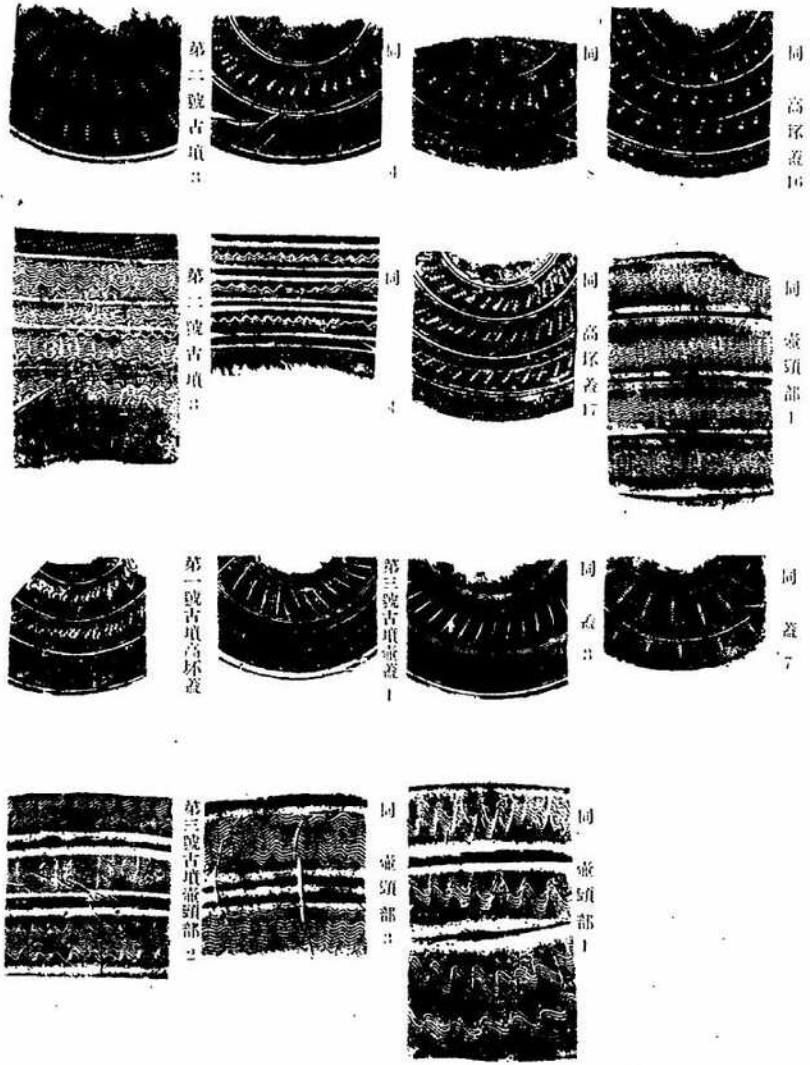
12

圖版第五三



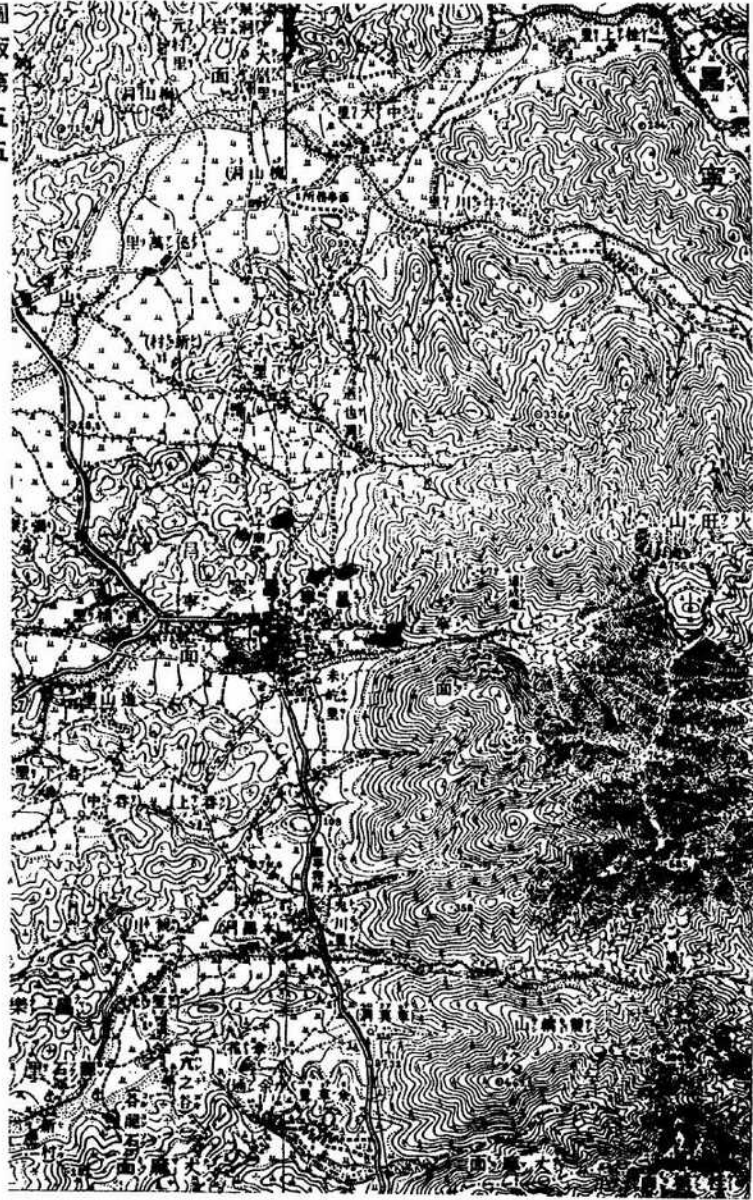
第八三圖 高靈池山洞第三號古墳發見土器圖 (約五分之二)

裏面白紙

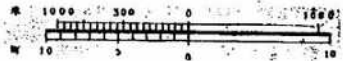


第八三圖 高靈池山洞古墳發見土器紋樣拓本

圖版第五



第八四圖 慶尚南道昌寧郡昌寧附近地圖(陸地測量部五萬分之一地形圖分裁)





第八五圖 昌寧遊擊圖 (小川軍管區圖)



第八六圖 昌寧西塔ヨリ見タル牧馬山城



第八七圖 昌寧牧馬山城遠望



第八八圖 校洞古墳群遠望

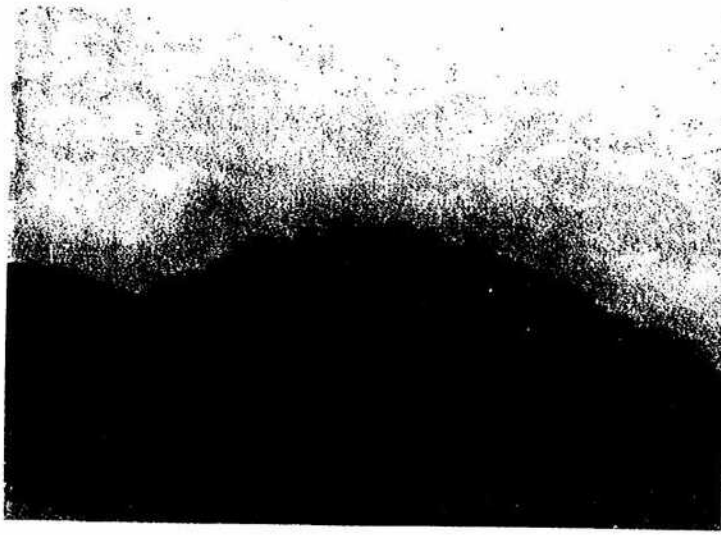


第八九圖 同古墳群一部



第九〇圖 校洞古墳群遠望

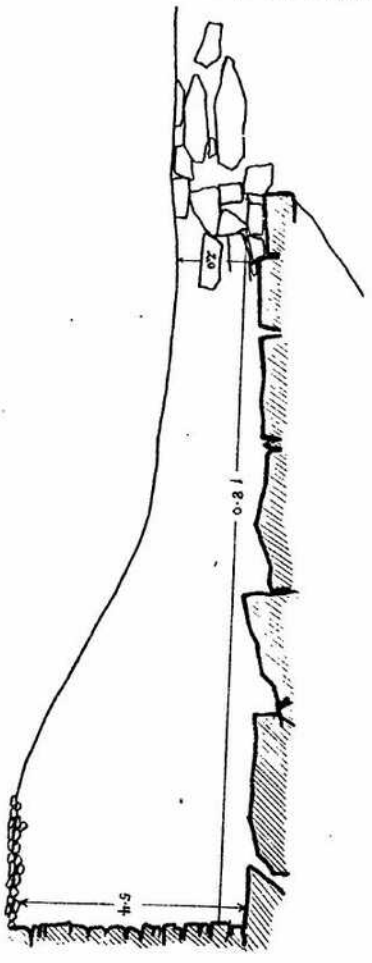
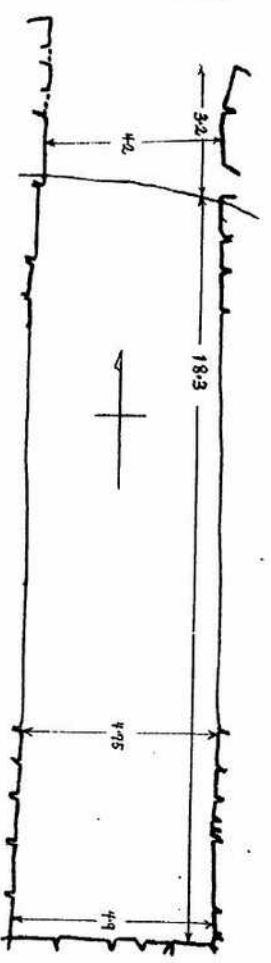
圖版第五九



第九一圖 校洞第廿一號古墳



第九二圖 同上附近群集古墳



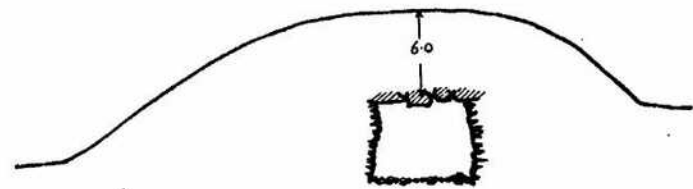
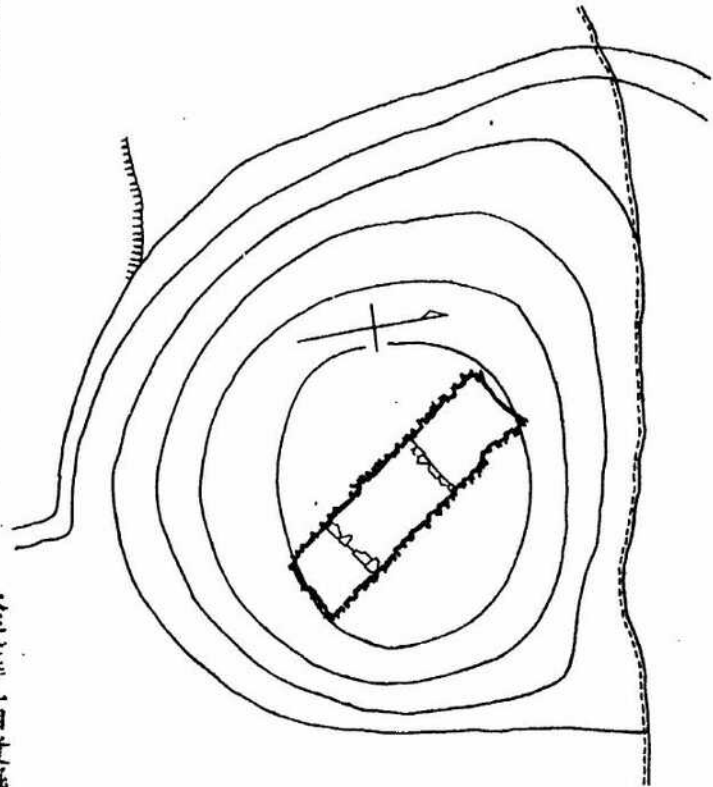
昌寧郡校洞第三號古墳 大正七年十月測量 梅原末次實測

第九三圖 昌寧校洞第二十一號古墳石室略測圖



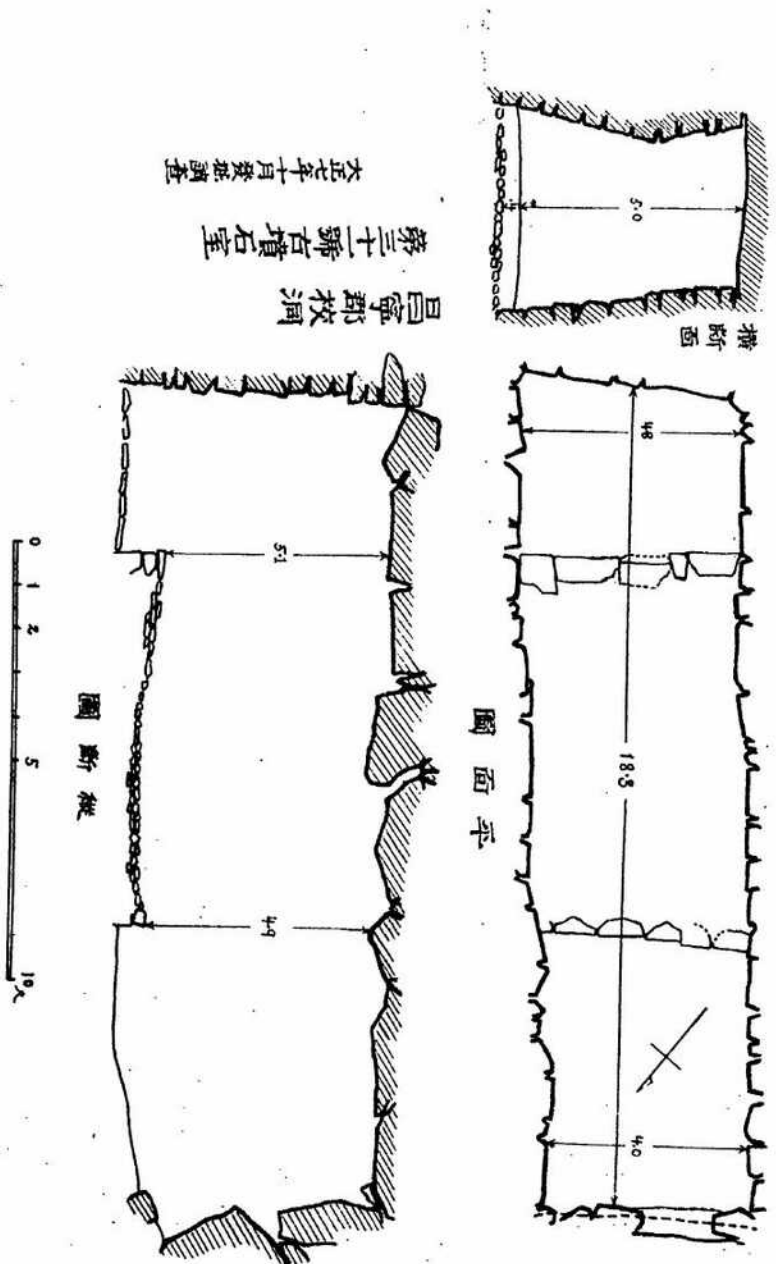
慶尚南道昌寧郡校洞第三十一號古墳

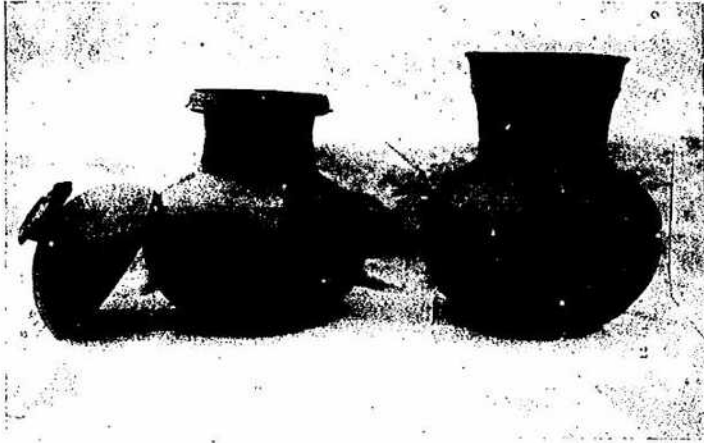
大正七年十月發掘調査
梅原末治實測



第九四圖 昌寧校洞第三十一號古墳實測圖

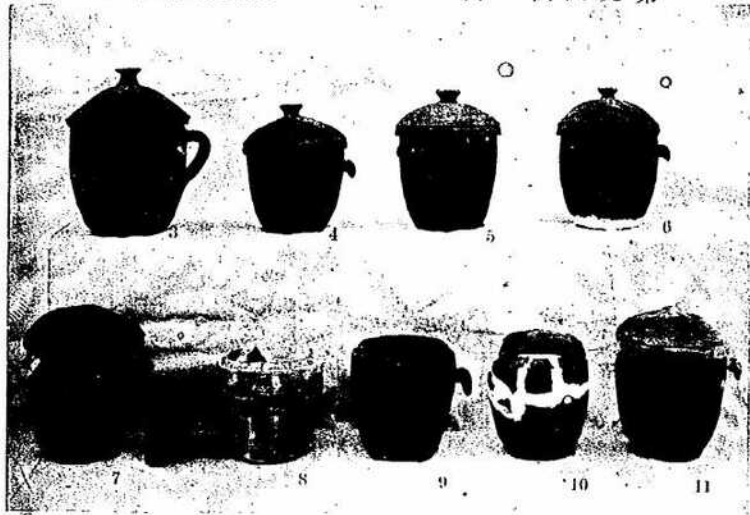
第九五圖 昌寧校洞第三十一號古墳石室實測圖



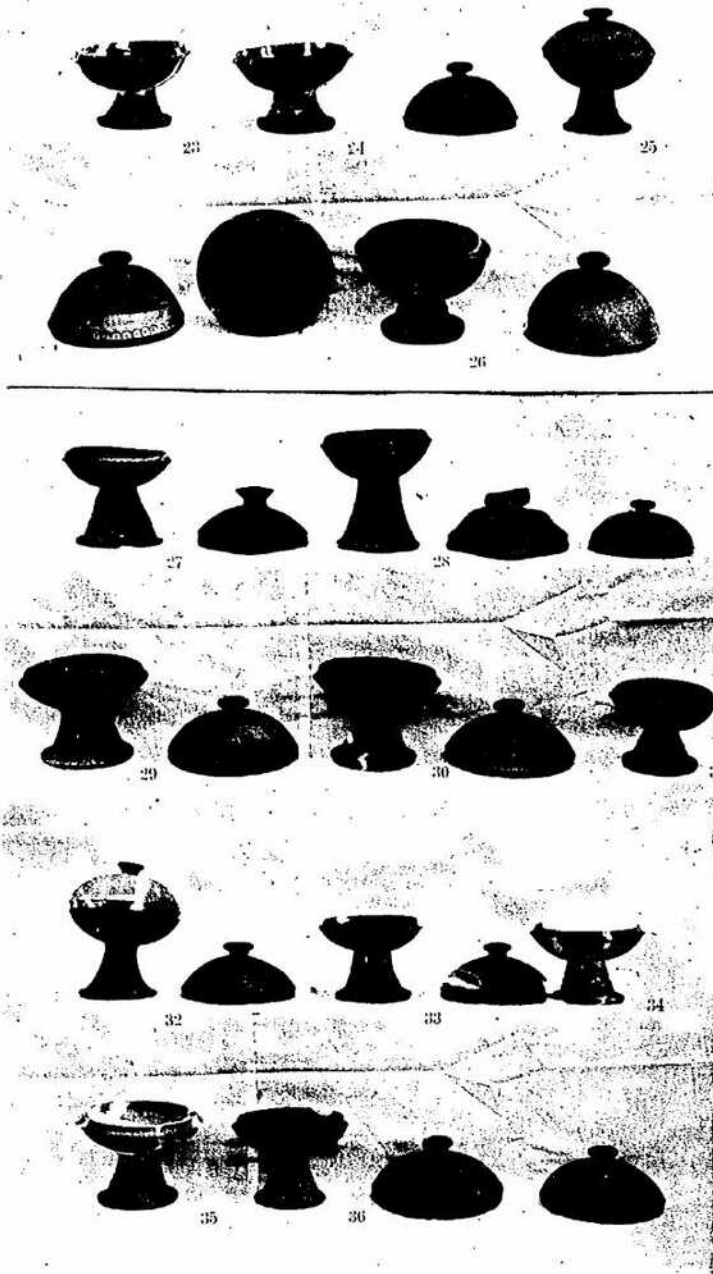


(一) 器土見發墳古號一卅第洞校寧昌 圖七九第

(二) 器土見發上 同 圖八九第

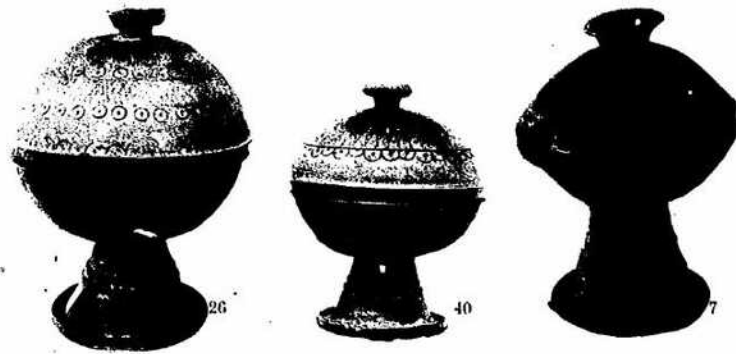
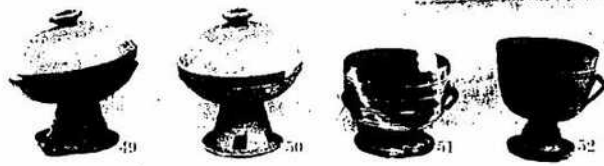
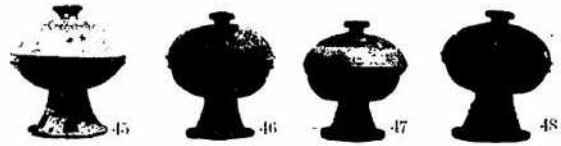
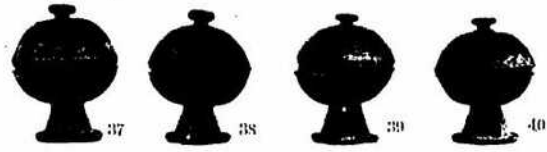






第一〇〇圖 昌寧校洞第卅一號古墳發見土器 其四

圖版第六七



第一〇一圖 昌寧校洞第卅一號古墳發見土器 其五

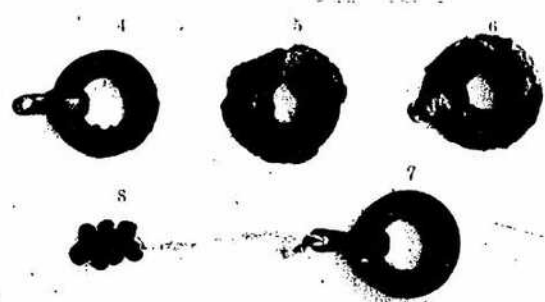
第一〇一圖 同上高杯(重出)

圖版第六八



第一〇二圖 校洞第卅一號墳發見管玉及金製耳飾

(實大)



第一〇三圖 全上環及小玉

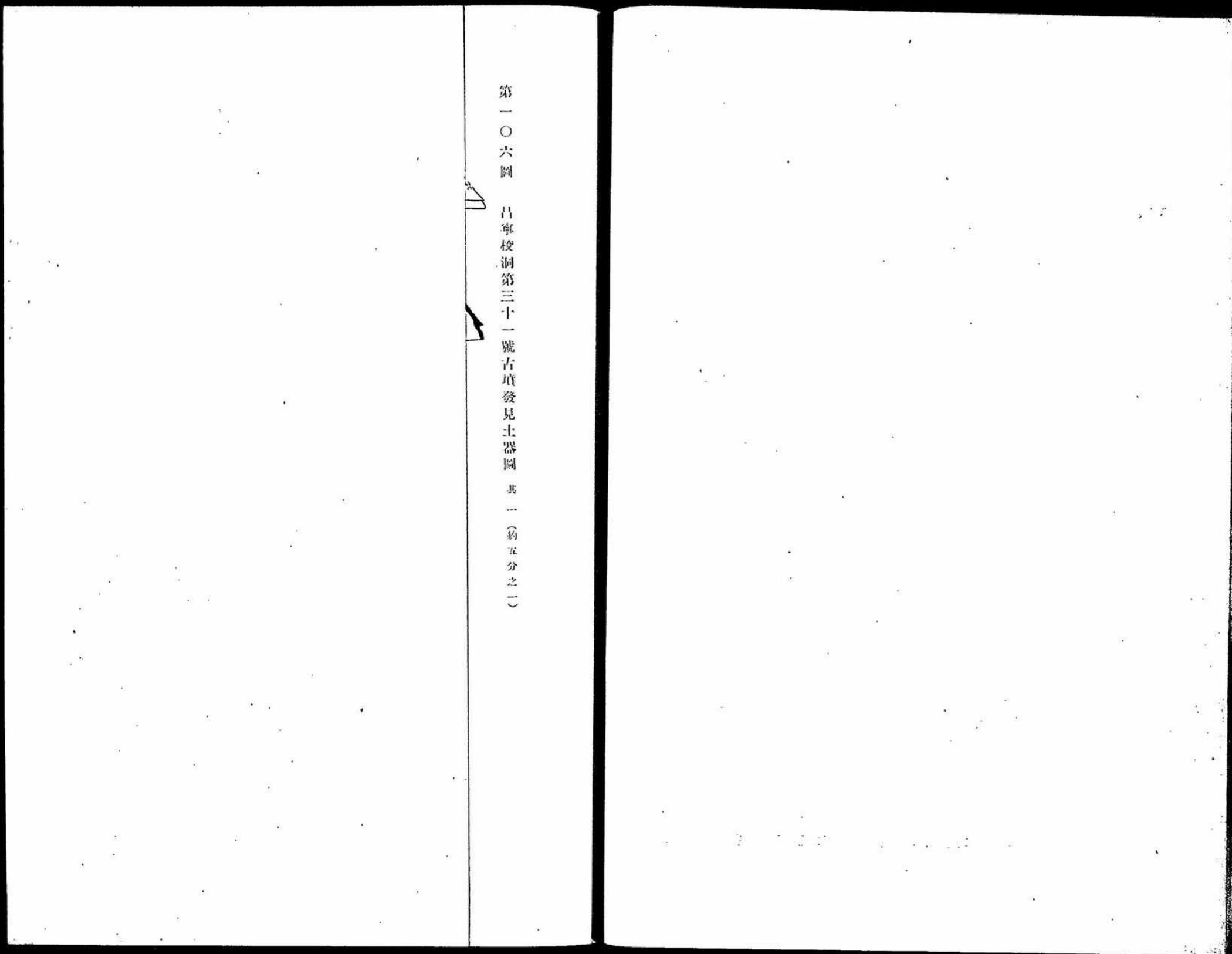


第一〇五圖 同上發見鐵器



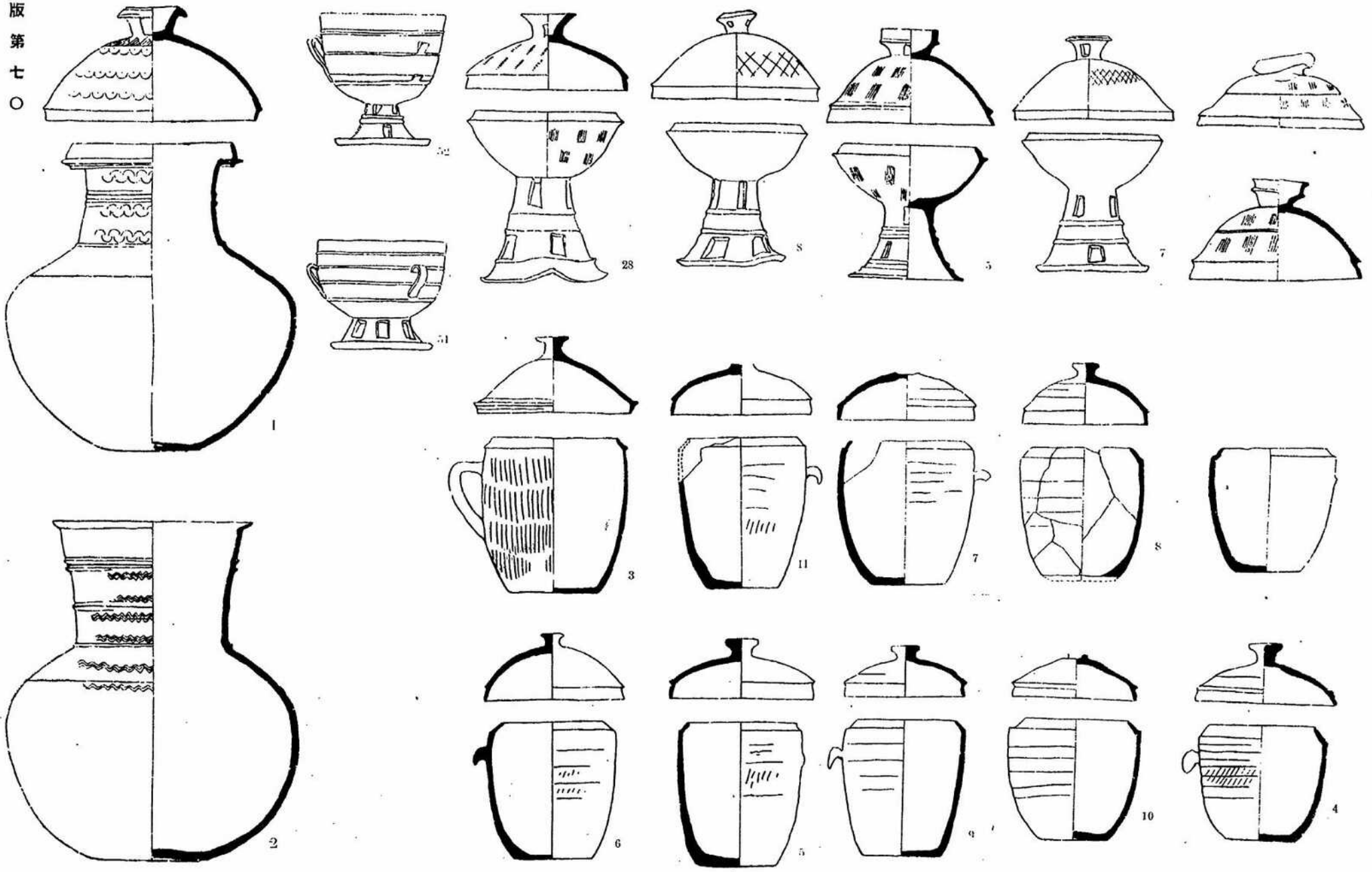
第一〇四圖 校洞第卅一號古墳發見鐵片

第一〇六圖 昌寧校洞第三十一號古墳發見土器圖 其一（約五分之一）

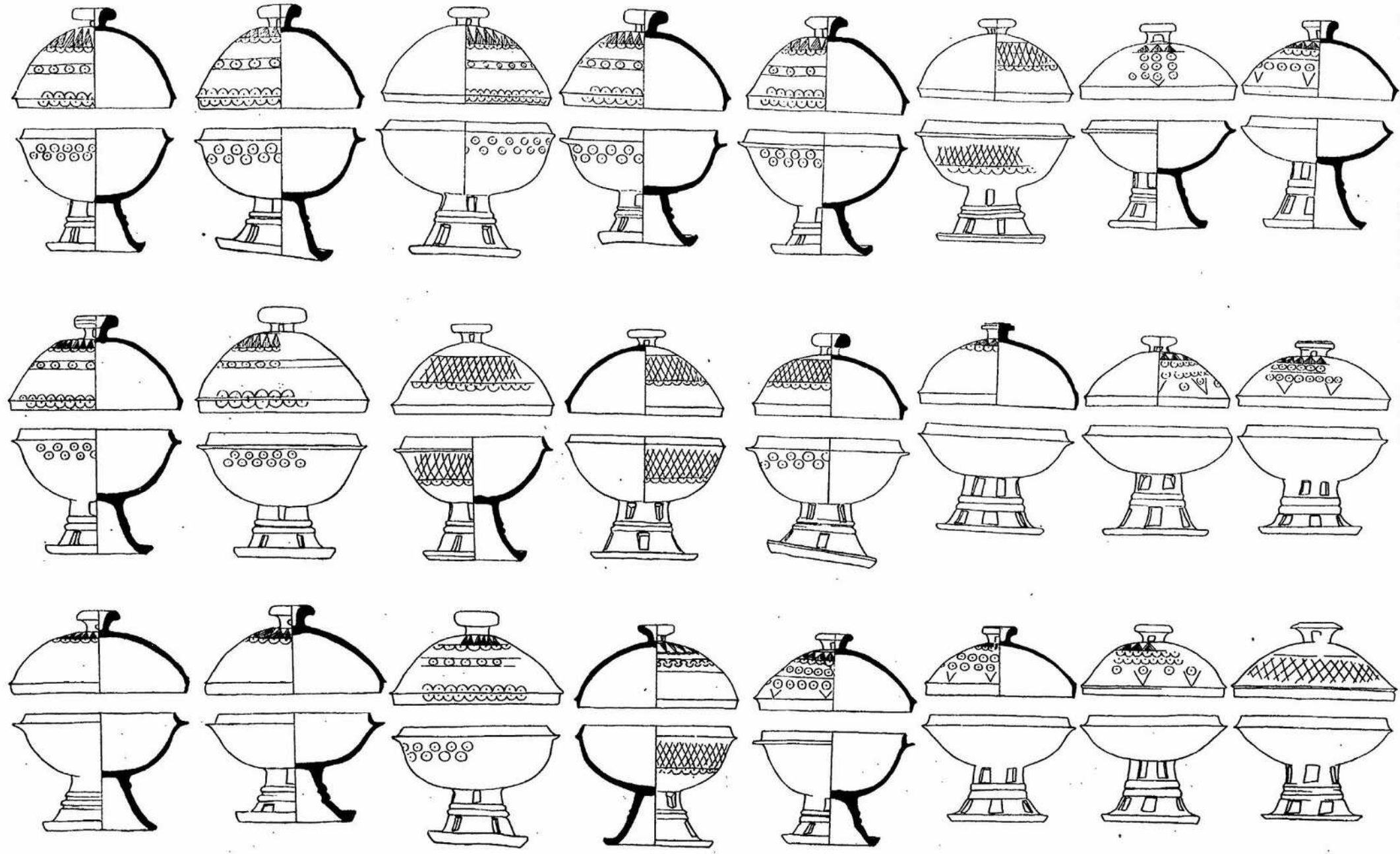


第一〇六圖 昌寧校洞第三十一號古墳發見土器圖 其一 (約五分之一)

圖版第七〇



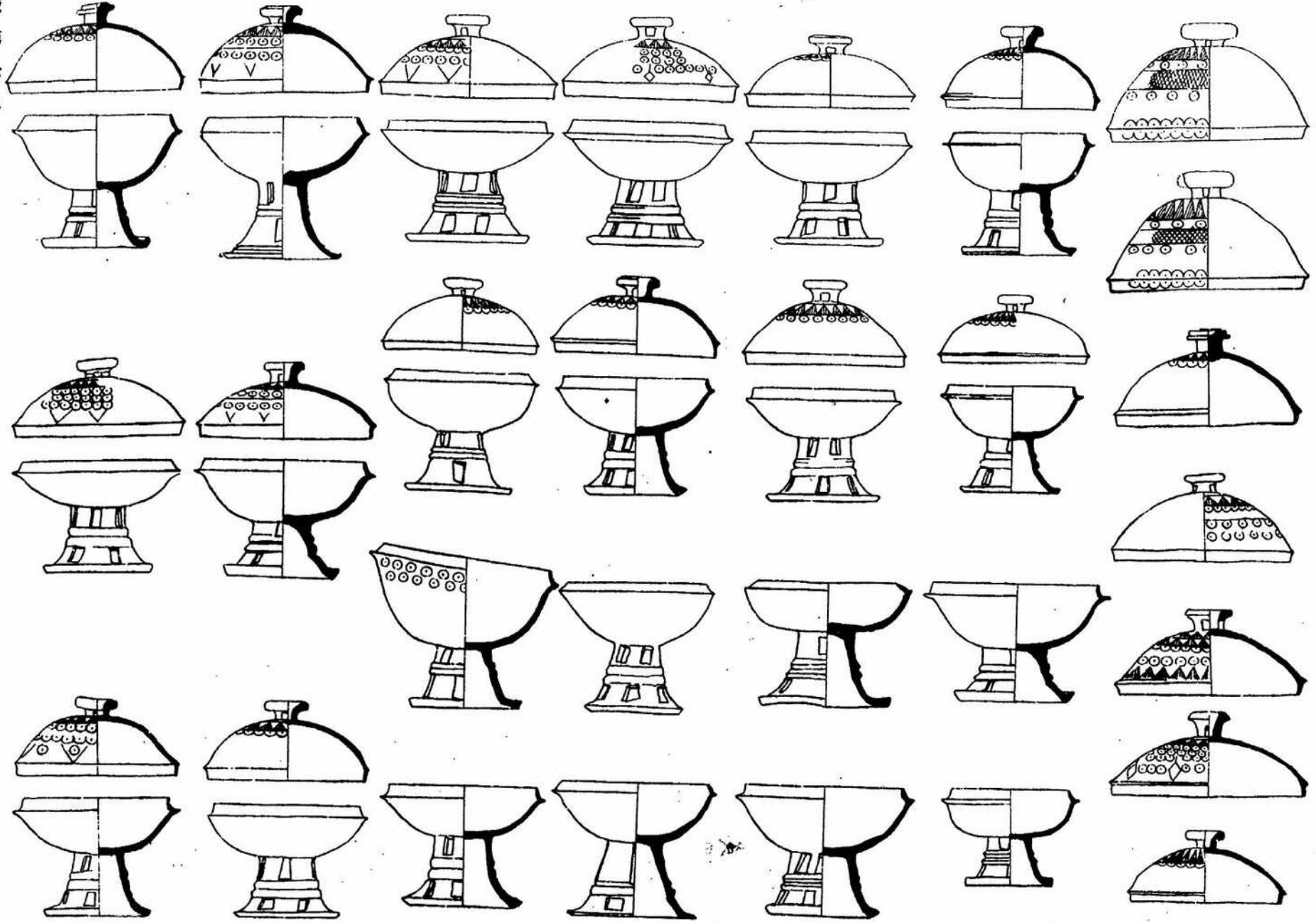
裏面白紙



圖版第七一

裏面白紙

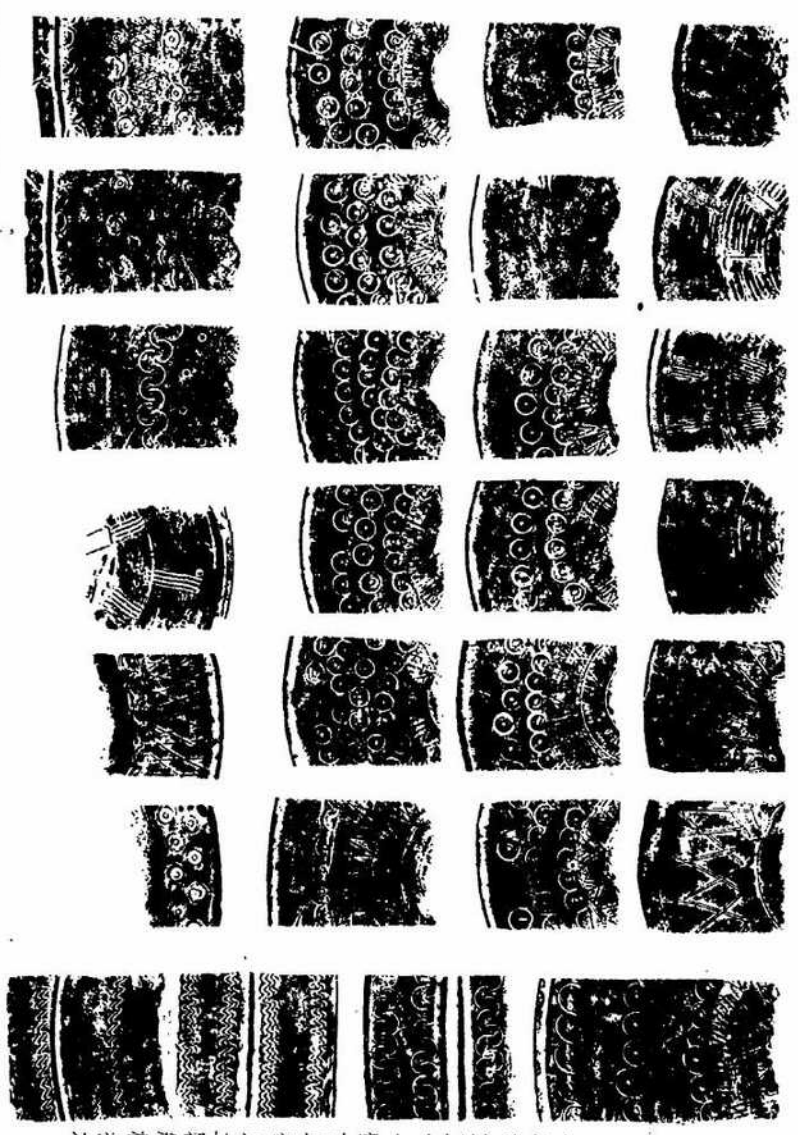
第一〇八圖 昌寧校洞第三十一號古墳發見土器圖 其三 (約五分之一)



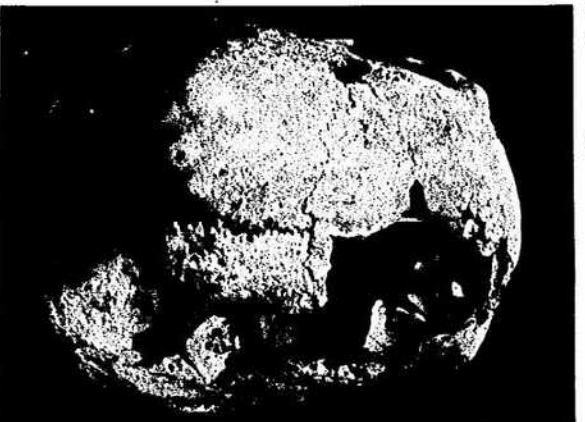
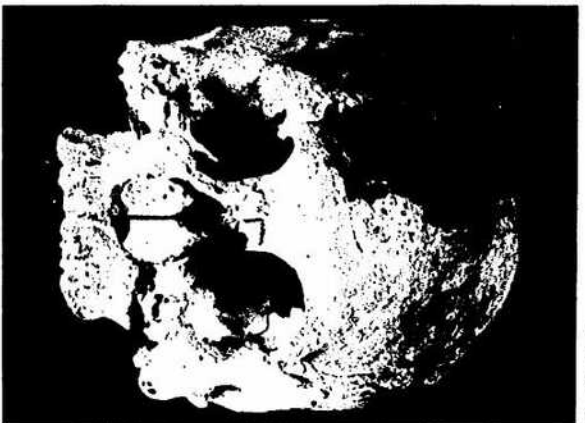
圖版第七二

裏面白紙

圖
版
第
七
三



第一〇九圖 昌寧校洞第三十一號古墳發見土器紋様拓本



骨頭見發室石小一第處附墳古號二第洞山星 圖〇一一第

圖版第七四

型面真

型面真

原
田
委
員
報
告

目次

慶尙北道慶州郡內東面普門里古墳及慶山郡清道郡金泉郡
尙州郡並慶尙南道梁山郡東萊郡諸遺蹟調查報告書

一 慶尙北道慶州郡

- 一、內東面普門里古墳發掘調査 一頁
- 二、內東面四天王寺址一部調査 八

二 同 慶山郡

- 一、押梁面大洞造永洞古墳群 九
- 二、山城址 九

三 同 清道郡

- 一、雲門面新院洞雲門寺 九
- 二、錦川面頂谷洞石佛并二石塔 二
- 三、錦川面長淵洞石塔并二幢竿支柱 三
- 四、梅田面龍山洞佛靈寺埵塔殘缺 三

四 同 金泉郡

- 一、開寧面西部洞猿陵 三

二、橋 巖	二二
三、金泉驛附近古墳群	二三
五 同 尙州郡		
一、尙州面南町里石塔殘缺	二三
二、石塔蓮臺	二三
三、沙伐面達川里沙伐王陵	一三
四、石 塔	一四
慶尚州 道梁山郡		
一、通度寺	一四
二、吏道碑	一五
三、梁山北山城址	一五
七 同 東萊郡		
一、梵魚寺	一六
二、金井山城	一六

寫真版目次

第一	慶州内東面普門里古墳群 <small>(四方ヨリ撮影。中央ノ墳墓ハ發掘セルモノ)</small>	一
第二	同 普門里古墳發掘前ノ形状 <small>(東面)</small>	一
第三	同 普門里古墳「ケールン」頂部	二
第四	同 普門里古墳「ケールン」現出ノ狀	二
第五	同 普門里古墳土器鐵器類現出ノ狀	三
第六	同 普門里古墳内寸沙ヲ混シタル土塊	三
第七	同 普門里古墳土器鐵器類配列狀態 <small>(其一)</small>	四
第八	同 上 <small>(其二)</small>	五
第九	同 上 <small>(其三)</small>	五
第一〇	普門里古墳發見銅鏡	六
第一	同 上 蓋	六
第二	普門里古墳發見長頸壺 <small>(其一)</small>	七
第三	同 上 <small>(其二)</small>	七
第四	普門里古墳發見臺附長頸壺	八
第五	普門里古墳發見壺類 <small>(其一)</small>	八
第六	同 上 <small>(其二)</small>	九



第一七	普門里古墳發見陶器蓋	九
第一八	普門里古墳發見金張銅金具及金銀張銅金具	一〇
第一九	普門里古墳發見金具類殘缺	一〇
第二〇	普門里古墳發見鐵製覆輪殘缺	一一
第二一	同 發見鐵製鎗殘缺	一一
第二二	同 發見金製耳飾	一一
第二三	同 發見銀釧及金張銅釧	一二
第二四	同 發見勾玉及指輪	一二
第二五	同 發見玻璃玉及管玉	一三
第二六	同 發見金冠環珞附勾玉	一三
第二七	同 發見銀製帶金具	一四
第二八	同 發見鐵槍身殘缺	一四
第二九	普門里古墳發見鐵器殘缺	一五
第三〇	慶州四天王寺址(南方ヨリノ全景)	一五
第三一	同 寺址ノ一部(輕鐵敷設ノ個所ヲ東方ヨリ撮影)	一六
第三二	慶州四天王寺址龜趺(東方ノモノ)	一六
第三三	同 龜趺(西方ノモノ)	一七
第三四	慶州四天王寺址ノ一部、輕鐵敷設ノ個所發掘中發見セル礎石	一八

第三五	慶山郡押梁面大洞古墳群ニ續ケル丘陵上ニ古墳點在ノ狀	一八
第三六	慶山郡押梁面大洞古墳群	一九
第三七	清道郡雲門面雲門寺石塔(東方)	一九
第三八	同 寺石塔(西方)	二〇
第三九	同 寺石燈	二〇
第四〇	同 寺圓應國師碑	二一
第四一	同 錦川面珀谷洞石佛	二一
第四二	同 上	二二
第四三	同 錦川面珀谷洞石塔	二三
第四四	清道郡梅田面長淵洞長淵寺址石塔全景	二三
第四五	清道郡梅田面長淵寺址石塔(西)	二四
第四六	同 石塔(東)	二四
第四七	同 寺幟竿支柱	二五
第四八	同 梅田面龍山洞佛靈寺千佛塔	二五
第四九	同 佛靈寺千佛塔(埵塔)ノ一部	二六
第五〇	同 上	二六
第五一	金泉郡開寧面傳禳陵	二七
第五二	同 面西部洞橋石(石塔)	二七

第五三	尙州郡尙州邑内石塔ノ一部(其一)	元
第五四	同 上(其二)	元
第五五	尙州邑内石塔	元
第五六	尙州邑内石塔閣ニ使用ノ蓮臺(西)	元
第五七	同 蓮臺(東)	元
第五八	梁山郡通度寺石塔	三
第五九	梁山郡通度寺什寶香爐	三
第六〇	同 寺什寶瓶	三
第六一	梁山郡下北面大安元年ノ碑	三
第六二	梁山邑東山城下邑ノ一部	三
第六三	東萊郡北面梵魚寺石塔	三
第六四	同 寺石燈	三

附圖目次

第一	慶州普門里古墳實測圖	圖版 壹
第二	同 上發掘品配置圖	貳
第三	同 四天王寺址一部實測圖	参
第四	清道郡錦川面珀谷洞石佛像見取圖	元
第五	同 郡梅田面長淵寺址幢竿支柱實測圖	亮
第六	尙州郡尙州邑内石塔ノ一部及石燈蓮臺實測圖	四
第七	梁山郡邑内面北山城址圖	四

慶尙北道慶州郡內東面普門里古墳及慶山郡清道郡金泉郡

尙州郡並慶尙南道梁山郡東萊郡諸遺蹟調查報告書

朝鮮總督府古蹟調査委員

原 田 淑 人

吾人ハ大正七年七月廿五日京城ヲ發シ先ヅ慶尙北道慶州郡ニ向ヒ廿六日ヨリ八月十六日マデ同地ニ滞在シ内東面普門里ナル新羅時代古墳ノ發掘ニ從事シ傍同郡諸遺蹟ヲ巡見シタリ滞在中最初三日間ハ黑板委員ト共同調査ニ從ヒタリ同月十七日慶州邑城出發ヨリ廿九日京城歸着ニ至ルマデ十三日間ヲ以テ慶尙北道ニ於テ慶山郡清道郡達城郡本部ニテハ達城遺址ヲ踏査セリ當時林樹鬱蒼洞窟困難ナリシヲ以テ他日精密ニ實測セシ上更ニ形査セントス故ニ本報告ニ省略セルコトトセリ金泉郡尙州郡慶尙南道ニ於テハ梁山郡東萊郡ノ諸遺蹟ヲ歴巡調査シタリ此ノ行慶州普門里ニ於ケル發掘ニ日程ノ大部ヲ費シタル爲メ他ノ諸郡調査ノ日數ヲ削減シタルト降雨出水ノ爲メ豫定ノ行動ヲ取ルコト能ハザリシハ吾人ノ頗遺憾トスルトコロナリ且慶州郡ハ他郡ニ於ケル新羅ノ遺蹟ノ標準ヲ得ンガ爲メ吾人ガ特ニソノ調査ヲ先ニシタル所以ニシテ慶州郡一般ノ調査ハ今西委員ノ從事セララル豫定ナリシヲ以テ吾人ハ單ニ普門里古墳ノ發掘ノミニ止メタリ。

慶尙北道

慶州郡

一 内東面普門里古墳發掘調査

慶州邑東一里明活山ノ西腹ヨリ山麓ニ亘リテ大小古墳群在セリ先年關野谷井委員ノ發掘セラレシ夫婦塚金銀塚塚ノ如キ此古墳群ニ屬セリ吾人ノ調査シタルモノハ西麓ノ一圓墳ニシテ(寫真第一號及第二號)前年黒板委員ガソノ封土ノ一部ヲ發掘シタルモノ即是ナリ此ノ墳墓ノ所謂積石塚ナルコトハ前ニ己ニ黒板委員ノ調査ニヨリテ確證セラレタルトコロナルヲ以テ吾人ハ所謂積石塚ノ構造全部ヲ精査セント欲シ封土ノ頂上ヲ崩壊シ更ニ積石ニ沿テ掘リ擴ゲ積石全部ヲ露出セシメタリ蓋新羅古墳ノ一特質タル此種積石塚ノ全構造ガ完全ニ調査セラレシコト少ケレバナリ。

吾人ハ七月廿八日ヨリ發掘ニ著手シ八月三日ニ至リテ始メテ積石ノ頂上ニ達セリ(寫真第三號)當初恰モ農家ノ田草耘除ノ忙ハシキコトト輕便鐵道工事ノアリシコトトニヨリテ人夫ヲ雇入ルコト困難ナリシ上發掘用具亦完全ナラズ加之古墳封土ノ堅固ニシテ發掘容易ナラザリシコトハ吾人ノ調査ヲシテ頗日時ヲ費サシメタリ同六日ニ至リテ積石全部ヲ露出スルコトヲ得タリ(寫真第四號)之ヨリ積石ノ取除ニ從事シタルガ八日ヨリ降雨四日ニ亘リ強風又時ニ加ハリタレバ一時發掘ヲ中止セリ十二日天晴ル即塚中ニ溜レル雨水ヲ汲出シ且積石ヲ除去スルニ勉メタリ十三日夕刻ニ及ビ雨水ノ汲出場トシタル部分ヨリ始メテ銅鏡並ニ陶器ヲ發見シタリ(寫真第五號)十四日ニ至リ陶器存在場所ト同一平面ヲ發掘精査セシニ馬具耳飾銅鏡玉類帶金具等ヲ得タリ十五日午後調査全部ヲ完了シ墳内ニ積石石材ヲ崩落シテ之ヲ填塞シタリ調査日數前後十有九日人夫延員五百二十名ヲ要シタリキ。

本墳ノ構造ヲ見ルニ先ヅ山麓緩斜面ノ平地ニ盡キントスル部分ニ徑三十六尺許ノ地域ヲ限リテ摺鉢狀ニ掘リ下テ深九尺ノ所ニ至リ縱二十二尺橫十七尺ノ底部ヲ形成シ割石ヲ一列ニ敷キツメ且礫石ヲ散布セリ蓋ソノ上ニ木棺ヲ安置シタルモノナルベシ而シテ之ヲ覆フニ礫石ヲ以テシ然ル後割石ヲ累積シテ高六尺ニ及ベリ此高ハ木棺ノ腐朽ニヨリテ積石ノ陷沒シタルノ痕跡歷然タルヲ以テ當初ハナホ少シク高カリシコト言ヲ待タズ積石ハ葉ヲ混入シタル粘土(寫真第六號)ヲ以テ凝結シ更ニ覆土ヲ以テ塞閉シタルナリ覆土ハ東西徑約八十餘尺南北徑約九十餘尺高平地ヨリ約二十五尺ニ及ベリ(附

圖第一號)

發掘ノ際積石ノ頂上東南ヨリ西北ニ向テ延長シ且ソノ中央同一方向ヲ指シテ細長ク陷沒セルヲ以テ略埋藏物ノ位置ヲ推想スルヲ得タリ積石ヲ除去シタルニ果シテ遺物亦東南ヨリ西北ニ向テ配列セルヲ見タリ東南端ニ銅鏡陶器鐵器馬具破片等布列シ西北ニ向テ純金製杏葉形裝具玉類銅鏡帶金具等存置セリ(寫真第七號第八號第九號)之ニヨリテ死屍ノ頭部ヲ東南ニ置キ足部ヲ西北ニ向ケタルヲ知ルベシ銅鏡陶器鐵器ハ棺外ノ供儀タルヤ疑ナク馬具亦棺外ニ置カレシモノノ如シ木棺ハ已ニ腐朽シテ殆ソノ痕跡ヲ留メズト雖長約八尺餘幅約四尺餘ナルコトヲ推測スルコトヲ得ベシ遺物ノ配列ハ附圖示ストコロノ如シ(附圖第二號)次ニ遺物各個ニ就イテ概記スベシ。

(イ)銅鏡 器身高二寸九分徑六寸腹部ニ二段ニ圍帶文ヲ繞ラシ縁邊ヨリ底部ニ至ル間ヲ三等分セリ底部ハ所謂絲底ヲ爲シ徑三寸三分ヲ算セリ蓋ハ把手ノ尖端ヨリ計リテ高三寸一分アリ亦器身ト同様ノ圍帶文ヲ三段ニ環ラセリ把手ハ寶珠形ヲ爲シ八花形ノ座ヲ鑄出シタリ(寫真第十號第十一號)八花形ノ座金ハ支那ニテハ六朝ヨリ隋唐ニ亘リテ流行シタルモノニシテ本古墳ノ年代ヲ推定スベキ一要件トシテ頗重要ナルモノナリ此器ハ發見ノ際蓋ヲ倒ニシテ器身ニ重ナリ居タリ蓋身共ニ缺損スト雖全形自ラ窺フコトヲ得ベシ。

(ロ)陶器 何レモ黝黑色ヲ呈セル堅緻ナル素燒陶器ニシテ中ニハ地釉ノ噴起セルモノアリ形狀ノ上ヨリ見レバ長頸壺三個短頸壺六個碗一個アリナホ他ニ蓋一個並ニ同殘缺一個存セリ長頸壺(3號)(寫真第十二號)ハ高九寸四分腹徑八寸アリ口緣部頸部腹部各圍帶文ヲ環繞シ且頸部ノ上方ニ波狀文ヲ廻ラセリ同(6號)(寫真第十三號)ハ高九寸一分腹徑七寸六分アリ亦圍帶文ヲ繞ラシ頸部中央ノ圍帶ヲ挾ミテ二段ニ波狀文ヲ施セリ同(14號)(寫真第十四號)ハ高八寸三分腹徑六寸三分五個ノ透穴ヲ有スル脚ヲ附セリ短頸壺ハ何レモ高四寸前後腹徑五寸内外ヲ示シ形狀ハ大同小異ナリ(寫真第十五號第十六號)碗ハ透穴アル短脚ヲ有シ高三寸四分口徑六寸二分アリ(寫真第十七號)蓋(7號)(寫真同上)ト思ハルモノハ

高二寸五分口徑五寸五分アリ何レノ器ニ屬スルヤ詳ニセズ蓋殘缺ハ瓢形ノ把手ヲ有シ且ソノ周圍ニ同心圓ト三角文トヲ交錯セル文様ヲ附セリ發掘ノ際陶器多クハ同一平面上ニ置カレシト雖ソノ或ルモノハ互ニ重積シテ存在シタリ思フニ此等容器ハ神前ニ供儀酒漿ヲ盛リタルモノニシテ或ハ之ヲ地ニ陳列シ或ハ机上ニ安置シタルナルベク機蓋朽敗シ机上ノ器物顛倒シテソノ或モノハ地上ノ器物ニ重疊殘存スルニ至リシナランカ。

(ハ)鐵釜(?) 陶器ト互列シテ二個ノ鐵器ヲ發見シタルソノ鏢ヲ有スル形態ヨリ考察シテ釜ノ類ナルコト想像セラレ一ハ高尺餘腹徑亦尺餘他ノ一ハ稍ソノ大ト高トヲ減ゼリ(寫真第七號)此種ノ器物ハ吾人ノ寡聞ナル未他ニ類品ヲ發見シタルコトヲ知ラズ當時ノ日用器具ヲ徵スベキ重要ナル資料タルヲ失ハザルベシト雖何レモ腐朽甚シク完全ニ收集スルコトヲ得ザリシハ誠ニ遺憾ナリキ。

(ニ)馬具 上記諸器物ト共ニ多クノ鐵具存在セリ多ク腐朽シテソノ形狀ノ知リ難キモノ少カラズト雖ナホ帶金具鎗等ノ馬具ニ屬セルコト明白ナリ革金具ニハ長一寸八分幅一寸七分ノ鐵地銀張ノ杏葉形座金ヲ有スル鐵製鉸具一個並ニ同座金破片一個(寫真第十八號II)徑一寸三分ノ鐵地銀張ノ圓形座金ヲ有スル金銅製鉸具二個(寫真第十八號III)徑九分ノ鐵製圓形座金ヲ有スル鐵地銀張鉸具二個(寫真第十八號I)徑八分五厘五分ノ鐵地(?)但青銹ノ附着セルトコロアリ)ニ銀ヲ張リナホンノ周邊ニ金ヲ張リタル半球狀ノ座金一個(寫真第十八號IV)ソノ他此等ト同種ノ裝具ト思ハルル銀並ニ座金等ノ破片若干アリ以上ノ座金ハ何レモ中空ノ膨ミアルモノナリ鐵地ニ鐵ノ縁金ヲ伏セ金張ノ釘頭ヲ打チ列ラベタル杏葉(寫真第十九號)鐵製雲珠(寫真第十九號)鐵製鉸具(寫真第十九號)等ノ斷片アリ此等ハ何レモ馬具ノ轡面繫胸繫尻繫等ノ革紐ニ附屬スル裝具ナルコト推定シ得ベキナリ又鞍橋ノ鐵製覆輪(寫真第二十號)鐵製轡(寫真第二十一號)等ノ斷片アリ漆ノ附着セル木片ノ存セシハ或ハ鞍ノ一部ナルヤモ知ル可カラズ。

(ホ)耳飾 凡テ純金製ニシテ一對アリソノ發見位置ヨリ推シテ耳飾ナルコト明ナリ長徑九分短徑八分五厘ノ外法ヲ有

スル大環ニ小環ヲ以テ竹呂盤珠ヲ重ネタルガ如キ形狀ヲナセル華麗ナル金具ヲ連結シソノ末端ニ長徑八分短徑七分ノ杏葉形金具並ニ之ヲ挾ミテ稍圓メル圓盤狀ノ小金具ヲ二枚重ネタルモノヲ垂下セリ大環ヨリ杏葉形金具尖端マデ長二寸四分五厘アリ寫真(第二十二號)此種纖巧ナル耳飾ハ嘗テ普門里古墳群中ノ夫婦塚ヨリ關野谷井兩委員ニヨリテ發見セラレシコトアリ(朝鮮古蹟圖譜三)本墳出土ノ耳飾ハソノ技巧並ニ金質ニ於テ造ニ彼ニ優レルヲ覺ユ而シテソノ樣式ハ最芬皇寺塔内石櫃中ヨリ發見シタル純金杏葉形小金具(朝鮮古蹟圖譜三)ニ似タルモノアリ是亦本古墳年代ヲ推定スベキ一要件ト爲スヲ得ベキナリ又肥後國玉名郡江田古墳ヨリ之ト同形式(技工金質亦劣レリ)ノ裝具ノ出土シタルコトアリ(東京帝國博物館藏品)ソノ耳飾ナルコトハ誰人モ信ジタルトコロナルガ今次ノ發見ニヨリテ之ヲ確ムルニ至レリトイフベシ。

(ヘ)釧 銀釧金張銅釧各一雙ヲ出セリ兩釧相重リテ左右ニ存置シタルハ殆兩腕同一個所ニ二個ヲ施シ居タルコトヲ知ルベシ銀釧ハ外法二寸六分五厘内法二寸三分アリソノ斷面方形ヲ爲シ厚一分五厘アリ外側ニハ小圓球ヲ列シテ飾トセリ金張銅釧ハ外法約二寸五分内法約二寸二分ニシテ斷面不正ナル半圓形ヲ爲シ外側ニ蛇腹狀ノ刻線ヲ施シタリ(寫真第二十三號)此種金銀釧亦夫婦塚ヨリモ出土セリ(朝鮮古蹟圖譜三)

(ト)指環 金銀各二對アリ徑約七分ソノ最幅廣キ部分ハ恐ラク指背ニ當タルトコロナラン幅三分アリ菱形ヲ呈シ上下ノ周邊ハ表面ニ向テ反折シ且繩狀ノ刻線ヲ施シタリ(寫真第二十四號)夫婦塚ヨリモ同式ノモノ出土セリ(朝鮮古蹟圖譜三)

(チ)玉類 左右腕釧ノ間即ハ體ノ胸部腹部ト思考セラルル個處ニ約二百七十個ノ琉璃玉(寫真第二十五號)散布シ碧玉岩製管玉一個(寫真同前)之ニ交ハレリ又腹部ニ當リテ大勾玉一個存在セリ該勾玉ハ徑二寸ノ硬玉(翡翠)製ニシテ風化セリソノ頭部ニ純金ヲ冠シ金冠ノ縁邊ハ指環ノソレト同一ノ手法ヲ示シ繩狀ノ刻線ヲ附セリ又玉ノ喉部ヲ繞リテ杏葉形ノ純金薄板ノ環珞十二枚ヲ垂下セリ(寫真第二十六號)ソノ頸部ニノミ環珞ヲ欠ケルハ蓋シ身體ニ接觸セル部分ナレバナリ

勾玉ノ瑰偉華麗ナルモノハ我邦内地及朝鮮ヨリ往々出土セルコトアレドモ吾人ノ寡聞ナル未斯ノ如キ壯麗ナルモノノ他ニ存在セルヲ知ラザルナリ思フニ大小琉璃玉ヲ連貫セル玉緒ヲ胸部ニ掛ケソノ緒ノ末端ニ此ノ勾玉ヲ垂下シテ飾トシタルモノナランカ管玉ハソノ發見僅カニ一個ニシテ一方ヨリ穿チタル細孔ヲ有セルモノナリ如何ナル部分ニ用キタルヤ詳カナラズ。

(リ)帶金具 銀製鉸具一具並ニ杏葉形座金ヲ有スル銀鑲二種九個散亂セリ鉸具(I)ハ全長五寸六分銚二十一ヲ以テ革ニ打列ラネタルモノニシテ(II)ハ全長八寸一端二寸二分ノ部分ヲ銚六ヲ以テ革ニ附着シ蝶交ニヨリテ他端ヲ遊動シ之ヲ(一)ニ潛ラシメテ革帶ヲ適宜ニ伸縮スルノ裝置トセリ杏葉形座金ヲ有スル銀ハ二種アリ一ハ杏葉ノ一端ニ小脚ヲ持出シ之ニ銀鑲ヲ垂下シタルモノ銚三個ヲ付セリ杏葉ノ長八分ニシテ正ニ鉸具ノ幅ニ一致スルヲ以テ革帶ニ連着シタルモノタルコト疑ナカラン他ノ一ハ同様ノ杏葉座金ノ中心ニ小鑲ヲ貫キ鑲脚座背ニテ小鑲ヲ爲シ裏面ヨリ定着セシムルノ構造ヲ爲セリ座ノ長八分五厘ニシテ前者ヨリ稍大ナルヲ覺ユト雖モ是亦帶金具タルヤ論ナシ(寫真第二十七號)「佩文韻府」帶字ノ條ニ「隋書」禮儀志ヲ引キ

「侯王貴臣多服九銀帶惟天子帶加十三銀以爲差異」

トアリ吾人陪書禮儀志ヲ繕クモ此文見エズ唯ダ天子帶ニ十三銀ヲ加フルコトヲ記ルスノミ然レドモ「北史」李穆傳ニ穆ガ隋文帝ニ天子ノ服タル十三銀金帶ヲ上リタルコトヲ記ルシ「陪書」李德林傳ニ九銀金帶ヲ賜ハリシコト見エタレバ此文必シモ根據ナキニ非ルベシ本革帶ニ九銀ノ附屬セル或ハ隋ノ制ニ因リシニハアラザルナキカ鑲ハ諸物佩用ノ目的ナラン而シテ鑲帶ハ蓋シ鈔帶石帶ノ古式ナルベシ。

(ヌ)槍身ソノ他鐵器殘片 尸體頭部ノ左邊ニ沿テ鐵槍身殘缺(寫真第二十八號)存在セリ而シテ木鞘アリシト見エ槍身ニ金箔ヲ施シタル木片附着シタリ又棺ノ右邊ニ扁平ニシテ細長キ鐵器アリ(寫真第二十九號)又右足下ニモ鐵器殘片アリ

此等鐵器中刀子ト思ハルモノアリ又ソノ他ノ武器ナキヲ保セズト雖モ腐朽甚シク之ヲ確ムル事能ハズ又帶金具ノ附近ニ山字形ノ鐵器アリ(寫真第十九號)又金箔散點シ何等カノ遺品ノ存在ヲ示セリト雖亦之ヲ詳ニスル事能ハザリキ。

(ル)金絲 尸體ノ頭部并ニ足部ニ當レリト思考セラルル部分ヨリ金絲若干片ヲ採集セリ是レ恐ラク裂地ニ纏セシモノガ絲屑腐敗シタル後ニ殘留シタルモノナルベシ。

本古墳ノ年代ヲ嚴密ニ決定セントスルコトハ固ヨリ不可能ノコトニ屬セリト雖モ遺物中ナホ之カ標尺タルベキモノ無キニシモアラズ前記耳飾ノ芬葉等塔内石櫃中ヨリ出テタル金具ニ酷似セルガ如キ大ニ注意スベキコトナリ芬葉等塔ハ新羅善德王ノ三年(西曆六百三十四年)ニ建立セラレタルコト疑ナカルベク且塔内ノ遺物ノ性質亦ソノ當時ノモノナルコト明ナルヲ以テソノ遺物中ノ杏葉形裝具ト同様式ナル此ノ耳飾モ亦其製作年代ノ相去ル遠カラザルヲ知ルベシ然レドモ肥後國玉名郡江田古墳ヨリ發見セラレシ同様式ノ杏葉形耳飾ハ之ニ伴テ出土シタル鏡鑲ノ研究上稍遠キ時代ニ屬スルコト推知スベキヲ以テ單ニ耳飾ノミヲ以テ此古墳ノ年代ヲ論ズルコトナホ支障アルヲ免カレザルベシ銅鏡ノ把手ノ座タルハ花形ハ未ダ菱花式ノ形狀ヲ呈セズト雖好ミテ裝飾ニ八葉ノ花樣ヲ用ユルハ吾人ノ知レル範圍ニ於テ支那六朝末ヨリ隋唐ニ亘リテノコトナリサレバ本古墳ノ隋代ヲ距ルコト甚遠カラザル時代ニ屬スルコト略疑ナカルベク同ジ普門里ニ新羅眞平王陵ノ存在セルハ偶然ニアラザルベシ又勾玉ニ纖巧ナル技術ヲ施セルガ如キ亦文化ノ頗進歩セル時代ノモノタラザル可カラズ此等ヲ綜合シテ吾人ハ此古墳ノ年代ヲ六世紀末頃ニ推定セント欲スルモノナリ若果シテ然リトセバ新羅眞平王ノ陪唐ニ朝貢セシ時代ニ相當スベシ「陪書」新羅傳ニ

「金眞平開皇十四年遣使貢方物高祖拜眞平爲上開府樂浪郡公新羅王」

トアリ「唐書」東夷傳ニハ

「武德四年王眞平遣使者入朝高祖詔通直散騎侍郎瘦支素持節答賽後三年拜柱國封樂浪郡王新羅王貞觀五年獻女樂二太

宗曰比林邑獻鸚鵡言思鄉巧還況於人乎付使者歸之是歲真平死無子立女善德爲王大臣祭柄國詔贈真平左光祿大夫贈物
段二百

トイヘリ本墳中ヨリ九鎗帶ノ出土セシガ如キ亦以テソノ年代ヲ髣髴スルヲ得ベクソノ遺品ヨリ推シテ埋葬者ノ羅朝ノ貴
紳タルコト想像シ得ラルベシ。

一一 内東面四天王寺址一部調査

吾人ノ普門里古墳ノ發掘ニ從事セル時ニ當リ恰慶州ニ輕便鐵道敷設ノ工事アリ四天王寺址ノ一部ハ方ニソノ線路ニ中
レリ四天王寺ハ狼山南麓ニアリ新羅文武王ノ御立ニ係ル堂塔ノ遺址今猶存セリ鐵道線路ノ此遺跡ヲ通ズル部分ハ堂塔址
殘存部ノ南緩斜面(寫真第三十號第三十一號)ノ間ヲ横ギレリ此遺跡ニハ堂塔礎石ノ現存セルノミナラズ四天王像甄瓊瑤
甄四天王寺文字瓦等ノ出土セルコトアリ精密ナル調査ト嚴重ナル保存トヲ要スベキコト言ヲ待タズ輕鐵線路ノコノ一部
ヲ横斷セルハ吾人ノ誠ニ遺憾トスルトコロナリ然レドモ已ニ着手セルヲ以テ吾人ハ取敢ヘズ此部ノ測定圖(附圖第三號)
ヲ作成シ且現狀ヲ寫真撮影シ又ソノ部分ヲ發掘調査セリ發掘シタル部分ヨリ方二尺許ノ中正圓ノ遺出ヲ有スル礎石一
基ヲ發見シタリ該礎石ハ上面水平ヲ爲シ且天王寺塔礎ト同シク正南面セルヲ以テ或ハ原位置ノママ埋没シタルモノナラ
ンカ(寫真第三十四號)此礎石ノ附近ニハ一體ニ切石ヲ不規則ニ敷キツメタリシガ遺物トシテハ四天王像甄瓊瑤草文甄平瓦
等ノ斷片並ニ中空ニシテ尖レル鐵器一個(用途不明)ヲ得タルノミ羅代恐ラク此處ニモ一建設物ノ存セシナランカ。
因ニ雁鴨池ノ北邊所謂臨海殿址トセララルル部分亦輕鐵線路ニ當レリ吾人滯在中ハ未ダ工事ニ著手スルニ至ラズユヘニ
一方之ヲ慶州警察署ニ依頼シテ充分ナル警戒ヲ要求シ又一方之ヲ本府ニ報告シ工事ノ際本府員ノ立合ハレンコトヲ希望
シ置キタリ。

慶山郡

一 押梁面大洞造水洞古墳群

本郡押梁面ハ古押梁^{トイフ}國ノ故地ト稱セラル新羅押梁州此地ニアリ慶山邑内面ヨリ押梁面ニ亘リテ平野連亘シ羅代
主要ナル地點タルコト首肯セラル邑城ノ東北約三十町押梁面大洞ノ村落ニ接セル丘陵地ニ古墳ノ群在セルモノ約十二基
アリ(寫真第三十五號第三十六號)多クハ封土崩壞シ緩斜面ヲ爲セリ而シテ墳ノ石材露出顛倒セルモノアリ破壊ノ厄ニ遭
ヘルモノ少カラザルヲ示セリ村民コノ附近畑地ニテ發見シタリトイヘル陶器ヲ藏セリ蓋付高坏七個何レモ黝黑色硬質ノ
素燒陶器ニシテ脚ニハ透穴アリ又窠印ヲ有スルモノアリ右ノ外赤褐色軟質陶器蓋一個土製鈴一個アリ何レモ新羅初期ノ
モノニ屬セリ吾人ハ此地古墳ノ性質ヲ知得スベキ物件タルヲ以テ本府ノ爲メニ購求シタリナホ此丘陵地ニシテ造永洞ニ
屬セル方面ニモ古墳四基アリ此等古墳ハ今ニシテ保存ノ道ヲ請ゼザレバ久シカラズシテ亡失ノ止ムナキニ至ラン。

一一 山城址

邑内面ニ嶺山城址トイヘルモノアリ嶺山城ハ武烈王ノ時金仁問ノ築クトコロ「三國史記」卷四十四金仁問傳ニ

「太宗大王授以押督州地管於是築嶺山城以設險太宗錄其功授食邑三百戶」

トイヘルモノ是ナリ慶山郡書記ソノ遺址ノ存セルヲ吾人ニ語リタルモ日暮ニ際シ踏査ノ機ヲ得ザリシカバ竟ニ確ムルコ
ト能ハズ他日ノ調査ニ待ツコトトセリ。

清道郡

一 雲門面新院洞雲門寺

清道郡ハ慶州郡ニ隣接シ新羅時代遺蹟ノ今日ニ殘留セルモノ少カラズ雲門面新院洞雲門山下ナル雲門寺ノ如キ今猶山
間ノ一巨刹タリ寺記ニヨルニ新羅眞興王二十一年一神僧ノ創立スルトコロ第一重創者ハ同眞平王辛亥歲皇隆寺僧圓光國
師第二重創者ハ高麗太祖三十年寶壤國師第三重創者ハ同肅宗十年圓應國師第四重創者ハ朝鮮肅宗二十年雪松禪師ナリ爾
來修葺シテ今日ニ及ベリトイフ寺ハ溪流ニ沿ヒ林樹茂生シ境内幽靜ナリ圓光國師ノ重創ニ就イテハ「三國遺事」卷四圓光
西學ノ條ニ

「然彼諸僧傳記皆無鵲岬目與雲門之事而鄉人金陟明謬以街巷之說潤作文作光師傳濫記雲門開山祖寶壤師之事迹合爲一
傳後撰海東僧傳者承誤而錄之故時人多惑之因辨於此」

トアリソノ事詳カナラズ寶壤師重創ノ事ハ同書寶壤梨木ノ條ニ

「三韓亂亡間大鵲岬小鵲岬所寶岬天門岬嘉西岬等五岬皆亡壞五岬柱合在大鵲岬祖師智識大國傳法來還次西海中龍遊
入宮中念經施金羅袈裟一領兼施一子瞻目爲侍奉而追之囑曰于時三國擾動未有歸依佛法之君主若與吾子歸本國鵲岬創
寺而居可以避賊抑亦不數年內必有護法賢君出定三國矣言訖相別而來還及至茲洞忽有老僧自稱圓光抱帛檣而出授之而
沒於是壤師將興廢寺而登北嶺望之庭有五層黃塔下來尋之則無跡再陟望之有群鵲啄地乃思海龍鵲岬之言尋掘之果有遺
塚無數聚而繚崇之塔成而無遺塚知是前代伽藍墟也畢創寺而住焉因名鵲岬寺未幾太祖統一三國開師至此創院而居乃合
五岬田東五百結納寺以清泰四年丁酉賜額曰雲門禪寺以奉袈裟之靈蔭」

ト見エタリ大雄殿ノ前面金法堂ヲ挾ミテ左右ニ三重石塔立テリ二基共ニ高約十四五尺塔身危傾僅ニ重心ヲ保テリ(寫眞
第三十七號第三十八號)基壇四面ニ天部各二體ヲ刻ス製作恐ク新羅末高麗初期ヲ下ラザルベク或ハ壤師時代ノ建造ニ
係ルカ又金法堂ノ前ニ石燈アリ高約六尺餘亦塔ト同時代ノ作ナランカ(寫眞第三十九號)寺院ノ東南外區ニ高麗圓應國師
碑アリ即當寺第三重創者タリ「東國輿地勝覽」ニ

「有尹彦頤所撰僧圓應碑」

トアルモノ之ナリ碑ハ片麻岩ヲ用キ三片ニ折斷シ且折斷部分剝落セリ今木椽ヲ當テテ樹立セシメ且碑亭ヲ設ケテ保存セ
リ(寫眞第四十號)碑身高約七尺餘幅約四尺題額ニ楷書體ヲ以テ

「圓應國師之碑」

ト記ルシソノ兩傍ニ飛龍ヲ對稱セシメ且碑面文字ノ周圍ニ寶相華文ヲ環ラセリ碑文ハ行書ヲ用キ國師ノ傳ヲ記ルセリ花
樣并ニ碑文ノ縱兩扁ハ木椽ニ隱蔽セラレ見ル事能ハズ全文ハ「朝鮮寺刹史料」上(三二六〇—三二六一)ニ載セタリ寺記ニヨル
ニ石碑長五尺廣三尺樹於寺之乾方

トアレドモ今ハソノ位置變ゼリ此碑ノ飛龍花樣極メテ巧麗ニシテ字體亦優雅ナリ麗碑中ノ傑作タルベシ此碑ノ南隣ニ接
シテ雪松大師碑アリ寺記ソノ文ヲ載セタリ寺内ナホ塔並ニ石塔ノ殘缺等アリ寺寶トシテ甘露樽(銅器)アリ寺記ニ

昔經亂後壬申年印洪大師坐眠若耶溪石微夢探水中

トアリ器ノ口縁ニ成雅三年ノ刻銘アリ遼ノ年號ニシテ高麗文宗二十一年(西曆一〇六七年)ニ當レリ。

一一 錦川面珀谷洞石佛並ニ石塔

錦川面珀谷洞ニ石造釋迦座像アリ高五尺三寸光背七尺五寸上下蓮瓣間四尺五寸光背跪間共幅四尺一寸五分佛鼻缺損ス
ト雖豐美ナル相貌優麗ナル姿勢大ニ嘆賞ニ値スベク衣文亦流麗愛スベシ蓮座ハ八角ノ臺石ニシテ下ニ八朵ノ俯蓮ヲ設ケ
上ニ重瓣ノ仰蓮ヲ載ス光背ハ中央ニ蓮華ヲ刻シ且重圍文ヲ環列シ周邊ニ火焰ヲ作レリ共ニ彫刻雄健羅代中期ノ一傑作タ
ルヤ疑ナシ今簡粗ナル小亭ヲ設ケ僅ニ雨露ヲ凌グリ至急保存ノ要アルヲ認ム(寫眞第四十一號第四十二號附圖第四號)傍
ニ石塔一基アリ完カラズト雖亦石佛ト同時代ノ作ナラン(寫眞第四十三號)

三 錦川而長淵洞石塔並二幢竿支柱

錦川而長淵洞ノ丘陵地ニニ基ノ三層石塔アリ(寫真第四十四號)一基ハ本年二月盜賊ノ爲メ崩壞セラレ畑中ニ顛倒セリ蓋基壇下ニ寶器ノ埋藏セラレルヲ豫想シタルナラン(寫真第四十五號)他ノ一基ハ之ヨリ東南約十間ノトコロニ在リ基壇上九尺七寸壇下四尺六寸アリ(寫真第四十六號)二塔ノ前方細流ヲ渡リテ約數十間ニシテ幢竿支柱殘缺アリ(寫真第四十七號附圖第五號)恐ラク二塔ノ後方ニ本堂アリシナルベク吾人ハ畑中ヨリ古瓦數片ヲ拾得セシガ何レモ羅代ノ製作ニ屬シ塔ノ形式ト照合シテ羅朝ノ一寺址ナルコト疑ナキガ如シ。

四 梅田而龍山洞佛靈寺塔殘缺

梅田而龍山洞ノ山間ニ一小寺アリ佛靈寺トイフ寺院ノ上方山徑ヲ攀ヅルコト約數十步塔殘缺アリ幾百ノ塔ヲ重積シテ方錘狀ヲ爲セリ(寫真第四十八號)蓋塔ノ殘片ヲ一處ニ集メタルモノ固リ塔ノ原形ヲ窺ヒ得ルモノニ非ズ塔ハ一方ニ佛像五層塔唐草文ヲ畫刻セルモノアリ文様ノ面ハ長約一尺前後幅二寸許圖象整齊雕作緻巧頗觀ルニ足ル恐ラクソノ製作高麗初期ヲ下ルモノニ非ザルベシ(寫真第四十九號第五十號)

金 泉 郡

一 開寧而西部洞瘡陵

「東國輿地勝覽」開寧縣ノ條ニ
「瘡陵在縣西熊峴里俗稱甘文國時瘡夫人陵」

トアリ所謂瘡陵ハ開寧而西部洞後麓ニアリ封土半崩壞シ墳ノ石材露出顛倒シテ殆ド見ルニ足ラズ(寫真第五十一號)ソノ附近丘陵ニ陶器片散亂セリ陶器片ハ黝黑色ノ素燒ニシテ古新羅時代ノ製作ニカカルコト明白ナリ恐ラク此墳墓内ヨリ發掘セラレシモノナランカ。

二 橋 巖

瘡陵ノ傍ニ橋巖ト稱スルモノアリ蓋石塔第一層二層及ヒ基壇石材一枚ノ倒塌セルモノソノ形橋輿ニ似タルヲ以テ俗ニ橋巖ト稱スルナラン(寫真第五十二號)恐ラク新羅時代ノ製作ニカカルカソノ附近ニ羅朝ニ屬スル古瓦散在セリ。

三 金泉驛附近古墳群

金泉驛ノ北線路ノ西方山陵ニナホ大小古墳群在ス何レモ既ニ發掘セラレタルモノ新羅初期ノモノナラン。

尙 州 郡

一 尙州而南町里石塔殘缺

尙州而南町里民家ノ庭ニ石塔殘缺アリ基壇ノ一部ヲ爲セル石材二枚ハ特ニ壁間ニ嵌入シ小閣ヲ設ケアリ二石共ニ高四尺餘幅三尺餘(附圖第六號)各天部ヲ浮離ス左右ハ琵琶ヲ彈ジ(寫真第五十三號)右石ハ珠ヲ捧グ(寫真第五十四號)羽衣飄々トシテ蓮歩將サニ移ラントスルノ趣アリ圖象豐麗彫刻雄渾ナリ正ニ羅朝盛時ノ一傑作タリ充分ノ保存ヲ要スベキモノタリ二石ノ傍ニ此塔ヲ構成セル他ノ石材ト思ハルモノ顛倒セリ(寫真第五十五號)

二 石 塔 蓮 臺

前記小閣ノ前方二柱ノ礎石ニハ雕刻雄健ナル蓮臺ヲ用キアリ(寫真第五十六號第五十七號附圖第六號)恐ラク石燈ノ臺石ニシテ亦塔ト同時代ノモノニ屬セルナラン充分ノ保存ヲ講スベキ要アルヲ認ム。

三 沙伐面達川里沙伐王陵

沙伐面達川里陳山南麓ニ沙伐王陵ト稱スル圓墳アリ後世ノ修復ヲ經テ墳域整然タリト雖果シテ沙伐王陵タルヤ否ヤ固リ明確ナラズ。

四 石塔

沙伐王陵ノ附近ニ一石塔アリ三層ヲ爲セリ(朝鮮古蹟圖譜四ニソノ圖アリ)高十八尺餘規模壯大形態修整羅朝盛時ノ一大工タルヲ失ハザルベシ。

ソノ他本郡外南面芝沙里塚塔ハ調査セザリキ又邑内ヨリ沙伐王陵ニ至ル途中山城址古墳輪竿支柱等アリシモ吾人ハ馬背望見セシノミニシテ特ニ調査ヲ爲サザリキ。

慶尙南道

梁山郡

一通度寺

慈栖山通度寺ハ慶南ノ大刹新羅善德王十一年僧慈藏ノ創立ニカカルトイフ境域廣大堂宇儼然タリ本寺ハ己ニ委員諸氏ノ調査セラレシコトアリ吾人ハ單ニ寺内諸遺物ヲ巡見スルニ止メタリ羅朝ノ遺物トシテハ三層石塔存セリ高約十二尺六

寸形態優麗新羅統一時代ノ製作ニカカルヤ疑ナシ(寫真第五十八號)吾人ハナホ石造物タル舍利金剛寶塔石燈禮拜石等ヲ調査シ又寺寶タル釋尊親着金襴袈裟慈藏律師親着天竺絢布袈裟大小香爐銅瓶(寫真五十九號第六十號等)見タリ「三國遺事」卷四慈藏定律ノ條ニ

「藏之道具布襪并大和龍所獻木鴨枕與釋尊由衣等合在通度寺」

トアレドモ今見ルトコロ何レモ麗鮮間ノモノノミ

二 吏道碑

通度寺ノ東南約一里街路ノ西側ニ一碑アリ(寫真第六十一號)高八尺一寸字部幅一尺九寸石材花崗岩ヲ用キ碑面北東ニ嚮ヘリ大安元年乙丑十二月日在銘碑文ハ見ルニ足ラザルモ吏道ヲ挿入スルハ大ニ珍トスルニ足ル吾人訪觀ノ際風烈シク搦木ヲ調製スルコト能ハズ他日コノ拓影ヲ獲テ更ニ考究スルトコロアルベシ。

三 梁山北山城址

梁山邑ノ東北新基洞ニ山城址アリ壘堦ノ殘存セルヲ望見シ得ベシ(寫真第六十二號)梁山ハ彦陽街道ノ要地ニシテ古戦良城(草羅城)ハ正ニ本郡内ニ求ムベキモノナリ此山城ハ「輿地勝覽」ニ

「古山城在城東三里石築」

トアルモノ即之ナルベシ(附圖第七號)思フニ新羅ト我邦トノ抗爭ノ當時ニ於テ此要所ニ一城壘ノ施設アリシヤ推想シ得ラルベシ。

東萊郡

一 梵魚寺

金井山梵魚寺ハ新羅眞德王九年僧義湘ノ創立ニカカルトイフ今猶羅朝ニ屬スル三層石塔(高約十二尺七寸)石燈高(八尺七寸)ヲ存シ(寫眞第六十三號第六十四號)支柱數基ヲ殘セリ。

二 金井山城

金井山城ハ金井山ニアリ朝鮮肅宗二十九年慶尙南道監司趙泰東ノ築ク所康熙四十三年東萊府尹使韓配夏中城ヲ築ク此山城ハ梁山郡方面ヨリ登ルヲ便トス吾人ハ梵魚寺方面ヨリ山徑ヲ攀テ赴カントシタルモ密雲山ヲ蔽ヒ細雨屢至リ且日暮ニ近カカリシヲ以テ之ヲ中止シタリ。

ソノ他温泉里東輪山頂上ニ城址アリ石壘ヲ以テ鉢卷形ニ取圍メリ吾人ハ雨餘上攀シ難カリシヲ以テ街路ヨリ之ヲ遠望シタルノミニテ調査セザリキ。



版



墳古掘發

第一 內東面普門里古墳群



第二 普門里古墳發掘前(正面)

圖版第二



(ス示ノ狀ルケ置ヲ土積ニ部上ノ積石割)

第三 普門里古墳ケールン頂部



(影撮リヨ方東)

第四 普門里古墳ケールン現出ノ狀



第五 普門里古墳土器鐵器類現出ノ狀

(ノモルセ影撮リコ面北)



第六 同上寸涉ヲ混ジタル土塊

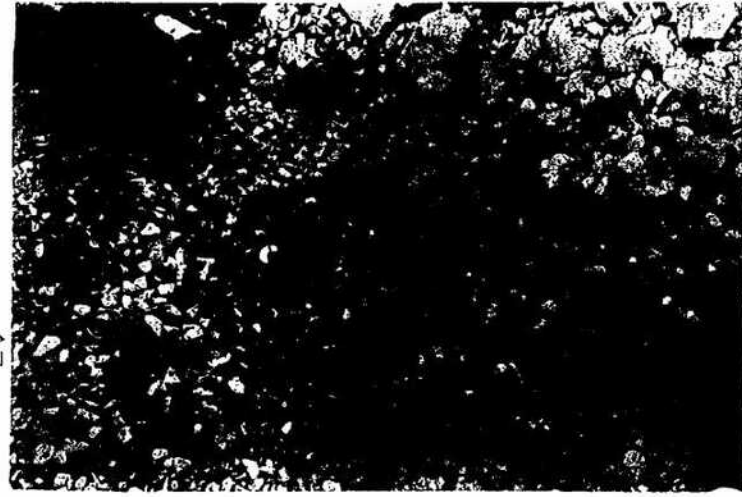


第七 普門里古墳内部遺物埋葬狀態

(北方より撮影)

圖版第四

圖版第五



→ 劍

↑ 勾玉

↑ 劍

↑ 耳飾

第八 普門里古墳內遺物配列狀態 (其二)



→ 劍

↑ 勾玉

↑ 劍

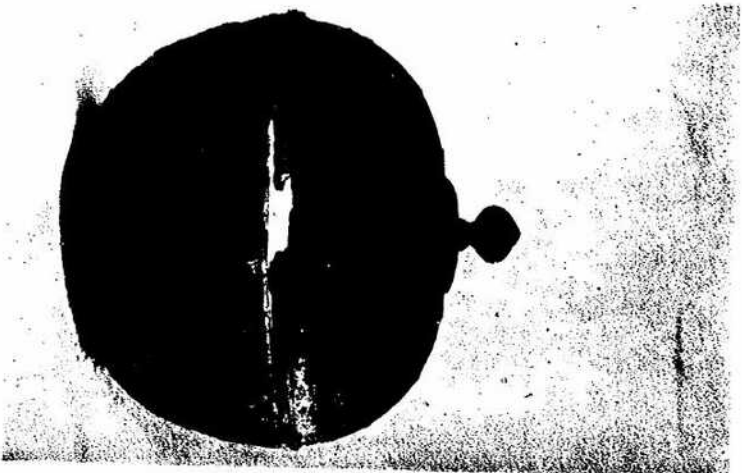
第九 同上

(其三)

圖版第六

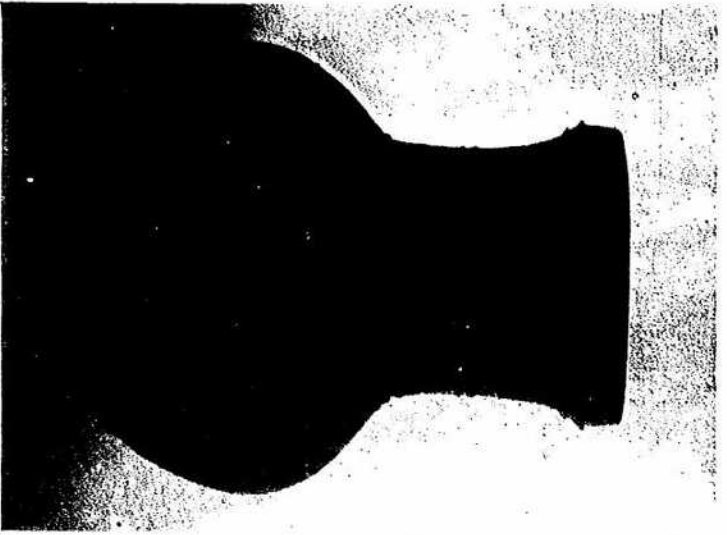


第二 同 上蓋之細部

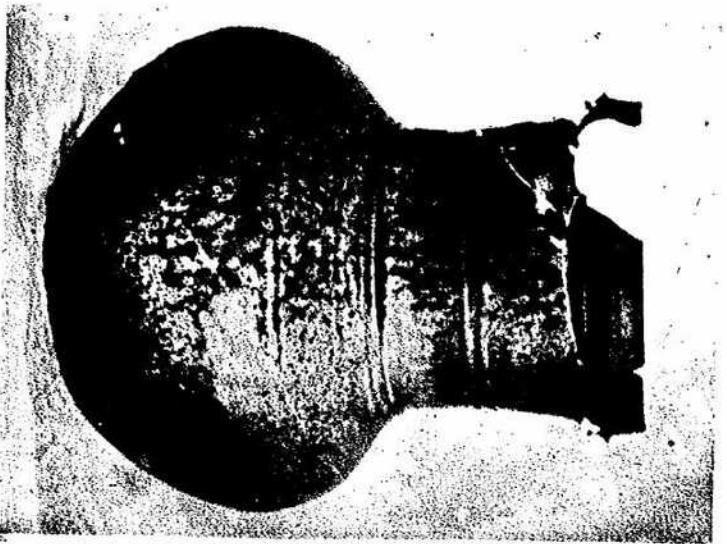


第一〇 普門里古墳發見銅鏡

(鏡蓋共六寸)



第三 普門里古墳發見長頸甕 (英一)



第二 普門里古墳發見長頸甕 (英二)



第一四 普門里古墳發見蓋附長頸埴

(一其) 類蓋見發墳古里門普 五一第

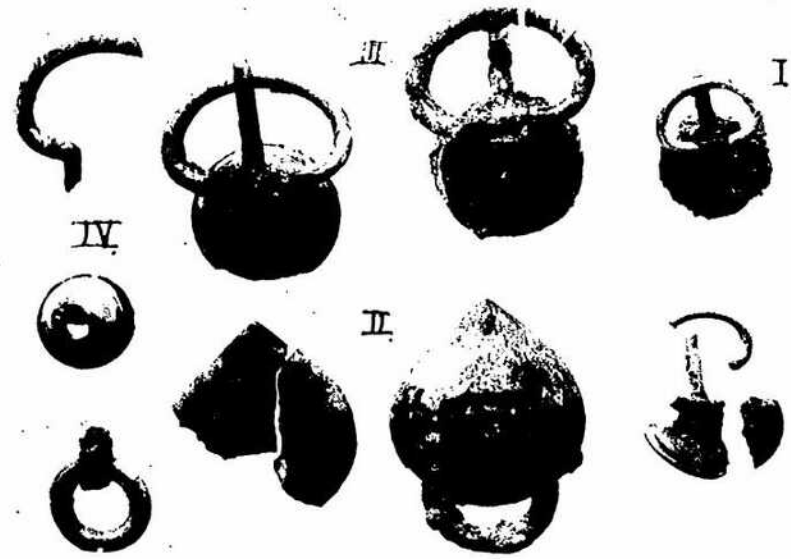




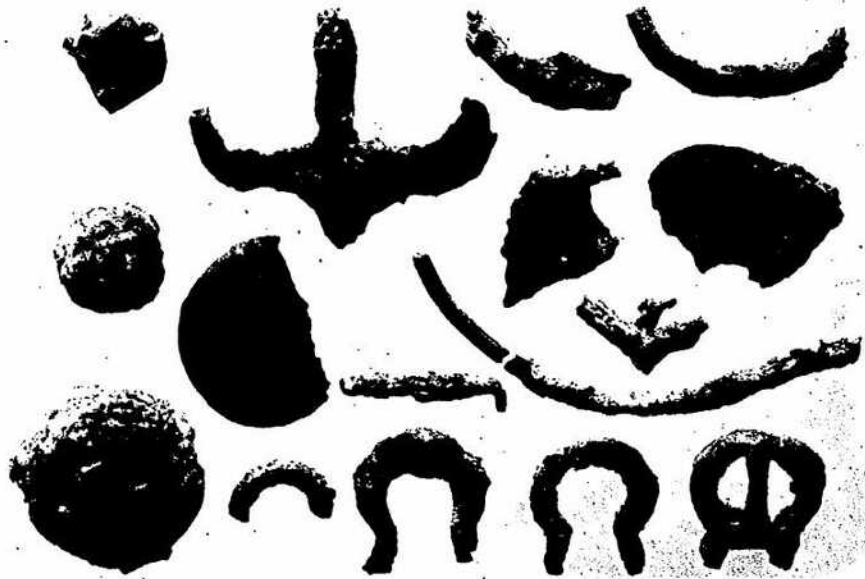
(二B) 類壺見發墳古里門普 六一第

蓋器陶見發上 同 七一第

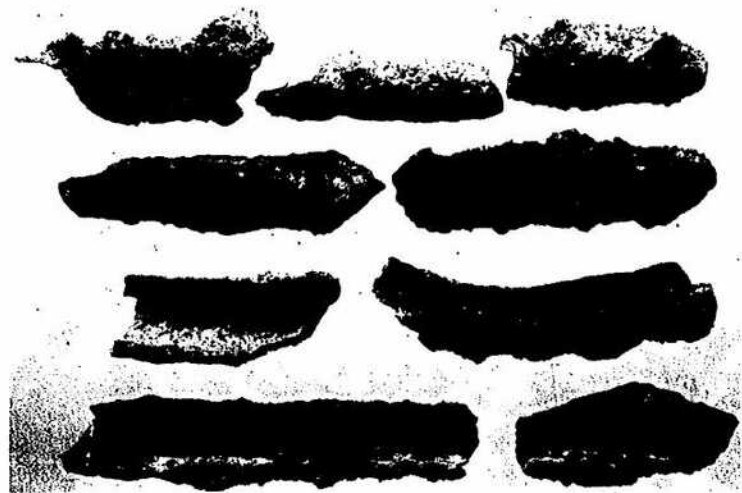




第一八 普門里古墳發見鉸具及座金具



第一九 同上鐵製雲珠鉸具類殘缺

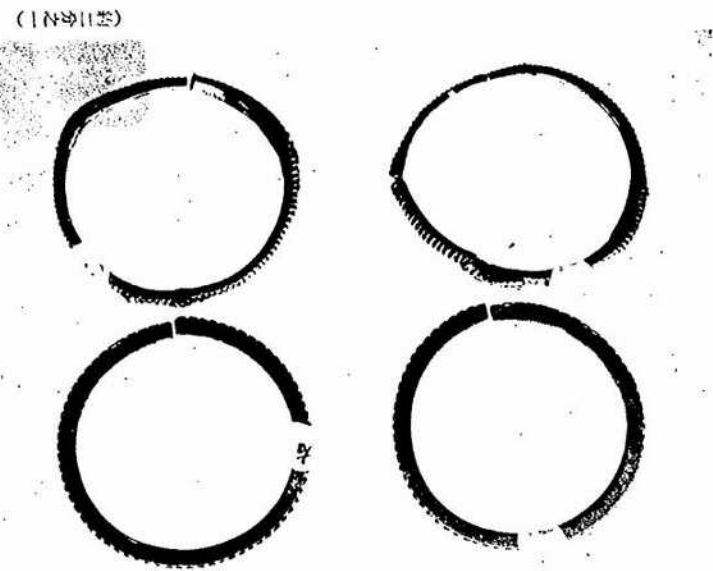


第二〇 普門里古墳發見鞍履輪殘缺

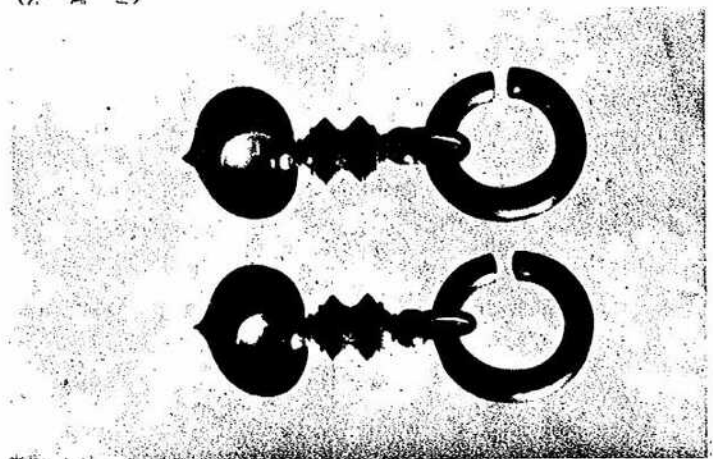


第二一 同 上發見鏡殘缺

第三同上金銀製銅

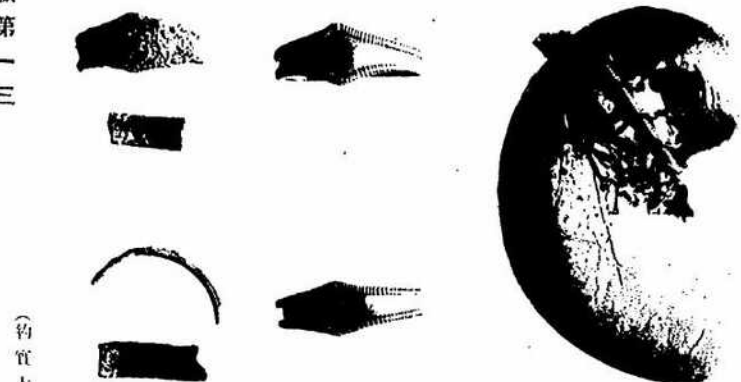


(初真六)



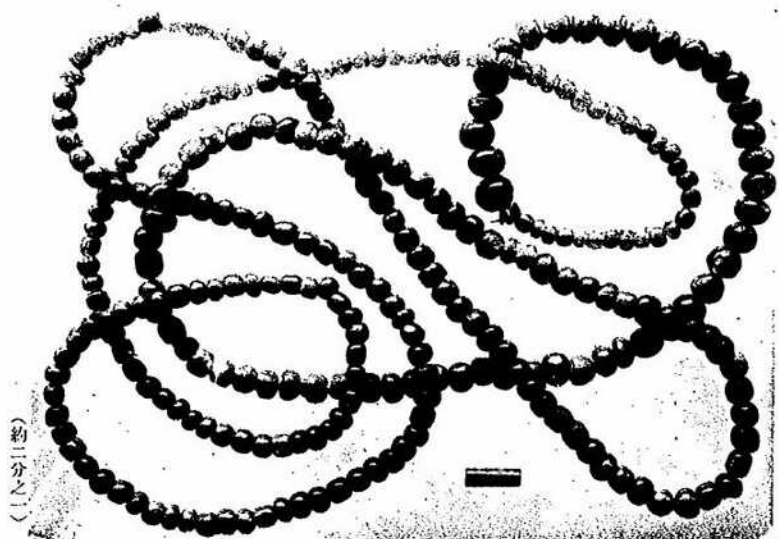
第三 普門里古墳發見金製耳飾

圖版第一三



(約實大)

第二五 普門里古墳發見勾玉及指輪



(約三分之一)

第二六 全 上玻璃玉及管玉

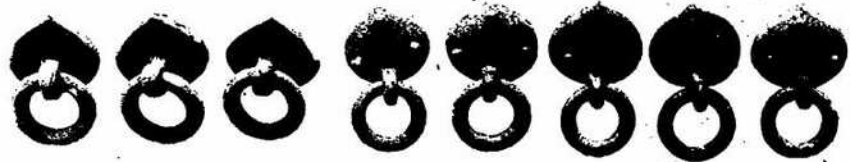
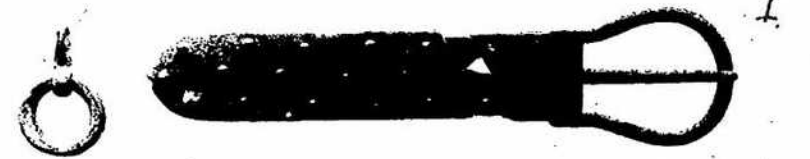
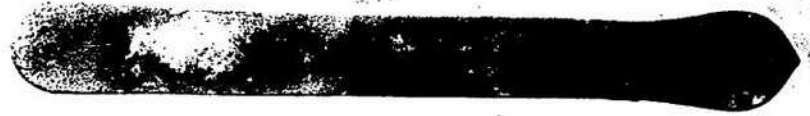
圖版第一四



(上) 第二六 同上勾玉

(實大)

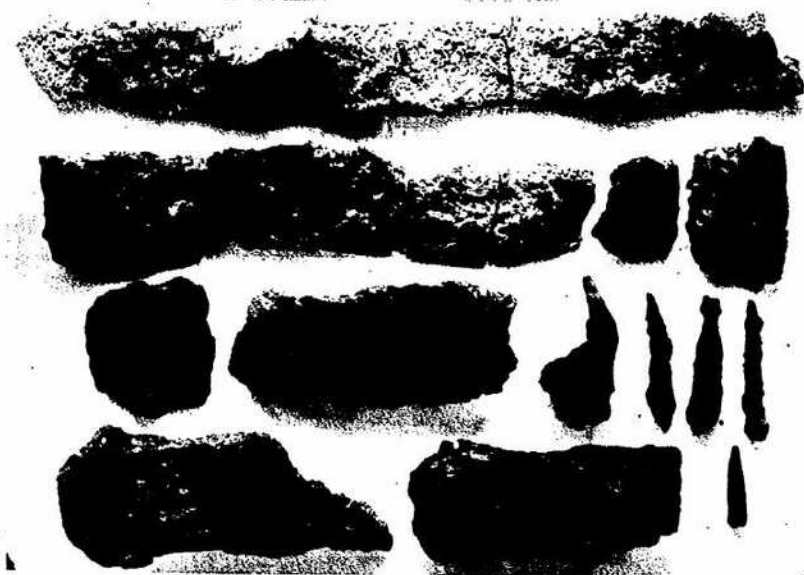
(下) 第二七 普門里古墳發見銀製帶金具
(約三分之二)



圖版第一五



第二八 普門里古墳發見鐵鎗身



第二九 同上鐵器殘缺



(此寺ノ遺蹟ヲ方南)

第三〇 慶州四天王寺址



(此遺蹟ヲ方東ノ所ニ設敷遺程)

第三一 同寺址ノ一部



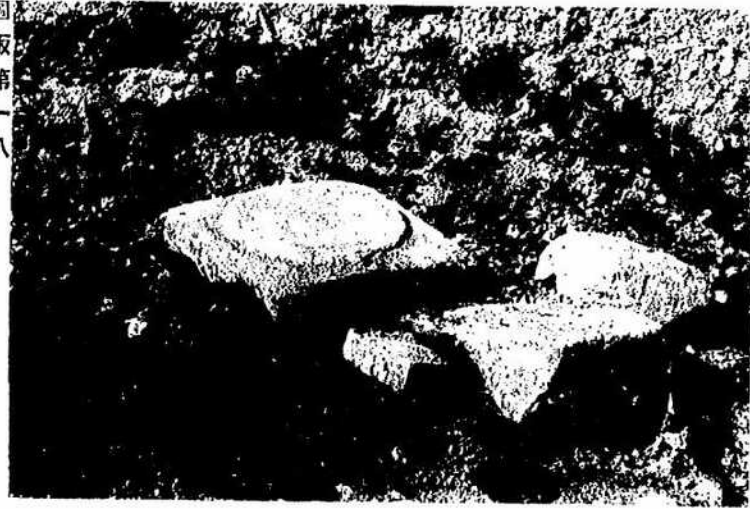
(ノモリアニ方東)

第三二 慶州四天王寺址餘蹟



(リモ没埋ガ半ノモリアニ方西)

第三三 同 上



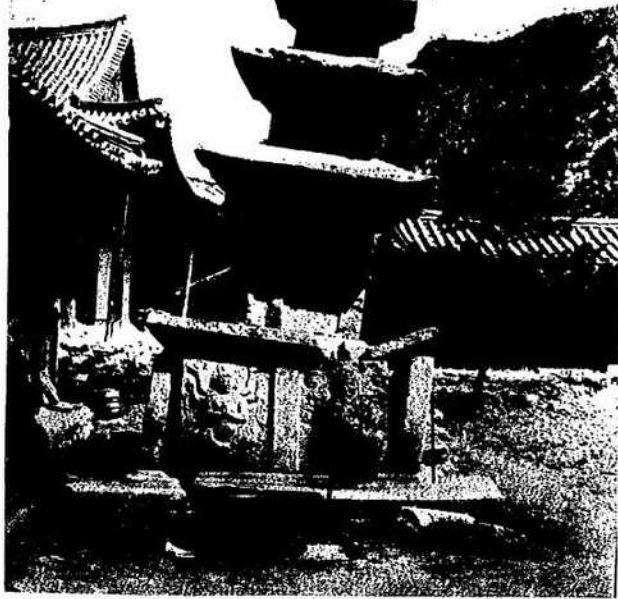
(石礎等に見發中散發四個ノ遺敷道殿佛殿)

第三四 慶州四天王寺址一部

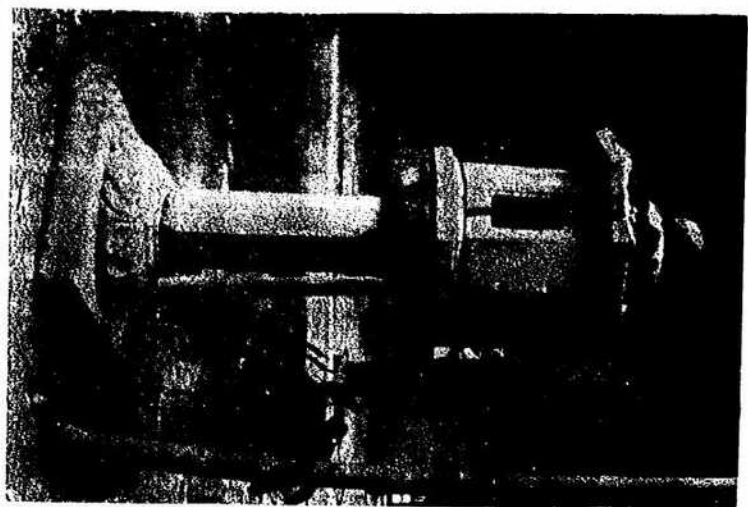


(不示ノ狀ノ在點墳古=上陵丘々々嶺=群墳古洞大)

第三五 慶山郡押梁面ノ古墳



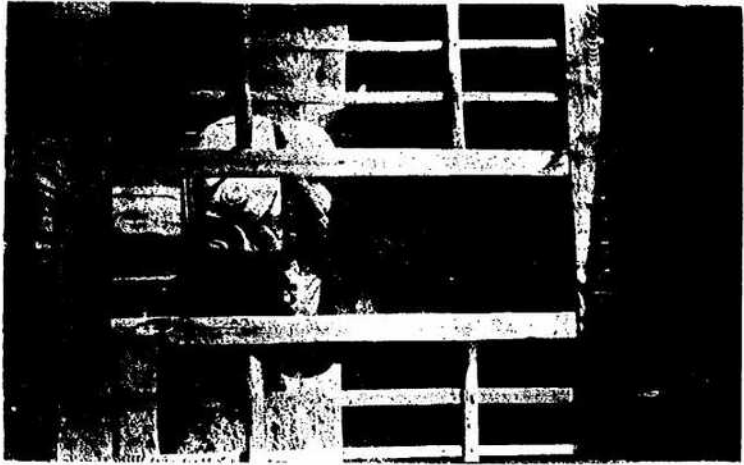
(上) 第三六 慶山郡押梁面大洞古墳群
(下) 第三七 清道郡雲門面雲門寺石塔(東)



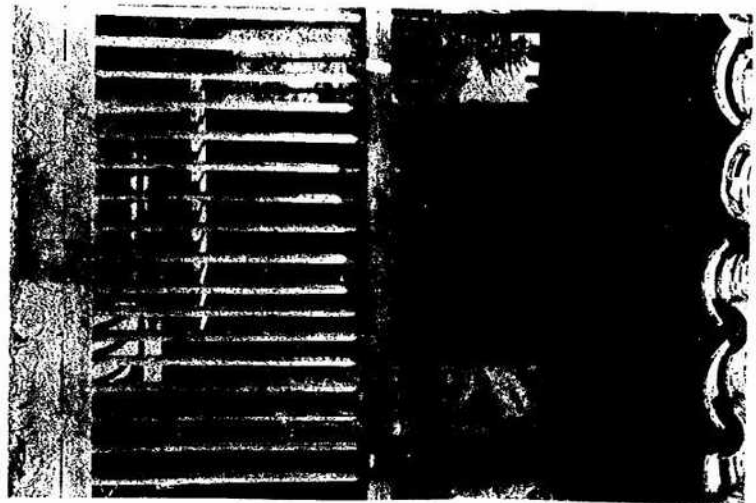
第三九回 上石燈



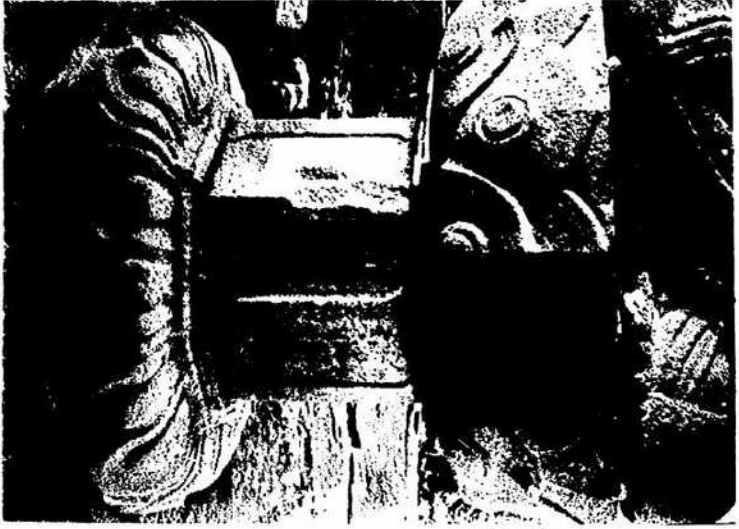
第三八回 清道郡雲門面雲門寺石塔 (西)



第四一 清道郡錦川面坊谷洞石佛



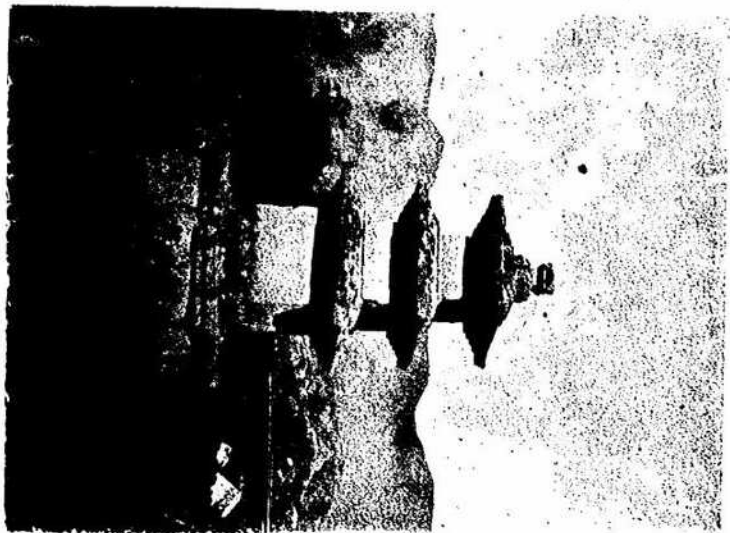
第四〇 清道郡雲門面雲門寺圓應風師尊



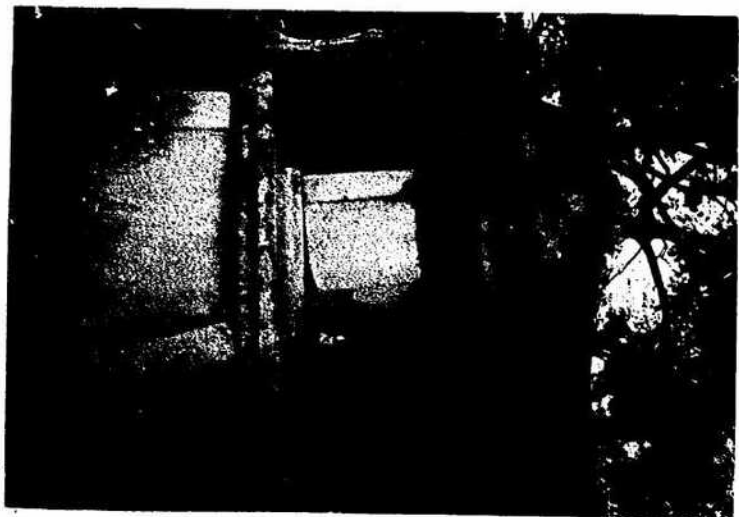
同上石佛坐座



第四一 清道郡磐川面拍谷洞石佛上部



第四四 滋遠郡梅田前長淵寺址石塔全景



第四三 滋遠郡御川前垣谷洞石塔



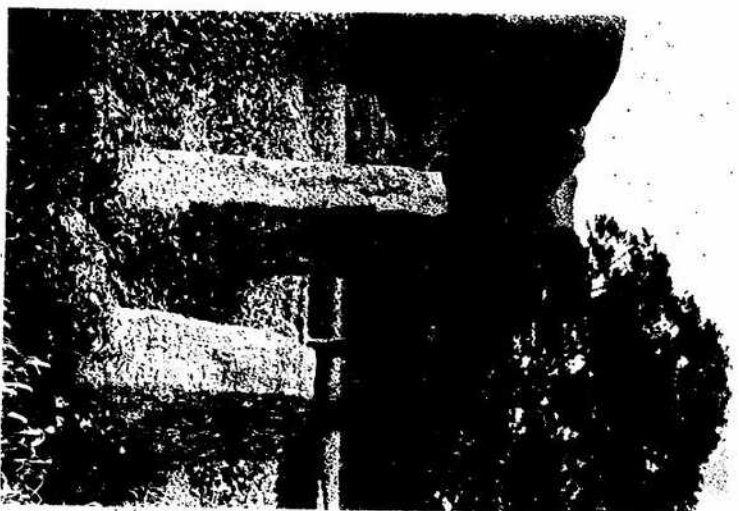
第四五 清道郡梅田面長淵寺址石塔(西)



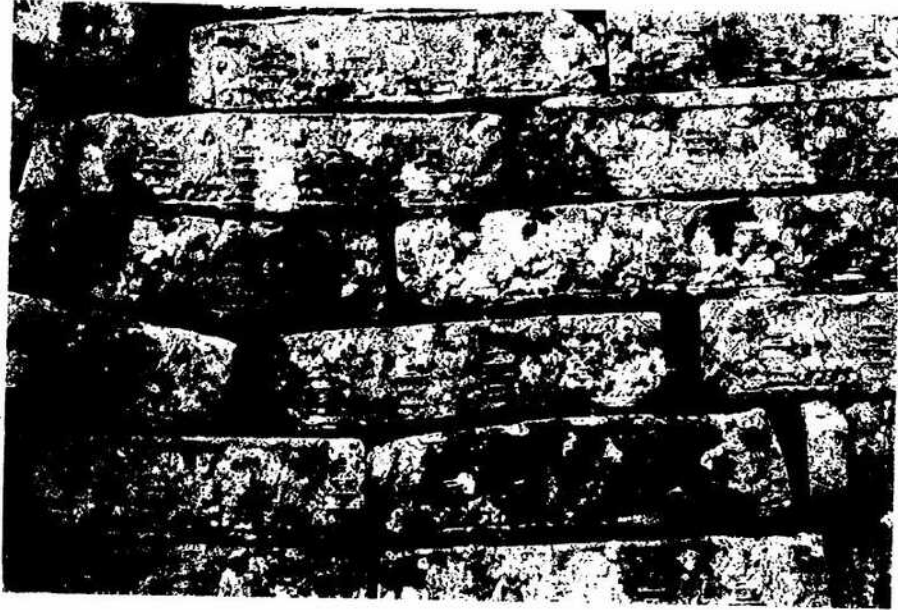
第四六 清道郡梅田面長淵寺址石塔(東)



第四八 同梅田面龍山洞佛堂寺千佛塔



第四七 清道郡梅田面長淵寺願筆支柱



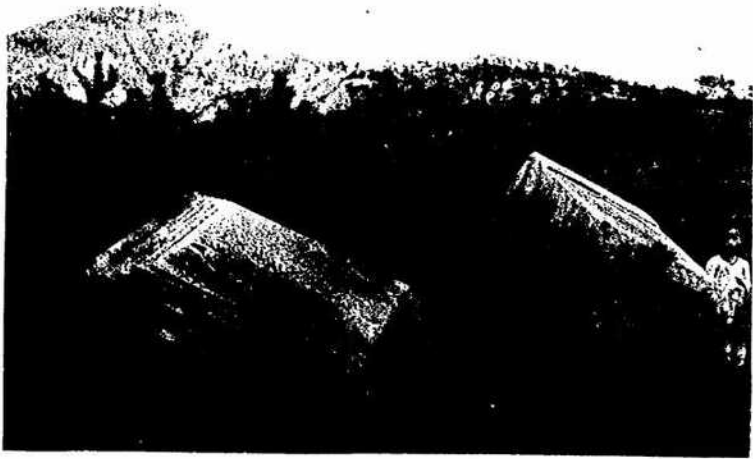
第四九 清道郡梅田面佛靈寺千佛塔ノ一部



第五〇 同上



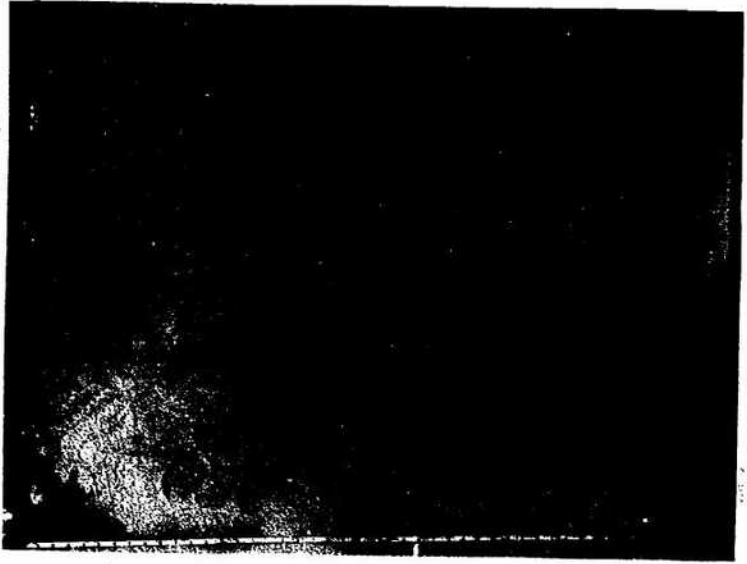
第五一 金泉郡開寧面傳燈陵



第五二 金泉郡西部洞橋石(石塔)



第五四回 上 (部)



第五三・高州郡高州邑内石塔一部ノ影像 (其二)



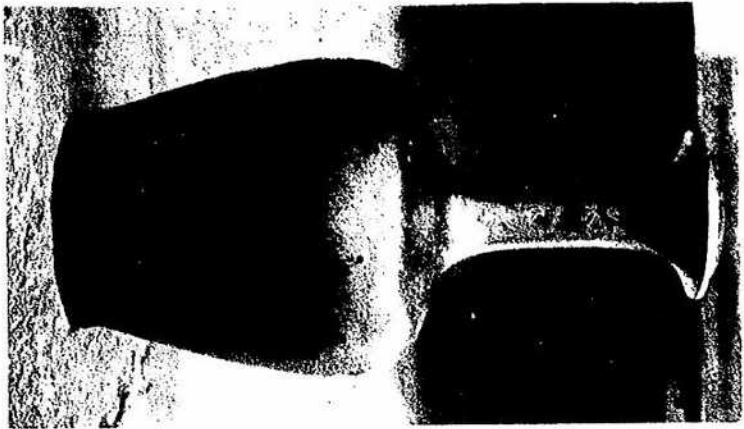
第五五 尙州邑内石塔



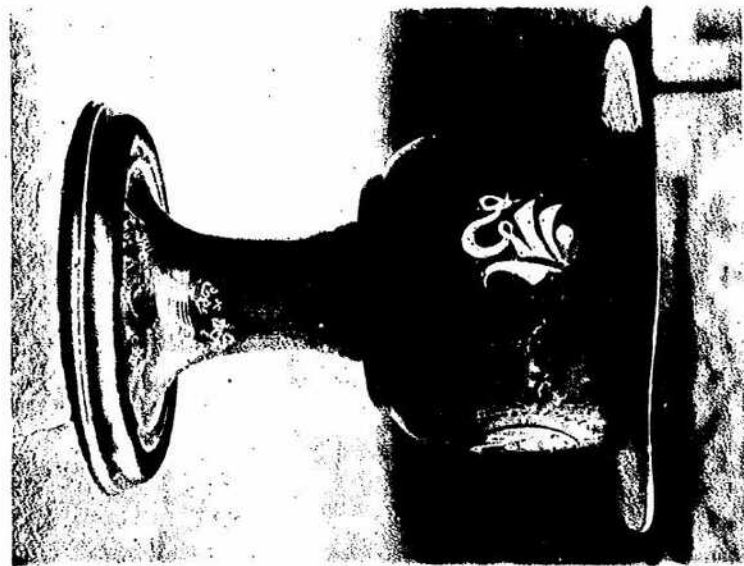
第五六 尙州邑内石塔閣ニ使用ノ蓮臺(西)

(E) 第五八 梁山郡通度寺石塔
(F) 第五七 尚州邑内石塔閣使用ノ蓮臺(東)

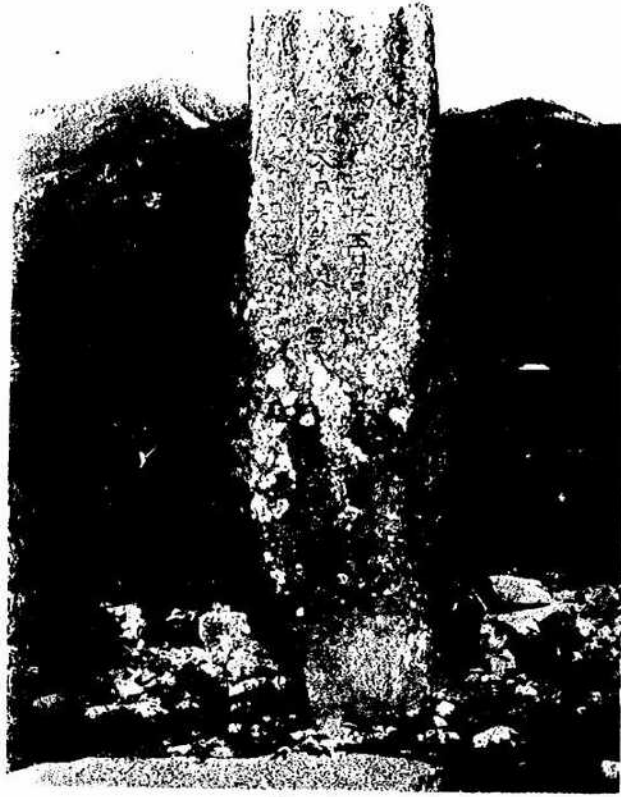




第六〇 梁山郡通度寺瓶



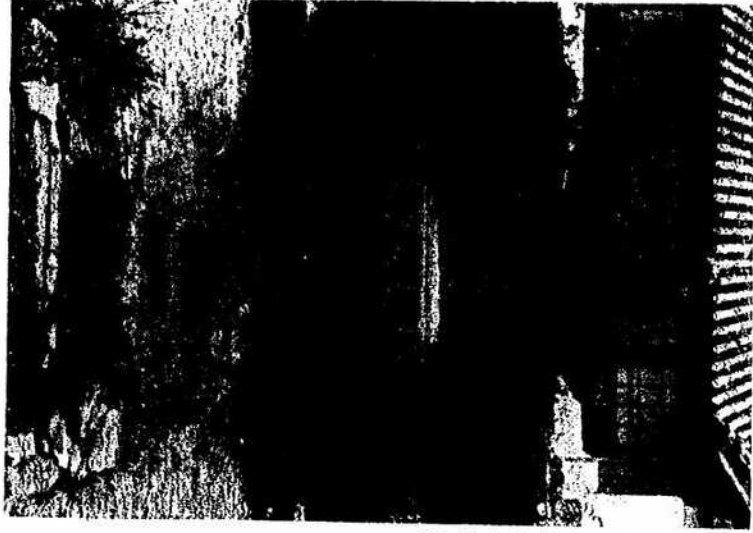
第五九 梁山郡通度寺香爐



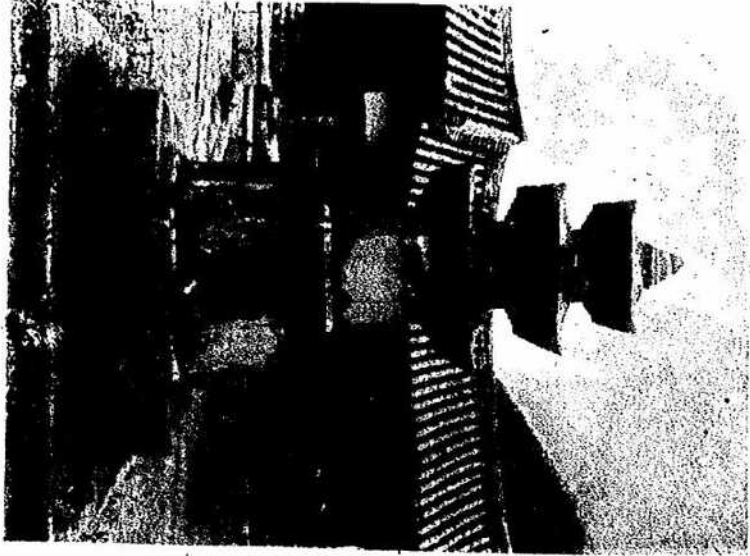
第六二 梁山郡下北面大安元年ノ碑



第六二 梁山邑東山城ノ一部



第六四 同上 梵魚寺石塔



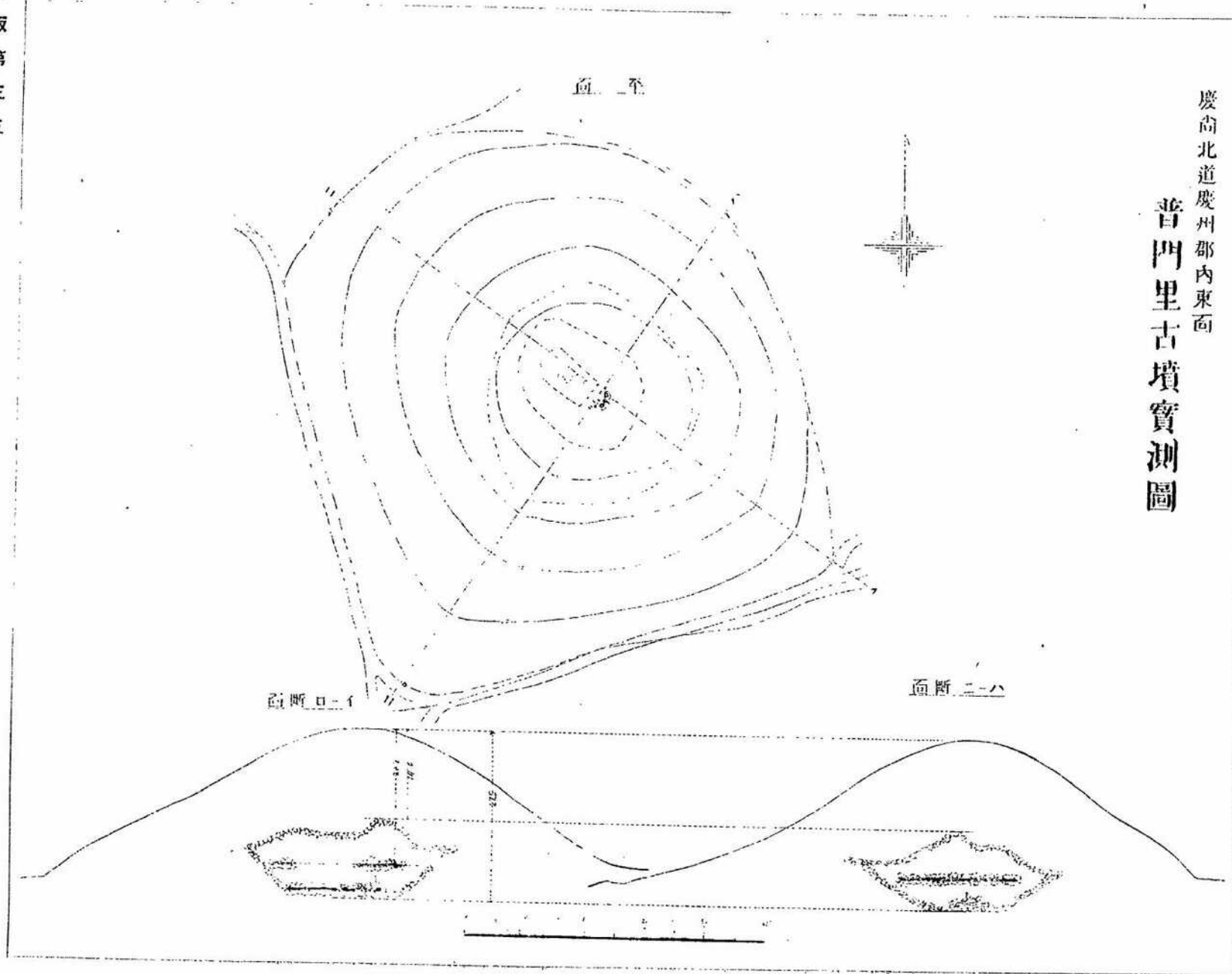
第六三 東萊郡北面梵魚寺石塔

附圖第一 慶州普門里古墳實測圖

慶尙北道慶州郡內東面

附圖第一 慶州普門里古墳實測圖

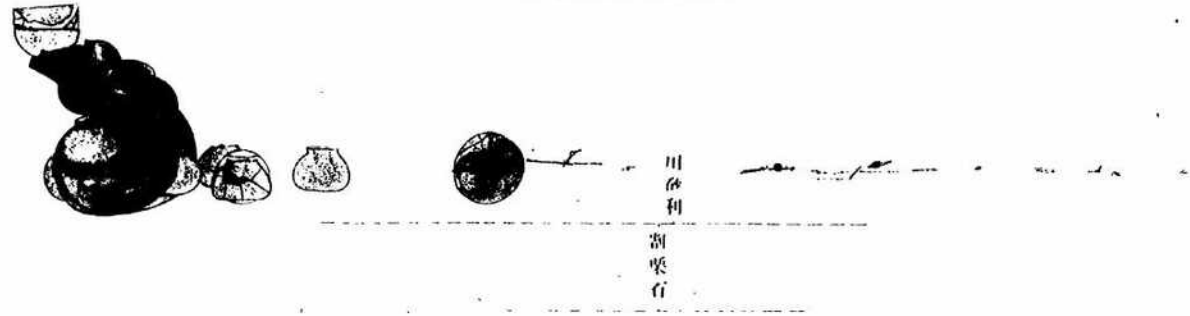
慶尚北道慶州郡內東面
普門里古墳實測圖



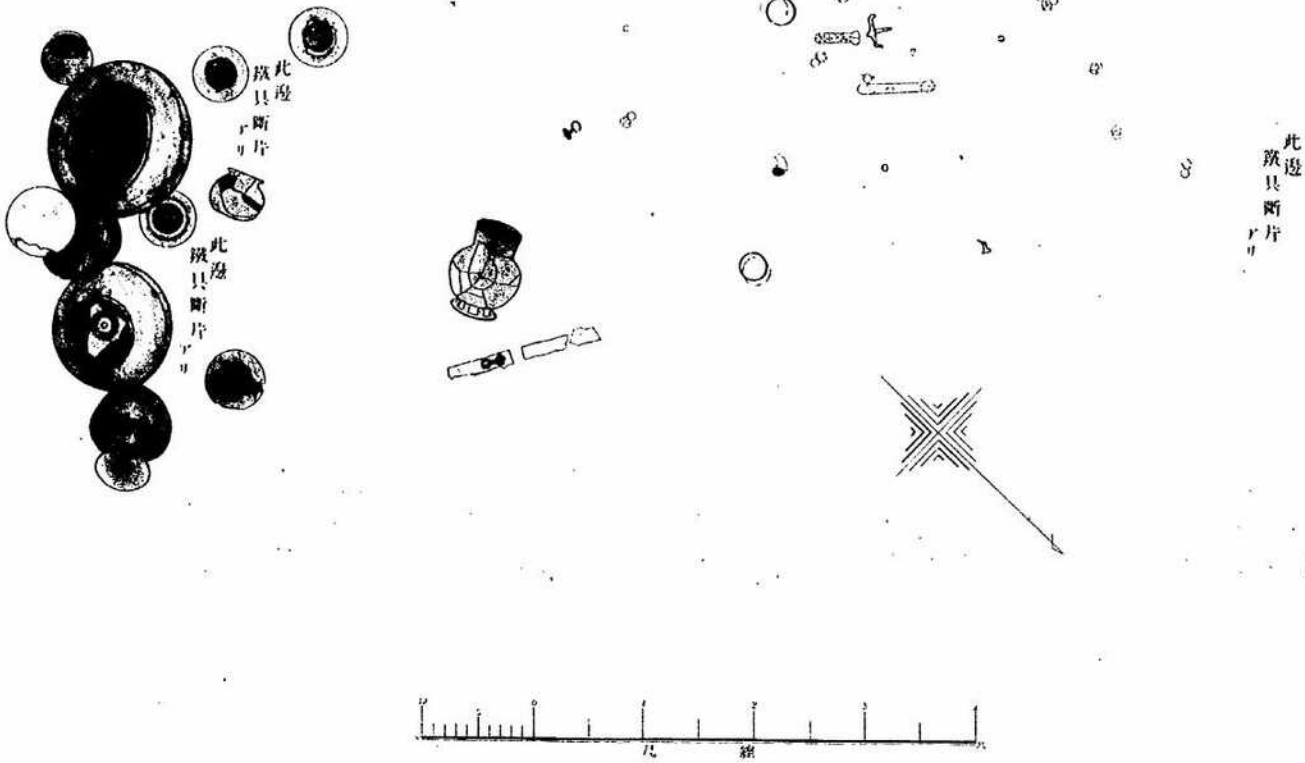
圖版第三五

裏面白紙

正 向 圖



平 向 圖

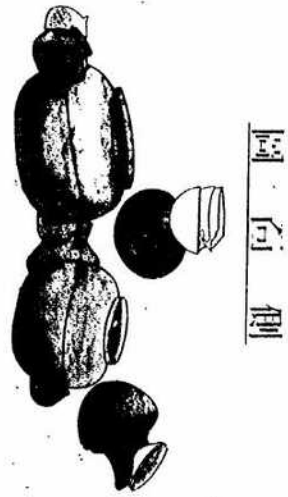


附圖第二

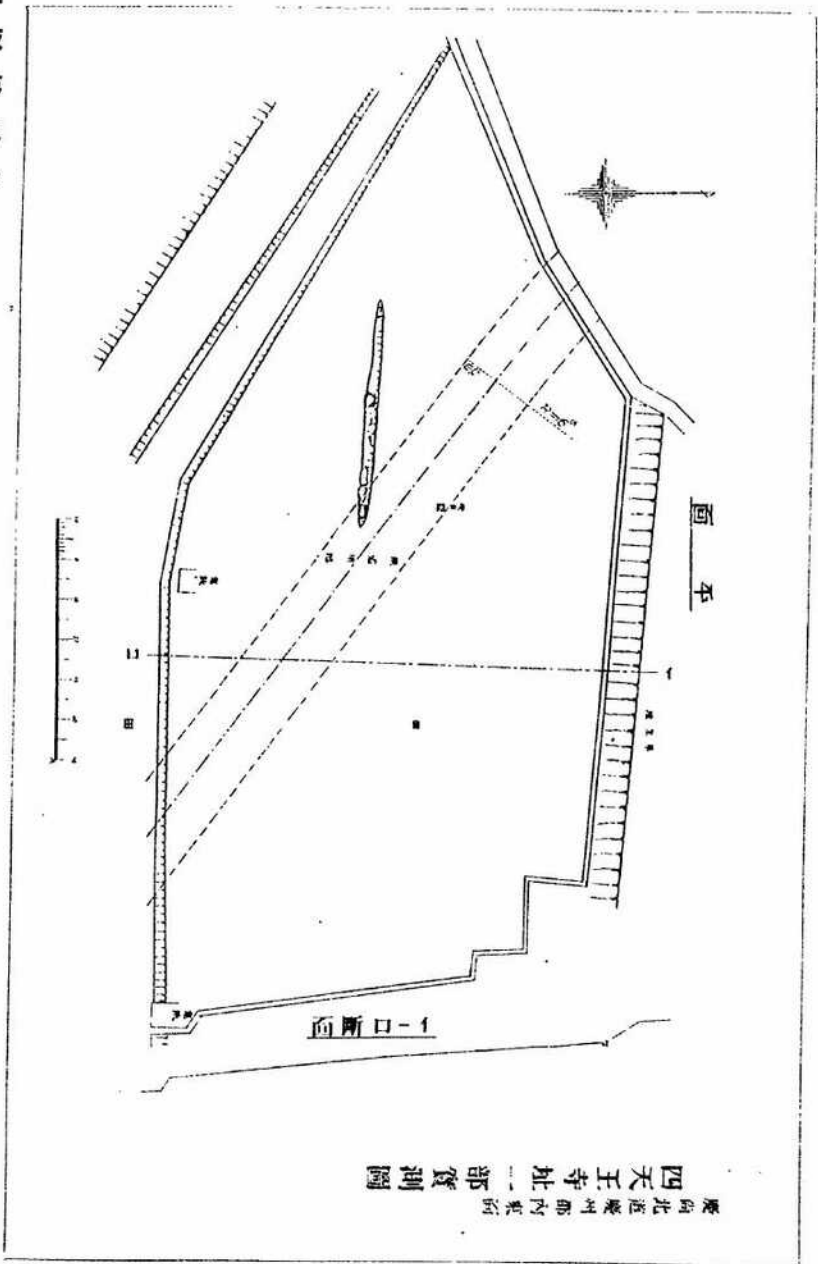
慶尚北道慶州郡內東面

普門里古墳
遺物配置圖

圖版第三六

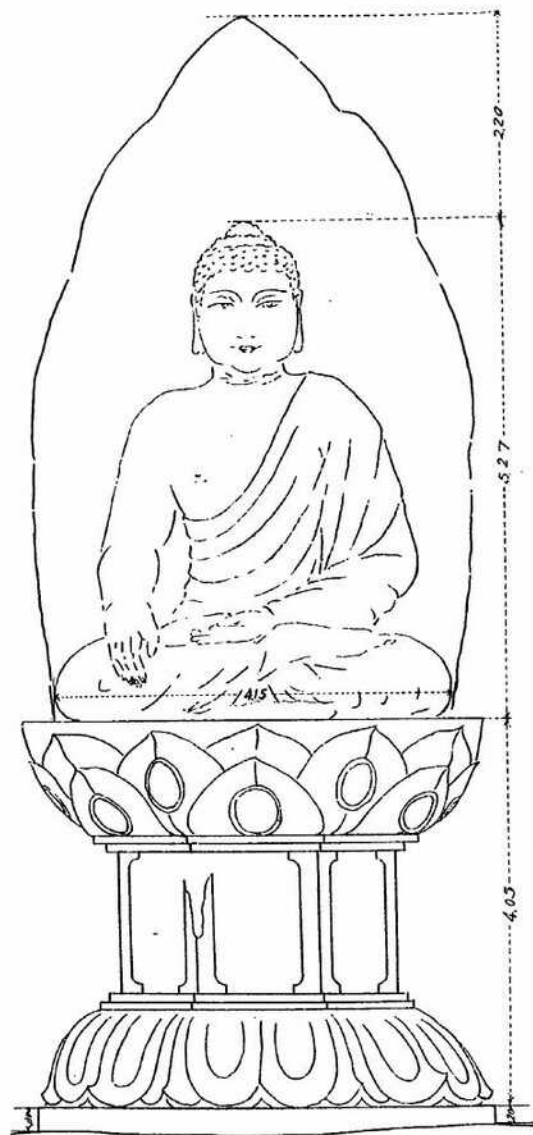


裏面白紙



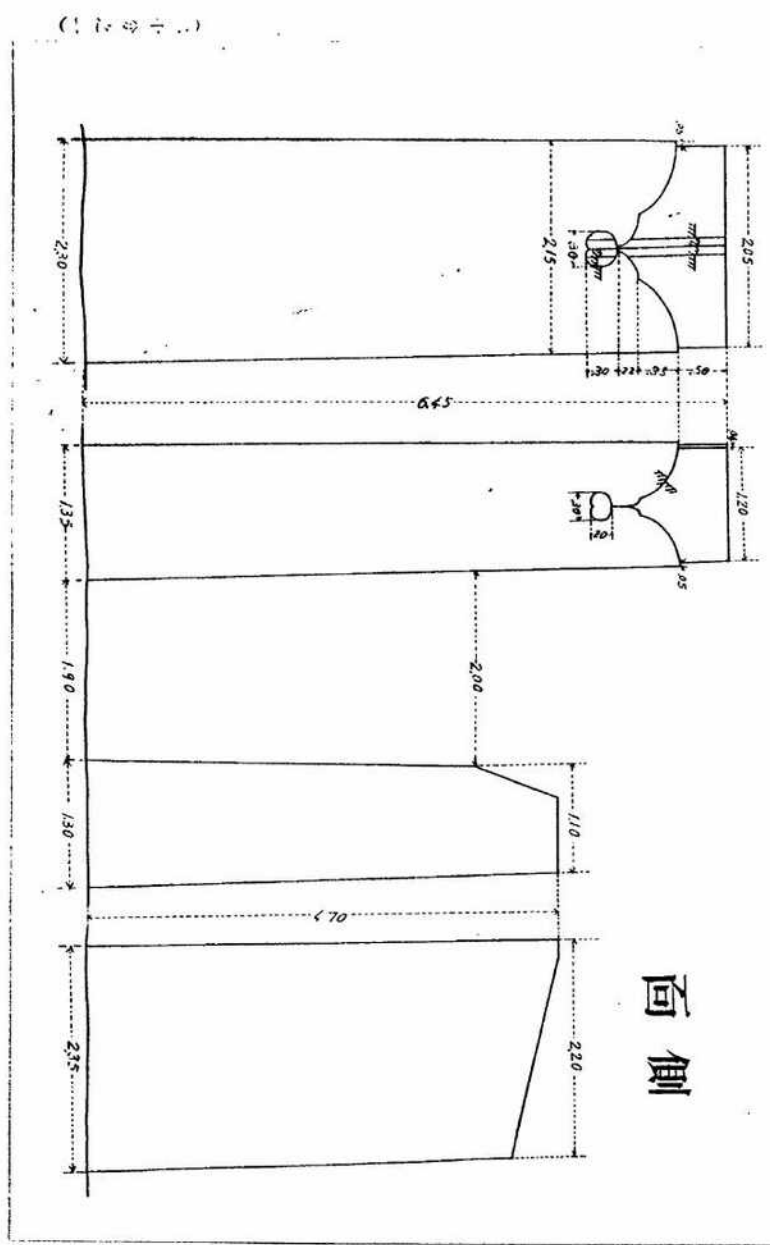
附圖第三 慶州四天王寺址一部實測圖

慶州北庭慶州節內東所
四天王寺址一部實測圖

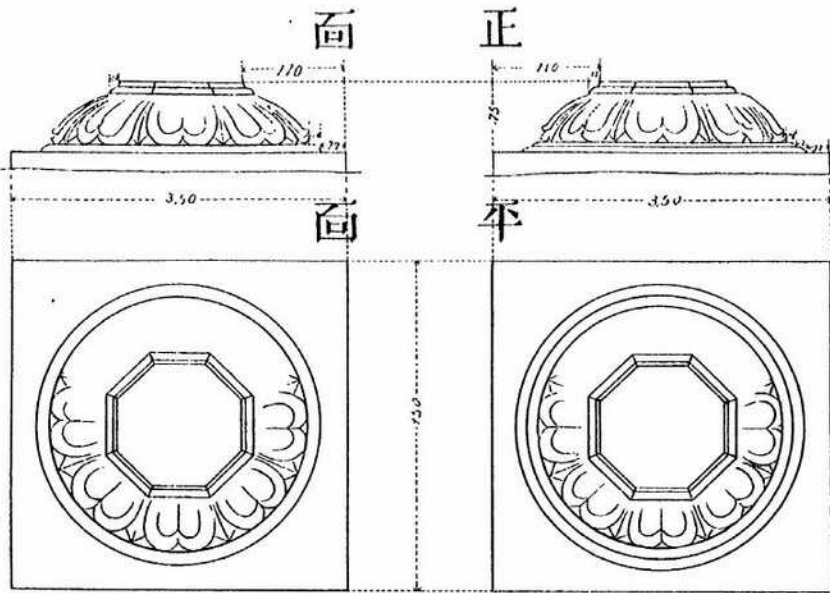


附圖第四 清道郡錦川面珀谷洞石佛像見取圖 (約二十分之二)

正 面 側 面

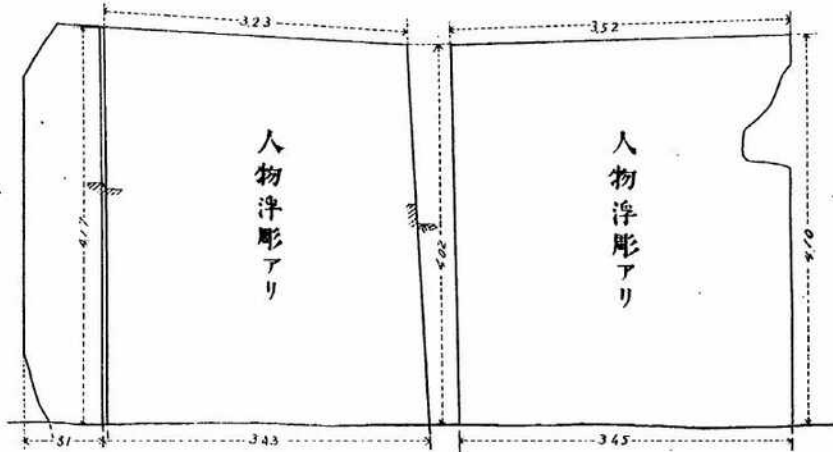


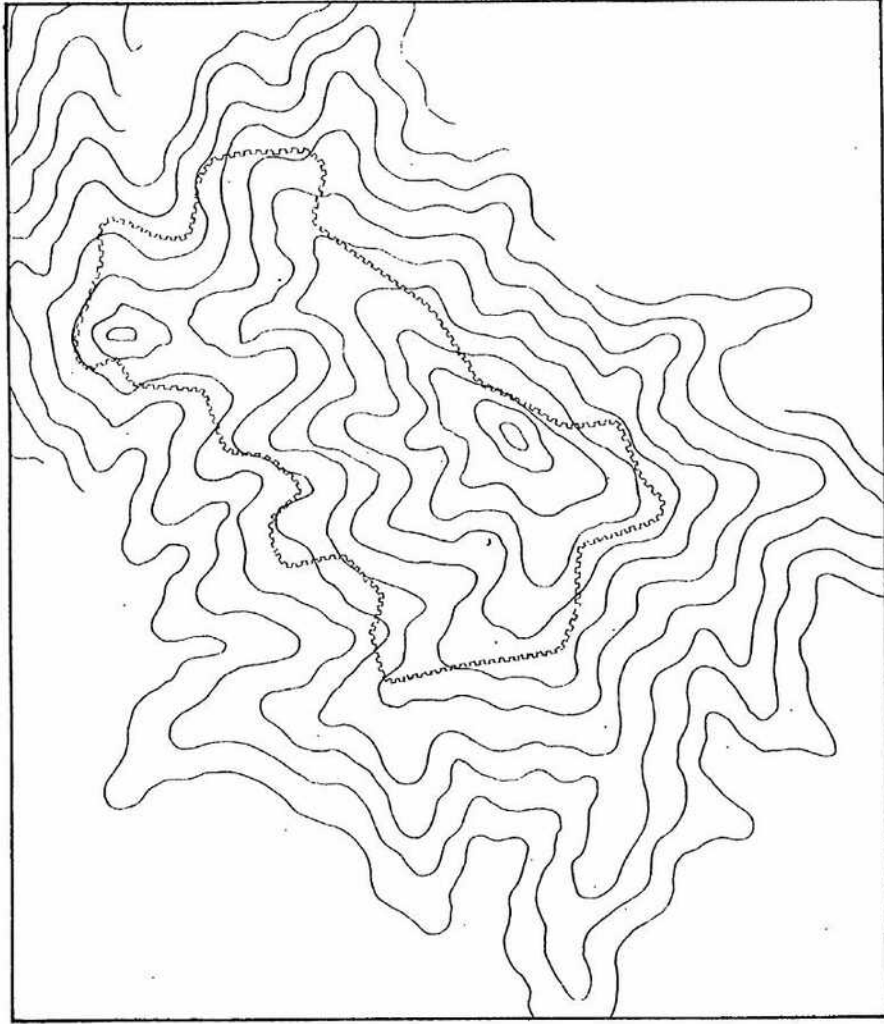
附圖第五 清道郡梅田面長淵寺址曠竿支柱實測圖



附圖第六 尙州郡尙州邑內石燈蓮臺及石塔一部實測圖 (約二十分之二)

面 正





附圖第七
梁山郡邑內北面山城址實測圖

大正十一年三月二十五日印刷
大正十一年三月三十一日發行

朝鮮總督府

京都
印刷所 株式會社似玉堂